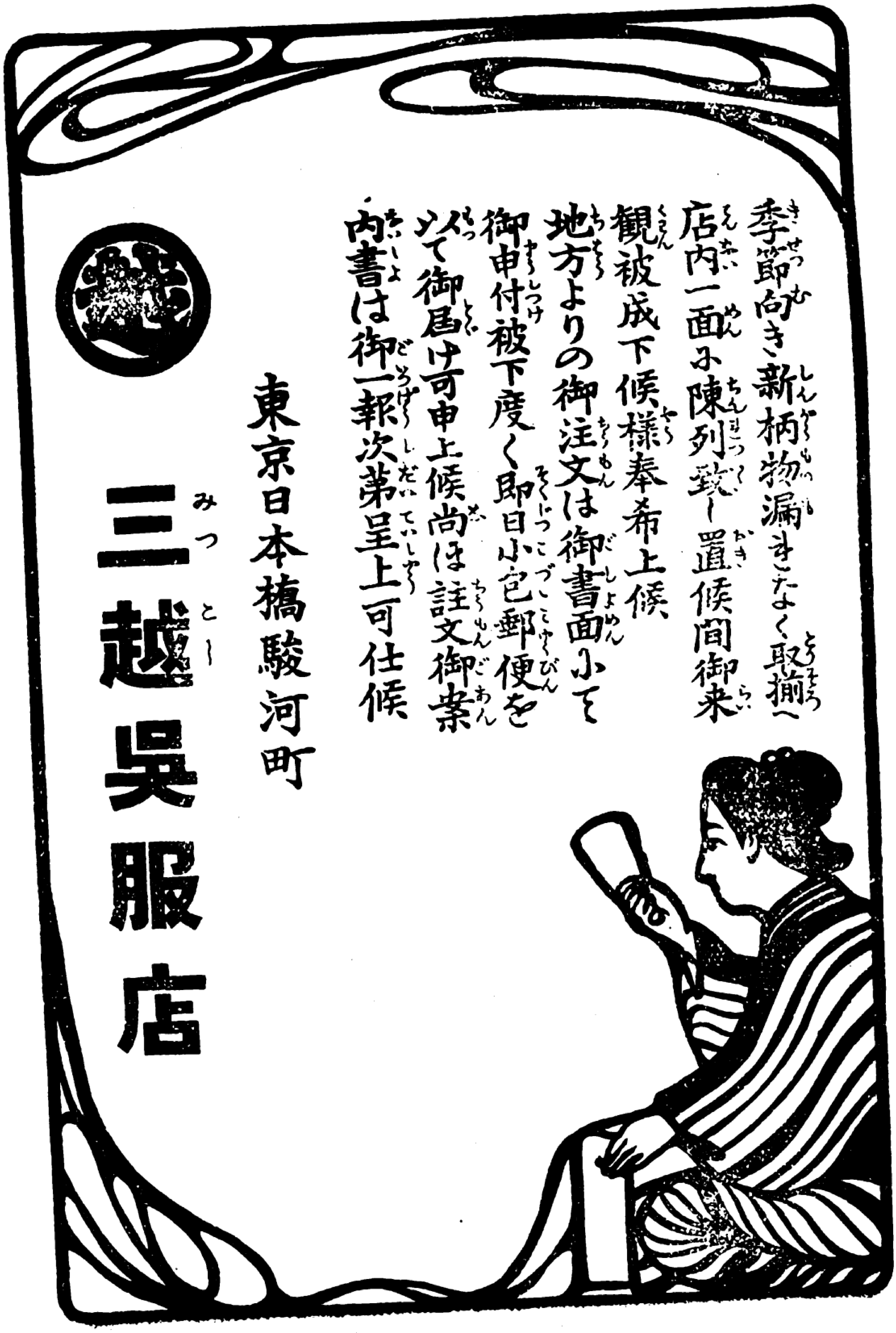
明治三十八年五月八日發行
毎月一回五日發行

明治三十三年十二月二十五日
第三種郵便物認可




季節向き新柄物漏れなく取揃へ
店内一面に陳列致し置候間御来
観被成下候様奉希上候
地方よりの御注文は御書面にて
御申付被下度く即日小包郵便を
以て御届け可申上候尚ほ註文御案
内書は御一報次第呈上可仕候
東京日本橋駿河町
三越呉服店

# 女學世界 第五巻第拾壹號 目次

登録商標

# 良藥にして口に甘し

浅田宗伯先生直傳

登録商標

# 浅田飴

たんせき・一切

肺病の持藥

ひき・かぜ

よわき人

老人の滋養藥

登録商標




十二日分 金五拾錢

一週間分 金參拾錢

四日强 金貳拾錢

三日分 金拾錢

日本全國到る處の藥店に販賣す

本家

東京市神田區鍛冶町
大阪北久寶寺町堺筋

（電話本局壹壹二番）
（電話東三九五八番）

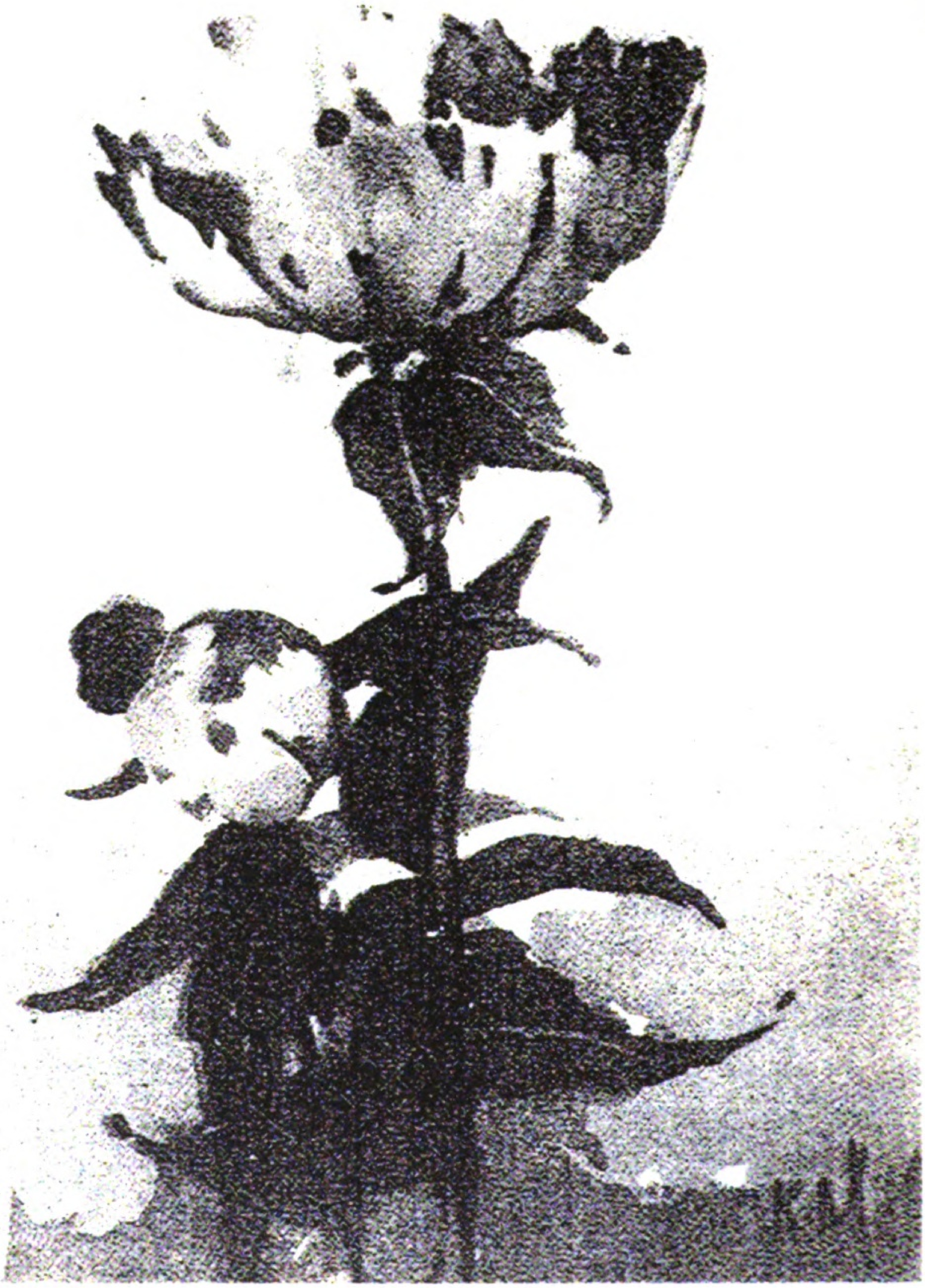
堀内伊太郎

微吟



# 芍藥

三宅克己筆



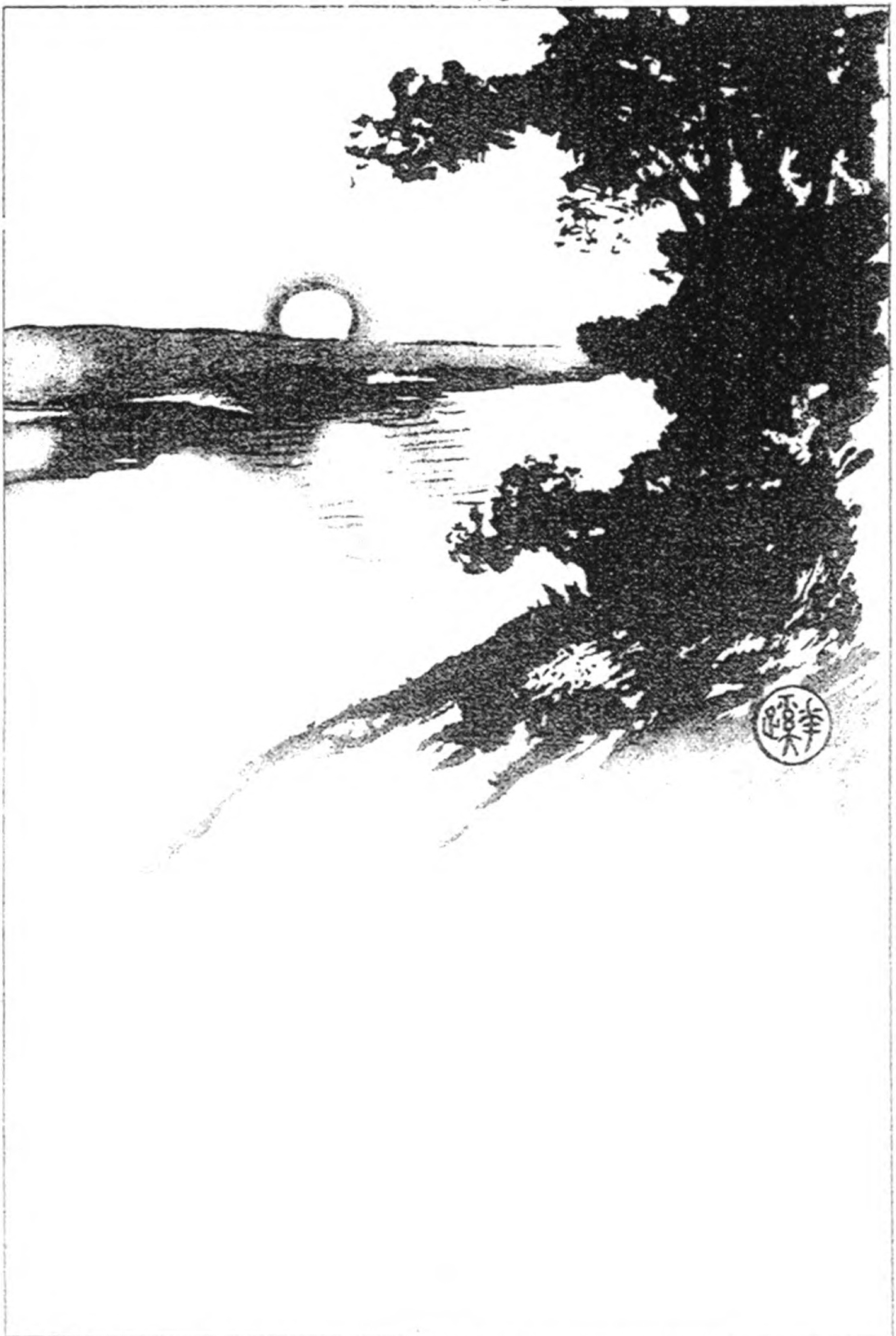
# 月と秋草



跡見花蹊女史筆

## 月夜山水

跡見花蹊女史筆

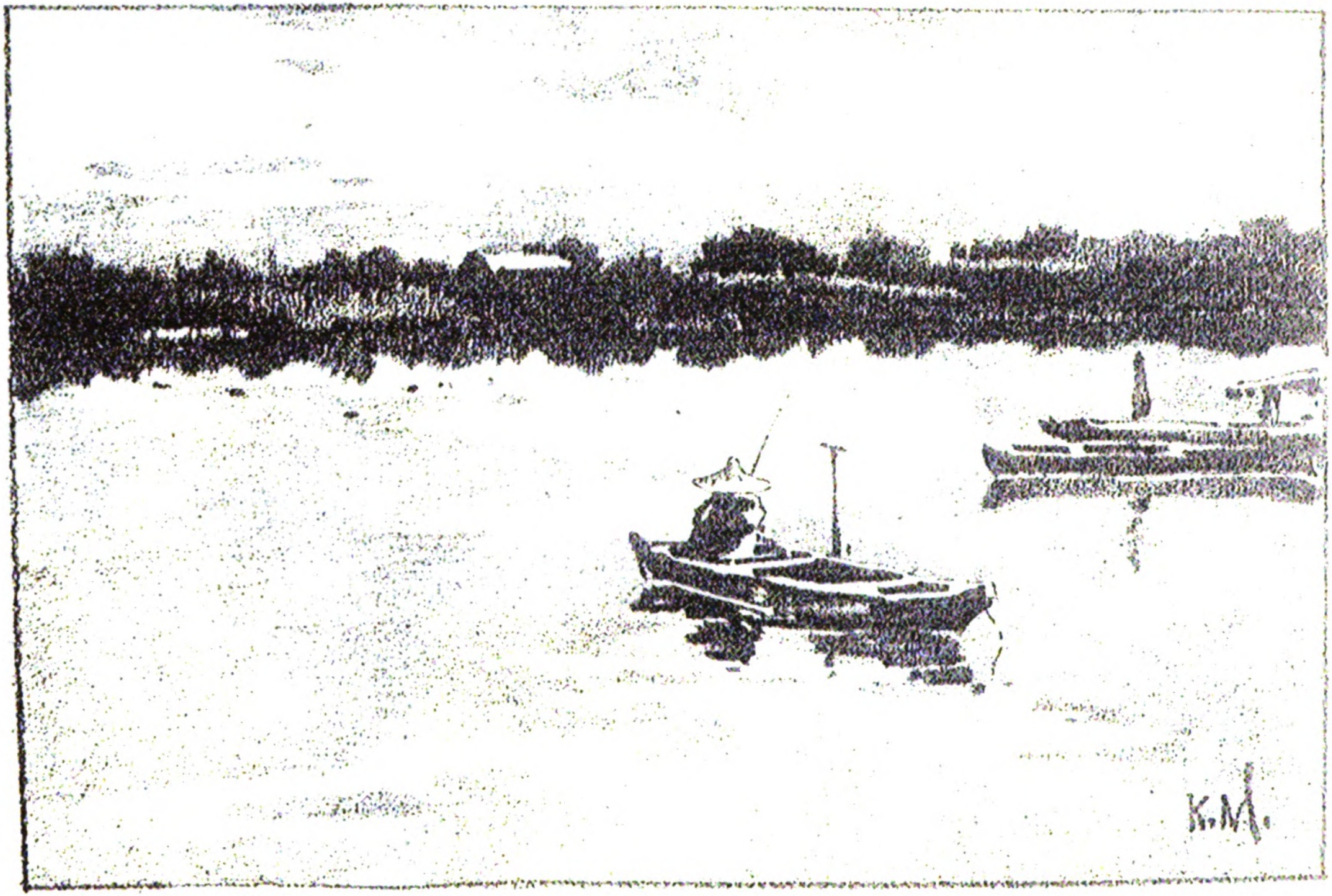


# 蚊やり團扇

三宅克己筆

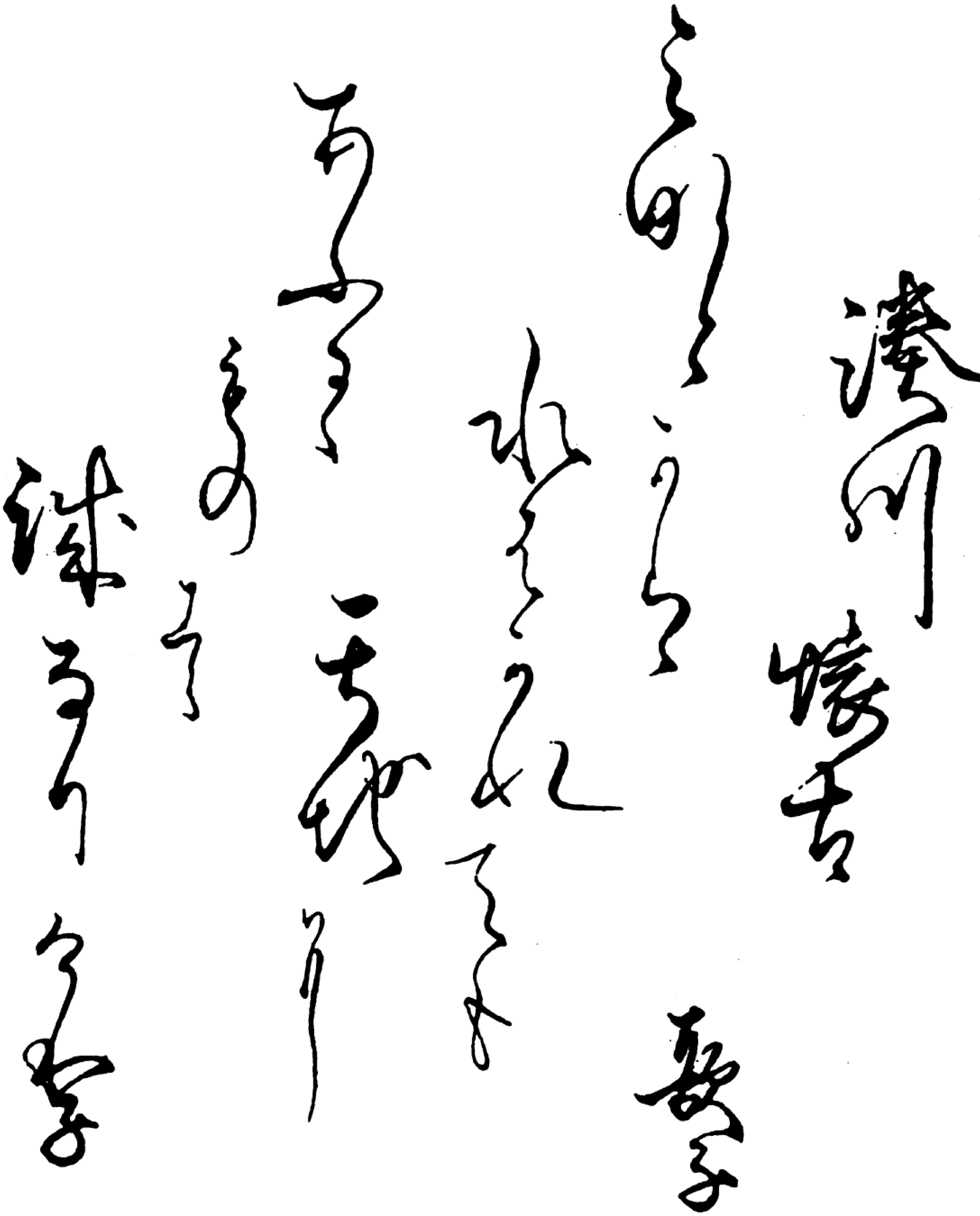


釣船




三宅克己筆

下田歌子女史筆



暁夜　鴫　数

とふかくしよ

ねられは　よし

うしろめたき

思ひしら

うき葉の

まくら　露や　おかむ


美術造花材料
斬新夏期用材料
舶來薄絹シホン
シホン見本帖及シホン製作品
カタログ(コロタイプ)御入用な
れば郵券五錢御送附可被下候
造花材料品各種
造花用繪具各種
造花用器械各種
摘み細工原料各種
刺繡用金糸、平金、絹糸各種
根掛材料、和洋リボン各種
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話(特)浪花一六四三番
(印の一)

（甲の二）

新奇發明 增酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり（附錄）腐敗酒直し法、醤油參倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内：：右今回披露の爲拾萬部限り：：**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚確實くべき大金儲あることを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に倣せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ：：（當館は去廿壹年の創立也）

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

---

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白化藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

---

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にても忽ちキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**一を掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯る深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



---

わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずるも憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二增割の事（電話下谷五四六番）

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

（甲の三）

# 文學博士高山林次郎君遺稿

文學博士姉崎正治君　文學士齋藤信策君共輯

## 樗牛全集第四卷 時勢及思索

近刊

▲正價壹圓五拾錢　小包料貳拾錢‥‥八月上旬發賣

『古き源を尋ね盡したる者は、終に未來の泉、新しき源を求めん。地震ひて新しき泉現はれん、古き民の地震ひなば、新しき民湧き出でん』（ニーチエ）が此の一言樗牛が思索信仰の徑路を說き盡して餘蘊なし。倫理問題、日本主義、日蓮崇拜の中に樗牛の眞相を見んと求むる人は、その全集第四卷を繙かれよ。

全一冊洋裝　金線金模樣　題美本紙數　壹千百餘頁

（甲の部）

## 樗牛全集第一卷 美學及美術史

全

第一部美學上の研究
第二部日本美術史
●總論●奈良朝以前の美術●天平時代●平安時代

洋裝大判美本
正價壹圓五拾錢
小包料拾五錢

## 樗牛全集第二卷 文藝及史傳

上編

本編收むる所の主なるものは築林子評論、運命と悲劇歷史的精神、桐一葉と牧の方、社會小說論、英雄論、理想的人物の表現、文明批評家としての文學者其他

洋裝大判美本
正價壹圓五拾錢
小包料貳拾錢

## 樗牛全集第三卷 文藝及史傳

下編

▲釋迦▲平相國、平家雜感、清盛骨相考▲菅公傳、菅公年表、▲史傳雜纂、南歐美術論、ナポレオン三世外八項▲文藝評論補遺三十一種

洋裝大判美本
正價壹圓五拾錢
小包料拾五錢

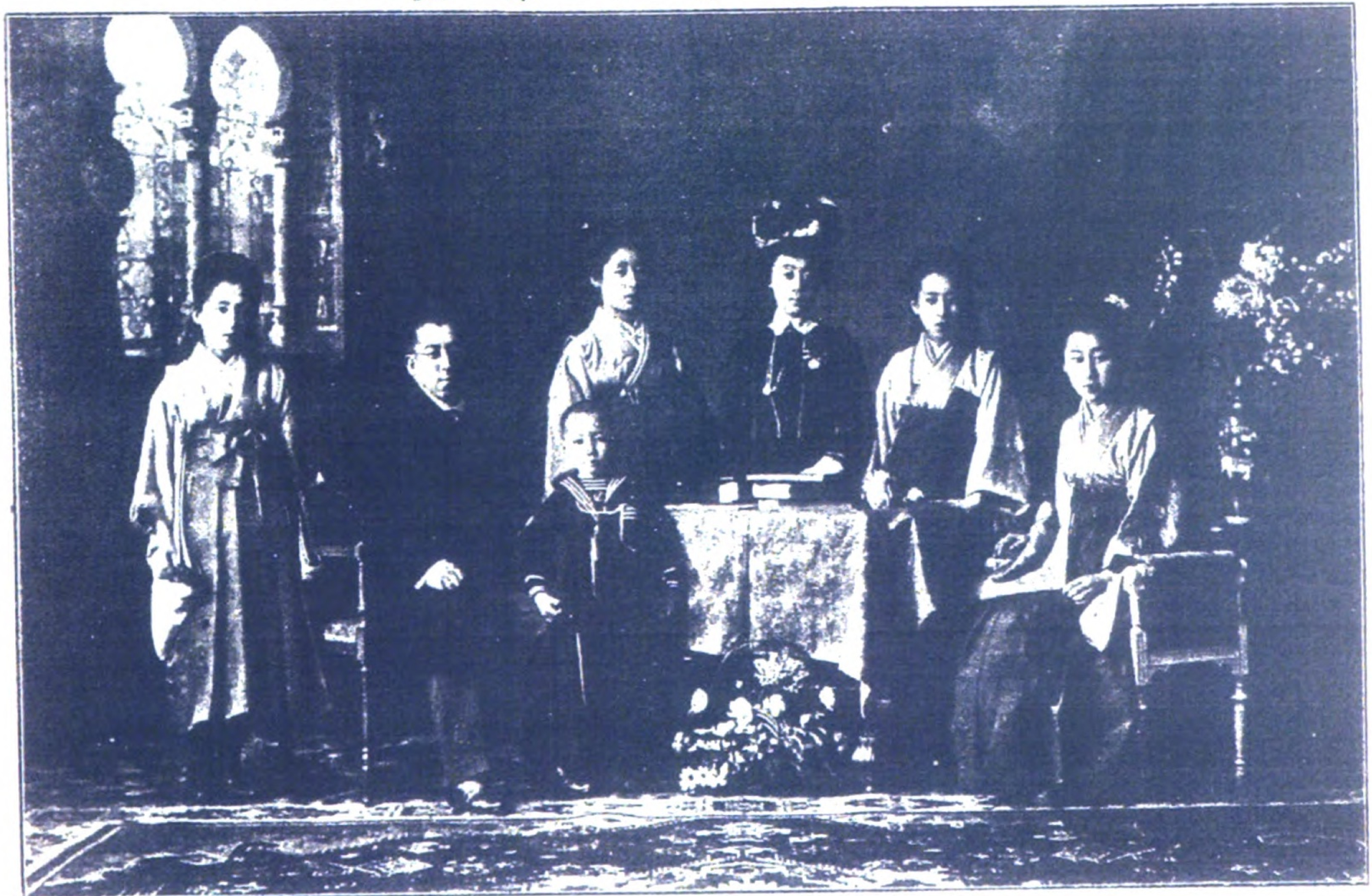
發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

獨逸皇太子同妃セシル殿下



(記事參照)

徳川伯爵の家庭（舊田安家）



三女艷子　伯夫人知子　二女毅子
長女喜美子　長男達成　主人達孝伯　四女繡子

波平の浦曲



英國イルフラコムベ海岸

處女と家婦





英國上流社會の婦人風俗

## 愛國婦人會の戰地慰問員



手島益雄　奥村五百子　野中彌知子　富壓眞喜子

# 中元の御進物は此品に限る

# 旭いちご酒




名譽ある讃辭を寄せられし大家

杏雲堂病院長 醫學博士 佐々木政吉先生
樂山堂病院長 醫學博士 宇野朗先生
井上眼科醫院長 醫學博士 井上通泰先生
東京顯微鏡院長 醫學博士 遠山椿吉先生
東京耳鼻咽喉醫院 院長醫學博士 金杉英五郎先生
次長ドクトル 佐藤敏夫先生

胃腸病院長醫學博士 長與稱吉先生曰

旭いちご酒は清澄の液にして氣味頗る良好、加ふるに多量の越幾斯分と少許の酒精分とを含有するが故に胃腸患者には其消化力を補弼するの効あると同時に健全なる人にも滋養飲料として寔に適當なるものと認めたり

發賣元 東京市日本橋區人形町通蠣殼町 特電話浪花六百二十番 三宅島物産株式會社

（いろは順）
大阪賣 日本橋區本町三丁目 鈴木恆吉
大阪賣 日本橋區本町四丁目 龜田延次郎
大阪賣 日本橋區通一丁目 國分勘兵衛
關西一手 神戸市元町三丁目 安倍弟二

（No.1）

阪井久良岐主幹

一巻四號八月五日發行　一部代金拾錢郵稅五厘

新風俗詩雜誌

# 五月鯉

目次　川柳談（主筆）　柳壇單語（三山水）

日記（瑞靈園主）　十八韻（政女）　閨秀

柳句家（久良岐）▲新風俗詩▲撰

古川柳研究（社中同人）　懸賞（柳句）

僕こう思ふ　岐白百合（集幻怪坊）　古（柳句）

評釋（菱花）久（良岐社發展史）（頴臺）聲（調の研究）萬句（合等）

麴町區富士見町六の十　川柳久良岐社

川柳募集　題　星▲裁縫●　〆切來る十五日限　阪井素梅女撰

---

●水彩畫通信教授

毎月一回講義錄發行　詳細規則郵券二錢

東京市麻布區飯倉町四丁目　大日本繪畫講習會

---

●女醫學生募集

戰後の經營は益々女醫の必要を感ぜしむ本校は玆に校舍と寄宿舍を增築し九月五日より臨時生徒を募集す志望の姉妹は八月中に申込ある可し

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

東京女醫學校事務所

（規則書は郵券三錢を要す）

---

根治確證　わきが　新治療藥　ラピヨシン

必ず全治し決して再發せず或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ　價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を驅逐し深淸し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

---

毛のはへる　毛髮生養液　原名ヘクネス

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人は早く試みられよ●わけ毛落毛なき人

めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

---

化學製品　色の白くなる　ハンドコロン浴液

盛に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女紳士間に大評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をなし

---

はやくをろし

メソルビン此藥は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆれば

すぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈强なるも毒も身體に害なくたやすく下る又月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製分貳圓參拾錢小包料拾錢

●專賣　東京本郷湯島四丁目十四　オリエンタル藥舘

（乙の二）

(乙の四)

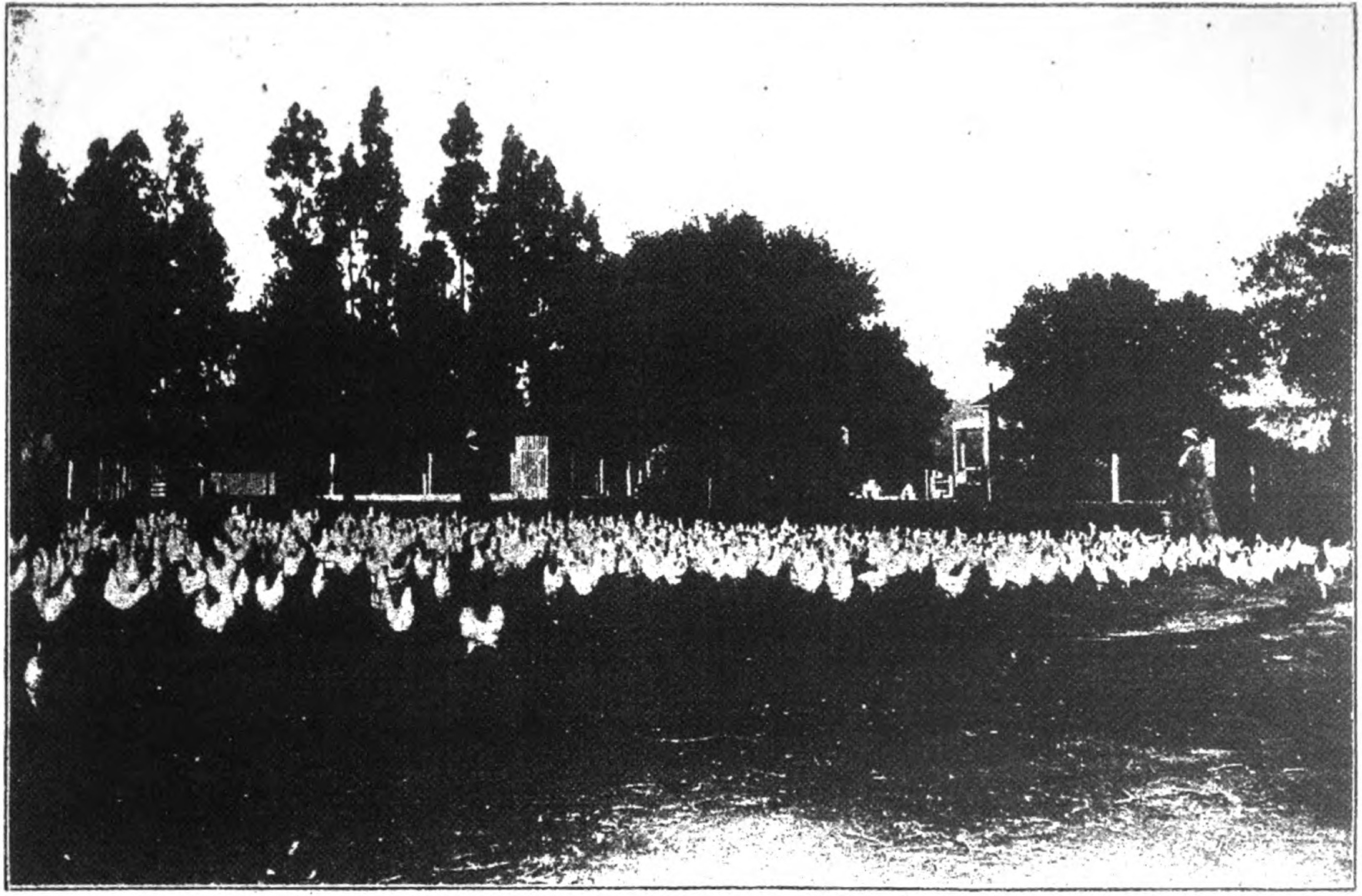
明治母の會大會





帝國生命保險會社徵集課に於ける女子事務員

鶏群



加奈太ペタルマに於ける養鶏園

大日本游泳術研究會師範 石橋司君校閲
早稲田大學生 加藤進君
同 上 向井正治君 合著

# 最新游泳術

全一册

洋裝中判美本
紙數四百五十頁
八月上旬發行

▲附錄――寫眞銅版游泳術實習圖

近時游泳術に關する著書鮮少ならざるも多くは疊上の水練に類する杜撰の書にして、殊に體育に關聯すべき生理衛生の要項の如きは殆ど其影をも存せず。向井、加藤兩氏玆に大に視る所ありて、遂に本書を著はし、汎く世の青年に最新の水練術を傳習せんとし多年の經驗によりて得たる智識と技能を以て、懇篤に斯術習得の順序を說述せり。加ふるに精密なる數多の圖解を加へ生理の應用及び水練上の衛生を詳論すること實に本書の獨特とする所なり。時將に盛夏に向はんとす其初學者と得技者とに論なく必ず一本を携へて夏期の好伴侶に供せられんことを希望す。

法科大學遠山駿君著
● ボート競漕
全一册洋裝小判一四〇頁 正價拾貳錢 郵稅貳錢

稲田賓君著
● 新游泳術
全一册洋裝小判一三六頁 正價拾貳錢 郵稅貳錢

池田米太郎君著
● 日曜の植物採集
全一册洋裝小判一二四頁 正價拾五錢 郵稅貳錢

池田米太郎君著
● 日曜の昆虫採集
全一册洋裝小判一三六頁 正價拾五錢 郵稅四錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(丙の二)

寫眞畫報 第八十八編 第三十一卷 臨時增刊

# 樺太回復紀念帖

八月中旬發行

全一册洋裝大判
寫眞銅版口繪
正價金貳拾錢
郵稅貳錢

我が樺太軍は北遣艦隊と海陸相呼應して、既に樺太南北の二大市を略し、全島を占領すること當に遠きに非らざらんとす。樺太は明治八年、千島と交換の名義の下に魯國の簒奪する所となりしもの、邦人の久しく切齒已まざりし所なりしに、今や王師連捷、一朝其回復を見るに及び、豈に之が紀念帖なるべけんや。加之軍の一枝隊は既に間宮海峽を過りて東韃の境に進入せり。其快報を得る是亦遠きに非ざるべし。樺太攻擊軍に特に從軍せしめたる本館の寫眞技師若林勝治氏より已に開戰以來の唯一新奇なる寫眞は續々として到着せるのみならず、海軍諸將校の撮影せる戰鬪實況の寫眞亦少からず、此等は皆本館特有の材料にして、紀念帖上の精華たり。其記事の精且健なるが如きは復た喋々を須ひざるべし。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（丙の五）

數學世界臨時增刊七月廿日發行

# 數學お伽雙紙

主筆 竹貫登代多君

上中下三冊洋裝大判美本
正價一冊拾錢郵税一冊一錢宛

勘者お伽雙紙は今を去ること凡百六十年前寛保年間の出版物也惜むらくは此書湮滅して世に傳はらず當時の數學思想を知る者殆んど無きを如何本書數學お伽雙紙は實に勘者お伽雙紙に明快平易なる解釋を施し其足らざるを補ひ以て現時の數學遊戯に適せしめし者、一は兒童をして知らず識らずの間に數學の極意を會得せしめ一は學生をして德川時代に於ける數理思想を知らしめんと欲す旣ち本書は實に世間在來の數學以外別に一新機軸を出して趣味の無盡藏たるもの幸に愛讀の榮を給へ

## 上卷 算術之部
巖谷小波君序

- 小町算の事
- 人の年數を碁石にて二度計へさせて知る事
- さつさ立の事
- 藥師さんの事
- 裁合物の事
- 買物錢數ほど取る事
- 奇妙希代の事
- 龜のうらなひの事
- 外拾數件

## 中卷 代數之部
江見水蔭君序

- 男女年を待ちて嫁いりの事
- 洛書の事
- はかりの錘の重さをかけずしてしる事
- かるたうらなひの事
- 鴛鴦のあそびといふ事
- 年數をしる事
- ヒノキコといふ事
- 曲尺平方の事
- 外拾數件

## 下卷 幾何之部
石橋思案君序

- 時の數自然の數の事
- 交會術の事
- 暦術を用ひずしてあらかた暦をしる事
- 變數をしる事
- 三十三所の觀音倍增し賽錢の事
- 算盤にむかひつぶあぐる事
- 櫻木目付の事
- 俵數を端なく杉形につむ事
- 外拾數件

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(丙の六)

米國醫學博士アイ、ピー、デーヴィス氏原著
海軍大軍醫隱岐敬次郎君譯述

（新刊發賣）

# 女子衛生學 附結婚論

女子衛生學は米國の大醫アイ、ピー、デーヴィス氏の著にして譯者米國漫遊の砌特に著者の委囑に依て譯述を約せしの珍書なり其說く所世の年少婦人特に妙齡の女學生の爲めに懇切叮嚀を極め、片言隻句皆な衛生の原則、人道の眞理ならざるなし、且つ米日素と國俗風習を異にし女尊男卑の淵源たる米人の所說なるにも拘はらず或點までは其主張の頗る孔孟主義（實に女大學）に近邇し又た文明の粹華を訓ふるに拘はらず反つて東洋の敎義に則とれるが如きは最も東西折衷主義を能く發揮して毫も餘濫なしと謂ふべし尙附錄とする結婚論は文學家として有名なる英國のハーディー氏が世の青年男女の爲めに書かれたる趣味豐多の珍書にして着眼の奇警なる將た觀察の妥當なる讀者をして不覺通讀の妙を得せしむ。

全壹册洋裝袖珍上製
總クロース金文字入
約三百頁頗美本
正價卅錢郵稅六錢

發兌元 東京 博文館

---

## 野口寧齋君遺稿

（新刊發賣）

# 寧齋詩話

寧齋氏の詩筆縱横、施すとして可ならざるはなく、其の夙に一家を成せるは、江湖之を知らざるものなし、而して其詩學に於て造詣特に深く、別に隻眼を具する者に至ては、世或は之を知らず、本書は其遺藁に係れる少年詩話、史詩談、開春詩紀の三部を合刻せる者、未だ其蘊奥を盡せりとは謂ふべからざるも、亦以て其の深遠の學と該博の識とを見るべし、獨り詩を學ぶ者のみに止らず、苟くも文學に志ある者必讀の珍冊なり……

洋裝中判
紙數四百廿頁
正價參拾五錢
郵稅八錢

發兌元 東京 博文館

（丙の七）

伊藤侯、山縣侯、井上伯、松方伯、桂伯、澁澤男題辭、大隈伯序文

# 明治三十八年 世界年鑑

●卷頭 各國地圖勳章萬國信號旗內外船主旗萬國統計會議寫眞各國統計家筆蹟日露國勢比較圖等石版彩色刷二十四枚挿入

☞注意 九月十五日迄の御註文に限り 特價金參圓五拾錢 外に要送料

▲期限後は斷然値上げ實行可仕候へば期限內至急御申込願上候

全一冊 洋裝大判
縱八寸五分橫六寸
總布金文字入頗美本
紙數千四百七拾頁函入
定價金五圓
小包送料參拾錢

（其の八）

## 統計學專攻伊東祐穀君著

國家戰捷の訣は能く彼を知り己を知るに在り爲政經綸の要も彼我の情勢を詳にするに非ざれば能はず。而して世界日進の氣運は昨の我既に今の我に非ず、今の彼亦必ず翌の彼に非ざるなり。世界年鑑の必要缺く可からざる所以實に此に存す、是を以て歐米各國夙に『イーヤブック』の著あらざるはなく朝野萬民賴て以て坐右の寶典となせり然るに本邦久しく完全なる『イーヤブック』の出でざるを憾とし、本館曩きに統計學專攻の大家伊東祐穀君と謀り、年々完全無缺なる世界大年鑑を刊行せんと欲し、昨年六月を以て其第一版を發刊したるに、果して朝野の需用に適し、大好評を博したるは本館の光榮とする所なり。

爾來約の如く年と共に大に改新增訂し、玆に卅八年第二版の發刊を告白するの機運に會せり、本書が廣く萬國の長を取て最新最精粹の缺漏なきは既に江湖の諒知せらるゝ所にして、尙本書が第一版以後の最新統計の基礎に成り、其紙數の增加は百六十餘頁に過ぎざるも、其內容に於ては約五割を加へ極めて精密を期せり。全編を日本の部、各國の部、世界の部、實用の部の四大綱に分ち、更に繫ぐるに許多の細目を以てし、加ふるに諸種の必要なる圖章を挿み、一目瞭然、坐して宇內の大勢を了知すべからしむ。眞に我邦唯一の寶典なり。

（八月中旬出版發賣）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館



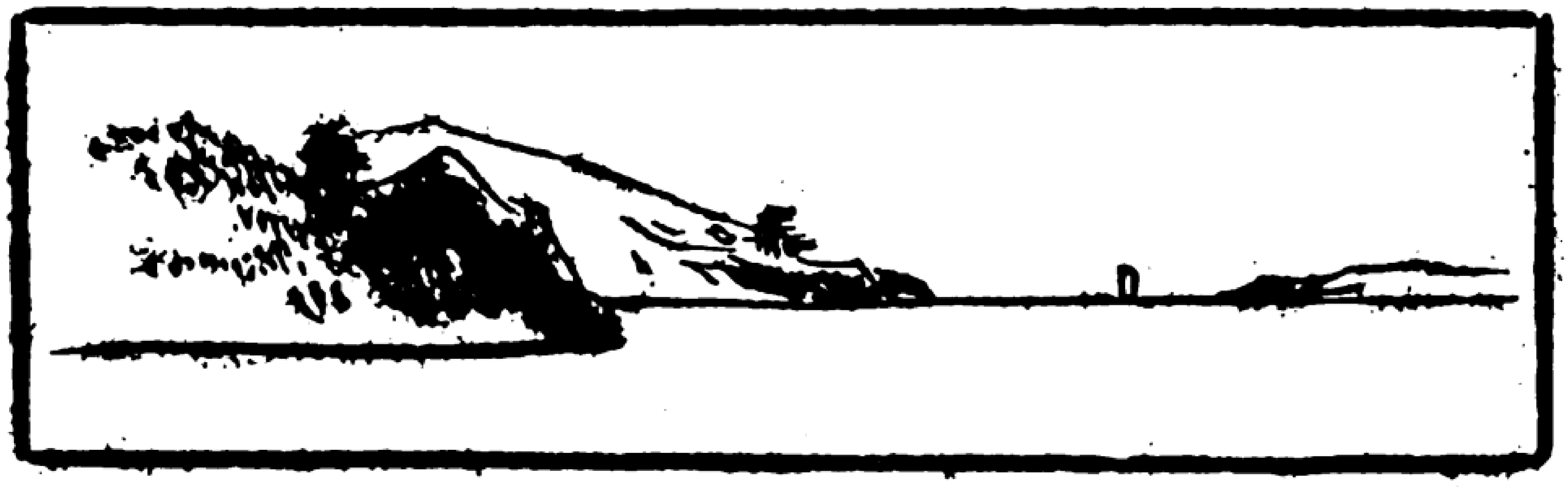
# 女學世界

## 第五巻第拾壹號

(八月五日發行)

## 勞後の休息

勞働後の休息は渇後の淸水のごとし。休息は仕事をしたる後に快樂ありて不斷遊び居る人にはこの樂みを受くる事能はざるなり、仕事の後に樂しき休息をなさんと欲せば、働らくべき時に務め働らくに若かじ、然して又人間は仕事のみ爲して其の身、其の家の發達し得るものにあらず、如何となれば只物質的の仕事ばかりをなして少しも精神上の事を考へざる時は折角骨折りて働きたる事業も何の利益もなく徒勞に歸する事あるものなりされば少くも一ケ月二三回はまく己れの事を考ふる時間を與へ、之を休息時となし、行くべきの道を歩み、爲すべきの業をなす事 是れ仕事を經營するの最好方便なり然るに世間の多くは休息日といへば食慾を縱まゝにし懶惰に流れ、以て其の目的を得たるものとす。是の如きは是れ休息にあらずして、寧ろ心身を消耗せしめて、却て過勞を覺へしむるに過ぎざるなり。



## 時論

# 賢母良妻の說

東洋女學校長　村上專精

男子に教育の必要なるが如く、女子に於ても亦、教育の必要なる事は、今更言ふまでも無き事なり、而も此社會が、愈々進步し益々發達するに從つて、又其必要の程度が更に增加し來る可きを當然とす。

然れども社會の進步と發達との程度に伴はざる、幼稚の教育が、何等の裨益をも與へざるもの多きと同一の狀態を以て、社會の程度を超過したる高尙なる教育は、反つて害無きを保し難し、吾人は特に女子教育に於て、其然るを見る。

蓋し現今の社會に有りては、中學を超えて以上の學問たる各自專門に研究するの學術は、學生が其後來に於て、依つて以て其衣食住を支うべき職業たらざる物殆んど稀なりと云ふべし、之を大學に見ても明なり、醫科と云ひ文科と云ふも、藥匙を採らざるもの教鞭を取らざる者は、彼等幾百千の卒業生中幾人有りしか、勿論始めよりして、社會に出て衣食住に窮せざらんが爲めならざりしもの一も有る事無けん。然れども女子に有りては男子の如く生活の爲めに學問を修めざる可からざるてふ理由は必らずしも存在せざるなり。女子は百年の苦樂唯だ男子に依賴してのみ生活する物なり、女子の天職は他の方面よりして男子の職業を輔佐す

るに有り、育兒に有り、臺所に有り、裁縫に有り、勞れて歸りたる其良人を慰籍するに有り、要するに男子をして後顧の憂なからしめて、生存競爭の激烈を極むる今日の社會に、能く勇戰奮鬪するを得せしむるに有りて、生活上の責任は擧げて男子の双肩に懸れり、故に女子の教育は目的を他に有して、決して男子と同じく生活の道を得せしめんが爲めには非ざりき。勿論之れは一般の例を以ていふものなれば、少數なる例外者の存在するは、免れ難き事なりと雖も、俗に所謂『共稼ぎ』とて、夫婦者相共に倶に助け合ひつゝ稼ぐ物有り、即ち良人が俥車を引けば、其妻は稚兒を背負ひて之が後押しを爲すが如き、事太だ美ならずとせずと雖も、畢竟するに是は下流社會にのみ見るの現象にして、まことは未開時代よりの遺習なり、無智者の爲る所なり、文明開化の人類に在りては、女子は女子の、男子は男子の長所に從つて、各自分業すべきを至當とし又自然なりとす。

斯の如くにして吾人は、女子教育は女子が生活の道を得て獨立せんが爲めに、之を施すものには非ざるを知りぬ、結局女子は其時世に伴ふて、賢母たり良妻たるを得ば、玆に全く其能事終れりとせん。されば女子と雖も或程度迄は高等教育の必要有るなり、社會の進歩に隨伴して、其時代に相應の智識を有せざる可からざるが故なり、例令は良人が終日外に在りて、如何なる仕事を爲せるか、其一般をだに知る事無くんば、何を以てか能く良人が一日の疲勞を慰籍し得るの良妻たらんや、更に第二の國民を養育すべきの賢母にして、少くとも其社會と時代とに伴ふだけの智識無くば、何を何てか能く日進月歩の膨脹的大日本の後繼者を出し得んや、女子には女子相當の高等教育を要す、時代に遲れざるの賢母良妻たらしむるを要す、一概に愚痴を免れざる者として顧みざる無きを要す。

更に此間に自活せざる可からざる少數の婦女子の存在するを知れり、或は先天的に學術研究に深大なる趣味を有して熱心なる者、或は不具者若しくは特種の情實の下に、到底嫁し能はざる者の如きは、宜しく高等の教

育を受くるに依りて、能く獨立自活するを得ざる可からず。從つて國家は是等少數者の爲めに、女子高等教育の機關を要するなり。

爰に一般に賢母良妻とし云へば、言餘りに抽象的に過ぎて、意味を了解し難きもの有らんも、要するに、女子の教育が社會の發達に相伴ふて進歩せざる可からざる事、尙ほ且つ今日の社會に於て『女大學』や『今川』が有せる價値の極めて少きを見ても容易に知り得べきなり。

女子高等師範學校の如きも、卒業したる生徒に取りては、正しく一個の職業を得たるに外ならざるなり、獨立すべきの力を備へし者なり、自活の方法を知りたる者なり、是れ實に一方より見れば、甚だ意外なる出來事の如くにして、而も時代の進歩發達に伴ふ時は、當に然るべきの事とす。

日本今日の社會に有りては、現今の高等女學校卒業を以て、先づ適當なる女子教育の最高程度と爲すものゝ如しと雖も、今日以後は各種の社會現象に因りて、靑年男女の結婚時期も尙は更に遲延するもの有るべく、他方には又社會が要求する良妻としての、女子の智識も高まらざる可からざるが如く、今の高等女學校卒業の後に、尙ほ一二年の餘裕を生ぜんとする物の如し、故に此間に授くべき、一歩を進めたる何等かの教育を要すとするの論者有り、吾人は之を贊するに躊躇せず、吾人は元より之と同感なり。

女子の高等教育論に至りては、歐米に於ても其議論二派に別れ、極端に走りて男女の同權を主張する者と、何所までも穩健を旨として女子は育兒の重任有るが故に、或程度までは男子と異ならざる可からずと爲すものと有り、元來世人は女子が子を育つる事を、左ばかりの難事ならざるが如く思ひ、女子自身も亦然く思へるが如きは、大なる誤謬ならざる可からず、一應は易くして無造作なるが如きも、恐らく是れ社會に於ける最も困難なる事業にして、且つ最も重大なる責任なるべし、東鄕大將の武勳は東西古今に能く比敵し得べき者無しと

雖も、大將登に能く子を育つるに於て世間の母に勝るを得んや。育兒即ち第二の國民を養はんは至難の業務なり、而も女子に限れる業務なり、女子の戈を取りて戰塲に勇鬪せし者は、古來必ずしも珍とせざれども、男子の子を育てしものは吾人未だ之れを知らざるなり。若し夫れ女子が獨立自活を爲して、良人に事へ、子を育つる事を好まざるに至らば、其は社會の病的分子なり速に除き去らざる可からずして、之が蔓延は其社會の滅亡に至る可きを豫告する物なりと云ふも差支無かるべし。

彼の上流社會に多く見るが如き、其子を乳母に托して養育せしむるは、吾人甚だ之を喜ばざる者なり、唯だ夫れ餘儀無き情實の伏在せる物は即ち止む、自己の子は自己に於て養育せざれば、遂に母子間に於ける愛情の薄らぐに至るを悲まざるを得ず、幼兒の時代に有りては乳母は誠に戀しき物なり、云ひ知らずなつかしき物なり、時としては、其の實母よりも尙ほ慕はしき物なり、乳母に於ても亦、其の實子と殆んど差別無き愛情を保つ物なり、斯の如き間に於て實母と乳母との差違有る待遇と、淺學者には多く免れ難き不健全なる愛情とは、或は衞生上に健康を傷ふ事有り、或は精神上に惡癖を養ふ事の有るが如きは、往々にして其免れ難き所なるを悲まざるを得ず。まことの母が手づから其子を養育して父母恩重經の所謂『我兒家中に啼哭して我を憶はんと、母即ち心驚き、兩乳流れ出で、即ち我子家中に我を憶ふと知て、即ち走りて家に歸る、其兒遙に母の來るを見て或ば闌車に在て頭を搖し、胸を弄し、或は又曳腹して隨ひ行き、嗚呼して母に向ふ、母は其子の爲めに身を曲げて下り就き、長く兩手を舒べて塵を拂ひ拭ひ、其口に嗚和し、懷を開いて乳を出し、乳を以て之に與ふ、母は兒を見て喜び、兒は母を見て歡ぶ、二人の情恩慈す、親愛の慈重きこと復之には過ぎたる事無し』の域に到る可きを當然とす、植物の如きも、一鉢の朝顏一株の菊花にして、其二葉の時よりして自己の養育したる物は、其開花の時に當りて如何に樂しく眺めらるるかは、滿開の儘を植木屋より買ひ入れたる物とは、到底同一の論

に非ざるなり、一枝を切つて花瓶に挿むも、花屋より買ひ入れたる物と、自己が艱しく耘り耕せし畠より採りし物と、其間に趣味の異なる物有るは自然の作用にあらずや。菊花の如く朝顔の如き無情の草花にして既に然り、況んや人は多情の動物なり、腹を痛め襁褓の世話をして、或時は憎しと迄も思ふてこそ、子は眞に我身よりも可憐かりけれ、願くば自ら生みし子は自ら手しほに懸けて、所謂嚥苦吐甘的養育を爲すの美風を養はん哉。

此乳母を雇ふの習慣は、高等教育を授りたる女子の嫁する中流以上の社會に特に多きを以て爰に特に一言せり。

# 女子と音樂

東京大學教授
東京音樂學校教授　フオンケーベル博士

日本の女子が西洋音樂を學ぶに至つたのは、謂はゞ昨今のことで、日尙淺きにも拘らず、其の進步發達は洵に著しい事である、何事にも長足の進步をなせるを以て世界に名高き國民のことゝて、音樂にまで非常の進步を顯はして居るのは、吾等の末頼母敷く思ふ所である、蓋し斯くまで進步して來たのは決して偶然の結果ではない、日本人は非常に勉强心に富んで居る殊に女子に至つては、音樂の道に熱心で且つ注意深いのであるから敎師の敎ふる所をよく聽き、固より怜悧なる國民のことゝて、敎師の敎ふる所を能く理會します、然し遺憾な點を申上げると、日本の女子はどうも自發心に乏しい、まして、する事が皆受動的であるから、敎師に離れるときは直に其の爲す所を失ふと云ふやうな有樣である、故に其の嗜好が未だ充分に發達して居らない、學んだ所や、又は一度演奏した所などは上手に演奏するけれども、一人で如何樣に演奏すれば宜しいかと云ふ考がな

いのは、如何にも殘念である、それ故教師と一緒に演奏するなどゝ云ふ時には實に上手で、獨逸などにもおさ〳〵劣らないが、偖教師に離れて獨奏と云ふときには未だ迚も西洋の女子の如くにはまゐらん、西洋では教師がなくても立派に獨奏する、是れは畢竟何に原因するのであるかと云ふに、

他ではない、音樂の理論をよく學ばないからである、所謂和聲學を知らないからである、凡そ音樂を學ぶには單だ手や指ばかりで器械的に學ぶばかりでは足りない、心にも耳にも之を學ばなければならぬ、如何に指先で樂器を巧妙た奏しても立派な音樂人とは申されない、どうしても音樂の精神を會得しなければならぬ、それで耳で聽分けるやうになると立派なものである、畢竟は此等のことは皆學問に依ることである、處が音樂の學問と云ふ方が缺けて、重に技術の方ばかり進んで居るから、是が丁度西洋にも劣り、又音樂の品位と云ふものも上らぬ所以である。

然し西洋音樂の本邦に入ることと日尙淺きに、之を責むるのは少しく酷かも知れんが、私は決して本邦生徒を責める譯ではなく、寧ろ大に之が發達を計りたいと云ふ心から申すのである正直を申すと東洋諸國の中で音樂に一番堪能なのは日本人である、他には之に及ぶ者はない、若只今申上る通り學問と技術とを兼修して兩々相並行するやうになつたならば屹度西洋にも劣らぬまでに發達するであらう。

要するに今迄音樂學校の缺點とする所は音樂と教育とを分けて置いたことである、音樂と教育とは離れぬものである、普通の教育さへもなくしてどうして音樂家になれるものですか、私は日本のことはよく存じませんが、一と通りの學問もなくして單だ指先きばかり巧に動かす者は音樂家ではなく、音樂屋であります、如此な者は品性も高まる譯もなければ、創見と云ふものも起る譯がなく、迚も立派な音樂師として視られぬものである故に私は『良教育を受けたる者にあらざれば良音樂家たる能はず』と云ふことをよく日本の音樂生就中女生に

記憶して貰ひたいです、之を想ふにつけても上野の音樂學校で音樂と敎育とを同時に授けないのは如何にも殘念な次第である。

然し幸に現校長高嶺さんは敎育界に功勞ある知名の御方であるから、此の缺點を補ふて學問と音樂とを兩々相並行して進ましむる爲には極めて適任の御方と思ひます、音樂學校の方から見ましても此の校長を得たのは千載の一遇と云うてよろしいでせう、故に私は現校長によりて此の方面の改良は今後着々實行せられて行くことゝ大に希望して居ります。

次に女生と男生と孰れが音樂に堪能であるかを申上ぐれば、概して女子の方が遙に優れて居る、故に音樂の敎師としても女子の方に多く良敎師がある、女子は謙遜で質朴でよく敎師の言を用ゐ、充分出來て居つても遠慮する程であるが男子になると直きに知つたふりをすると云ふやうな氣味があるかと思ひます、すぐに先生ぶると云ふ癖が見えるのである、是れは音樂の發達上大に害になります、無論其中には多少の例外はありませうが、然し私は女子の方には隨分上手な者があると認めて居るから、概して女生は男生に優れて居ると申しても嘘ではなからうと思ひます。勿論私は音樂學校で凡ての生徒に敎へて居ると云ふ譯でないから、幾分か一を以て萬を測ると云ふやうな譏あるかも知れませんが、然し自分では大抵眼識がまちがはぬ積りであります。

（博士は明快なる佛蘭西語を以て述べて下さいましたが文責は記者にあります。菊地雪子記）

# 男女交際に就て

山脇房子

男女交際の必要は一般に感じて居ることですが、さて其方法に付ては未だよい考案はない樣です、何事でも習慣を破て改良を計るには、其初期に於て多少の弊害の伴ふことは免れられないけれども弊害を恐れて此儘に致して置ますならば、幾年經ても交際法の開ける時はなからうと思ひます。

されば私が兼てかく致したらばと存じて居ることを摘でお話致して見ましやう、今日では歐洲各國と對等の交際をしなければならぬ場合ですから、國民の義務として先進者たる男子方は、少々御迷惑でも成丈交際場裡に妻を同伴して智識見聞を廣めしめ、興味の多い、常識に富んだ、氣の利いた者に成樣に敎へて下さる樣にし女子も亦勉めて夫に同行し、成るべく邪魔ものにならずして怜悧快活なる相手の出來る樣に、常に新聞雜誌を見るにも時事問題に注意し、其日〳〵の出來事に對して幾何かの意見を貯へ、萬事に廣い頭腦を養ひ置き其席に臨んで手持無沙汰に迷惑そうな風をして他人に鬱陶しがられない樣につとめ、男子をして成程あゝ云ふ婦人ならば同席した方が興味があつて面白いと思はれる樣に心掛けねばなりません、それから又一方法としては銘銘の家へ何も御馳走はせずとも茶菓位にて極手輕に友人知己（男女）を招き互に智識を交換し、また或時は郊外散歩に同行して地理動植物の智識を廣め又追々には各區每に集會場の樣なものを設け其處には書籍室もあれば音樂器もある手輕に飮食も出來ると云ふ樣にしたならば相互に都合よき日を撰んで此處に會合することも出來る、又時日を定めて面白い會になる遊を催すことも出來る勿論年頃の娘には必ず母親或はこれに相當する人が同伴して監督することにし此集會場にも經驗ある賤しからざる監督者を置て萬事不都合なき樣に氣を附けたならば次第に慣れて參り自然交際の興味を覺え、弊害も惡評もなく面白く交際の出來る樣になりませう。

又家庭に於いても幼少の時から從來の樣に男女の區別を嚴しくせず、可成兄弟姉妹打ち混じて遊ぶ樣に仕附け、强い男の子は弱い女の子を助けねばならぬ、といふことをよく知らしめ、男子のみにて會合するは殺風景

にして面白からず、女子のみにても亦愉快ならずと相互に會することを希望する樣に仕向け、度々集合を催して男女の友達を招き、母親自身が其監督者となりて客を接待する術を教へて成長させましたならば、たとひ年頃の男女が會合致しても極清潔な交際が出來やうかとぞんじます。

此頃歐洲より歸朝された人の談に彼地の子供は六七才の頃よりはや途を行くに女同志、男同志よりも男の子は女の子の手を取り、女の子も男の子と喜んで步行する、すべてのことが男子と女子とでなければ愉快でないと思ひ居る樣に見受けられる、而して自分が四年ばかり滯在して居る間に男子のみの會合は只二三度ありしのみにしていつも男女混合と極まつて居る、萬一男子のみの會合なるときは特別に通知書に其事が記してある、そして一般の宴會其他の會合がいつも正しき男女のみの混交なれば極めて清潔に高尙であることは實に羨敷次第であると申されました。

然るに我國に於ては宴會其他の會合へ可成夫人を同伴することを嫌ひ、所によつては婦人携帶を免されない場所さへございます、これはつまり夫人を同伴しても談相手にもならず、客の應接も出來ず、却て手數のかゝる邪魔者になる故に、自然自分一人で出席する樣になるであらうとぞんじられます、さて會に行て見ても男子ばかりでは御互に面白くない、淋しい處から惡いことゝは知りつゝ客あしらひの上手な快活な藝者と云ふ調法な者を招て興を添える樣になることゝ思はれます、二三年前我國へ漫遊に來ました英國の婦人が申しました「自分は日本へ來て種々の集會に行て見て婦人の出席者の少ないに驚いた、今一つは自分は女子のことであれば勉めて婦人方に談話を試みるけれども一向婦人方には話がない遠慮なく申せば話せない何を話かけてみても更に興味がないかゝる婦人を妻として終生起臥を共にして居る男子は如何にも不愉快なことであらう、或人が日本社會の有樣を評して半身不隨卽ち男子は發達活動して居るけれども其半身たる女子は眠つて居ると申した

が、これは強ち無理な評ではないと思はれる」と申しました誠に殘念な評ではございませんか。

さて交際をするに當て第一に心掛けねばならぬことは其男女の間に禮儀作法と云ふことを專ら注意致したいことです、兎角未熟の間は誤解より悪い風評の起て終身の妨げとなる恐れがございます我國の女子は幼時から家庭に於て可成禮儀作法は教へられて居りますが男子にはまことに無禮無作法な人が多うございます、これは家庭に於ては勿論學校に於ても男子にはあまり禮儀が教へてないから、一と角の紳士の積で居らるゝ人の中でも其言語擧動の無作法なこと實に驚くばかりです西洋の諺に「禮法を習熟せずして社會に立たんとするものは必ずや非凡の資質なかるべからず」とございますが、禮法を知らざるものは紳士にあらず貴女にあらず且つ高等教育を受けたるものに非らずとして中流以上の人は大抵これと齒せず現に劍橋、牛津兩大學の學生の如きは紳士たるの禮儀作法を習ふに切なること其學術を勵むに均しいと承て居ります、凡て紳士たり淑女たるの人が自己の品格を保たんには人と相對する場合は勿論、能く其獨りを愼み敢て苟くも言はず、行はず、進退よく其度に協ひ、之に接するものをして其威風に服し、之に近くものをして其溫容に感ぜしむるが如きはみな其心の整へと、形の整へと相待ちて紳士たり、淑女たるの資格を備ふるのでございます。

## 現米國大統領の平生

日露の講和に就て殊に著しく其人格の偉大なる世界に知られたる米國大統領ルーズベルト氏の平常に就て聞くに、氏の起床は毎朝午前七時にして、八時半には家族一同と共に朝餐を喫し、九時過ぐれば、廊下を經て政廳に出頭し、午後四時までは政務を視、それより官邸に歸りて、運動に取りかゝるを常とす、運動の種類は一定せず、時に嚴寒を厭はずして、長距離の散歩を爲すことあり、乘馬を試むることあり、又テニス或は拳鬪を試むることあり、夜に入れば必ず每夜招客あるか、或は他に招かるゝを以て寢に就くは十二時以後なり。

而して氏の政廳にあるや、氏に面會を求むるもの、數實に夥しく、每日百名乃至百五十名に達す、秘書官ロープ氏は、其特別の用務を帶びたるものに限り、面會時間を定め、午後三時より四時半の間に於て、大統領に面會せしむるも、面會請求者の約半數は秘書官ロープ氏面會して、其用務を聽き取るなり、又各國の大使には何時にても訪問に應じて面會すれども、公使以下の外交官は、電話にて大統領の都合を問合せざるべからず、代議士等は、政廳に出頭の上刺を通ずれば、遂に面會する事となり居れり、又氏は、夜中の執務を好み、緊要なる公文、教書、又公會演說の草稿等は、夜の九時に至り、官邸の圖書室にて口授するを常とす、又夫人が午後に茶話會を催す如きことあれば、之にも顏を出すを常とす、又非常に子女を愛し、その幸福と快樂との爲に常に盡力せり。

# 人事曆

## 八月

日曜日 六日、十三日、二十日、廿七日。

▲一日――武藏氷川祭（舊暦七月朔日みつのえさる）▲四日――山城北野天神祭、▲十五日――八幡神社大祭、▲十六日――滿月、▲廿五日――龜井戸天神祭、▲廿六日――二十六夜、月見團子枝豆などをさゝげて月出を待つ「秋涼し二十六夜の月の色」（霜紅）、▲三十日――八朔。

季節――八日「立秋」廿四日「處暑」、驕陽炎威をふるひて天地山川熱又熱、天氣は概ね晴燥にして南風徐ろに至り時に雷雨を來す。人は苦熱を避けて旅行を企つる者多し。

農事――本月下旬より農家の最も煩はす時期に入る、播種には秋蕎麥、菠薐草、牛蒡、玉葱等、其他粟、陸稻、水稻等の除草、中耕、秋蠶の飼育。

遊覽――八月の樂みは露のひぬ間の朝顏、瀾にしまぬ蓮花を見るに如くことなし。或は遠く避暑旅行に出掛て清風冷水に心身を洗ふ亦た無上の快なり。蓮は上野不忍池畔、京都大谷、大阪天王寺、朝顏は東京入谷が最にして、瀧は日光裏見、美濃養老、熊野那智等幽邃を以て傳る。秋草を賞するには、向島百花園、廣島矢花園。二十六夜待には品川、高輪、洲崎等よし。

食品――水蜜、石決明の水貝、鯉の洗ひ、鮎の膾作り、大子の魚田、いなだの刺身、南瓜の胡麻韲和、西瓜、まくは瓜。

# THE "JOGAKU SEKAI" ENGLISH COLUMNS

# 女學世界英文欄

Conducted by ISOH YAMAGATA.

山縣五十雄擔當

## QUEEN ALEXANDRA ON WAR.

An interting interview with Queen Alexandra of Great Britain was lately published by a Paris papar. After speaking of the duty of queen in rearing their own families in a manner to do honour to the station they are to occupy, and of their obligation to help relieve the distress and misery of mankind, she touched upon the matter of war. "Your talk, as man," Her Majesty said, "is of war, but we women speak always of peace-peace in every nation, peace, between all nations. I have always tried to preach love and charity." The sentiment, which is highminded and womanly, comes with added grace and force from the lips of one whose life has been a constant and succesful effort to express it in deeds.

## 英國皇后の戰爭論

近頃巴里の一新聞に英國のアレキサンドラ皇后との會見の面白い話が出て居ました，皇后たるものは其子女を他日彼等が占むべき位置を耻かしめざるやう養育せざるべからざる義務と，人類の苦みと惱みとを救ふことに力を盡さゞるべからざる責任とを負へることを語られたる後，戰爭の事につきて述べられました．陛下の言に曰く「男子として貴下等の口にする所は戰爭であれど，我々婦人のいふ事はいつも平和，即ち各國民中の平和，總ての國民の間の平和であります．私は常に平和と慈愛とを說くやうにして居ました」と．此感想は高尙にして且つ女らしいのでありますが，殊にこれが一生絶え間なく之を行に表はすことを努めて成功せられた方の御口より出でたのでありますから一層美しく且つ力强く聞えます

〔註〕 Interview 會見—rearing 養育—in a manuer......are to occupy 他日占むべき位置を耻かしめざるやうに—obligation 責任—to help relieve 救ふに力を盡す — high-minded 高尙なる—added grace and force 美と力とが增加して．

## WOMAN, THE FRIEND OF PEACE.

Woman, by nature, should be a friend of peace. Heaven has endowed her with a gentle and loving disposition. Her mission on earth is to bring peace and love among mankind and make brothers all. Even in time of war, her first

## 婦人は平和の友なり

婦人は天性平和の友たるべきものであります．天は婦人に與ふるに柔和にして愛深き性質を以てしました．婦人の此世界に於ける天職は人類の間に平和と愛とを齎し總ての人を兄弟にするに在ります戰時に於てすら，婦人の先づ思ふべきことは戰爭の爲めに必ず起る

thought should be directed towards relieving the miseries and sufferings that inevitably arise out of war. As it is, when war is over, she should endeavour to prevent the repetition of it and to preserve peace. I am very much glad that in the present war the women of Japan have shown themselves to be truly great. They have shown that they are as patriotic and bravo as men, ever ready to sacrifice their private interests for the sake of the Empire. There is no doubt that the work done by the Ladies' patriotic society and other similar organizations of our sisters has contributed a great deal to the success of our arms. It is my sincere hope that when peace is restored, which is now in sight, they will work in the interest of peace as devotedly as they have done in the cause of war.

べき不幸苦惱を救助するにあるべきにあります．であるから，戰爭が終はつた時には婦人たるものは二度と之が起らぬやうに防止すること〻，平和を維持すること〻に力を盡さねばなりませぬ．私は今度の戰爭に於て我國の婦人が眞に偉大なることを表はしたのを大に喜ぶ者であります．彼等は男子と同じやうに愛國で勇ましく，帝國の爲めに何時にても自分の利益を捨つるを辭しないことを示しました愛國婦人會其他我々姉妹の組織した同種類の諸會が我軍の勝利に多大の貢献をしたことは疑ひありませぬ．今や見えつ〻ある平和が回復さる〻時には我日本婦人は戰爭の爲めに盡したと同じやうに熱心に平和の爲めに働かんことを私は誠實に希望するのであります．

〔註〕 By nature 生れついて—has endowed 賦與した—mission 天職—first thought 第一番に起る考—directed 向ける—inevitably 必ず—repetition 繰返し—sacrifice 犧牲に供する—private interests 私の利益—Ladies' Patriotic Society 愛國婦人會—similar organizations 同情の團體—contributed 貢献する—a great deal 多く—success of our arms 我軍の勝利—in sight 見える—in the interest 爲めに．

* * * * * *

## EXTRAVAGANCE OF AMERICAN WOMEN.

Japanese husbands ought to congratulate themselves upon the fact that their wives are as a rule frugal, unostentations, not given up to vanity. To hear the amount of money some New York women spend on dress, fairly takes one's breath away. A writer in the recent *Success* tells us that according to the investigations he has himself made, it is not at all rare in New York that as much as £ 2,000 or 20,000 *yen* are paid on a short fur

## 米國婦人の濫費

我國の夫たる者は其妻が一般に儉約で，飾り氣がなく虛榮心に支配されぬ事を喜ばねばなりませぬ紐育の婦人が其衣裝に費す金の額を聞きますと，實に驚かざるを得ないのであります．近刊の「成功」といふ雜誌に於て或人が其自ら調査した所を記述して居りますが，これに據れば紐育に於て並みの品の短い毛皮の上衣に二千磅即ち二萬圓といふ大金が拂はる〻ことは少しも珍らしくはないもしそれが上等の品で並みに長い黑貂の上衣であると其代價は六千六百磅即ち六萬六千圓乃至八千八百磅即ち八萬八千圓であります此文を書いた人は紐育の一等の毛皮商人に「そ

coat of moderate quality. If it is a moderately long sable coat of good quality, the price asked for is between £ 6,600 or 66,000 *yen* and £ 8,800 or 88,000 *yen* ! "Andyou sell coats at such prices ?" asked the writer in astonishment of a leading New York furrier: "We sell this kind of sable as fast as we can get it," was the reply. Again the writer has found out that a New York society woman would spend up to £ 160 or £ 200 on a ball or dinner dress. He alss says that he has heard of a certain wedding dress on which the lace alone cost £ 300. On the whole, the writer estimates that six thousand New York women of upper society spend a total of over £ 8,000,000 or 80,000,000 *yen* a year on dress.

のやうな値段で上衣が買れますか」と驚いて聞いたところ,「このやうな黒貂の上衣なら手に入り次第賣れます」との答へでありましたそれから又其人は紐育の交際社會に出る婦人等は舞踏又は宴會用の衣裝に百六十磅若くは二百磅を費すことを知り又レースばかりに三百磅かゝつた或婚禮用の衣裝のことを聞いたと言つて居ります、總めていへば紐育の上流社會の婦人六千人が一年間に衣裝に費す總金額は八百萬磅即ち八千萬圓であると記者は計算して居ります.

〔註〕 Extravagance 奢侈, 濫費 — congratulate 祝する, 喜ぶ—as a rule —般に—frugal 儉約 — unostentatious 見えを飾らぬ — not given up to vanity 虛榮心に制せられぬ—fairly takes one's breath away 全く息を止めてしまう(非常に驚ろかす)—writer 記者(寄稿家)—*Success* 成功(米國にて發行する雜誌の名)—not at all rare 少しも珍らしくない—moderate quality 並みの品質—sable 黒貂(サイベリア產の貂にして其毛皮は柔く黒色にして光澤あり)—in astonishment 驚いて—leading New York furrier 紐育第一等の毛皮商—society woman 交際社會の婦人—ball 舞踏 — on the whole 引きくるめていへば—upper society 上流社會

## GIRL POETS.

In the may number of the *Girl's Realm*, an English magazine for girls, there is an article on four girl poets—Julia Cooley, Enid Welsford, Antonine Coullet, and France Darget—who have become famores while they were mere children. Julia Cooley, who is a Chicago girl, was only eleven when her "Poems of a Child" were published. Enid Welsford, whose book of poems was published a short time ago, is equally young. Antonine Coullet and France Darget are French children. France Darget's first volume appeared when the girl was thirteen, and a second volume was published two years later. Antonine Coullet's

## 少女詩人

少女の爲めに發行する英國の一雜誌「少女界」の五月の分にまだたゞの子供であるうちに有名となつた四人の少女詩人即ちジユリアクーレー,エニツド ヴエルスフオンド,アントニン クーエ及びフランスダージエの事を書いた文が出て居りますジユリアクーレーは米國シカゴ府の生れの少女で其作「子供の詩」が出版されたのは僅に十一歲の時でありました. 又近頃其詩の本が出版されたエニツドウエルスフオードは同じく年若く, アントニンクーエとフランスダージエとは佛蘭西の子供で, フランスダージエの最初の卷は此少女が十三歲の時に世に出で第二卷は其後二年を經て出版されました. 又アントニンクーエの詩集は此少女が十歲の時に世間に出されました.

collected poems were issued to the world when the child was ten.

〔註〕 May number 五月發行の號—Girl's Realm 少女界—while they were children まだたゞの子供であるうちに—collected poems 詩集.

## WOMAN'S FOOT.

"I do not know," says a writer in the *Gentlewoman*, "if any one has ever drawn attention to the fact before that you can generally tell the shape of a woman's foot by her face. There is as much character in a foot as in a hand; you will generally find the round-faced, short-nosed little woman has the prettiest ankle and foot; the high-cheeked long-nosed woman the ugliest. Woman with very pretty faces have seldom very pretty feet. Nature, somehow or the other, compensates its daughters."

With regard to the subject of the woman's foot, European papers tell of a curious custom among travelling women. It appears that the women when staying at hotels or the like do not care to exhibit to the passers along the corridors the exact size of their feet, so they carefully carry with them a couple of pairs of tiny, delicate sholes, which instead of the ones they are wearing, they place outside their doors for the servants to take down and clean. All the big boot shops in paris now make a speriality of this tiny footgear, and a pair or two form a portion of the troussean of every up-to-date bride. Madrid women are said to have the smallest feet; Peruvian women come next.

## 女の足

「ゼンツルウーマン」といふ雜誌に或人記して曰く，大抵女の顏で其足の形をいふことが出來ることに誰か注意を惹いた人が旣にあつたか知らぬが手と同じやうに足にも亦特性があるもので一般に丸顏の鼻の短かい小がらな婦人は一番美しい踝と足とを持つて居り，頰骨の高い鼻の長い婦人の足は一番醜い．甚だ美しい顏の女は甚だ美しい足を持つて居ることは稀で，自然といふものは何處かで其娘に對し償ひをして居ると．

女の足の問題につきて歐洲の諸新聞に旅行する婦人の間に行はるゝ奇妙なる風俗のことが記載されてありました．旅舘又は同樣の家に滯在して居る女は廊下を通行する人に其足の正しき大さを見せるが厭であると見えて小さいやさしい靴を二足用意しておき，之を其穿いて居る靴の代りに戶の外へ出しておき，婢僕が掃除をする爲め下に持つて行くやうにしておく．巴里では今總ての大きな靴屋で此小さい穿物を特別に製造するそうで，時勢に遲れぬ花嫁御が新婚旅行をする時には，一足か二足か必ず其荷物の一部となつて居る．世界の婦人のうちで最も足の小さいのは西班牙マドリット府の女で，其次はペリユ國の婦人であるといふことであります．

〔註〕 Gentlewoman 英國にて發行する婦人雜誌の名 — generally 大抵，一般に — character 性—round-faced 丸顏の—ankle 踝(くるぶし)—Nature 自然—somehow or the other 如何かして—compensates 償ふ.

with regard to 關して—European papers 歐羅巴の新聞—travelling women 旅行する婦人—hotles or the like 旅館又は同種の家—passers 通行する人 — corridors 廊下 — a couple of pairs 二足—make a speciality 專門にする—trousseau 荷物—up-to-date 時勢に伴ふ



社交

# 金髪夫人の家庭談

婦人記者

欧米の婦人にして我士人に嫁せられた御方は多いが中にも一番古いのは、農商務省の老吏某氏の夫人であります。夫人は我國に住はるゝこと最早三十年、青木子爵夫人より先輩と申すべき方で、淑徳高く能く良人を補佐せらるゝが、近年最愛の令孃を先立てられ、二人の遺孫を手一つに愛育されつゝあるのです。家庭に於ける夫人の優しさは何人も敬慕する所で、社會の方面に於ては、幼稚園の先鞭、華族女學校音樂の教授を始めとして、専ら泰西の趣味を我邦人に注入された功勞を認めねばなりません。記者の訪問致した際は、應接室の二階で夫人自ら染物の最中、靴音細かく天井に聞えて御忙しさうでしたが、手早く庭に干し終つて此室に來られました。夫人は日本語を上品に流暢に話されて客の心を滿足せしめられ、未だ衰へぬ花顔、活々した御容子、虚飾なく眞實に滿された御話振りは感興湧くが如く幾度か膝の進むを覺えぬ程でしたが、獨逸婦人の特性か謹素謙退、世に歌はるゝを好まれず、固辭さるゝこと再三でしたので、記者は唯だ其一二を紹介致す事にしました。

### ▲結婚の手續

私が日本へ參りましたのは明治九年の八月でした。私は兩親から日本へ到着した翌日に直ぐ結婚しろと命ぜられて參つたのですが、獨逸政府の許可の書付が

なければならぬと公使から聞かされました。それ迄に公けにならない結婚は多少あつたでせうが、日本人と公けに結婚するのは私が初めてゞしたから、此手續が一向不案内で、國から書付を貰つて來るのを忘れたのです。私は極々堅い家で育つたので、手續を曖昧にするとは大嫌ひですから、早速本國へ電報を打ちました所、一週間程經つて返電が參りました。けれども唯返事だけで、肝腎な政府の書付が來なかつたので、何にもなりませんでした。それから又交渉に手間取りまして、愈結着が付くまで四個月も掛りました。其頃は日本が未だ唯今ほど進んで居ませんでしたから、公使は私に向つて『貴女は折角お出でになつたが、日本人と結婚なすつても、將來餘り面白くはあるまいと思ひます。先あ御考へなすつては如何です』と頻りに止めました。併し良人とは國で六年も交際致して、善く其人と爲りを信じて居ましたので、正しい手續を致し同年十二月に結婚致したのです。ハイ家は矢張り此家で、良人が私の參らぬ前にチヤンと建てゝ置いたので御座います。

▲渡來當時の境遇

日本へ着きました際には、木戸さんや品川さんが波止場まで御出迎へ下すつて、百方御世話下さいましたそれで結婚までの間は木戸さんの別莊を借りて居つたのです。八月に日本へ參つた時、暑いのには實に驚いて、方々人力車で歩くのに是れでは耐らぬと思ひました。左樣國では極暑いのが七月ですが、華氏の九十度位が頂上で、それも滅多にはありません。食物ですか、未だ麺包が無かつたので、カステーラを食べて居りましたが、不味いのに弱りました。肉も料理の工合が思はしく無いので、卵ばかり用ゐて居つたのです。ハイ私は二十一歳の時に參つて、今年で丁度三十年になりますが、唯今とは市の樣子も全然異つて居つて屋敷町の黒板塀はチヨツト厭な感じが致したのです。尤も是れは私の國で不幸の際に黒の圍ひを致す習慣があるので、黒塀を非常に寂しく悲しく感じたのでせう。其後追々眼に慣れて何とも思はぬ樣になりました

ので、宅の園ひにも黑板塀を致して居ります。ナアニ三十年も居つても、却々言葉が能く出來ませんで、唯今でも六ケしい漢語になると解りませんよ。

▲幼稚園の先鞭

私が日本へ着くと、直に文部省から幼稚園を受持つことを仰せ付けられ、御茶の水まで通ひ初めたので御座います。日本の幼稚園は此時が創設であつたので、言葉の善く分らぬ私は、當時の女子師範學校々長中村正直さんのお嬢さんに通辯して戴いて教へて居りました。結婚後も矢張り毎日出勤致したのですが、良人も毎日農商務省へ出勤致すので、家は一日下女任せの所、其頃は未だ下女も不馴で、掃除なども私の氣に入りませず、留守には唯ぶら／＼して居ると云ふ風で




私が歸つて參ると直に家政を取らねばならぬと云ふ有樣でした。其うち子供が出來たので、辭職しやうとしましたが、中村さんが『今貴女に退かれては折角始めた幼稚園が中絶して了ふ』つて却々許されません。それで私は子供を任せる適當の女がないから、學校へ子供を拉れて出ても宜しければと申しました。所が中村さんは、一人でも二人でも保姆を付けるから、子供を拉れて御出でなさいと請合はれましたので、それから毎日子供を拉れて出勤致し教師室の隣室へ置いて監督致しました。私は子供を實に大切に育てましたので、何處へ參るにも子供を置いて參つたとは無かつたのです。時として

公使の許へ夫婦で出る折などには、良人の親類へ預けて參りました、注意の疎漏な下女共に預けて出るとは如何しても出來ませんでした。尤も唯今居るの位に善く私の家に慣れてシッカリとした下女が其頃居つたなら預けて參つたでしやう。斯う云ふ風に家や子供の心配致しつゝ勤めた上に、乳も割合長い間飮ませ、辨當も麵包と卵ぐらゐで、滋養が足りなかつた爲めに、身體を大層惡く致したので、三年目に辭職しました。幼稚園も唯今は大層進歩致しまして、昨年四月 天皇陛下から最初の幼稚園に盡力致した賞狀と金千圓を賜り誠に勿體ない有り難い事と感銘致して居ります。ハイ華族女學校へはピアノの敎授に丁度十七年間勤めました。其間に樂隊の方や雅樂を成さる方などが音樂の稽古に來られたのです。當節は最早何處へも出ませんで少しづゝ御孃さん方に音樂を敎え申して居ります。

▲孫の養育

私は唯つた一人の娘を大切に育て上げ、北白川宮妃殿下御姬樣には私母子とも御最屓に預り、先年伊香保へ御供致した折などにも片時も御離しになりませんで御寫眞を御撮りになる時などは何時も私と娘を御加へ下さつたのです、其娘が四年前に男女二人の子を遺して臺灣で亡くなりましたので、私の悲しさは譬へやうも御座いません程でして、それが爲めに身體を餘程惡く致しました。それで遺した子供は、私方へ引き取つて世話致して居りますが、四歲になる弟の方は、昨年國へ連れて參り親戚へ預け、六歲になる姉娘は宅に置いて、築地の學校へ通はせて居ります。孫を育てるので、少しは紛れて居りますが、親のない子供は何となく物足りない樣で可哀相でなりませぬ。

▲食物の規律

朝食は皆牛乳に卵、コヽア位です。子供には麵包と林檎ぐらゐ持たせて學校へ遣りますと、十時頃に學校でこれを食べます。西洋人ばかりの學校ですから、他の生徒も皆十時に食べるのです。午後一時に歸宅致すと、晝飯を與へますが、腹一ぱい食べられるだけ滋養を取らせ、三時までユルリと晝寢をさせます。左樣致

さぬと子供は疲れますから……。間食は胃を害しますから、決してさせませんが、親戚などへ連れて參ると菓子や果物を呉れまして、イクラ斷つても『一つ位いいでせう』つてクド〱勸められるので困り切ります子供が好き嫌ひを致すのは全く習慣で、私共の子供は何でも食べさせて置きますから、好き嫌ひを申したとは御座いません尤も大概子供の身體に適當した食物を與へて置きますから、何とも申さないのでしやう。

▲日本の小兒

日本の御方は實によく子供を愛しますね。併し十歳位まで極寛かに氣儘に育てゝ其後俄かに嚴重にするのは如何いふ理由か善く判りませんよ。幼少の間は茶が欲しいと言へば與へ、菓子が欲しいと言へば與へ、時間も構はず子供の言ふ儘に與へる人が多いですが、あれは實に胃を害して可けませんね。十歳位から急に八釜しく言つて温柔しくさせるのは難かしいばかりでなく、子供も可哀相だと思ひます。子供の規律は生れると直に習慣を付けなければならないもので、二時間毎に哺乳させますならば、哺乳後二時間經たぬ前に泣くのは、空腹の爲めでは無いのです。或は襁褓が濡れて心地が惡いとか、或は痛む所があるとか、空腹以外の原因があるに相違ないので御座います。それですから泣く度に乳を與へないで、善く赤子の身體を調べなければなりません。子供が眠る前には襁褓を取り換へ、口中をチヤンと拭いて寢床



に獨り臥させれば、善く寢るもので、決して添乳などする必要は御座いません。子供が這ふ頃になれば繩手を揃へて危くない樣に致し、獨りで遊ばして置きますから、人手が掛らないのです、始終抱いたり負ぶして、チンチコ〳〵するのは可けませんね。而して私が一番氣になるのは、十二三歲の子守が赤子を背負つて自分は毬をついたり繩飛をしたり、勝手な眞似をして遊んで背中の赤子の頸はグタりと曲つて居るのや、衣服が濡れて赤子が泣いて居るのや、其他種々樣々の不都合を平氣で居る子守を見ると、私は何時でも耐へ兼ねて百方言ひ聞かせるのですが、此邊の子守達は〇〇の奥さんは厭な人だつて言つて居る相です。

▲下女は少數

私の鄕國では、此家ぐらゐでは下女一人が普通です日本の方ならば先づ五人位の下女を置かれるでせう。私は外向の用も可なりありますし、音樂の稽古に御出での方もありますし、孫も居りますので、二人の下女を使ふて居りますが、目見えに來る女は「此家に唯つた二人だけでは迚も迚も勤まりません」と申すのです。併し私が全然教へ込みますと、規律と時間が正しい爲めに案外働き易くつて暇もあるので、喜んで勤める樣になります。唯今居る下女は六年も勤めて居ります者で、實に善く役に立つ立派な女です。昔し幼稚園へ出る頃、斯樣な下女があつたならば、子供を連れて出勤せずとも宜かつたたらうと思ひます。私は日本へ參り立てに、日本の婦人方は、彼樣に下女を多勢使つて居らつしやるから、何樣に暇がありなさるでせうと良人に話したことがありました。而して日本の下女は何か言ひ付けても、「唯今」と言つてから却々直に取り掛りません。如何かすると「唯今」が三十分も延びることがあります。それで私は一番初めに此「唯今」と云ふ言葉を覺えました。

▲蓄妾

西洋では縱令其樣な者があるにしても、極秘密にして置き、若し知れたら世間に顏出しがならぬ位ですが日本では妾といふ立派な名を付けて公けに置くと云ふ

のですから、表面は隨分違ひます。何れに致しても、妾を置かれた奥さんこそ實に御氣の毒で耐りません。サンザ子供を育て家事に苦勞して、容貌が衰へると、良人が他に心を移し、中には家族の仲間入りをさせ一家に住はせて御客の前へ出す人もありますが、私は其樣いふ場合に其妾へは挨拶も致しません。私は其奥さんにこそ御交際致すが、汚れた婦人には何の關係もないから、挨拶する必要がないと思ふのです。本當に私は日本の爲めに此野風を歎きます。公けに妾を置くと云ふのは、文明國に不相應の事で……斯樣に戰爭に於て立派な國になられたのですから、何卒此點に於ても立派な國となるゝ樣に御互に御勵みあらんことを希望致します。




▲模範とされては心配

西洋婦人も隨分種々な缺點があるのですから、一も二もなく西洋婦人を手本にされるのが心配で耐りません。私の知己の或家へ來られた若い御嫁さんは、近處の友人の家へ招かれて遊びに行くことが度々でしたので良人の親御が小言を云はれた處、是れは西洋風ですと平氣で居られた相で、終に離緣沙汰になつたのです。元來西洋では自由のやうで却々嚴重なものでして、夜分若い婦人が一人で外出する事など決してありません。斯樣な間違つた考へを持たれる方もあり、其他唯上邊ばかり見て、西洋の婦人は外の事に多く働くから、家の細い事は餘り取扱はぬなどゝ誤解されては、大層間違ひますので、私は心配でならないのです。

夫人は良人を敬愛さるゝこと最も厚く『自分の良人を

褒めるのは可笑いやうですが、私の良人は實に立派に育つた人で、私や召使に無理を申したとは一度もありません」と仰しやる御容子から推しても、家庭の和氣靄々春の如くなるを、想像されました。總て最愛の孫女は學校から歸られ、祖母君へ土產にされた蒲公英雛菊を楓の掌に握つて、軟かい金髮を振り動かし、夫人に抱き付いて接吻されました。

# 米國土產

## （婦人の渡米を勸む）

早稻田大學講師　安部磯雄

米國に於ける女子敎育の現況は、頗る盛大な物で有る。スタンフオールド大學の如きは、千六七百人位の生徒の內、五百人以上は女學生で有るから、殆んど總數の三分の一を占めて居ると云つて善いので有る。此スタンフオールド大學でも、カリフオルニヤ大學でも又シヤートルのワシントン大學でも、總て太平洋沿岸の各學校は皆男女を混交して一緒に敎育して居るのである。

　スタンフオード大學では男生女生共各々寄宿舍を造つて學生を收容して居るが、寄宿舍以外に『俱樂部』と云ふ物が出來て居る、中々立派な建築で有るが、之は父兄が各自出金して出來たので、年々少許宛の利子を支拂つて行けば善い事に成つて居る、でこんな俱樂部は何個も有るので、一つの俱樂部には大抵十八人から十四五人の者が一組と成つて這入つてる樣に奇麗に造り上げて有つて、二階は大方學生の寢室に成り、下は大きな食堂と談話室等で、談話室には勿論ピヤノ其他の樂器などが備へ附けて有り、遊戲室にはピンポンの道具などが一式備はつて居る。寄宿舍の方は何れにしても大勢の事故、殺風景なきらひが有れど、此俱樂部は少人數なれば、各學生間の交はりも至極親密で有つて、ベースボールの時なども此俱樂部を以て一つの組とする事が多いのである。

此等多數學生の內に、貧困なる學生は男女共に亦少くないので有るが、彼等は一般に卒業と云ふ事を決して急がないから、學資に窮した時には、適宜休學して一二年間は何所かへ出稼ぎするので有る、斯くて豫定の資金を造り上げて、更に歸り來つて學業を續けるので有る。

私が桑港に滯在中米國の一女學生が面會を申込んで來た、丁度土地も稍距つて居たのに女の體でわざ／＼來て貰ふのは氣の毒で有る上私に自轉車が有つたから尋ねて行つて見たが、此少女の用事と云ふのは然る可き口が有つたら、敎師として日本へ行きたいと云ふ希望なので、それを世話して吳ないかとの願ひで有つた、で如何なる學校の方を望むか




宗敎學校にても宜しきかを尋ねて見た所が、宗敎學校は好ましく無い、成る可くなら政府で立てた學校が結構で有るとの事だつたが、何しろ未だ在學中だから、貴孃は何時頃此學校を卒業するのかと重ねて質問せしに、來年は卒業する筈なれど、適當なる勤務先さへ有れば、卒業などは幾年の後に成つても差支ないと云つて居た。打ち見たる所、人格も上品で且つ怜悧相な少女で、能き敎員と成るべき見込が有つたから、私にも幸ひ少少心當りの筋有る故、特別の障害さへ無ければ、世話してやる心算で居るので有るが、此少女も學資が盡きたから出稼ぎするので有る。

米國にては獨立自活して、金を儲けると云ふ事には

男女に係はらず、甚だ熱心に計畫する所で、一般に此氣風が盛んで有る事は著しき特色で有る。

米國婦人の一般に交際が巧みな事は、今更說くまでも無いが、爰に面白いのは、我等の一行が滯在中、一個の新らしい家を貸與されたが、人數の割合に少々狹かつたので、內の六人は其近所の一民家に下宿する事と成つたが、此家は母親と娘が二人有つて、上の娘は良人を迎へて良人と共に此家に居たので有つたが、二番目の娘は本年十八歲で、米國に有つては萬事が十人並と云ふ所で有つたらうが、二人共能く客を接待して十二分の快感を催さしめる手腕は中々馴れた物で、特に若い娘の方は何時の間にか早稻田の學生等と、交際して親しく成り、後にはお互におどけまで云ふ位に成りしが、其應接振りや話の受け答へなどの巧妙なるには、流石は米國の婦人なりと學生等皆感嘆して居つた、以つて米國婦人の一般を推知し得べしで有る。

然し米國婦人が如何に善いと云つても、缺點も亦無い譯には行かぬ、即ち意張り過ぎる氣味が有るのも其一つで、由來米國人は餘り女子を尊重し過ぎるから、知らず識らずの間に增長して、意張氣味に成つて來るので、東部即ち太平洋沿岸では、此風いくらか減じた様なれど、西部では相變らず過度の尊重を續けて居るらしい。私が或日電車に乘つた時、入口に立つて一寸躊躇して居た所が一人の女が後から、私を突き除け様とするので有つた、此等は日本では到底見る能はざる現象で、確に過度の尊重から生ずる所の、婦人界の一弊害に相違無いので有る、尤も何れは品性高からぬ下等社會の婦人で有つたらうけれども。

それで私の滯米中特に深く感じたのは、日本の婦人が今少し盛んに渡米せねばならぬと云ふ事で有る、現今米國に居る日本人は東部許りで、約六萬人に成るから、太平洋沿岸は至る所日本人を見ざる所無き有樣である、元來が職業が多くて人が足らぬので有るから、特に生活程度の低かつた日本人に取つては金の儲かる事と云つたら夥多しき物にて、無駄費ひさへ節すれば毎月三十圓や四十圓は如何なる勞働者にも屹度殘つて

行くので有る。けれども情無い事には多くの日本勞働者は酒を飲み、醜業婦にも近づく、富籤に誘はれて之を買ふ故、前後の考も無く折角の貯蓄をめちや〱に消費して仕舞ふ、何故かう酒色に溺れる様な悲むべき境遇に陥るかと云ふに、此等出稼日本人の爲めには、一個の娯樂も無ければ、半片の慰籍と云ふ物も無いからで有る、彼等の生活は終日營々として勞働する外は無味乾燥、到底故國を遠く放れて、永の年月を異域にたゝ苦勞するには堪へられぬからで有る、それでも渡米した最初の一二年は神妙に貯蓄もすれば、故郷への送金も仕たので有るが、三年五年と月日が經つに從つて、相當の小金も溜る、けれども白人等の様に遊戯場を設けて、ベースボールや競馬や其他各種の遊戯に娯樂を取り、一日の疲勞を慰めると云ふ事も無ければ、白人等とも餘り交際せぬので有るから、貯蓄も少々出來るが、何の爲めに金を貯へてるのか考へて見ると自分で自分の事が分らなく成つて來る、（多くは教育の不充分なる彼等に有りては寧ろ當然で有る）斯る時僅の憂さ晴らしは酒で有る、酒に伴つて來る物は色慾で有る、富籤の如きは一種の賭博で有るから、一度手を下すと容易に止めることが出來ぬので、見す〱金を捨てる、遂には一文無しに成つて仕舞のみか、從つて儲ければ從つて使ふと云ふ情ない事に成るので有る。そ故少しにても金の出來た人に、妻を持つ事が出來たらば、其人は永く、酒に怪しい慰籍を求めたり、醜



業婦に接近する必要も無ければ、勿論富籤などは買はない樣に成るので有る、暖き愛や婦人の優美などは勿論、人生最大の希望たる家庭の和樂と云ふ物も見る事が出來ないので有るから、他所にのみ見て居る辛さに知らず識らず酒色に溺れて墮落するので、實に勢の止むを得ざる物で有る。然らば何故米國の婦人を妻に迎へぬかと云ふ疑問も起らうが、米國は日本と比べて生活の程度が高い上、米國婦人は萬事贅澤で有るから、日本人が勞働で以て貯へ得た一萬弗や二萬弗の財產では、彼等を妻とした家庭は到底支へ切れないので有ると云つて四五千弗も出來て妻の必要を來したからとて態々日本まで女を貰ひに行く譯にも行かず、さうすると旅費や其他で貯蓄の半額は無くなつて仕舞のみか、そんな事は中々おつくうで出來ないので有るから、つい墮落の道へ足を入れるのである。

若し北米の太平洋沿岸をして眞に大日本帝國の殖民地として成功させやうとしたならば（是非せねばならぬので有る）今後大に婦人の渡米を獎勵する必要が有る。第二の日本は男子ばかりでは出來ないので有る、元來婦人の伴はぬ殖民は古今東西、何れの國に於ても終局の成功を見る事が出來ない事になつてゐる、それに關はらず我國では外國の渡航にはむつかしく制限を加へられるのは、甚だ愚昧な話で有る。

それならば婦人が渡米して、果して都合善く女の仕事が有つて、能く獨立自活が出來やうかと危ぶむ人も有らうが、其心配は御無用で有る、太平洋の沿岸一帶は何所にでも、日本婦人の容易に出來得る、而も割の善い仕事が澤山に有る、故に婦人と雖も渡米して三年か四年位辛抱すれば、千弗や千五百弗の金は譯も無く貯蓄が出來るので有る、爰に立派な一例が有る。

私の知つて居る一人の女が、矢張米國で女中奉公を仕て居るが、其給金は、食つた上に月々二十五弗即ち日本の五十圓宛を貰ふので有る、尤も最初からそれだけは與れないが、半年も一年も過ぎて、少し米國の事情にも馴れて來れば、こゝらの月給は普通の相場なので有る。そこで女は男と違つて餘り外出せぬから從つて

小使が入らぬのみならず、衣服は奥様が流行を追ふから、お古がどし／＼頂戴出來るから衣服を造る錢は拂つた事が無いので毎月五十圓と云ふ物、其儘故郷へ送金して居るが、日本では下婢風情が細腕で、三年間に千五百圓などは七轉八倒したとて出來る物ではない。

今一つ面白い話が有る、滯米中、一人の日本婦人が私を尋ねて來たから會つて見ると、私は勿論其人を知らなかつたけれども、其女は日本で某女學校に居た時、私の演說を聞いた事が有るので、それで當時私の來て居る事を聞いてなつかしく思つて尋ねて來たのだ相で有つたが、此婦人は農業に從事して居たが、數年前良緣有つて結婚し、良人と共に萬里の波濤を越えて希望の光りを仰ぎつゝ此新天地に來り、私の居た所か




ら約二哩ばかり距つた村に三十エーカー（一エーカーは我四反一畝弱なり）の土地を買ひ入れ、トマトー即ち赤茄子を植ゑて、良人と共に熱心に培養し居りしが不幸にして良人の病死するに會ひしも、更に屈する事なく其遺志を嗣ぎ、單獨にて遺業を續け、自ら雜草を拔き水を與へなどして、多忙なる時は人夫の四五人も雇ひ入れて、盛んに赤茄子を培養し、それが成熟すれば取れ入れて大なる籠に入れ、馬に馱せて、自ら之を引いて青物市場へ賣りに行く、すると婦人を尊重する米國の事とて、荷物を馬より下す時など、知る人知らぬ人に關らず人々來りて手傳ひ吳、譯も無く赤茄子は賣れて多分の利益有るのみか、今日にては當時一エーカー百三十弗にて買つた僻地も、電氣鐵道が附近を通

過する樣に成つてからは、一躍して一エーカーの地價四百四十弗に騰貴し、即ち一萬三千五百弗の價を持つ樣に成つた、故に今一二年の後には、茄子の利益其他にて約二萬弗の財産と成る故、何なりと一藝を覺えて日本に歸るべき希望を述べるので有つた、そこで私は旣に女學校の生活も知つて居て、相當の智識有る貴女に、そんな技藝や學術よりも、尚ほ一層勉勵貯蓄して六七萬程の金を携へて歸國する樣になすつたら善いでせう、と忠告したのである。

こんな風で有るから、婦人が渡米したとて決して困難する事は無い、暫時業務を缺つて居る內に、譯も無く適當なる配偶者を見出す、在留六萬の男子に對して、現今米國に在る婦人は精々千か二千に過ぎないので、男子にして妻を持つて居る者は僅に五六百人に過ぎないので有るから、娘一人に婿八人位の事では無い八十人位も附け纏ふので、女の方では四方八方からの親切に應答し切れなくて、反つて迷惑する位で有る。

現時日本に於て此六萬人に對するだけ、婦人の方が男子より多く餘つて居る筈なれば、女子は獨り自己の利益のみならず、將た國家の爲めでも有るから、第二の日本を異域に建設する爲め、大に奮發して躊躇する事なく、盛んに渡米するのがよい。

元來、日本人の第一着に成功せねばならぬ殖民地は實に米國である米國は廣漠として際限のなき沃土で有る、カリフォルニヤ一洲でも、日本と同じい程の大さの面積で有るから、十萬や廿萬の移民が行つたとて、黃色人種の排斥など有つた物では無い、日本人が行つて始めて開拓の實が擧がる樣に、太平洋沿岸は自然に左樣出來てるので有る。

唯だ桑港に到着して後を如何にすべきか、何れに向ふべきか、女だけに差當り困却する所で有らうけれど、桑港在留日本人間に、日本婦人の新渡米者の爲めに、適當なる職業を見出すまで、不自由なく滯在すべき寄宿舍を建築する筈で有るから、追つては好都合と成るべく、今日とても米國に知人さへ有らば、其人を賴りて行くが善い、さうすれば行き着いて一週間も經過する內に好職業を得る事が出來るであらう。實に日本の膨脹は男子のみでは尻に少しも落附が無くて、新日本の建設も覺束無いので有るから、是非婦人の奮發を希望するので有る。

# 婦人界見聞錄

▲華族會館の婦人就職會は三輪田女史山脇夫人、毛利男夫人等の斡旋に依りて開かれたが、當日大隈伯の演說に「戰爭は男性的であつて文學は女性的である、絶大の戰功を永遠に發揚する物は文學の力でこれは女性に待たざるべからず、故に今回の戰時に伴うて、日本婦人の世界的活動を希望する。と云ふので有つた。偖は當日坪内博士にも演說を願ふ筈で有つたが、博士の著作「牧の方」に、女子と小人は養ひ難しと云ふ様な意味が書いて有つたとかで、不贊成の議論が出て、遂にお止に成つたとの事。

▲先月の理想團で黒岩涙香氏の演說は婦人の爲めに催ほされたので有つたらうか、生憎婦人の傍聽者は一人も無かつた、時に辯士の曰く「滿場婦人に關係の無い人は一人も有るまいから、爰に少々婦人に對する惡聲を放たうと」前置して、偖て

▲此頃至る所に見ざる無き海老茶袴の女學生が、突出したる廂髮の下反る所から二つの烱々たる眼の光れるを見る時、こは如何なる意味の裝飾で有るかを考へればならぬ、云ふ迄も無く之は男子に向つて宣戰を布告仕様とするので有る、即ち婦人が生存競爭の塲裏に立ちそむるので有る、是れ善か、惡か、利か、害か、吾人を以てすれば、女子と男子とが相競爭したならば、必ず何所かに無理が出て來るに相違無いので有る。

▲昔神様が男の肋骨を取つて女子をお造りに成つたので有るから、婦人は到底男子の上に立つべきもので無いと或人が云つたらば、婦人の方では、然り、足の骨でお造りに成つたのでは無いから踏み付けに仕て呉るなと云ふかも知れぬが。孔子は女子と小人は養ひ難しと云ひ、釋迦も女子には重きを置かなかつた、キリストも自身は妻が無く、止むを得ずば娶れ出來得るだけ心を他に轉じ、女より遁けて近づくなと云つて居るので、今の人が思つて居る様に婦人を貴んだ物では無かつた。

▲目下我國の女子教育は、良妻賢母を造るのを目的として居るけれども、良妻賢母以上に或物が無くては、再び元の奴隷に戻り行く恐れが有る。が女は男より弱いけれども、必ずしも男に敗てのみ居るべき物では無い、柔能く剛を制する事も出來るので有るから、男女職業に爭ふ事無く共同主義を取つて行くべきで有らう。女は美の神で有る、且つ未開の婦女子とてもよくその身を飾る事を知つて居た。殊に忍耐は婦人特有の美風で有る、婦人が母として子を育てると云ふ事は非常に貴重なる大事業で有るのに、此子を育てる艱苦の程が、餘り目立たない、人に知れないのは殘念でも有り、氣の毒でも有る、けれども、其目立たない位置に在つて不平無く、男子の後に立つて艱苦に甘んずる所に、道德上の美が有るのである、又それが實に婦人としての廣大無邊なる働なので有る。斯の如くして婦人が深愛の犠牲たるは誠に其天職で有ると言はねばなるまい。

▲米國のドクトルマギー夫人は、我國人から云ふたらば實に感謝すべき高徳の人で有るけれども其の良人たるマギー氏から見ると、愛子を打ち捨てゝ置いて三月も五月も、彼様に出歩かれては甚だ有り難く無い譯で有る。要するに今日の婦人は少々思ひ違ひをして居はすまいかと思はれるので有ると以上黒岩氏の論旨の大要であつた。

▲早稲田邊の某博士曰く、日露戰役は歴史の上から見ても空前のもので、日本に取つては實に千歳一遇の機會、國の權利も大きくなれば、義務も重くなるので有るから、此際特に勉むべきは教育事業で有る、就中女子教育で有る、健全なる大國民を造るべき母親、其母親を造る處の女子教育で有る。

▲又曰く、男女交際や家庭教育に就いて、兎角口先ばかりで叫ぶに止まらず、各自が思ふ所を實地に行うて見て、其結果の有益にして善良なる事を世間に示すが善いので有ると。

▲一日村上文學博士を訪ふ博士曰く、女子は男子よりも心理上宗教に縁故が厚い様で有る、佛教でもキリスト教でも最も熱心なる信者は婦人は多い、故に婦人は男子よりも一層宗教が必要である、若し夫人が宗教の精神を一度實現して來ると嫉妬や怨恨が麗はしく理想化されて極めて親愛のものと成り又慈悲のものと成りて甚だ善美なる結果を來すのであるけれども、此れが反對に行くと嫉妬や怨恨が殘虐のものとなつて極めて賤しくなる故に私の學校では月に一回宛科外に精神講話と云ふを致して居ると。

▲獨逸の或教育家が米國を經て日本に來朝した、すると日本の學生が餘りに規則立ちて大人の如く見えるのを怪しんで之でどうして大國民に成れるか知らんと危んだ。成程米國人の如く自由や活動と云ふ事に十分重きを置いてるのに比べて見れば、實に雲泥の差が有る、故に若し自主自由と云ふ事の貴ぶ可き事が分つたら、直ぐ隣は米國で有るから多少米國風を交へて教育する必要が有らう、とおもふ。

▲北米シヤトルの領事久水三郎氏の令孃(華族女學校の生徒)が此夏期休業を幸ひに、父君に面會がてら北米へ旅行された、日本の女子も、徐々海外へ旅行する様に成つて來た、

▲早稲田大學の安部磯雄氏曰く、私が學校の生徒を連れて米國へ行く時、船はコレア號であつたが、乘つて居た日本婦人は五六人に過ぎなかつた、けれど外國の婦人は約百人も有つたらう、而して彼等の半數は浪が荒れ船が動いても、平氣で甲板へ上り食堂へも出て來ていろ〳〵話してゐた、海國たる日本の女子が早くあんな風に成らなくては駄目である、今度米國大統領の令孃が、遙々來遊すると云ふではないか日本の婦人も少し水泳ぎの稽古でもして「水」が恐く無い様にならねばいけない、一寸泳ぎが出來ると、波の有る日棧橋に立て居ても、艀に乘る時でも、本船に移る時でも、自然其人の態度が違ふではないか。

▲一日横井農學博士を訪ふ博士曰く、眞の戀愛は下等社會にだけ有るが、中流以上には最早金錢と虚榮心の化物ばかりで、到底見出す事が出來ない、それ故、眞の戀愛が珍らしいものだから、小說家にそれを書

かせて、それを讀んで僅に慰んで居るのであらうと、奇語といへども又一面の眞理あり。

▲三輪田文學士曰く、男女交際の道を開いて、其親は娘の價値を世の青年に十分知らせる手段を取らればならぬ、事此所に至らないから、結婚前に先を買ひかぶるのが多い、從つて甚だしく日本には離婚が多い、始めから能く娘の價値が男に分り、男の價値が女に分つて居たら、それ相應な者と夫婦に成るから、間違が少かるべき筈で有る。と一理ある言。

▲先達の日本體育會の祝捷舞踏會で、井口あぐり女史は一番熱心に踊つて居られた。女史が體育に就ての熱心は實に感服の至りである。

▲某女史の曰く、女學生の一部に劍舞が流行すると云ふ事を新聞紙上で見ても半信半疑で居ましたが、先日知人が宅へ來ての話に、近頃私の娘に劍舞をやらせられますには閉口だ、と零して居ましたが體育の爲めには成らうけれど、どうも餘り感心出來ませんね——。

## 娯樂

### 避暑の樂み

なつ子

炎塵萬丈の都の空を後にして、一炊の夢の間に、汽車を下れば、はや此所は磯山の片蔭に。今朝までの、日に燒けし瓦屋根の雲の峰の暑苦しき眺めも、今は小松並木の梢頭に、近くミン／＼蟬の聲を添へて、汐風涼しう袂を吹かせつ。

欄に倚れば海の景色、磯山の趣き、沖の小島に行違ふ白鷗なんど、一大パノラマを現ず。庭も、生垣も、背後の茄子畠も、門前のいさゝ小川も、薄勝ちなる叢も、河骨咲ける小沼も、楢の林も、栗の花散る畔道も、四邊は皆是好個のスケッチなりき。

雨ば泥濘の都となり、風ば砂塵の都となる、加之梅雨の擧句の炎暑の都を。一日も缺勤無く旦那樣はお役所へ坊等は學校へ、奥樣は内に殘りて縫ひ物に手の小歇無かりし身の。今日は數十里距てゝ綠陰深く波風淸き片田舍に、大なる月を花ほの白き夕顏棚の、下涼み、心長閑なり。

炎暑九十五度と新聞の記事を、此方は沖の白帆に孕める風に知らぬ顏の涼しさ。岡に山百合を折り、清潭に魚を釣り、老幼交りて芝生の鬼ごつこ、波を破つて

の水泳も、是れ避暑中の日課ぞかし。

白砂青松の濱びさし、戯るが如く寄ては返す女波男波の渚にをり立て、濱砂踏みさくみ勇ましう、ざんぶと波間に躍り入らん時の愉快さは是れ少年時代に於ける最大の樂みならぢや。

奥樣は流石に金モールの肩章を附けたまひし人の娘なり又旅順口の閉塞隊に加はりて名譽の戰死を遂げ給ひし人の姉君だけ有りて、中々に新らしき敎育受けたまひし方なれば泳ぎの道も一と通りは心得たまふと聞しが、困りたるは侍婢のお何なり彼れは山家育ちの舊弊物、海を見ては只呆氣に取らるゝといふのみなれば、海水浴のお伴をしても一向に榮のない事なりき。

されば僅に波打際でボチャ〳〵とやる位なり。

或日は朝より音樂會、以前書生生活をなし給ひし旦那樣、向鄕の山田と云ふが、得意の横笛携へて音づれたれば也、姉さんは琴でも彈きたまへ、僕は此ぞと二郎が手風琴採れば、奥樣も以前の烏鷺覺えを姉娘の美代子に聞き正しつゝ、奏爾位ならばとバイオリン持て立ちたまふ、一瓶のビールに半醉の旦那樣は、我も何をがなと、やをら立ちて見廻せど樂器とては玩弄のデン〳〵太皷だに無し、さらば歌ふべし風と波とに送られてならば我も知れり諸君此度は風と波に願升と、はやも調子外れのだみ聲高う歌ひたまへば、お父樣はいけませんよと、令孃に叱られて引込給ふも愛嬌なり、下女のお鍋其歌調の可笑かりしとて盛んに笑ひこけては轉げ廻りつゝ椽より掌と落つ、二尺に足らぬ高さなれば怪我は無けれど、尻打ちし故生涯子は出來まじとお客樣に揶揄はるゝを眞に受けて悲む。皆腹をかゝへて打笑ふ。此賑はしさに帳場を浮かれ出でたる宿の息子は、奥樣の洋弓引受け男三人にて活惚の合奏を繰返せば皆々笑ひくつがへりぬ。宿の息子鳥居際に高麗狗然と後に聞き居りしお鍋に踊り給へと戯る、お鍋豈盆踊の外に踊を知らんや、知らぬこそ幸なれ、お鍋樣に踊られては大變と又々大笑ひなり、復た號外かと、寢轉びて新聞見たまへる旦那樣枕頭高笑ひなり。此夕此等を、御幸源氏の繪はがきを物してワシントン大學

の一郎様へ、雨止て例の佳景に虹の橋架れる下を、みよ子自らポストに持て行きぬ。

楢林の中に芝生美しう百合匂へる所にハンモック持出して晝食後二時間の讀書は旦那の日課にして、此間小供等は、或は釣竿、或は捕蟲網。

或夕は長く成りて扇團使へる旦那様を取圍みて談話會あり。旦那様より席順と事定まれば、第二は令孃美代子と成りぬ。妾は清少納言の枕草紙に、涼しき物に岐阜提燈を追加したしと思ふなり、とのみにて逃ぐるを、づるし〳〵女子大學には面白き話多しと聞く物をと山田が抗議も甲斐無かりき。第三は宿の息子なりき、一昨年初夏紫紅會と云ふ和歌の連中と、毎月遠足を約し、其第一回を



本所より汽車にて鴻の臺に向ひぬ、鴻臺は萬葉集に名高き薄命佳人眞間の手古名の由縁の地なり、縁結びの神として祭られ有るを訪ひし時、境内に湧ける泉を、誰云ふと無く戀の眞清水ぞとて、之を飲む者必ず戀を感染すべしと語り乍ら、折柄咽の乾きければ、四五人爭うて之を掬し、したゝかに飲みて相顧て一笑したりと語り終りて微笑き、蓋し君はいと澤に飲みけらしと山田が戯るゝに、我は當時神官と話居たれば飲まじと逃ぐる、あてにならねばこそ活惚の主唱者よと奥様も笑ひたまふ。第四は三郎君なりき、僕は遊就館に飾つて有る三笠の模型、あんなのが欲しいのだ、そして此海で浮べて見たいのだと肩を聳やかしていふ。第五は山田氏なりき、三年ぶりにて

歸省せし時、父母の御墓邊に草生ひ茂りたると、今一つは隣家の親爺が頭の禿げ具合が如何にも尤らしく成りたると、馬鹿の三太郎が、禿鴇母を從へて花魁が八文字踏める繪を見てこれはどこのお姫樣ぞと云ひしを聞きて、大笑ひせりと、之は正直なる白狀なりき、次は二郎君なりき、其次は奥樣なりき、二郎のは昨年、夏房州沿岸週遊の時の所感にして、少女の溺死を救ひし一段は特に喝采を博したり、奥樣と旦那樣のは、いと面白き話なりき。最後にお鍋の話は愛嬌有りけり、東京で暑い日毎に庭のお池を眺めては左樣思ひました「こんな日は金魚に成りたい」と談話會は實に興深かりき。

午近き頃目下二尺ばかりの大鯛來り、汽車の去ちし後へ捕れたるなれば都へ出すに便なければ是非お買上げを願ふとなり、そこで中食は刺身と燒き物と潮煮とにして、七人の膳部總て一枚の鯛より成りて滿腹しける。

翌朝有明の月に、お鍋の寐ぼけ聲けたゝましき、何事ぞと問へば、只今臺所に大なる兎が這入りて、妾の肩を越えて東の藪に飛び去りたりと云ふ。

さらばよし兎狩にとて例の活惚の三人、勇ましく打扮しが、實は兎狩とはつけたりにして夕方山苺二笊程持て歸り來ぬ、洗うて美しう玻璃皿に盛られたり、此里にては苺を兎と申候哉と、旦那樣が宿の息子に戯むれらるゝ時、臺所にて又もやギャッと異常の聲、大騷動の樣子なるに、一同驅附見れば、鮒釣に行きし三郎が、今しも夕餐にとて芋の皮むけるお鍋の襟首へ、鰌を入れしなりとて七轉八倒の大騷ぎ腹の皮を撚りぬ

總じて避暑は海、山、江村、温泉の何所なりとも心の長閑ならんこと肝要ぞかし、されば肩のこるやうな仕事は携へざるぞよし、但しバイリオンの稽古や、許嫁の君に贈るべき膝突を造るなどは此限りに非ずと知りたまへ。

そうじて僻地に行きては贅澤を云はざるぞよし平常の經濟をあまり超えぬ位の程度にありたし黄金多ければ自然虚榮の樂みに赴き易く、淸境を俗了するの恐あればなり。

目的は暑を避くると共に、年中の勞苦を肉神兩方面より慰藉するに有れば、樂しくだにあらば、何を爲すとも不可は無からん、成たけ運動逍遙して、之に伴ふ適宜の飲食を取るべし、珍味もむさぼるべからず、取分幼者は菓實に注意を要す。されば少者には世故に長たる人を伴ふを善とす。

## 涼み臺

麻軒子

▲常は勉學の忙しきに取紛れて家郷を思ふ暇もなけれど、いざ休暇となれば飛立つ思ひにて歸省を急ぐはなべての學生の人情ぞかし、殊に女學生にありては、父母戀しの情一層切なれば、待ち焦れたる日の到るや、行李匆



匆、苦學の地を去つて樂多き郷里に歸り、久振にて父母弟妹の温容に接する其の喜びや蓋し想像の外なるべし。彼等はかくて懐しき父母に慰められ、慕はしき兄妹に圍まれ、優しき隣人に擁され、麗しき山水に抱かれて、例へば天の寵兒の幸ある日影に眠るが如く、开處に手足を延ばして暫らく英氣を養はんと欲するものなれば、暑中休暇に彼等を迎ふる父母達は、何よりも先づ此の期間に於て愛子に十分なる休息を與へられよ。

▲避暑旅行をなす時は塵外涼味の快きを味ひ得べし、山紫水明の界に疲れたる身心を靜養し得べし潮聲

松籟の間に清涼の空氣を呼吸し得べし、兼て又た奇を探り勝を尋ねて詩情を強ふるの便宜をも得べし、かゝれば夏期此種の旅行を企つるより衛生によきはなく、此種の清遊を試むるより快樂なるはなし、然れども今や、我が同胞諸士の彈丸と戰ひ苦熱と闘ひて具さに遠征の艱難を甞めつゝあるを思へば、內地にある我等の如何に三伏の炎熱堪え難ければとて、濫りに職業の地を脫れて、悠々山水に親しむを得んや、故に言はんとす、今年は暑を避くるの時にあらずして避暑を避くるの時なりと。

▲終日營々として稼ぎ、熱汗額上に滴る者は家に歸りて先づ一掬の涼水に咽喉を濕し、綠蔭の行水に身內の汗を流し、浴後、團扇を取つて椽端に出づれば、涼風一陣、青簾を渡つて來り、其の心地快きこと言はん方なし、玆に至つて日中勞働の苦も忘れ「樂みは夕顏棚の下涼み」の句をも想起せずんばあらず、あゝ此の涼味、千萬金にも換へ難からむ。

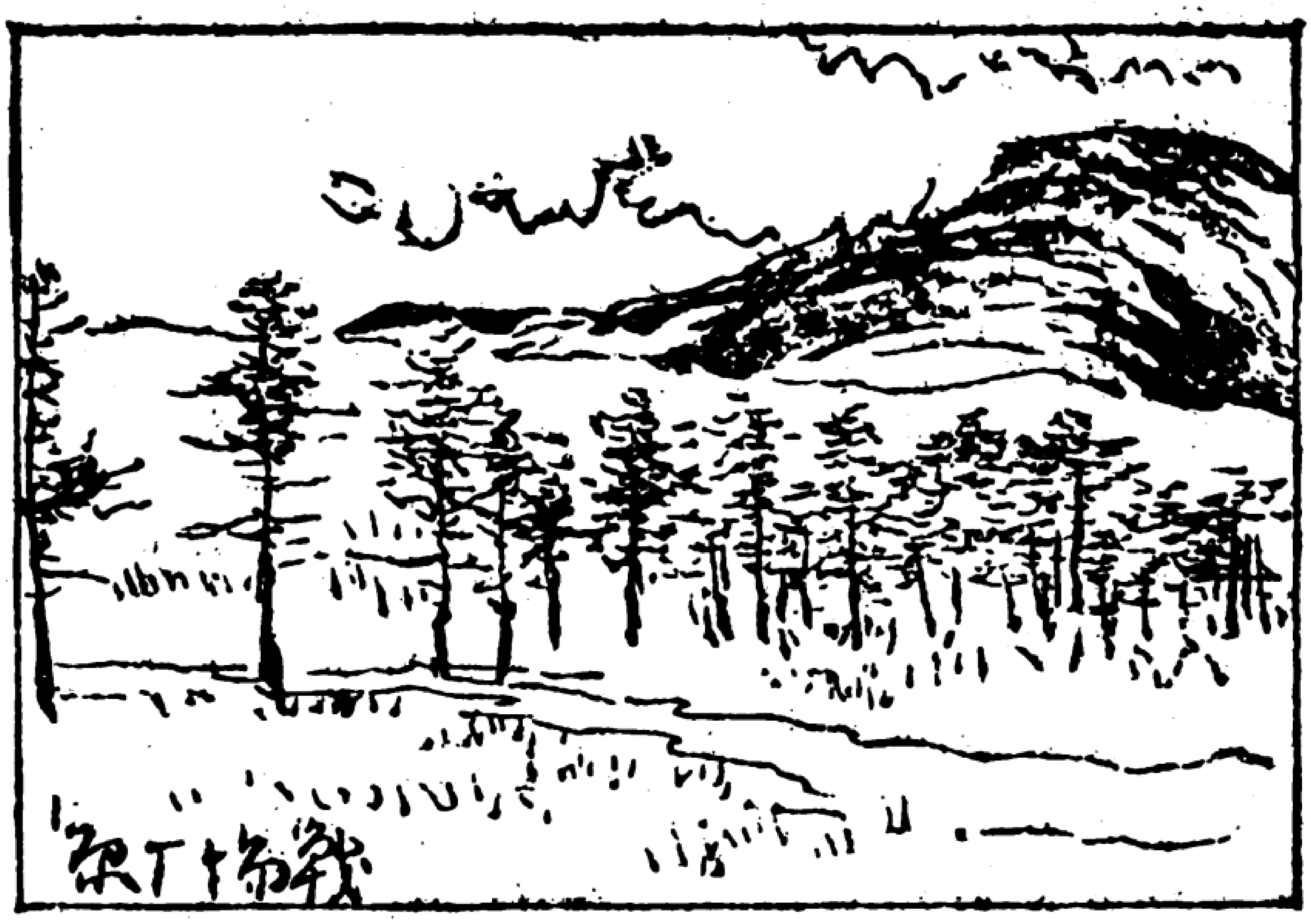
▲軒端に吊す岐阜提灯のあるとしも無き風に搖れて、遙かに前栽の繁みに隱れたる石燈籠と、相對して、淡き光を交換する趣、言ひ知らず涼し、況して螢の二つ三つまぐれ來りて、打水清き笹の葉の露の上に、凉しき光を投ぐるに至つては、涼味一層、坐ながらにして清冷の仙境に遊ぶの心地やせむ。

▲井戸に清水あり、室に涼風ありとも、家內に清潔と整頓とを缺きては、眞の涼味は得られず、例へば窓のガラスの曇りたる、障子の棧に塵埃のたかりたる、低き天井裏の蠅の糞に汗點だらけなる、黑き椽側に猫の足跡のきたなげなる、又は蓬髮垢面の奧樣乳もあらはに肌脫ぎ玉ひて、取散らしたる縫物其儘に寢轉び、傍に小供の玩具箱打まけたるなどは、見るから暑苦しうなりて、よしや少しの風入あるにしても、かゝる所に涼味など思ひも寄らず。

▲室內の薄暗きは陰氣にして心地惡しく、其の家の貧相を顯はすものなり、衛生上よりいふも家庭に光明の不足は、視力を弱くし心を鬱屈ならしむるの害あり、僅ばかりの油代を剩さんとて燈火を儉約するの結果、

ショボ〳〵眼で新聞の拾讀みするなどは賞めた話にあらず、さりとて明るくせんが爲めに電氣、瓦斯の如き高價の燈火を用ゆるには及ばず、普通の家にては在來の石油ランプにて澤山間に合へば、之を用ゐて室内に光明の洽からんことを計れ、光明は實に家庭に生氣を增し、家族をして快樂を感ぜしむるものなれば、無暗に燈心を引込すは宜しからず。

▲家庭の娛樂中夕刻の雜談は最も樂み多きものなり、一家團欒して主人は其日の仕事を誇りがに語り妻は模様よく其の日の家務を報告し、扨て後、雜談に移りて四方八方の世間話に笑ひ興じ、賑かさは此許にばかり再び春の來りしかと想はるゝなど、いとゆかしゝ茲に又た幼兒ありて廻らぬ舌に會話を挑み、或は昔噺を聞きたがるなど、尚ほ更に興味深し、かく夕刻を家に在りて愉快に過すは其人其家の幸福なりといふべし、世には日暮るれば蝙蝠の様に飛び出して戸外の娛樂に耽るもの少からず、此等は未だ共に家庭の趣味を談るに足らず。



▲或る家にて土用干したる折、息子なる人長持の隅より己が幼兒の折の襁褓を發見したりとて「蟲干や親の恩知る襁褓かな」と口吟みたるに、親なる人之を見てよき實物教育なりと言ひて笑ひしとかや、養育の恩を思ふ孝子の眞情掬すべきかな。

▲町家に奉公する者は古來の慣例により藪入とて年に一月十六日と七月十六日の二回の休日を與へらるゝのみ、其他は日曜も休まれず、祭日も遊ばれず、故に彼

等が此日を待ち焦るゝ事は學生が暑中休暇を待遠しがるの比にあらず、而も其日は只だ一日のみ、遲くとも其夜の十二時までには主家に歸參せねばならぬが故、彼等は此の一日を出來得る丈いろ〳〵の娛樂に用ゐんと欲す、親許に歸りて御馳走も喰べざるべからず、請人の所へも顏を出さゞる可からず、面白き所にも行かざる可からず、好きな芝居も見物せざるべからずと、一個の身體が三つも四つも欲しさうなり、其も無理ならず。思ふても見よ、彼等は年中他人の間に在りて揉まれ、花の日も月の夕も家庭團欒の席に連るを得ざるにあらずや、又た親に甘へて娛樂を縱にするを得ざるにあらずや、左れば此の日彼等を迎ふる親達は心を盡して待遇して可なり、珍味佳肴とは行かずとも責ては彼等の好むものを並べて、此日許は親子弟妹と食卓を圍むの樂みを共にし、或は又た弟妹等を連れ立ちて彼等の所謂面白き所にも遊ばしめ、以て渴したる彼等の慾望を滿足せしめんことをこそ願はしけれ。

## 高木博士の水浴談

◎博士曰く予は人間は半ドンと日曜の休暇とに適當の運動をすれば足れりと思ふ、併し夏期の長休みに山に遊ばうか水に遊ばうかと一寸迷ふのであるが夫は平素其人の職業から考へねばならぬ。

◎先づ食物充分にして勞働烈しき農民職工等は幽邃淸冷なる山中の温泉場に行つて靜かに保養するが宜し。

◎又食慾は充分でも運動不足の人々は海邊にて水浴をすれば胃腸を强くし食物停滯を消却する。

◎併し過度の運動や高山の旅行は却つて害になる又特殊の病者は山を良しとするのもあつて一樣には云へぬ。

◎加之海邊は自然水泳術の必要を感じて之が熟達を造る事となる日本は海國で水泳術は一般人士の心得べき事である。

◎又海外へ渡航するにも此術を心得て置くと非常に勇氣が出る予の如きは國家的の論だが國民海事思想の上から論じても山に遊ぶは大反對である併し病人は此限りにあらず。

◎歐米人の著書の多くには水浴の時間は五分間位を適當としてあるが予は少しく異つて居る、水浴は身體の冷却せぬ限り存分に遣るが良いので決して害はない且つ一方より云へば水と戰爭し波濤と闘つて之に勝つには充分に働かねばならぬ。

◎日本人は無頓着に我慢强く現に二三日も食はずに勤勞する一種の武士的根性がある是等の氣性も幼より水と闘つたお蔭のものが多い。

# 詞藻

## 塚越停春撰

**（天）寫眞**　美濃國武儀郡武義村　山田愛子

仇人の屍に得たるうつし繪の
　この人こよひ何夢むらむ

評。「可憐無定河邊骨、猶是春閨夢裡人」と其意を同うして、新意匠を出す。

**（地）寫眞**　和歌山市新道七丁目十五　森繁尾

とりて見つまた取りて見つうつし繪の
　をさな笑顔したゞなつかしく

評。巧に兒女の情を寫す。

**（人）海**　下野足尾鑛業所佐藤卯兵衛内　森照野

出雲濱浪のしぶきの末はれて
　雲かと見ゆる隱岐の島山

評。眼目の景を寫して他の奇なけれども、晴海萬里の氣象、自ら言外に躍若たるを見る。

## 秀逸

○○○海　長門國大津郡深川高等小學校　杉山きくの子

岩間よりもれ出る露の雫だに
　すてぬや海の心なるらむ

「河海は細川を擇ばず」の意を歌ひたるものなれども、遣語自ら陳ならざる也。

○○○蟬　大阪市西區九條町四三一　佐田秀子

業終へて湯あみすまして雨すぎし
　庭の木立に蟬を聞くかな

「夕顔棚の下涼み」と其意を同うして、着想何等の嶄新ぞ。

・○○海　越後三島郡日吉村　坪井わか

寄せによせし仇のふね〳〵行方いづら
　夕雲迷ふ玄海のなだ

雄渾

、○○母　下野小山町 新島昏　新井てい子

母君の絲繰取りて歸るさを
　心せかるゝ蟬の聲かな

能く愛心仲々たる趣を寫す。

、○○海　下野芳賀逆川町　高塩かつ子

與謝の海や月影消み橋立の
　千本の松に波の寄る見ゆ

、○○海　能登　加能浪子

落つる陽のさゝべり空を彩りて
　龍神をどるおほわたの原

以上二首、雄渾如畫。

○○海　米澤市　藤倉藤子

海馬の群鮮かし地圖になき
　沖つ岩島あだ波騷ぐ

險峻獨闢。恰もオコツク海北の時事を歌ふものに似たり。

○○海　兵庫山陽社宅　柳田のぶ子

月によき離小島の夏の夜や
　海原白う海鳥の鳴く

面白し。

---

、○○蟬　神戸元町三丁目 竹馬呉服店　竹馬利子

人行かず柳動かず橋づめの
　茶店淋しく蟬の鳴くなり

寫景如畫。

○○蟬　山口縣下關市觀音崎町　江間蘭子

しげりあふ杉の梢に蟬啼きて
　盤凝の夢を覺ますころかな

聲調なだらかなるもの。

○○海　旭川　藤本すみれ

雨はれて虹立つ夕異帆片帆
　しづかに走る海の面かな

○○海　和泉國泉北郡 鶴尾村三八　藤井とみ

白帆いくつ歸るも見えて夕ばえの
　色美しき夏の海原

○○海　上毛桐生町安 樂土二三〇四　大澤千旦

海靜か狹霧に影の淡く濃く
　蜑の釣舟島隱れ行く

以上三首、共に好詩たるを失はず。

○○蟬　福井市寶永 上町一五　長谷川綠子

聲かぎり蟬はなけども現し世の
人は塵穢の夢より醒めず

○○海　　信濃小縣郡東内村　竹鼻はる子

仇波の立ち騷ぐ世も海のごと
廣きを人の心ともがな

以上二首、教訓の意あり。

○○海　　東京下谷五條町五　瀨川萩の戸

すさのをの神のうしはく國なれば
大海原はあれにけるかも

、○○海　　陸中宮古町　星子

限りなき世のたからをばをさむてふ
海をめぐらす敷島の國

○○海　　明石　白菊

現し世に太古の秘密語るかな
月に更け行く潮のさゝやき

以上三首、着想の奇を以て勝る。

○○蟬　　三重縣野後町飯盛平太郎方　齊山鈴子

片肌さす舊師かわら屋の庭荒れて
槐の風に蟬なきしきる

---

○○蟬　　安藝竹原町　松坂梅子

奥の院に經の聲していねむの木に
蟬の聲して日は斜なり

○○蟬　　大阪　やす子

讀經のやみにし後を蟬なきて
御堂の松に日は斜め也

○○蟬　　長野縣諏訪郡湖村　渡邊秀子

山の端に日は傾きて氏神の
森のしげみにひぐらしの鳴く

○○蟬　　新潟縣長岡新町東浦　土田ちい子

登りゆく行者の白衣にぎはしき
麓小村の山蟬の聲

以上五首、巧に實景を叙したるもの。

○○海　　金澤市見玉小路四、梅村方　森井せき子

夕凪にゆらぐ白帆の影見えて
三日月淡し金石の海

、○海　　京都　日吉あち子

磯ちかく女波男波のさゝめきて
あした舞子の海静かなり

以上二首、亦凡作に非ず。

、○寫眞

御軍の勝ちのしらせを聞く度に
君の寫眞をまづ取り出でつ
福島縣　蘆川きよ子

○○寫眞

つくづくとうつしゑ見つゝ思ふかな
ありし昨日の夢のさまざま
東京　梅田よし枝

○○寫眞

緑車ひく手とゞめてうつしゑに
去年の今宵の夢くりかへす
和歌山縣日高郡南部町　みち子

、○寫眞

銃とりて立てる歩哨のすかし見る
うつしゑかげに北斗きらめく
甲府緑町農業工場　中村ふゆ子

以上四首、異曲同巧。

○○蟬

木の下のいひ知らぬまで涼しきに
世は夏なれやひぐらしのなく
東京淺草馬道八ノ五　窪田幸子

用語巧妙。

## △筆の花

古今集中の短歌十六首を書かれたる本書副の折手本なり、こは今千蔭と稱さるゝ文科大學生猛田豐道氏の筆せられたるものにて、天覽の榮をさへ賜りたるものゝ由、假名を習はんとする女子には殊に好個の習字帖なりと云ふ（東京根岸高山房發兌定價金三十五錢）

## 佳調

せの君の寫眞手にとりなでし子をうつくしむ禎はつゆけかりけり
●美濃　榮子

水天に連なる彼方一條の煙見え初めて士氣振ふるふ
●姫路　船戸ゆき子

波津海の入龍神も怒りけん波踏さかまく和田の大原
●秋田　須田とし子

ハンモックゆるうゆらげる緑葉の涼しきかげに蟬のなく哉
●越後　しげ子

押よせししこの仇ふれ打ちしづめ濵も靜けき日の本の海
●小倉　濵永きよ子

峠路や清水滴々旅人が憩ふ木陰に蟬鳴きしきる
●伊勢　太田榮子

うつしゑの前にぬかつき幼兒のちゝうへものなめされよといふ
●大阪　井上とみ子

大海原ゆきかふ舟の跡たえて沖つしら濱雲にたゞよふ
●讃岐　永松幸子

よにあらばあはれむほどの弟はたゞひとひらのうつしゑにして
●東京　瀬川銀子

風清き東の海の朝明や凱歌諭するにふる㐬しきなぎ
●能登　池野いさみ子

今ははやとはにかたみとなりにけり去年たまはりしきみがうつしゑ
●小石川　芳子

● 和歌山　森　紫尾
白帆ひとつ霧にまよひて霧に入りぬ雨に暮れゆく夕ぐれの海
● 横濱　鎌尾久子
うつしゑのうす色えにしぞうればはしきしたふ心のこきに似もせで
● 大阪　羽岡露
見る毎に涙の種と知りながらまたもとり出す君がうしつゑ
● 金澤　ますみ
なく蟬の聲かしましき峠路を胸傘がする武夫六騎
● 三重　中谷かよ子
夕付日涙を彩どる海原に潮浴む人のみな美くしき
● 小石川　武内春江子
征きし夫が寫眞に供ゆる陰膳を日毎忘れぬうない子五つ
● 和歌山　楠瀬とみ子
日盛りのつくしの海は帆船のはかなくなりしあとのみにして
● 下谷　中田すみ子
和田の原こぎ行く船の影細し夕日に匂ふ淡路島山
● 香川　香西榮子
遠東の何地に骨をうづめけんいへど答へぬ君がおもかげ
● 伊勢　水谷露子
こよろぎのいそのあしやもよむばかり月さやかなる海のおもかな
● 岡山　菅原竹子
戰死せし兄のうつしゑ手にとりて愁に沈む五月雨の窓
● 滋賀　田中とみ子
小倉帽の中より出でし寫し繪にしばし昔の我れにかへりつ
● 香川　くめ子

亡き背子がかたみの寫眞とり出でゝ汝が父ぞよとしめす夜半かな
● 靜岡　伴野ふゆ子
狂ひぬがきつゝどにらむる海の面に波の音あらく日は落ちて行く
● 大阪　山村末尾
朝ぼらけ米浮の海原霧はれてかすかに見ゆる淡路島山
● 姫路　町田たみ子
いつとても眺め見あかぬ和田の原賤が苫屋をてらす月影
● 但馬　桂花子
釣床につみなく眠るをさなごの枕にちかく日ぐらしのなく
● 三國町　武田かをる子
なつの夜に海邊にたちて眺むれば沖の燈かげうすう見えける
● 麻布　積しな子
戰ひにたふれし君の御寫眞を見まもる窓に村雨のふる
● 越後　小原操
むらさめの露もまだひぬ夏山の木々の梢に蟬ぞなくなる
● 丹波　稲荷増枝
詩集手に青葉たどりてわけ入れば泉もあり蟬とりの子等
● 牛込　小島濱子
晝ばんに心清けき方丈や蟬なく儘に夏とは知りぬ
● 讃岐　荻野てる子
せみの歌をきゝつゝ夢にいりにけり木陰涼しきつり床の上
● 神奈川　わかな
なつかしき君がうつしゑ見るごとになほよにいます心ちこそすれ
● 金澤　英子
御寫眞を佛間にうつし備て子等に君が御遺言云ひきかすかな

● 仙臺　渡部光子

背の君の形見となりし寫し繪を取り出でゝ泣く朝な夕なに

● 東京　佐藤露子

湖より水つたひ來るひぐらしのなく音に暮るゝ川沿ひの里

● 下野　森照野

なき母のおもに似たると叔母上の寫眞を父のゆびさしていふ

● 千葉　みさを

朝夕に忍ぶたよりのうつしゑぞ今は我身の寶なりけり

● なゑ子

夕立の晴れ行くあとの木がくれにみゝかしましく蟬なきわたる

● 越前　梅香女史

やますみの身をば訪ふ人なき庵のとぼそを守る蟬の諸聲

● 滋賀　ゆかり

思はずも又見まもりぬ卒業の式衣正しき吾子のうつしゑ

● 越中　橋本光子

君がのりし舟はおしまにかくろひて遠き海原白きとりとぶ

● 甲斐　岩岡はぎの

三つになる乳子をせ負ひてふところに入れて又出すせこのうつしゑ

● 但馬　小西やを

戰場をあらし畫披を見ることに友の御たまの行方しのばる

● 備後　小林鈴香

野草のほどれをかざす御すがたはいまや戀しきかたみなりける

● 備後　福田すゞか

昔にもかはらぬ君がすがたかなよはさま〴〵にうつりかはれど

● 滋賀　田中とみ子

花と散りし君の寫し繪ながめてはおもひ出多き夕ま暮かな

● 秋田　滑川やす

木魂より木魂へ響く群れ蟬の聲かしがまし初夏の森

● 神戸　今井たま子

音たえてかゞり火消えて上と下に月やどりけむ須磨の夜の海

● 駿河　むらさき

うつしゑを取出しては又しまひしまひては出す年若き人

● 丹後　福島しげ子

禪寺の鐘の音ひくう黄昏て沖つ島山たゞ黒う見ゆ

● 神戸　水越照子

夕日影波に沈みて紫の潮流れて海暮れにけり

● 三重　たづ子

戰死せし兄のうつしゑ見る度にそゞろ昔の忍ばるゝ哉

● 府下　齋藤鏡子

月もあり小舟もあれど君まさず今出し見る寫眞語らず

● 河内　小倉文子

しげりあふ松の梢の木がくれにきくも涼しきひぐらしの聲

● 京都　ゆふ月

おもひ出の旅の袖ひぬこの夕君がうつしゑそと出し見つ

● 芝　清川ふさ子

兄さんの御歸りいつとうつしゑにしほるゝ妹がひざにもたれて

● 牛込　平野なつ

音づるゝ人もあら野の我が庭をせみのみおのがまゝになくらし

● 八王子　大野ふさ子

うなばらに曇ますなる朝霧の中に靜けく小舟こぎ行く

朝風の露ふきこぼす木がくれに聲も涼しく蟬の鳴くなり ●　横濱　三島洋子

眞帆はるか天城の山は雲もあらず海のながめのたゞ廣き哉 ●　赤坂　高瀬韓子

夕立の雲吹きはらふ山風になく音も涼し蟬のもろ聲 ●　大阪　服部たき子

今日の日は明けてあまりに長ければ君が寫し繪又立ちて見つ ●　神奈川　服部須惠子

たつのみや神のしづめと思ふまでなみ風もなし今日の海庭 ●　和歌山　みどり

兄君の遊びの庭のせみとりによこどりしたる汝もありしを ●　横須賀　たき子

蟬の來て鳴く枝に今日も亦誰か夜の子等かもち竿二つ ●　本鄉　石原鶴子

團扇手に文よむ軒の夏木立あたりしづかにせみ鳴きしきる ●　越後　荻野てる子

ちごまけのわがうつしゑよと見れば乳子の母ともおもはれぬ哉 ●　越後　吉田梅子

ゆきくれて宿かる木曾の掛茶屋に[illegible]しきく蟬の聲かな ●　下野　外塚あさ子

鳴くせみのこゑもすゞしき夕ぐれに友と語らふ松の下かげ ●　下總　櫻野操子

ま日中は蟬も暑さやいとふらむ木隱れにのみ聲の聞ゆる ●　神戸　倉重千代子

　　　　栃木　金戸貞子

思ふこといはでしのぶの山に似ず聲いや高く蟬ぞなくなる ●　深川　島田八重子

山蔭にゆられ〳〵てゆく道の木蔭すゞしきせみのこゑかな ●　岡山　林榮子

面影もおぼろになれる亡き母のうつし繪みればそゞろかなしも ●　武藏　神保歌子

漕ぐ〳〵海士の苫舟ほの見えて波間にゆるゝ曉の月 ●　大阪　三宅春子

風鈴の涼しき鳴り音しばし絶えて又一しきり蟬なき出でぬ ●　米澤　土橋榮子

妹の絹日傘もてくしばらくな蟬しきり鳴く櫻の大門 ●　埼玉　武井るゐ子

幼子がひるねもよほす日さかりをあなかしかましせみのもろこゑ ●　下關　笹すみれ

なげかじとおもへどなほも見るたびに涙をさそふ君のうつしゑ ●　群馬　紅ばう

かたみこそ今はあだなるうつしゑにあやなく今日も袖しぼりけり ●　大阪　北村愛子

父君のお出でなしたはこゝからと指さす海に夕日かゞやく ●　上總　田村たき子

おもかげの微笑むとしも思ふかな君がやさしのうつし姿繪

## 次號兼題

「萩」　「夕陽」　「山路秋行」

# 貴賓入京

米國陸軍卿タフト氏及大統領の令孃アリス、ルーズベルト氏一行は去月二十五日の朝六時半を以て恙なく横濱港外に安着し同九時上陸此處にて内外紳士淑女の歡迎を受け、同十時發の列車にて上京せり、一行の新橋停車場に着するやまづプラットホームの入口には日米兩國の國旗を聯揭し、場内は非常の雜沓にて憲兵巡査の制止にも拘はらず、遠來の貴賓を歡迎せんとて押寄せたる人々は肩が上にも雜沓して全く身動きもならぬ有様なりき。

十時五十六分一行を乘せたる列車は徐々として進行し來りプラットホームに停車するや出迎の田中宮相、伊東軍令部長、佐久間大將以下の紳士は孰れもプラットホームに整列して一行を歡迎せり、やがて待ち設けたる出迎人は一行を取圍み陸軍を代表せる佐久間大將はまづタフト氏と握手して遠來の勞を謝し愛國婦人會を代表せる岩倉侯爵夫人はアリス孃に花束を贈りて歡迎の辭を述べたり、斯くて横濱まで出迎へ同乘したる長崎接待員、並同夫人の先導にて群集を押分け湧き起る萬歲の聲嚠喨たる樂隊の響、爆然たる煙花の音を後ろにしつゝ場外に出で車寄より宮內省の馬車にて接待員同乘一行十餘名は芝離宮へ赴きたり、當日タフト氏は鼠羅紗の大背廣にパナマ帽を戴き上衣の見返しに一枝の紅薔薇花を挿し躰軀偉大、風采堂々たりき、又アリス孃は芳紀二十前後痩形にして艷麗なる佳人なりしが、白衣に淡色の上着をつけ、愛國婦人會より贈りたる花束を手にして蓮歩を移す様如何にも氣品高く見受けられたり。

右の如く一行の入京あるや市內各區の團體は午前八時二十分日比谷公園に爆然打揚げたる一發の煙花と共に紅裳取り取りの大旗小旗をひるがへし、新橋停車場外に押寄せ一行の着京を待受けたるが、定刻前後に至りさしも廣き場外人の山を築き、數千の彩旗翩々として目眩しきまでに打靡ける様壯觀いふばかりなかりし。

家　庭



# 米國家庭事情

野口米次郎

家庭論は愛戀論の如く常に新らしく聞ゆる問題である、淸く全き愛戀、淸く全き家庭を見る程心に快感を發せしむるものは無い、其快感は自然の美の人情の粹より發動せられるのである、神聖な愛戀と家庭の裡には常に花笑ひ風淸く月輝きつゝあるを見る、健全にして美麗な愛戀は人間を活動せしむる不思議なナーブで、健全にして美麗な家庭は其世界を健全に美麗に活動せしむる原である、家庭にして健全ならず美麗ならずは如何にして健全にして美麗なる人間を生ずることが出來やう、故に曰く家庭を見て其國民の情性如何を知るを得るなりと、然らば日本の家庭は如何であるか、健全であるか美麗であるか、此は疑問であるが、近來家庭論を今更の樣に云々し來つたのは餘りに時代後れではあるまいか。

余は十個年以上も海外に居たので、殊に米國の家庭の模樣を親く見たので、如何にして米國人は家庭を組織するか、如何にして米國人は生活するかを、一言で云へば Americans of Home を研究したのである、天下に健全にして美麗なる家庭ありとせば夫は米國の家庭である、米國人の如く家庭を作るに金錢――何處に米國人の如く富むだものがあるか、余は一言米國人の爲め辯護したいのは日本では米國人を稱して人は拜金宗といふが、決して左樣では無い、余の親しく見た米國

人は唯だ金錢の價を解して居るに止まつてゐる、而して其金錢を少しも家庭を作る上に惜まぬのは、天下に比類無しといふ可しである、男子――亭主が朝から晩まで勞働勉强するのは家庭を美ななしめむが爲め、女房を幸福ならしめむが爲めである、女房―然り女は家庭の主君である、女皇である、其主君女皇の不幸不滿なる家庭に美なる家庭は無いのである、米國の男子は女子の爲めに骨を惜まぬのは其男にして結婚して居るならば美麗なる家庭を組織せむが爲めである、彼等米國人の最初にて最後の目的は家庭にあるのである。

實に

But give me, Oh! give me, the pleasures of home!
Home! Home! sweet, sweet Home!
There's no place like Home! there's no place like
Home!

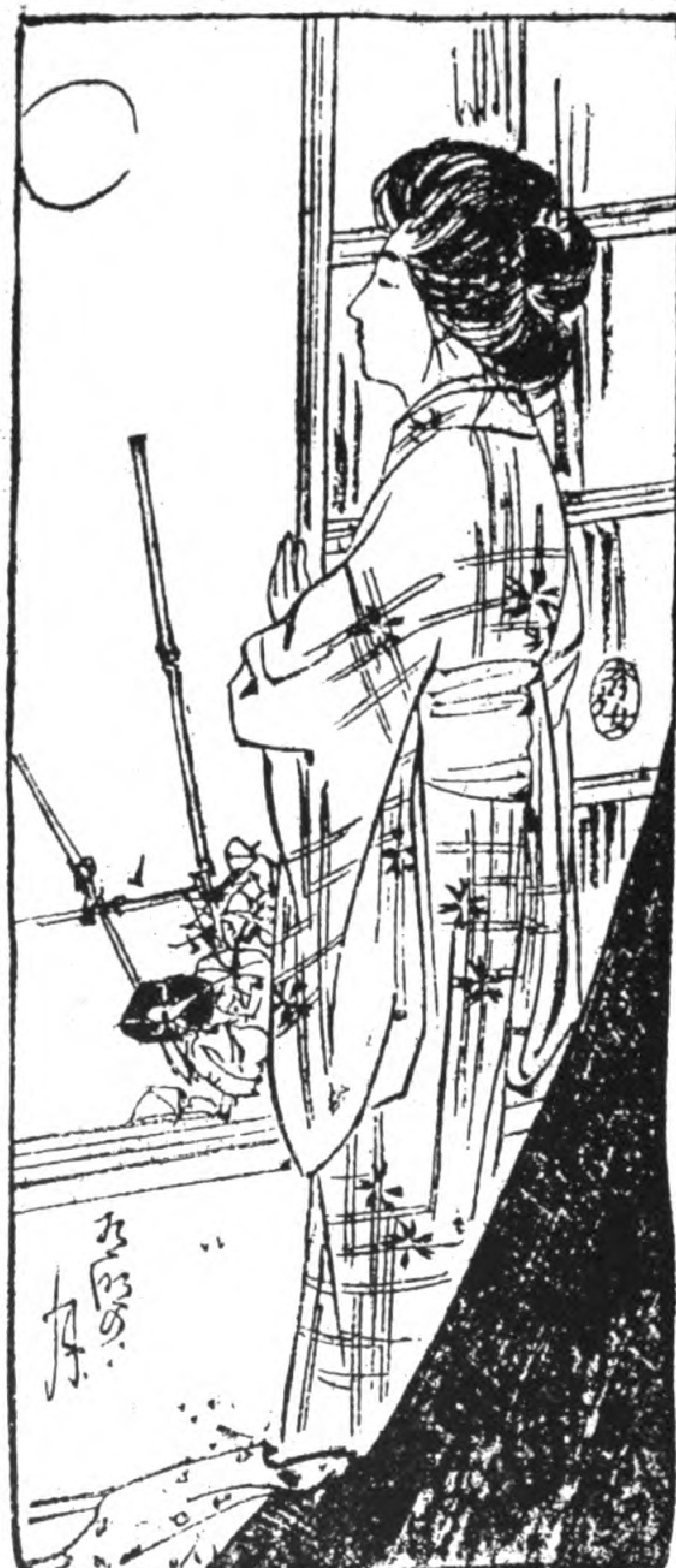
であるのである。

▲淸潔なる家庭　米國の家庭は千種萬別である、貧富賢愚に依りて差別がある、余は一日一弗で街上に於て馬糞を集める勞働者の家庭より、富百萬弗を積むで居る所謂ミルタヲナの家庭まで見たのである、中には小さき家庭を一間か二臟の裡に作つて居るのもあれば、大厦高樓を第五街――紐育第一等の所である――に立てゝ家庭を作つて居るのもあるが、其淸潔で愛戀の趣味多き空氣が滿ちて居る點に至つては、貧富賢愚を通じて皆な等しといふ有樣である、米國人は實に淸潔なる人民である、米國の市街米國人の衣服が淸潔なるが如く其慣性も淸潔である、從つて其の家庭も自然淸潔である故に米國の家庭を見て初めて健全にして美麗なる家庭を見るを得可しといへるのである。

如何にして米國の富豪者流が生活して居るか、如何なる家庭を作りつゝあるかは趣味ある問題であるから玆に其一斑を話すとしやう。

▲理想中の家庭　余をして假に理想中に余の實歷より一の米國富豪の邸宅を作らしめよ、其場所は紐育なるも華盛頓なるも或は市俄古なるも可し、或は桑港なるも或は又ボストンなるも可なるべし、余の理想中に一個米人の富豪者が家庭を作るものと思召せ。

▲邸宅は市中であるから餘りに大なるを許さぬ、又其庭園も大ならぬのであるが、青き、常に目が醒める様な青々とした雜草が敷詰めてある米國の園庭であれば日本の園庭の如く風流な所は無い、何處までも規則的で秩序正しきものである園丁が一週間に二度づゝ―まづ月曜に木曜日の午前まだ露の草の上にある頃に來て刈ることに成てゐる、町の入口から家の戸口までの通路の脇にはパイヲレツトか薔薇を以て縁を取てある雜草の庭がある、又園庭の中央には大理石か銅で誰れかの像――ヴナスの像でも建つて居るのである、今しがた主婦は他から歸つたのである、小馬車が主家から馬車小屋の方へ行つた、午後四時―今は四時であれば所謂アフタヌン、コールを主婦はしたのであらう。



▲入口　入口は三つある、一はメーン、ドーアで主なるもの、二はサイドドーアで家の側面に付いて居り、商賣人や奉公人の友達などが入いる戸口である、又三はケツチン、ドーアで勝手の口である、今其主なるメーンドーアのベル(鈴)を鳴らすと、鈴とて戸に鈴が付いて居るのでは無く、エレクトリク、バトン(電氣仕掛け

のボタン）で、其を推すと鈴が鳴るのである、直に下女――パーラー、メードとて日本で云はゞお小間使の様な少女で、應接間や居間等を掃除する役の女が出て來て、戸を開けるのである、其少女身には白いキャラコのエプロンを掛けて、頭の上に小い同じキャラコで作つた帽子を看護婦の様に載せて居る小作りな奇麗な小女であるから、非常に嬉しい扮裝なのである、午後になると掃除が濟むから自身の衣物を替へて、チャンと客の來ても見苦しからぬ様子をして居るのである、髪も結はれ自分の靴も磨いてある、それで自分のエプロンは一週間に二度替へるといふ事になつて居るのである、午前中掃除に忙はしき時は赤か黒の汚の見えぬエプロンを掛けてゐるのである、其少女が出て來て戸を開ける、自分は導かれてパーラーに入ると、主婦なり主人に告げむとて二階へ登つて行く、自分は其間其邊にある近刊の雑誌でも見てゐる。

（序であるから云つて置くがパーラー、メードの月給はまづ十四五弗である）

米國の雑誌程進歩したものはあるまい如何なる雑誌でも家庭用として編輯せられて居る、甚だしきに至つては其印刷や挿畫等ばかり精選して家庭用装飾として賣付けむとする程である、雑誌に掲載せられる文章は少くも讀者をして快樂と利益とを兼ね得させる所のもので無くてはならぬ、其内容は道義を亂さず科學的でもあり又時的の文章を以て滿ちて居るのである、斯の如く雑誌が家庭の必要物と爲り家庭をして快樂を增さする一大要素となつて居るのである、故に家庭に入り込むの盛衰に依つて其雑誌自身の盛衰を卜することが出來るのである。

▲繪畫室　主婦なり主人なり自身の遇ひたき人が出て來ると、日本に於けるが如き時候の挨拶等は全然抜きで、米國では至つて單純である、單純なると共に談話は率直で正直である、一言一句禮義に合はむよりは、寧ろ誠實なるを欲するのである、別に用事とても無い普通の訪問ならば、主婦――假に主婦を訪ねたとすれば――間も無く茶菓子を出すのである、而して後自家の

ピクチュア、ガラレー(繪畫室)へでも案内するのである、紐育などの富豪は歐洲名家の繪畫を蒐集して一枚幾萬弗といふ大幅を澤山一室内に掛けてある、例へばターナーの山水とか、ケンスバロウの肖像畫とか、コローの裸體の畫とか、近代佛蘭西靑年畫家の作品とかを掛けてある、此の繪畫室は又自分の娘——若し有りとせば、其娘が時々催す舞踏室に充つるのである或は又た時々催す午後の集會の場所ともするのである、娘——世に幸福で自由なる娘の時代ありとせば夫は米國の富豪に產れた少女の時代であらう



兩親よりは非常に束縛もされず而して金錢に頓着する必要も無いのである、然し如何に自由放任なりとは云へ日本人の考へる程無規則のものでは無い、無言の裡に制裁が行き渡つて、無規律に外出は出來ない、得手勝手に自分の欲する所の人を家へ引き入れるとは勿論出來ぬのである、米國良家の令孃程快活で常識に富み自身の分を守つて自家を所置するの才力を有して居るものは無いから要する所自由放任して置いても失錯が少い、米國ではトラスト(信用)といふことが重ぜられる、亭主は女房を信じ、女房は亭主を信用し娘は兩親を兩

親は娘を信じて一點疑心ある無しといふのである、故に兩親は娘を完全無缺なりと信じて、自由放任して置く故に、娘も其信用を破らざらむとして擧動を謹むのである。

▲料理番とメイド　自分が主婦と極めて懇意の間柄であるとすると、主婦は晩餐即ちデナーを共にせよと申入れるであらう、主婦は「勝手に樂め」とて自分を捨て置いて勝手へ行つてデナーの献立を料理番と相談するのである、大概普通の家では料理番といへば女である、男を使つて居る家は非常に金滿家で無くてはない、男の給金は第一等が六七十弗、女の料理番ならば四十弗が止まりである、料理番が勝手に居る間は中々の勢力があるので主婦たりと雖も無理を云ふとが出來ぬ、料理番の下には芋の皮を剝いだり鍋を洗つたりするケツチン、メードといふものが居る、此のメードのするをと料理番のする事に嚴格なる規則があつて、一つでも自分に屬して居ない仕事は爲て遣らないといふ風である、無理な自分の仕事で無い事を料理番が云ふ時は

メードは極力反對するといふ譯で、勝手では終始此二人の間に爭鬪が絶へぬといふのが普通大家の勝手の狀態である朝六時頃メードが起きて勝手の火を作つて湯を沸す、而して珈琲を作つて女中共の朝餐の用意とする、其が出來上る頃に料理番は自分の部屋を出て勝手へ出張するのである、自分の務は主人方の食事はかりに關係して居るのである、メードは女中共に食事をさせて、其皿を洗つて片付けるのである、其頃には主人共に食卓に付くといふので、玉子を煮たり、ベーコンを炙つたりするのである、如何なる富豪と雖も朝食は簡略なもので、デナーとなると料理番の任務は中々大である、然し料理番は麵包や野菜の事には少しも關係しないのが規則である、給仕人がデナーになつて料理を取りに來ると肉類は料理番に要求するし、野菜等はメードに要求するといふ様に萬事萬般規律が立つて一つも亂れぬといふ有様である、米國で分業の行き渡つて居るのは驚嘆の外は無い、デナーが濟むで料理番は自分の仕事が終れは如何に勝手元が混雜して居ても、

ヂッヂと自分の部屋へ歸る、主婦も少しも異議を申込むといふことが出來ないのみならず、自分も其れでよいと信じて居るのである、若し主婦が無理——料理番には料理番の規定があつて其規定以外の事に嘴を出すとでもあると、主婦に反對するのである、主婦も日本流に所謂奉公人として取扱ふとが出來ないので其職業に對する尊敬と愛とを以て對せねばならぬ、然し其は敢へて料理番に對するのみでは無い、八九人の女中——大家になると勝手に二名、給仕人が二名、自



分の女中が一名、パーラー、メードが一名、部屋の掛が一名此れに娘のお付きとか、御亭主付きの男とかで少くも八九名の奉公人を使はねばならぬ、此八九名のもの共に満足を與へ自分の位置と威厳とを維持して『奥様』と云はして行くには、中々の雑事である

▲テナーの鈴が六時か六時半に鳴る、鈴を鳴らさぬと給仕人が一々其由を傳へてあるく、給仕人が女なれば女給仕人の服装があるのである然し大家になると給仕人は男である、二人の給仕人に

支拂ふ月給は少くも百弗より少くない、又其給仕人には相當のドンス、コートと仕事着とを與へねばならず夏になると仕事するに暑いから絽の上着を與へねばならぬのである、此の二名の給仕人の關係は勝手で料理番とメードとの關係の如しである、食事に付く前に主人公たるものは――若し上流社會で宗教家なる時は、グレースを捧げて箸を取上げるのである、給仕人は主婦より給仕し初めるのである、此の食事の際に於ける談話の快樂は初めて米國に於て解することが出來るのである、其談話の中には文學談もあるし、演劇談も出る政治談や知人の噂や、新版小說の批評も出づるのである、米國の紳士の談話に富めることは驚くの外はない、人に招かれて談話の上手なるは交際社會に活動し得る一大要素である、家に居ても談話の上手なものは家庭をして多趣味ならしむるのである、故に米國人は男女老若を問はず天下如何なる出來事にも注意し、食卓上の快樂を添へるといふ事に細心留意するのである、米國では新版の著書が賣れる、又芝居の繁昌するのは交際場裡に於ける談話の元手にするからである、少しでも時勢に後れざらむことを之れ勉むる有樣である。

▲食後の光景　食事をして居るとパーラー、メードが客間や居間等に火を點ずる、冬ならば火爐に薪炭を入れて食後主婦に文句を聞かない樣にするのである、菓子が出で菓實が出で、フヰンガー、ボールで指の先を洗つて、食卓を去ることになると、娘は自分の友達が居れば共に腕を組むし、主人は客と共に食卓上の談話を續け乍ら、客間の方へ歩むのである、娘は自分の友達と勝手な場所に陣取つて談話をする、時には大笑する――米國で少女の大笑するのを少しも行儀惡しとせぬのである、日本では娘共人の前で大笑すらすることの出來ぬ不自由さよ――時には接吻を爲合ふのである、音樂に長じて居るものがあれば音樂をするし、男達は談話と喫烟に賑くと、チエス(象棋)でもして夕を愉快に暮すのである。

▲娘の戀人　若し其家の令孃に情人があつて偶々訪ねて來ると、誰れも彼れも靜かに其場を避けて他へ行つ

て、二人で自由に談話をさせて置くのである（序であるから云ふが自分の娘へ如何なる手紙が來ても母たる人は決して開封しない、日本の母は心配の餘り無斷で開封して寧ろ母の務を成したと思ふものがあるが、米國では人權を重むずるよりか、寧ろ娘に於ては間違はないものと信ずるより、少しも手紙等を開封などせぬ）夜が餘りに遲くなると母は何とか彼とか云つて二人の談話して居る部屋へ來るのである、米國の母親は一度は自分も斯かる時代があつたのであるし自分も間違つた擧動を爲さなかつたものであるから、其邊頗る優美で、擲す可きものがある、米國の愛戀は少しも放恣なもので無いのである、余は之れを詩的なりと云ふのである、米國の社會は戀人を見て其成功を祈り、喜むで勵ますのである、米國の社會は愛戀の社會である、愛戀のナープに依つて活動して居るのである。

客が散じて後、主婦は一々戸締を見て睡眠に付くのである。

# 夏の家庭

河西　璞

▲「御醫者樣」

凡そ世の中に夏の夕べの雷雨位小氣味のよいものは少い。降りみ降らずみ五月雨の上るのを待ち兼ねて、日一日と暴威を逞うして來る夏の日の堪へ難さに、欄に凭つて仰ぐ南の空に一村の黒雲、見る〳〵天一面に擴がつて、其奥から一道の閃電、續いておどろしき雷のはためき、二粒三粒豆の樣なのを先驅に屋根も抜けそうな大夕立、連れて吹き渡る青嵐の面を拂つて床の軸をなぶる小氣味よさ。されば南洋あたりの熱帶土人は、此雷雨をドクトル（御醫者樣）と崇め奉り、生命の親と敬つて居るといふ。理の合たとで、此の夕立は、啻に堪へ難き夏の炎暑を拂つて、心身を清々しくして呉れるばかりでなく、空氣中に浮遊充滿して居る不潔の塵埃、不健康の病毒臭氣を樸滅し、洗淨めて呉れる

ため、之に由つて恐るべき疫癘を免れるからである。

自然界の機關は考へれば考へる程甘く出來てるもので、夏の強い日熱は地上の水を蒸發させ、水は其熱を自分の形態を變へる手段に取つて目に見えぬ蒸氣に化け、此蒸氣は空氣に交つて居て、上からの日熱を喰止め、それが爲め自分も空氣も膨らんで、上へ〳〵と登り行き、上へ行くにつれ膨らんで冷えて、とう〳〵一部雨となつて降つて來る。若し人間の眼が空氣や、水蒸氣や、細微い塵埃の運動變化まで仔細に觀ることが出來るならば、河や海の水が蒸氣になつて上つて行く工合から、冷えて其處の細塵を核に細小い雨粒になる工合、それが集つて雲を作へる工合、その雨粒へ段段水蒸氣が凝り着いて大粒になり、落ちて來る工合、夫から塵埃や水蒸氣の運動變態に連れて、空中にエレキが起り、其のエレキが電雲に鬱積して、雷電を起す工合、空中電氣の作用で、空氣を變化して、非常に消毒の効のあるオゾーンといふガスを作らへ、此ガスが空氣中に浮遊して居る色々の病菌を撲殺し、毒物を變化する工合、水蒸氣雨粒が地上から立つて行く腐敗產物の惡臭氣を吸ひ取り、塵埃を附着させて落ちて來る工合、此等の大活動を目撃して、其機關の巧妙なのに喫驚するであらう。自然の機關の巧妙はこればかりでなく。日熱の爲め空氣が膨らんで動けば風が起り、風が吹けば身體の熱を取つて呉れる。何故風が身體の熱を取つて呉れるかと言ふに、風が身體の汗を蒸氣の形態にして奪ひ行くからで、汗でも只の水でも、蒸氣の形態になる爲めには、澤山熱が入用で、此熱は人の膚から取る爲めに冷く感ずるのである。自然の風が無くて、身體の汗が立つて行かず、暑苦しい時は扇を使ふ。さもなくば水で身體を拭く。これは只冷い水で冷すのみでない、此水が立つて行く時膚の熱を奪ふから冷しいので、其の證據には湯で身體を拭いても同く冷しいのである。足へ熱を持つて重い折燒酎を吹く。燒酎は水より一段と冷しい。燒酎は水より一段と立ち易いものだからである。夏の夕方一風呂浴びて欄に凭れ、木立を渡る青嵐に面を吹せながら、小氣味よき夕立に對

して自然界の妙を考へるならば、心は正に羽根が生へて極樂淨土に遊ぶ感があるであらう。

▲山國の朝夕

山國の朝夕は海岸地方とは違つてめつきり凌ぎよい、第一の理由は空氣が乾いて居るからである。何故空氣中に水蒸氣が少なければ冷え方が早いかといふに、これは水や水蒸氣の暖り難い、冷え難い性質と、夫から空氣中に水分が少なければ汗が引き易いと、此二つに基くのである。東京などの海岸地方は空氣が濕つて居る。晝は此水分が日熱を途中で吸取るから、山國に比べれば、



一日中で一番熱い時刻が一時間位は後れる。さて夕方になつて、日熱の來方が少くなる。山國の空氣は早く冷える。海岸地方の空氣は其中の水分が容易に冷えないから、矢張蒸々と暑いで夜中迄も扇が離せない。此理はまた夏と冬との氣候にも同じで、山國の方が年中での一番暑い日も一番寒い

日も、海岸地方より一週間位は先立つて來る。夫から空氣が濕つて居れば汗が引難い。これは勿論のことで、空氣が十分濕つて居るから、丁度腹一杯食べてる人が御馳走を前に置いても箸を取兼ねると同じで、其上に汗の水分を水蒸氣にして取ることを好まないので、熱は膚に籠つて堪へ難いのである。

### ▲庭の打水

右樣の理であるから、夕立もない風も無い折の海邊地の夏の夕は張合の無いもので、風呂にでも行く。水で身體を拭く。庭に水を打つ。此の水を打つといふことは、熱して居る地面を冷す工夫で、此水が地面の熱の爲めに立つて行く時、多量の熱を奪ふので、家の周圍の空氣は冷えるから、極て有効であるのみならず、見た所丈でも冷し氣で、夫と共に庭の草花や植木には缺くべからざる必需品になるのであるから、打水は夏の夕方の大切な仕事の一つである。

### ▲夏の誘惑物

廣々した庭や海に面した家ならば兎に角、東京などの普通の住居では、夕立も無い夏の一夜を家に辛抱することは難かしい。身體の爲めにも宜くない。そこで夕飯の方付もそこ／＼に戸外へ出る。廣い道路、橋の上、公園の木の間でも散歩する。程よき散歩から歸つて休息するならば申分は無いが、玆に一つ注意を要することは、戸外へ出ると、好ましい誘惑物がある。どうも我慢がし切れない。遂やる。歸つてから腹の工合が變だ。下痢が始まる。醫者に行く。などゝなると大變であるから、これは極々注意せねばならぬ。誘惑物とは、氷水及び其一類である。

暑い時の氷位甘いものは無い。ガリ／＼ツと嚙んで喉を下すと、五臟六腑が冷々と、誠に蘇生る思ひである。此味が忘られないで、やりつけるとやらずに居られぬ。然し、よく考へて見ねばならぬ。人の胃腸は夏は冬より熱くなつて居るであらうか。氷を食べ込んだ時の作用はどうであらうか。此二間に充分の答が出來て、夫で差支なしと定つたら、いくら食べても差支な

いか、此答がいけないとなつたら、注意して度を過さぬやう、我慢して口にせないやうにせねばならぬ。

生理學の研究から、人の身體の温度は、皮膚丈は夏冬で相違は免れぬが、其外はどんなに寒い冬でも、どんなに暑い夏でも、殆んど違ひの無い攝氏卅七度位（大人）のもので、此一定の温度は、體內の機關を差し障りなく運轉させる爲めに最適當した、否、これが相違を生ずると、必ず害を免れぬものであるといふ。されば氷や其類で胃腸を冷すのは、言ふ迄もなく宜くないことで、胃腸の內壁は之が爲めに一時收縮し、血液の循環は鈍くなり、且つ血液はこゝへ來るのから冷えて、從つて全體の機關の働きに影響する。皮膚も爲めに冷えやう。一時氣持が善からう。然しつまりは身體を逆に持つことで。結果は熱い物ばかり好いて食べるのと同じてある。これは一般の話であるが、脂肪質のやうな物を多く食べて、過分の熱を起して居る場合には、氷も少しなら差支へは先づあるまい。其外は必ず褒めた物では無いと斷言する。



## △氷の性質

氷の今一つの害は、氷といふものは唯の水と違つて純粋に近いものであるから、「自然は純粋を好まず」とある自然法則に從つて、其の觸れる胃腸の内壁から、何物をか溶し取つて不純にならうと力める。この性質の爲め、胃腸の内壁は犯されて爛れる。内臓の爛れると消化液の分泌、胃腸壁の收縮蠕動力を弱める。不消化病の原因になる。抵抗力が減つてコレラや赤痢チブスなどの病菌に犯される傾が多くなる。

氷は攝氏零度であるが、これが腹へ入つて、腹の本來の温度攝氏卅七度程になる爲に、腹から奪ふ熱は、攝氏零度の冷水が卅七度になる爲に奪ふ熱より遙かに多い。どれ丈多いかといふに、此攝氏零度の氷が溶けて、攝氏零度の水になる爲めに取る熱丈多いので、此の多い丈の熱の分量は攝氏零度の水を三十七度にする丈の熱の二倍以上である。(零度の水が卅七度になる爲め卅七の熱を胃から取るならば、零度の氷が卅七度の水になる爲めには、同じ零度の水に溶る丈に八十、夫から卅七度の水に暖まる爲めに卅七、合せて百十七丈を胃から奪ふ勘定)即ち唯の水と氷では、水が氷程冷いと見ても、胃を冷すのは三分一足らずであるから害はずつと少い。いや水を飲んで冷す丈なら、冷すといふ事の爲丈では別段害といふ程ではないのである。であるから、若し氷を食べるならば、口中ですつかり溶して、夫から少し温める位にして喉へ通すやうにするが宜しい。夫ならば害は餘程度合を少くすることが出來るのである。

氷を食べることが歯を痛める原因になるのは、人のよく知つて居る事で、歯と壽命の間に密接重大の關係があるならば、氷と壽命の間にも夫丈の關係は免れぬのである。

氷は塊を其まゝ噛るよりは、掻いて砂糖か何か交せ、不純にして食る方が、種々の點に於て害が少い。

### ▲「アイスクリーム」

氷の一類中「アイスクリーム」「ミルクセーキ」などいふ結構なものがある。これらの胃腸に對する作用も氷

を劣で賤すべきものであるが、多くは氷程氷つて居ないのみならず、一杯の量も少いから、十錢位で別段胃にも障るまい。夫さへも障るとならば誠に氣の毒の胃腸である。

「アイスクリーム」は「クリーム」即ち牛乳の「クリーム」に卵黄と砂糖を混せて氷らせたもので「ミルクセーキ」は牛乳を其まゝ用ふもので ある。何れも氷らせるには氷と鹽の混合物を用ふるので、雪又は氷を二、鹽を一位の目方の割合に混せたものは、非常に冷いものになる。これは學問上では寒劑と言うて、其温度はざつと攝氏寒暖計の零度以下二十一度といふ甚しいものである。寒劑には外にも色々あつて、もつと低い温度のものは澤山あるが、雪又氷の鹽を使ふのが一番安價で、簡便であるから之に由るので、此混合の割合を變へると下る温度も違ふが、しかしいつも非常に冷いもので、之を桶に入れ、其中へ氷らせやうと思ふものを入れ漉して廻すと、容易に氷らせることが出來るのである。



▲「ラ ム 子」

清涼劑といふ廣い語を用へば、氷や「アイスクリーム」などの外に色々ある。普通なのが「ラムネ」、平野水、「ソーダ」水、「ビール」、沸騰散などで、此等は何れも出て來るガスの作用によつて、冷しくなる所を賞美するのであるから、一纏めにして少し其譯を述べて見やう。夫には先づ水に甘い不甘いのある道理から話せば直ぐに納得される。

泉や井戸の水は冷こくて甘いが、煮冷しの水は不味い。これは水の中にガス類の溶けて居る分量の多いと少いとに由るので、泉や井戸の水は、空氣や炭酸ガスなどを割合多く溶して持つて居るが、此水を煮れば、溶けて居る此等のガスは逃げて出てしまふ。それで冷しても不味いのである。であるから、飲料を冷こく甘くしやうとならば、成る丈澤山ガス類を溶すやうにするので「ラムネ」、平野水、「ソーダ」水、「ビール」など何れもこれで、溶し込む「ガス」は炭酸ガスである。澤山の炭酸ガスを無理に壓し込んで置くから、栓を拔けば逃げ出すので、呑んで冷しく噯氣を催す。「ラムネ」の特別上製は、原料に砂糖と、重炭酸ソーダと、夫から枸櫞酸といふ白い粉の酸を使ふ。酒石酸を使ふてもよい。壜に重炭酸ソーダを入れ、其上に砂糖の煮汁即ち舎利別を注ぎ、其上へ靜に水を入れ、夫から枸櫞酸の塊を入れて手早く密栓をし、振り動すと、ソーダと酸で炭酸ガスが出て水に溶ける。「ラムネ」は出來上つたので、澤山のガスが無理に水に溶されて居るのだから、壜が丈夫でないと、破つて逃が出す心配がある。「ラムネ」の壜を持つて轉んだ途端に破裂して大怪我をした話も少くない。

普通の「ラムネ」には枸櫞酸などは使はず、ずつと安い硫酸といふ酸を使ふ。硫酸でも上等を使つて呉れゝば害は無いが、ずるい製造人は密かに粗製の安物を使ふから、其中に少許ではあるが鉛を混じ、猶時とすると砒石といふ大毒物を混じて居ることが少くない。否、若し嚴重の試驗をしたら、此等の毒の混つて居ないものは少いであらう。硫酸と重炭酸ソーダと合へば、炭酸ガスと硫酸ソーダが出來る。硫酸ソーダに水に溶け

て居て飲んで了ふのであるが、少しなれば別段害にはならぬ。澤山だと害になる。枸櫞酸を使へば枸櫞酸ソーダが出來る。

## ▲平野水、曹達水等

平野水は炭酸ガスを澤山含んで居る鑛泉である。然しそれ丈ではガスが少いから壜へ詰る時別に加へる。「ソーダ」水も「ラム子」と似たるのである。砂糖が使はれぬ丈と見てよい。尤も砂糖を加へて用ふることあるも、普通「レモン」などの香料を加へて用ふる。



「ビール」は麥をもやして飴汁となし其を醱酵させたる酒で、此醱酵を壜の中でさせるから、其時出て來る炭酸ガスは酒の中に溶けて入つて居る。黒「ビール」といふのは、別に麥を熬つて焦したのを加へるのである「ビール」の中の苦味と澁味は、別に「ホップス」といふ花の煮汁を加へるからである。「ビール」は敢て夏用とは限らぬが炭酸ガスで涼味を持せたるのは同じであるから傳手に附記しておく。

沸騰散といふのは、枸櫞酸又は酒石酸と、重炭酸ソーダと、二色の粉を混せたもので、之へ水を注けば炭酸ガスが出て、此ガスが逃げ出さうとして沸騰する。「ラム子」と同じ理

である。

「ラムネ」でも、平野水でも、「ビール」でも、栓を抜いてガスの吹き出さないのは、栓が弛んで居てガスの抜けた證據で、栓に漏りがあれば、其處から腐敗菌が入るから、多くは腐つて居る。決して飲んではならぬ。

## ▲最安全なる飲料

要するに、飲料中最も安全なのは水である。が水を用ふるならば、充分清淨無毒を保證せねばならぬ。淺い井の水は不潔病毒が混じ易い。六七間以上の深い井上流に人家の無い山川の流れ、水道などは先づ安全である。煮冷しは不味いが、其代り安心である。あの不潔な支那人に傳染病の少いのは生物を口にせぬからだと聞いて居る。子供の身體は一體大人よりは餘分に水を要する。從つて水を欲しがる。夫をやかましく言ふて止めると、見ぬ處で一度に澤山飲む。どんな水でも構はず飲む。これは深く注意すべきことで、平常充分信用の出來る水に限つて欲しい丈飲ませることにして置けば、身體の入用丈づゝ飲んで阿房飲をせず、隱し飲をせないから害を受けない。

井戸を擇ぶなら、夏冷くて冬暖いのを擇ぶ。即ち深い井戸で、調べて見れば別段冬暖くなり夏冷くなるのでは無い。年中同じ温度であるから、外氣と比較してから感ずるのである。大抵地下百尺位は一年中同じ温度で、其地方の年平均温度位の水が湧く。此層は恒温層で、東京ならば攝氏の十三度半許りである。攝氏十三度半であるから、夏は冷い、冬は暖いのである此位の深さになると病菌などは入つて來ない。入つて來ても多くは死ぬ。夫よりも深いのは、百尺位毎に唯一度位づゝ水の温度が増すだけだから、先づ差なしと見てよい。淺い井戸は外氣に感ずるから、冬はもつと冷くなるが、夏は生温くなる。そんなのへは病菌なども潜り込んで生活繁殖しやうし、便所や泥溝の不潔物も滲み込む恐れが多い。夏そんな淺井戸を使ふ家では、特に深い注意を要する。

# 紋の話（上）

清水芳子

▲特種の服制

家々の定紋をつけて各自が姓氏の徽章とし或は職業の記號とし、又は紋の有無を標準として禮服と平服とを區別する風俗は廣い世界に於て獨り日本にのみ行れる特種の服制法で他の國々には決して類例のないことです。勿論諸外國にも其の國を代表する國旗、若くは皇室の御紋章、亦は由緒ある名門貴族なぞは皆それぞれ紋を定めて居りますが、然し是は我國の紋とは大に意味が異つてゐて其多くは公共團體、さなくば舊家に限られて未だ姓氏の徽章として一個人に專屬するものはありませむ、況して紋を衣服器具等につけて禮式とする慣習はないのです。




そこで紋章なるものが我國にばかり普く行れて他國に類の尠いことは、要するに建國の體制の相違から來たとで研究してみますと太だ興味のある問題であります。然に我國でも明治維新と共に封建の制度が根底から破壞されて、紋章を工夫した當初の目的や及び是の實際の効用は全く閑

却されて、總に習慣の惰力でホンの形式だけが殘つて居るのです。所が文明の進歩は啻に是に留りませむで洋服の輸入やら服裝の改良やらで漸次この形式だけを殘してゐる紋章が更に滅亡するの運びになつて、此分で今後數十年を經過したならば紋てふ徽章は單に歴史上のものと化して、社會から忘れられるようになりはせぬかと考へられます。殊に多い讀者のうちには我家の定紋が奈何なる由來を有て居るのか、定紋と替紋とは奈何なる必要があつて工夫されたものか、若くは我國の紋と外國の紋との相違をも知らずに居るお方も少くなからうと存じて、玆に古書に質して是が起原及び沿革等の大略を申述べます。

▲紋章の起原

紋の起原を尋ねますと總ての紋章は模樣から脫化したものです。是を詳しく云ひますれば太古に於ける吾人の祖先が、天の雲紋または地の水紋に稽へまして四季の花やら禽獸の羽毛やら草木の葉なぞから模樣なるものを案出して、未だ衣服なぞが發明されぬ以前に家屋や器具につけまして、それが段々と工夫を積み意匠を重ねて種々樣々な模樣とはなつたのです。我國に於ても有史前の石器時代に極めて粗末ながらも此模樣が存してゐた事は考古學の證明するところであります、そこで此模樣から離れた或る特種の模樣が今日の紋章と成つたもので、換言すれば紋は模樣から分離した獨立の模樣であります。新井白石の著した紳書に據りますと、此獨立期、即ち紋の發明された時代を考證して『紋は蓋の紋と車の紋とが起りなるべし、彈正巡察の轅に蝶の紋ありこれ始めならむ、河内の上の太子の蓋に紋あり』と記してあります。今この說に從つて調べると河内の上の太子とは聖德太子の別名ゆゑ現今を距る恰も千二百五十年ほど以前で、彈正巡察とは聖德太子より五十年ばかり後の文武天皇の太寶元年に制定された太寶律令にある官職ゆゑ、兎に角に紋章が模樣から分離したことは大昔の事と思はれます。久保田米僊氏の說によると家紋の起原は天慶の頃、撿非違使の勢力が強く位は從五位の卑きにも關らず政所にゐ

ると撿非違使の權威が非常で宮中の申口（只今の參内玄關）へ百官が退つて來ると、撿非違使の靴は位の上下を問はず必ず眞中に置く若しそれを過つて他の者が穿くと咎をうけるので、靴を間違へないように各自靴に符號をつけたのが家紋の起りだと申して居ります。然し此説は何書によられたのか米僊氏もやゝ疑ひを存して云はれてゐますが、その何れにするも紋の起原は決して新しいものでないことは事實です。玆に注意すべきことは紋の起原は以上の如く大昔に相違ないとし



ても、その効用は全く模樣の一種と視なされたもので後世に於ける紋の意味とは大に異つてゐます。現に帝室博物館に保存してある奈良朝時代の調度を見ても、鏡の裏や翠簾の縁なぞに紋とも思はれる種々の模樣がついてゐます、是から推して見ても紋章が模樣から出たもので、且此分離期に於ける紋の目的が後世のそれと相違してゐることが明白であります。

▲紋章の効用

諸家紋鑑といふ書物に載せてある紋の數は實に二千三百二十八種の多きに達し

てゐる。勿論これは現今我國に用ゐられてゐる大略の調査にしか過ぎぬので、其の實際に於いて行れてゐる種々の替紋やら變り紋まで計算したら恐らく三千種以上にも及ぶでありませう。而して斯くの如く夥多なる紋章は由來奈何なる必要があつて工夫されたかと申しますと、是れは專ら往古の武士が戰場に驅逐する折に敵と味方を區別し、又は味方のうちの先陣後陣等を見別るための目標としたもので、語を換ていへば我國の紋章はその多くが封建時代の產物で武士によつて、發明工夫されたものであります。されば嚴格なる意義から紋章の効用を申しますと武家以外にはサシテ必要のないもので、公家や町人が是を用ゐますのは全く武家の眞似をしたのに過ぎぬのです。皇室の御紋章こそ千年ほど以前に御治定になりましたが其以外の紋は悉く源平時代以後に發明されたもので、就中元龜天正の戰國時代に武士の勃興につれて遽に其數を加へたのであります。我國の紋章は其運命を武士と共にしてゐるのです。

▲紋章の變遷

武士の勃興と共に發達した紋章の變遷を先づ鎌倉武鑑に見ますと、同書に載せてある紋の數は僅に三十九種で、其重なるものは源家嫡統の引兩と替紋の笹龍膽武田氏の四ッ菱、北條氏の三ッ鱗、千葉氏の月星、佐竹氏の日の丸の扇等でや〻變つたものには三本傘、三ッ鏡位のもので、此外には當時鎌倉武士の粹といはれた志乃黨兒玉黨なぞの各黨派で、是等の黨派は皆それを代表する紋を定めて中でも志乃黨の向ひ鳩、兒玉黨の軍配扇、和田黨の丸に三ッ引兩、那須七黨の日影左り三ッ巴、宇都宮清紀兩黨の日向右三ッ巴、畠山黨の村濃等は有名なものであります。而して是より三百年ほど經て足利時代の天文八年に評定所に於て改めた見聞諸家紋帳によると、其數が二百九十五種に增加して紋の圖様も種々と變化して或は植物の花葉をとり、動物の形を模し、或は天象に又は器具に各々その家の所緣由來に因んで工夫してある。別ても諏訪氏の牡丹に唐獅子、曾我氏の青海波に三ッ巴、小島氏の鳩に鷲

なぞは前代に見ることの出來ぬ紋章であります。それから天文より百五十年ばかり後の德川時代の元祿武鑑には紋の數が頓に增加して五百餘種となり、更に七十年後の寶曆元年に出板した紋帳には七百八十種に殖えそれより二十五年を經た明和八年に刊行した紋帳百菊といふ書には奇形變態なもの丶みが百種載せてあります、されば此頃ひに弘く世上に用ゐられてゐた紋の數は旣に千種以上にも達した事と思はれます。明和以降寬政武鑑または文化武鑑なぞを調べ併せて當時の紋帳を見て計算すると紋の數は非常に增加し



て二千種近くになつてゐる。文化以後天保嘉永と明治に近くなるほど更に此種類が增加して慶應年間に出來た紋鑑には二千種を越えてゐる。此時代に於ける紋章の增加率は實に驚くべきほどである。そこで茲に注意すべきは元來紋なるものは戰場往來の必要から發明されたものであるに、是に反して何が故に太平の續いた德川時代に以上のやうな增加を來たしかの問題である。是に就ては德川氏が應仁以降の戰亂を武力を以て鎭靜し元和にその武を堰とめて幕府を江戸に開いた、で當時の男子が空拳を振つて功名立身する

には武術を煉るのが第一の修業で武以外には全く出世の途がなかつたのです、されば武家に生れた人々は云ふまでもなく鋤鍬とつて耕作を業とする百姓、牙籌もつて身代を彈き出す商人も只管に武を好み勇を愛し氣風は殺伐に流れ、寄ると障ると一番首の手柄話や向疵の太刀打を誇つて風俗の好み遊藝の嗜みも總て武張つたことが流行し且歡迎されたのであります。元祿の初め櫻井丹波といふ淨瑠璃語りは金平節を語るに二尺あまりの鐵の棒を張扇の代りに遣ひ毎日見臺を二三脚づつ叩き割り、初代市川團十郎は荒事といふ芝居を工夫して總身に紅を塗つて舞臺を勤めた、衣服は派手を盡した寛濶扮裝、模樣は輪繋ぎいろは盡しなぞ極めて大柄なものばかりで、昨今市中の呉服店から賣り出した元祿模樣が即ち是である。然して此流弊が波及して旗本奴または町奴等の無頼の徒を生じ、それが更に進んで市民が武士の權威に恐れぬようになつて、始め武士の眞似をしてつけた紋章を自分達が工夫するようになつたのであります。否それればかりではなく太平の續くにつれて世人が段々贅澤になつて來て、織物の品質、衣服の模樣まで追々と華美に走り從つて紋章も種々に意匠新案されて文化文政の交には紋爭ひとて紋章の新奇を競爭するほどになりました。是が此時代に於いて紋章に非常の増加を致した原因なのであります。然るに明治になりましてからは紋のことは世間から忘れられ　新案の紋章は絕對にありませむ。勿論これは前述したように封建の制が破れて紋の効用が全く消滅したからであります。

▲紋章の種類

三千種に近き紋章の種類を一々列擧して解釋することは徒らに煩雜になるばかりで其要領を得ることの頗る困難でありますゆゑ、茲には我國に於て始めて紋章が書物として板行された足利時代の見聞諸家紋帳を標準として所感を申述べます。尤も同書は啻に紋帳の權輿ばかりではなく我國にある總ての紋章の根元を載せて居りますので、此書の解釋は直ちに他書の解釋とすることが出來るので多くの書物の中から是を撰擇した

次第であります。そこで同書に載せてある紋の數は前述の如く總計二百九十五種で、更に是を種類別にしますると植物を用ゐたものが百二十三種、動物が三十六種、文字を紋としたものが二十三種、天象が二十一種器具が十三種、山水のものが六種、動植物併用のもの及び以上に屬せざるものが八十三種ほどで、數の上から順位をたてると植物が第一で動物がその次で文字天象器具これに次で居ります。そこで以上の如く我國の紋章は重に植物の形ちをとり、同じ植物のうちでも松杉の大木をとらずに橘藤の小樹をとり、幹よりは葉葉よりは花に多きをとり、動物のうちでも牛馬の猛きものよりは蝶鳩の優しきものを用ゐ、天象器具も又これと同じく優美なものゝみを紋としてゐる。デ斯かる意匠は專ら我國の人の趣味が自然を愛し優美を好むに基きしもので、此一事また以て我國の人の高雅なるを知ることが出來ます。

船まちし妻子のかげもたそがれて
火かげ眞すぢやみに流るゝ

## 家庭衛生

# 夏季と胃病

糸左近

前々號には「消食の妙機」と題して胃腸などの生理衛生を述べたに依つて、今回は其の病理を述ぶるが順序であらう、のみならず今や炎々金をも鑠さんずる三伏の候なれば、隨つて身體は倦み易く、消化はし難く、加之に飲食物の腐敗も招き易く、黴菌の發生も續々出來る道理、されば夏殊に八月は胃病が最も多く流行するものである、元來我が國人に胃病の多きは爭はれぬ事實である。これは察するに、衛生思想の發達せずして、飲食物の其の當を得ぬのと、今一つは運動を輕視するなどが、大なる原因を爲すのでもあらう、されば讀者諸君に於れては、前々號に述べたる生理衛生の實行は言ふに及ばず、今回の疾病談も能々御熟讀ありた

いものである。

素人の方は、唯單に胃病と言はるゝけれど、胃病にも色々種類があつて、醫師は大抵急性胃加太兒、慢性胃加太兒、消化不良、胃擴張、胃痛、胃潰瘍、胃癌、中毒性胃炎、胃出血の九通りに分けてゐる、故に余もこれに從ひ、其等の大要を述べて見ようといふのである。

▲急性胃加答兒（食あたり）

〔原因〕この御飯は少し臭いけれど、勿體無いから、洗ひ流して食べませうとか、或は賭食賭飲などして十七杯の蕎麥に一升の酒を傾けるやうな事を爲るとか、或は蟹及び貝類の中毒、或は熱病に續發する等である。

〔病　狀〕ムカ／＼惡心を催し、えも言へぬ厭な氣持になつて來たと思ふ間も無く、ゲツガツ嘔吐を發するのである、斯うなれば四肢力脫け、身體倦み疲れ、頭痛はする、微熱は出る、上腹部はシク／＼痛み、口は渇いて惡臭を放ち、食欲全く欠乏するものである。

〔豫後〕輕きは半日位で治るけれど、重きは二三週間も呻くのがある。元これ養生を守らぬより起れるなれば、自業自得と前非を悔て、次の療法を施さねばならぬ。

〔療法〕嚴重に攝生を守るといふことが本病の主眼なる療法である、即ち少し食欲があつても、固形物は一切嚴禁し、極めて流動性の食物を少量に用ゐ、腹はフランネル樣の物を以て溫かに包み、全快するまでは身體を安靜にし、精神を樂ますやうにするが肝要である。

その初めて嘔吐を催す時に當つては氷片を喫し、或は冷いセルテル水を飲むが宜い、內服藥としては

重曹（五、〇）酒石酸（四、〇）枸櫞油（二滴）單舍（一〇、〇）水（二〇〇、〇）（大凡一合）右適宜服用　或は又

苦味丁幾（二、〇）稀鹽酸（一、〇）單舍（八、〇）水（一〇〇、〇）半合 右一日三四回に分服。或は又

護謨漿（二〇、〇）單舍（五、〇）水（一〇〇、〇）
右適宜服用　或は又

蓚酸攝俐謨（〇、二）含糖百弗聖（三、〇）
右三包に分け一日三回一回一包宛

等の中適宜用ゐるが宜い。

◎慢性胃加答兒（素人の單に胃病といふもの）

〔原因〕飲食の不攝生即ち暑いからとて、ガブ／＼水や氷を貪るとか、或は朝酒寝酒といふやうに情慾の奴隷になるとか、或は運動も爲ずに食ては寝寝ては食ひしてゐるなどからも起るし、又急性症より轉ずるのもあるし、又心肺等の他病が誘ふのもある。これは急性症のやうに苦しまぬけれど、數月乃至數年に亘つてジク／＼惱むのである。

〔病　狀〕上腹部が脹り且つ重いやうな感覺を起し、或時は食欲大いに進み、或時は箸取る氣にもならぬ、さうして曖氣は出る或は時に粘い液體を吐き、口中臭氣を帶び、舌には厚い苔が生へ、何を食べても砂の如き氣持がし、身體は次第に痩せ、精神何と無く鬱々する等である。



〔療法〕第一に温浴冷浴を屢々行うて皮膚の機能を盛んにし、早起の習慣を實行し食時と食時との間を六時間以上とし、如何なる塲合にても間食せぬことゝし、鹽で貯へた物や干物或は脂肪を含める物、或は酸味の強い物等を絶ち、粥、生卵、豆腐湯葉、自然生芋、百合、麩、牛乳、淡泊としたる魚類の刺身等を食料とし、適度の運動、適宜の遊戯を行うて血液の循環を宜しくし、

飮酒房事は可成愼しまねばならぬ。內服藥としては、初めは胃を洗ふ目的を以て、

(1)硫酸苦土（一五、〇）稀鹽酸（一、〇）單舍（一五、〇）溫湯（一〇〇、〇）右一日三回分服

それより胃內食物の防腐及び食欲催進藥としては

(2)含糖百弗聖（三、〇）マルチチ（〇、三）撒里失兒酸（〇、二）乳糖（適宜）右三包に分ち食後一包宛。

胃液の分泌を促し、胃を健かにするには、

(3)重曹（三、〇）ホミカ丁幾（一、〇）單舍（一〇、〇）水（一〇〇、〇）右一日三回分服

但し(1)は大凡一週間、(2)は二週間、(3)は三週間程試むるが宜い

### ▲消化不良（胃弱）

〔原因〕神經病精神病が大に本病を誘ふものである、例へば歇私的里、依卜昆垤兒、神經衰弱、鬱憂症等が誘因となるやうなものである、その他肺病、脊髓病、寄生蟲、過房、大酒、及び運動不足等である。

〔病狀〕慢性胃加答兒に、殆ど能く似てゐて、醫者でさへも吐物の檢査をして之を鑑別する位なれば、素人の方は、其の原因を考へて判斷するより仕方は無い。

〔療法〕原因療法を行はねばならぬ、即ち神經衰弱肺病が原因であるならば其病を治せば本病も隨つて消滅するやうな道理である、其他は慢性胃加答兒に施すものを應用すれば、大抵差支無い、けれど又更に一二の處方を擧れば、

(1)健質亞那丁幾（二、〇）稀鹽酸（一、〇）單舍（一〇、〇）水（一〇〇、〇）右一日三回分服

(1)百弗聖酒（二〇、〇）水（一〇〇、〇）右一日三回分服

(1)(2)と同時に用ゐて連服するも差支無い

### ▲胃擴張

〔原因〕潰瘍などの爲に、幽門が狹くなつたり、或は胃の衰弱して筋層が弛んだり、其他暴食暴飮等は大なる原因をなすものである。

我國の勞働家殊に土百姓に本病者が多くある、これ腹の飢えたるに任せて、粗食を一時に大食するからで

あらう、斯る輩は蔬食量を減して、其の代り一日四回にせば大いに宜しからんと余は信ずるのである。又大酒家は百發百中本病であると言つても可い。

〔病狀〕胃部何と無く、重さを感じ、食欲次第に減り、續いて、多量の液體を吐き、吐いた後は暫時輕快を覺ゆ、其の重きは外部から見たばかりでも、其の膨れてゐることが分る、又指尖で胃部に衝突を與ふればダブ〳〵音を發するものである。されど確然本病に相違無いとの診斷は打診法に依りて知るのであるから、素人方は容易に本病の鑑定は出來ぬものと心得ねばならぬ。



〔療法〕攝生の仕方は慢性胃加答兒等に同じけれども、本病は胃の洗滌が肝要である、洗滌法は器械を用ゐるのであるから、勿論素人療法には出來ぬ、內服藥としては、

人工加兒々斯泉鹽（一五、〇）水（一〇〇、〇）右一日三回食前分服

重曹（三、〇）硝蒼（一、〇）ホミカ越幾斯（〇、〇八）右三包に分け食後一包宛

但し右水散共甚だまづい藥であるから、服するや否や能く含嗽せねばならぬ。

▲胃痛

〔原因〕男子よりも女子に多い病で、月經の異常、歇私

的腫、子宮病、或は脳脊髄病等から來るけれども、又不明の原因も多くあるものである。

〔病　狀〕胃部に非常な劇痛を發し、「アイタヽヽ」「アイタヽヽ」と呻き苦しみ、七顛八倒するものである、其の重きは一週間餘も續き、脈搏は細くなり、顔色は蒼白くなり、甚だしきは人事不省となるものがある、この病で死ぬのは少いけれど、根本的に治ることの無いもので、所謂癪持とて、古來幾多の小說の材料にせられたか知れぬ。妙齡の一婦人が旅の困苦を嘗めてゐる途中俄かの胃痛、所へ通懸つた行脚の僧、斯うなると無骨な我でも一つのお伽噺は作られさうである。其れはさうと、俯して、胃部を確と壓へて居れば、幾分緩解するものである、若夫れ仰になつて「アイタヽ」を叫んでゐる者あらば、他病であるか或は僞癪である。

〔療法〕醫者であるならは、モルヒ子の皮下注射といふ所なれど、素人療法としては、胃部に芥子を塗るか或は發胞膏を貼り、一杯即二勺程大凡(二〇、〇)の日本酒を飲ましむるが宜い、輕きはこれにて治るものである、その他は皆劇藥なれば之を畧す。

◎胃潰瘍

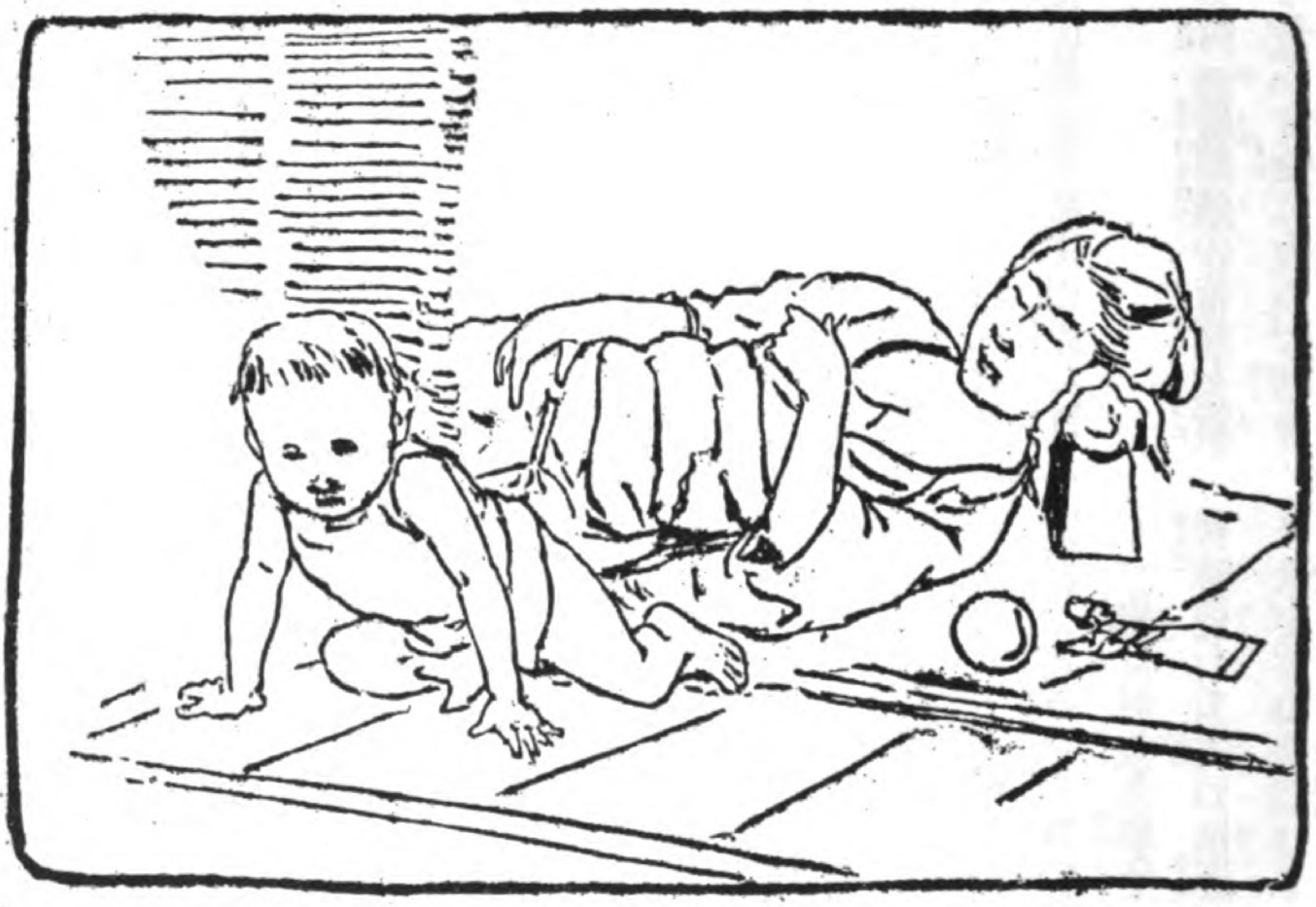
〔原因〕脈管に障害あつて、胃の粘膜に血液の循環が悪いと胃は侵蝕するのである。

〔病　狀〕大抵食後直ちに、或は食後凡そ一時間程經つと、胃部に切るが如く灼くが如き劇痛を發し、續いて嘔吐を起し、遂に血液を交ふるに至る、この吐血は本病に最も肝要なる徴候で、これを以て胃痛などの他病と區別するのである、多量に出血すれば眩暈を起して一時失神することもある、大便は黑色になつて、次第に眩暈耳鳴等を頻りに發し、顔色は蒼白くなり、身體大いに瘦せ衰へて、重きは遂に鬼か佛になるのである、けれど其療法さへ宜ければ、十中八九治るものであるから、吐血したとて左程驚くに足らぬことゝ心得ておかねばならぬ。

すべて血をはくと何人も大いに落膽するものであるが、これは甚だ宜しく無いことである、何となれば心配の爲に病勢を重くするのみならず、時に依ると肺病

や胃潰瘍で無く、唯咽頭などに僅かの故障あつて出血するやうなことが有るからである。

〔療法〕極て身體を安靜にし、大小便も勿論便器を用ゐるが宜い、即ち輕重に拘らず四週間は臥蓐にジツとして居らねばならぬ、最初の二三日は冷たい牛乳の甚だ僅かと、氷片を口内に含んでゐる外は全く食物を絶ち、胃部に氷嚢をあて、四五日目から少量の半熟卵、牛乳及びソップの様な物を取り、それより少くも三週間を經て、疼痛が去つたら、甚だ少量の固形食物例へば刺身鳥肉粥の如き物を食べでも可い、然るに此の攝生を守らねば如何なる名藥も其の功を奏せず、自らの刀で自らの頸を切るやうなものである。私の知り人が、三週間目までは大いに養生してゐたために、殆んど全快したやうになり、これでは差支あるまいと二三杯の酒を飲み始むれば、暫時にして痛みを起し、それが此世の別れの盃となつたのもあるし、又鰻の丼食べてドンブリと餓鬼道に落ちたものもあり、嗚呼情慾といふ者は恐しい奴である。内服藥としては、人工加兒々斯泉鹽（一五、〇）を水（一〇〇、〇）に溶かし、早朝より三十分間毎に其の三分の一を服み、即ち一時間半に三回分服をなし、それより、



硝蒼（一〇）宛、一日間に三回用ゐ、就寢に及んで抱水コロラル（一、〇）に砂糖をまぜ（三〇、〇）の水に溶かし之を一度に服むが可い、右の通り二週間續くれば大いに快よくなるものである、但し抱水コロラルは劇藥なれば無暗に用ゐてはならぬ。

▲胃癌

〔原因〕彼の小說家の紅葉山人は三十七歲を以て本病に襲はれしは例外として多くは五十歲以上の人を侵すものである、この原因に就いては未だ確たる輿論は無い或は遺傳なりと論じ、或は然らずと駁し、或は酒茶を貪る者に在りと言ひ、或は否と反對するなど其說區々である。我母は我の十九歲の時本病に罹り、あはれ五十五歲を一期として、この世を去り玉ふたが、祖父祖母の遺傳も無ければ酒も用ゐ玉はず、唯抹茶だけは大好物であつた、今我この章を書くに及んで風樹の感に堪へぬのである。

〔病狀〕殆んど胃潰瘍に似てゐて尙一層劇烈の苦痛を訴ふ、さうして其の吐物は咖啡のやうな物である、初めは頑固に便秘がし、終りは却つて下痢を起し漸々瘦せ衰へ、その瘦せた下肢等に浮腫を發するものである。

〔療法〕胃潰瘍と粗々同じけれども、本病は外科的手術を行ふ外は殆んど死病と言つても可い、故に本病と診斷せられたる場合は、その病勢の進まぬ前に、早く手術の實行を請求するが何よりの得策である、內服藥として

コンヅランゴ皮（一〇、〇）を水（四〇〇、〇）にて十二時間以上煎じて大凡（二〇〇、〇）とし、これに少量の葡萄酒を加へ一日三回二日に分服

なども用ゐるけれど多くは無効である。

▲中毒性胃炎

〔原因〕自殺或は過つて硫酸、鹽酸、昇汞、砒石或は植物性毒物などを服すのである。

〔病狀〕食道から胃にかけて、灼るが如く、燃ゆるが如く、焦るが如き劇痛を覺え、血液を吐き、悶へ苦しみ暫時にして大いに虛脫し、其の結果多くはチンドンガヲリンである。

〔療法〕その毒物の性質に依つて其の方法を異にするものであれば、直ちに醫者を迎へ、醫者の來るまでは兎に角胃部に氷嚢をあて、

亞拉比亞護謨漿でも用ゐてゐるが宜い。

▲胃出血

〔原因〕血管の故障、外傷、月經の不調、胃の充血等である。

〔病狀〕胃潰瘍と能く似てをれども、其の異る點は胃潰瘍の如くに痛みは無い。

〔療法〕これも殆んど胃潰瘍と同じけれども内服藥としては

麥角（二、〇）を溫湯（一〇〇、〇）にて五分間煎じ、その煎じ詰つた丈水を加へ、これに鉛糖（一、〇）と砂糖（適宜）とを混せ一日六回に分服

等は効あれども、麥角鉛糖各々劇藥なれば、須く醫師の診療を乞はねばならぬ。

右の九病は大要中の大要を說いたのであるが、併し素人の方で、これだけ暗記して居られたならば、一方ならぬ効益ありと、余は自惚れてゐるのである。次號には秋に起り易い病即ち「腸病」の話と題して詳しく述べませう。

## 夏季衛生 神經の休養

狩野病院長の談

〇夏の生理　動物には變溫動物と同溫動物との二種別がある、變溫動物は外氣の溫度に依つて自身の體溫をも變化するが、同溫動物は之と反對で外溫のために自身の體溫に變化を及ぼさない、即ち夏であらうが冬であらうが、同一の溫度である、ヨシ差異があつたとて實に僅かなものである、人間の如きはこの同溫動物に屬するから、外氣の溫度が四十度になつたからとて決して四十度に昇るものではない、ダガ極暑の候は酷く暑さを感ずる所から、熱病にでもなつた樣な感覺が起る、シカシ檢溫器で計つて見れば矢張春の體溫と同樣で三十七度を保つてゐる、是れは同溫動物には溫の

調節と云ふ機能があるためである、即ち夏になつて衣服を減ずるのも調節の一つであるが、衣服を減ずるのは何のためであるかと云ふに、身體から温の放散を容易ならしむる爲めである、外氣の温度高くなれば皮膚血管は擴張する、隨て血液の輸送も多くなる、ソコデ汗の分泌が盛になる、汗が盛になれば、其水分は蒸發して身體に寒冷を與へると云様なのが、つまり温の調節機能であるのだ、それから同じ温度の空氣でも、乾いた空氣よりは濕つた空氣中に在る方が心持が悪いが、これは身體からの蒸發が減せられるからである。

○體温と食物　體温と云ふものは、身體が食物及空氣より取る所の酸素の關係から起るのであるが、夏になると自然と食量が減ずると同時に脂肪性の食物を忌む様になり、隨て温の發生も減ずるものである、斯様に調節機能が具つてるので、外氣の温度が變つても、夫れ程障害がなく、夏を經過して秋に渉ることが出來得るのみならず、寒帯の人が熱帯に移住しても死なぬのである。

○暑氣と神經　前に述べた通り、外氣の温度が高くなつても、調節機能で平均を得る様になつて居るのであるが、モシ多量の食餌を取り、温の發生を盛にするか、或は筋の動作過度なるか、又は神經の使用過度の場合には、體温の發生を増し、調節機能を害するものである、故に夏分は成るべく大食を愼み、勞働を緩やかにし、神經の使用を避けるやうに勉めねばならぬ。

暑中休暇と云ふ事も此理由に基いたものである、シカシ業務によりては暑中だからといふて、休養することが出來ず、却て多忙なものがある、吾々の業務の如きは取分け蟻の仲間で暑い最中が最も忙しいのであるが獨り醫者のみでない、夏になると却て涼しい靜かな土地から態々神經を傷めに熱い臭い塵の多い東京に出て來るものも中々多くなる、夏期講習會等に出席する人人は隨分氣の毒な話で、自己の進歩發達を計る爲には熱さ位を厭はぬ精神には感心せねばならぬが、出來得る限りは費用の多くかゝらぬ閑かな涼しい場所を選んで講習會の様なものを開く方がよからうと思ふ、それ

から家の內は熱いからと云ふて外出する人の中には石油瓦斯の多い汗臭い寄席や、市街の人込などの中を選ぶものもあるが、これでは重くなつた腦が輕くなる譯がない、成べく樹木の多い公園とか、川岸とかいふ樣な場所を選み、涼風に乘じて散策した方が遙に利益である。

○熟眠　睡眠にも熟眠と不熟眠とがある、不熟眠は童幼に多い例で、五官器の中で眞に休息の出來ぬ所のある眠り方である、多くは騷しい音響が耳に達する爲めに聽官の休息を害され熟眠に入り兼ぬるのである、又光明い室であれば光線が眼瞼を透して視官を刺戟するために、熟眠を得られぬこともある、それであるから、八時間不熟眠を貪つても、四時間熟眠したと同じ割合となるのである。

○夏の夜　は色々な故障があつて、兎角睡眠を妨げられるものである、之は暑さで妨げられるよりも尙害がある、暑い〳〵で苦んだ其上、眠らうとすれば、汗がだく〳〵、子供が裸體となる、轉がり出す、蚊にせめらるゝといふ樣な始末でトウ〳〵朝の三時になる、無理に一睡しやうと思へば屋外がガヲ〳〵と騷々しくなつて眠らずに仕舞ふ樣な事も往々ある、それが三日も四日も續かうものなら、ボンヤリとして欲も得もなくなる、さうすれば神經の疲勞が過ぎて思はぬ神經衰弱病を起す樣な事になるから、大に注意せねばならぬ。

○眠られぬ苦しみ　は辛いものである睡られぬからと言つて、眠やうとすれば尙睡られぬ樣になる、明日は是々の用事があつて早く起きねばならぬのに少しでも睡らねば身體が弱る、睡り度いものとあせればあせる程、腦に血量を增して、愈々睡られぬ樣になる。元來睡眠時中は五官器の刺戟もなく、意識も働かぬために腦の血量が減じて、血液の循環も整然となるものであるのに、睡られぬを苦にする心が神經を刺戟して腦に血量を增して來るから愈々睡られぬことゝなる。

○催眠　には、よい方法もないので、醫學社會でも困つて居る、なぜ困るかと云へば藥で眠るのも持續すれば害がある、酒を飮んで睡るのも害がある、目下俗

間に評判ある催眠術の如きも神經の細胞に疲勞を與ふるもので眠るに就ての疲勞を招くからよくない、併し夏の暑さが原因で眠られぬのは戸を開けて涼しくすれば眠られるので譯のないことであるが、開け放しといふ事は、盜賊の憂があるのみか、曉の冷氣に遭へば腸胃を傷める患がある、そこで十二時間は戸締を必要とするそれ故睡り方は研究を要する重要な問題である。

○晩食の注意　前にもお話した通り、體温は食物にも關するもの故、特に夕の食事は滋養あるものを少量食して、胃の腑を膨脹げぬ樣心がくるが第一である、いくら酒客であつても可及的飮まぬ方が宜い、二日三日は我慢も仕惡くからうが慣るれば何でもない、煙草も其通りである、夏の暑いといふのは氣温の騰るのであるのに、鼻先に暑氣よりも熱い煙草を呼吸するといふのは理窟のわからぬ譯である、特に夏の喫煙は腦に障るものである、世には夜分睡られぬ程喫煙するものがあるが、ヨシ其の爲に睡れたとしても後に故障があるから止めたがよろしい。

○余の睡眠法　余の專門とする神經衰弱の患者は、眠られぬといふのが、一番多い徵候である、それで藥効の顯れぬうちに不眠を訴へられて困る、さうかといふて何分催眠藥は贊成出來ぬが故、種々考へて見、調べても見たが、あまり感心したものがない、そこで余は左の方法を勸めることにした、始めは床に起き直り、自分で自分の兩側の脇腹部を靜かにもむ、一側大概五分以内で宜敷い、さうすると手が相當に疲れる、それから仰向に臥せる、臥たなら心を虛にする爲に、一二三を緩やかに數へながら、靜かな深呼吸と同時に、緩徐りと胃部の按摩をするのである、其回數最初は一二三を十五位まで數へる、次には三十位迄數へる、此樣に二三回反復するといつか眠りに就くことが出來る。

○神經と食物　神經を多く使用する人は筋肉を使用する人と違つて幾分か食物をも異へねばならない、唯單純の勞働者なれば複雜なる成分のあるものを大量に食すれば胃腸で能く消化さして必要だけを平等に分配することが出來るけれども、神經を使ふものはどうし

ても運動が足らない爲め、胃の消化が充分に出來ぬから、神經に力の付くもの即ち神經の興奮を起すべき成分のものが必要である。それは何であるかといふに、今日の食物では肉中に含有する肉越幾斯である。

○肉越幾斯　は何ういふ作用があるかといへば、元來肉の美味なるは、肉中のエキス分と脂肪分との含有に基くので、美味の肉ほど此のエキス分に富むもので野生の鳥獸を賞美するのも畢竟此のエキス分の多い爲である。それで美味が直接に神經を興奮さするかといふに、さうばかりとはいはれぬが、味官に爽快を與ふるのも、一の養生に相違ない。視官には赤いもの、美麗なものが爽快を與へ、聽官には清き音聲が爽快を感せしむるが如き皆一般の理である。肉越幾斯は美味の成分を有して神經を興奮さする特効があるので、病人にはよくスープと共に之を勸める。何故かといふに病人は身體の衰弱するのみでなく、行末を案じて神經を惱ます事も劇しいもので、夫れに胃の働きが、不充分である所が、此のエキスを主とするスープは胃より容易に吸收されて、神經を興奮するものであるから適良なのである。

○滋養にはならぬ　併しエキスは間接には養生となるが、直接に神經の組織とはならぬ、血球となるとか或は筋肉となるとかといふ成分ではない、夫故牛乳或は肉類を食すると同様に見ることは出來ない、蛋白質とか脂肪とかいふものは、一度は身體に止つて血液となり、組織となり、色々の働きをなし、夫れから分解して身體外に排泄さるゝものであるが、此のエキスに至つては身體を素通りするので、其通る間に神經を强くすると云ふ丈が効用である。

○夏は肉を忌む　自然の作用で夏は脂の多いものは厭になつて、淡白な野菜の様なものが好きになる、さうかと云ふて神經は相當に使はねばならぬ故、之を補ふにはエキス分を取らねばならぬ、エキスの多いのが肉のスープ、其他鮮魚のあらひ、鯉のふくさ、鰻の蒲燒、しかし大食すれば胃を害し其他種々の害がある。

○便秘　それから夏は發汗の多いために便の秘結す

るのが通常であるが、秘結は腦に鬱血を起すから、便通を能くせねばならぬ其には果物は便通を促すものであるから、成熟せるものを適度に食するが宜しい、又た果物は精神を爽快にし、神經を興奮する効がある。

## 家庭科學

# 蚊、蚤、蠅

天放生

### △蚊

「我庵は蚊の小さきを馳走かな」などゝ悟り澄して居ればそれ迄であるが、夏の夜の蚊といふものが無いならはどんなにかよからうと思ふは誰も同じであらう。

蚊は啻に五月蠅い許りでない、或種類の蚊は瘧、即ち「マラリア」の媒介をするから、惡むべき害蟲である。宜く出來る限りの防ぎもし、退治もせねばならぬ。

△蚊の前身　蚊の前身は孑孑である。「孑孑や昔は誰の水鏡」「孑孑や貯へて置く舟の水」などゝいへば何となく美しく聞えるが、其の昔は水鏡にもなつたらう今は腐れた溜り水や、泥溝などに、夏の暖い日影を浴びてウヨ／＼と生活して居る無數の孑孑は、やがて蛹となり、續いて蚊となつて人間攻撃を開始するので、其の孑孑の水中に生活して居る樣を見ると、尾の端を水面に出し、體は水中に倒さにブラ下つて、如何にも滑稽である。然し當人は人間を笑はせやうとてこんな滑稽な倒さ立をして居るのではなく、よく見ると、尾の端の第二番目の節にある呼吸孔で空氣を呼吸し、夫と同時に、口は水中に小さな水草などを獵つて居る。つまり矢張我々同樣至極眞面目で世過ぎをして居るのである。

孑孑はメキ／＼と大くなり、皮を脫ぐ、幾度か皮を脫ぐと棒のやうな蛹に化ける。蚊でも蠅でも多くの蟲は、蛹に化ければ殆んど動かないものであるが、孑孑の蛹は同じやうに活潑に動く。然しよく見ると、水から體を出して呼吸をする部分が尾でなくて、體の中程

である。これで區別が出來るが、形や色でも分る。蛹で居ること五六日、背の皮が割れて蚊が殻の上に立つ丁度舟に乗つた船頭のやうに。それで翅が乾くと、もう一人前の蚊になつたので、高く飛んで行く。

▲蚊の雌雄　蚊の口は管になつて居る。それを肉の中へ挿し込んで血を吸ふので、血を吸ふのは十中九迄は雌である。雄は血よりは甘いものや酒などに集る。雌と雄の相違は、一番早く分るのは頭上にある觸角である。雄のは長いが、雌のは短くて密發で居る。翅や體には細小い毛が生へて居る。蚊をピシャリやると手に粉が着く。あれが毛である。

　親蚊は卵を腐つた水や濕潤した處へ生む。卵は五六十粒から三四百粒も密着いて、舟のやうに水に浮いて居る。夫が孵けて孑孑になるのである。

▲蚊と瘧病　「マラリア」を傳染する蚊は普通の蚊に似て居るが、下顎にある鬚が細管になつて居る口と同じ程の長さであるから、容易に見別けがつく。猶留つて居る所を見ると、普通の蚊は體を平にして居るが、此蚊は尻を持上げ、頭を下げて、鯱鉾立ちをして居るから、見違へは無い。其の孑孑も水の中でいつも體を平らにして居るといふ。見付け次第退治るがよい。此蚊は瘧の流行る所には多く居るが、他の所にも普通の蚊と交つて飛んで居るから、油斷はならない。

　どうして此蚊が瘧を傳染すかといふに、もと瘧の病氣の源は目には見えぬ小い〳〵蟲で、此蟲が此蚊の腹や口の中に澤山生活して居て、蚊が人を刺す時之を移す、瘧を患つて居る人を刺せば、其人から病毒を取つて、夫を又他の人に移す。かうして傳染させるのである。

▲瘧の病源　瘧の病毒の蟲には三色知れて居る。一色は三日目〳〵に熱を起させ、一つは四日目〳〵に熱を起させ、今一つは不規則に熱を起させる。日を極めて熱の起るのは、其日丈經てば新しい蟲は其人の體内に充分殖えるからで、熱が頂上に上れば、此熱の爲めに其蟲は死んで、生殘つて居るのが又始めから殖え始める。かういふのが幾組も一度に體内に入れば、毎日熱

等になるのである。瘧といふ病氣は、身體の弱つて居る時罹り易い。俗に新婚病などいふ名を付けて居る處もある。

▲蚊の退治　蚊の退治には孑孑から根絶しするが一番よい。泥溝や、水溜り、濕潤地へは石油を撒くと、石油は水の面へ廣がつて薄い膜を被せるから、孑孑の呼吸道を止めて殺して了ふことが出來る。石油へ石灰を混せたものもよい。池などには魚を飼ふが何よりである、魚は孑孑を御馳走にして絶してくれる。

蚊になつて飛んでるのは蚊帳で防ぐか、蚊燻しをする。蚊燻しには杉、松、杜松、柏などやにのある葉がよい。夫よりも除蟲菊の粉は一番よく利く。三撮みばかり煙草盆で燻せば皆出て了ふ。坊間で賣つて居る蚊遣香といふ螺旋形の香は、除蟲菊の莖や葉を粉にして造へたものである。

蚊帳へ入つた蚊を蠟燭で燒く折は、言ふ迄もない、注意が大事である。蚊に刺された跡へは「リスリン」か樟腦丁幾を擦り込めば痒みが退く。

## △蚤

▲蚤と淸潔　蚊に勝るとも劣らぬ夏の害蟲は蚤である此奴は雄雌の區別なく人の體へ針のやうな口吻を刺し込んで生血を吸ひ取る。蚊は蚊帳で防げるが、蚤に至つては、何とも始末にをへぬ。尤もこれは思ふに自然が我々に淸潔を強ひ勸める一つの方便かも知れぬ。といふのは、蚤は必ず不潔に正比例して多い。蚤の巣は第一が古いボロ／＼の疊、掃除の不充分な塵埃の積つて居る疊の敷合せ、同く裏、夫から椽の下、押入れの隅、襤褸の中、着物の縫返しなどで、さういふ處を撰んで卵を產んで置くのが、暖氣につれて孵り、安眠を妨害するので、若し始終之を掃除して奇麗にして置けば、蚤は必然少いのである。春秋及び暮の大淸潔の時はこゝ迄考へて、叮嚀に疊を拂ひ、床下を淸め、床板の隙には目張りをし、夫から着物夜具などの縫直しの時は、布の折返しの埃を拂ふやうにしたいのである。

▲蚤の生態　蚤は一年に幾度も卵を生んで、一度の卵

は大抵十二位である。此卵は桶のやうな形で、生れてから六日前後で孵るが、未だ蚤にはならぬ。白い筒形の蟲である。此蟲が十日許りの間は塵埃や親蚤の糞を食つて大くなり、十日許りして絲を吐いて繭をかけ、蛹になつて十日許り其中に潛み、夫から蚤になつて跳ね出し、大膽にも數十萬倍の人間を攻擊して如何なる豪傑をも躍り上らせる捜しても見當らず、見當つても、長い強い後足で自分の體の何十倍も遠く跳ねて消えて了ふ。癪に障ること夥しいが、又何となく勇壯な感じもする。『景淸もあきれし蚤の行方哉』

▲蚤の退治　蚤の退治は普通捻



り潰しであるが、中々旨く捕へられぬ。幸な事には除蟲菊といふ菊の花の粉があつて、之が蚤や蚊には適藥でしかも人の體には何の害も無い。此粉の混合物の無いのを買ひ求めて置いて寢る時寢衣の裏と蒲團の周圍へ振つて置くと、蚤は來ても忽ち醉つてフラ〳〵になつて歩けなくなり、勿論刺す力は無くなる。夫を捕へて灰吹へでも摘み込むことにすれば、段々絶すことも出來やう。然し夫と同時に次の法によると、獲物が遙かに多い丈其丈有功である。

先づ寢る時に家中の者の着物を脱ぐ室を一つ定めて置いて、其室で着物を脱いだら、丸めて

隅へ順につくねて、室を締め切つて置く。さて寢てから、之は女がよい、獵の好きな眠くない女が其室へ燈火を持つて行つて見ると、蚤は着物から出て、丸めた上面か、疊の上、乃至壁などに付いて居る。手もなく捕れる。蚤に苦む家では一つ試して御覽なさい。

言ふ迄もなく蚤は大いのが雌で、小いのが雄である。

## △南京蟲

▲舶來の害蟲　明るい中は影も見せずに隱れて居て、夜になるとノソ〳〵匍ひ出して來て、蒲團から出て居る手足の先などを襲撃する、而も其襲撃の跡が蚤や蚊の跡と違つて、赤く膨れ上り、一週間も十日も痒みと共に直らないといふ恐ろしい明治舶來の害蟲は南京蟲である。此蟲は南京と限らず、歐米諸國にも居れば、殊に滿洲や朝鮮には盛に暴威を逞うして居るので、從つて先ず此等外國との交通の頻繁な港地から兵營（鎭臺蟲の別名がある）夫から今日では支那留學生が多く居る神田、本郷などの下宿屋旅屋から、追々蔓延して、我國普通の害蟲たらんとするの勢を示しつゝあるのは苦々しい次第であるが、何とも致方は無い。

▲其の生長　南京蟲は、形は「ダニ」に似て長さ一分五厘位あり、色は淡赤褐で、黄赤の毛が生へて居る脚は細長くて、走ることは非常に早い。後脚の間に孔が開いて居て、それからいやな臭ひをひり出すから、蚤や虱の積りで捻り潰すとひどい目に逢ふ。晝は疊の裏や敷合せ、板の割目、壁の間、箪笥の裏などに潜んで居て、中々見付らぬ。夜暗くなると出て來て刺すが、蒲團の中へは入らぬ丈が特勝である。非常に頑固な蟲で半年位何を食べずに居ても死なぬといふ。一年に幾度も卵を産み、一度の卵は五十位、親蟲の巢へ纏めて産む習慣がある。卵は白い楕圓形で、生れて一週間か十日目に孵り、夫から七十日許りの中に五度皮を脱いで始めて親蟲になる。

▲南京蟲の退治　此蟲に侵入されたら充分に掃除と消毒をせねばならぬ。疊、床、壁の際などに石油、昇汞水、ベンゾールなどを噴霧器で噴き懸けるか、又は疊

を上げ二枚づゝ立てゝ置いて、硫黃を燃して燻す。此ガスは毒であるから、其間家の人は家を締めて外へ出て居ねばならぬ。夫から此ガスは銀や銅などの金屬を黑く燻し、着物なども物によつては色を褪くから、さういふものは出して置かねばならぬ時間は二三時間でよい。濟んだらよく戸を明け風を入れる。面倒でも一度此法をやれば、大抵は根絕しが出來る。

### △蠅

▲惡魔の化現　書くさへも胸の惡い可厭な蟲は蠅である、あの不潔げな形で飛んで來て、遠慮なく顏や手足へ留り、失敬にも



糞をする。人を馬鹿にすること甚しい。二三十分眠らうと思つても、五月蠅く來て、而も口の周邊を標的に突貫し居る。凡そ世の中にこれ位可厭なものが又とあらうか。蠅に比べれば、蚊や蚤はまだ〱愛すべき所がある。虱さへも何となく鷹揚で尊げなといふ取得がある。蠅に至つてはどうよく見ても少しも辯護すべき美點が無い。おまけにあれがあの口に傳染病の病菌を運搬して、傳染の媒介に日も足らず飛び廻つて居るのかと思へば、惡魔の化現かとも思はれて、身の毛も慄立つ。

▲蠅の繁殖　蠅の卵を產みつける所は第一が馬糞で、夫から腐

れかゝつた食物、一切不潔な物の上である。夫が一夏に十五六回も卵を生んで、一疋の蠅の一度の産卵數は百以上であるから、殖えることや夥しい。東京でも貧民窟などへ行けば、隨分蠅が多いが、田舍の馬でも飼つて居る家へ行つて見れば、羽音を立てゝ眞黑に群つて居、麥藁帽子などは半日で糞で黑く變色するのだから實に驚く。

蠅の卵は孵つて蛆になる。蛆は圓長い五分許りの白いもので、尾の方が太い。體に毛が生へて居るから匐ふことが出來る。蛆が十日許り經てば蛹となり、夫から數日で蠅になる。普通の蠅は刺さぬが、馬蠅となると跳ね上る程激く刺す。

▲蠅と傳染病　口は管の形で、其先に舌があり、此舌を畳んで物に吸ひ付く。其折前に傳染病毒のあるものを舐つた口ならば、此毒を容赦なく食物に蒔き歩くので、特に赤痢、コレラ、チプスなど、蠅を媒にするのが多い。極て注意して、決して食物には蠅を近づけぬやう、蠅帳の中へ貯へねばならぬ。

蠅に格別の注意を要するのは、赤坊子供である。赤坊などの口は蠅が、第一に覘ふ。夫から菓子など持たせると畳へ落したり、拾つたりして食べる間に、蠅も甜めやう、蠅の甜めた所、糞をした所へも觸れやう、しかも唾で粘つて居るのだから、條件は充分に備つて居る。心ある親達は決して輕く考へてはならぬ。

▲蠅の退治　蠅の退治は卵の生み付けられさうな不潔物から退治するが一番成功する。夫から飛んで居るのは、黐、蠅取器、蠅叩きなどを使ふ。ガラスの蠅捕器には酒を入れるが、惡い蜂蜜を酒に溶したものは利目がずんとよいといふ話である。蠅取紙と言つて、毒を塗つた紙は、今は賣つて居ない。たとへ賣つて居ても危險だから好ましくない。蠅叩きは不潔極るものである。客の前などでは氣を付けねばならぬ。澤山居る田舍へ行くと、飯などで蠅を集めて、蠅は舞ひ上つて袋へ入るのを、冠せて叩くも、筒の先へ袋を附けのを、煮湯を注けて殺す方法を用ふる處がある。今後一層上等な蠅驅除退法又は武器の發明があるであらうが、今

の處全滅法又は驅逐法の完全なのは無い。除蟲菊の粉も、煙燻も、蠅にはとんと甲斐が無い。

▲戰地の害蟲　害蟲の記事を終るに當つて、滿韓地に出征して居る幾十萬の同胞が、此等の害蟲と奮鬪して居る有様を想像して同情に堪へない。何にせよ清潔とか衛生とかいふ高尚の觀念の殆んど無いともいへる地方の事であるから、蠅の如きは雲の如くに群れて居て千や萬捕つたところが羽音が減つたとも思へぬ、兵士等の之が爲めに苦むことは一通りで無いといふ。内地から黐は夥しく輸送される、被せ捕りや網取りは盛んにやられる。網を一振り振ると百も二百も入る、鍋の尻や古新聞に黐を延べて置くと、見る間に眞黒になる。小枝に黐を塗つて、水を容れた桶などの上に渡して置くと、落ちる蠅は忽ち水の面を隱す。ある人が古新聞の黐に附いた蠅を數へたら、一寸四方に五十何疋かあつたとの事である。此蠅が食事の時は食器に群り横になれば顔を襲ひ、而も内地のと異つて夜迄も出るといふのだから、其間斷なき襲撃と戰ふ將士の五月蠅さはどんなであらうか。蠅許りでない、夜は南京蟲が出る、恐しい蠍が襲ふ、虱は遠慮なく生血を吸ふ、蚊はブン〱刺す、如何に砲聲の聞えぬ準備期間でも、一時も安氣樂に居ることは出來ない。こんな苦みを忍びつゝ國の爲めに戰ふ忠良の士を思へば、感謝の胸が塞がる位である。

# 季節料理

松廼屋主人

### ポーチドエック

これは燒パンの上に玉子を載せて出すものなり、まづ廣き鍋に湯を沸かし小皿に玉子を割り落し靜かに碎けざる樣注意して沸湯中へ移し入れ三分間ほど煮るべし、別に薄く切りたるパンを黄色に燒きこれを皿内にのせ其上に右の玉子を碎けぬ樣注意して取出し乘せて出すなり

### カスタードの製法

まづ材料として玉子五個(黄味と白味を別々に解き用ふ)砂糖大匙にて五杯、牛乳同三杯半、香料としてナツトメツグ小匙一杯

右共によく交ぜて深き鉢に入れ弱き火加減のオーブンに入れて固めし

むるなり、冷して食す、是れを小さき茶碗數個に入れて燒くもよろし

## オムレツの製法

まづ材料として玉子六個(黄味白味を別々に解きて用ふ)牛乳大さじ三杯鹽並に胡椒少許

まづフライ鍋に多量のバタを敷きて熱し置き玉子の黄味に牛乳鹽胡椒を交へ、これに玉子の白味の泡を靜かに混じ直ちに用意の鍋の中へ移し込むべし、熱するに隨ひ三四倍に膨脹すべし、かくて上下固りたる頃薄きナイフにて玉子と鍋の間を靜かに離し中央より二つに折り碎けぬ樣注意して皿に入るべし尤も是れは熱き中に食ふべし

## 玉子トースト

まづフライ鍋にバタを敷き麵包を薄く切り玉子をよく解き右のパンに浸し火上に用意せる鍋にて裏と表とを黄色になるまで燒くべし、但し玉子の内には少量の鹽及び砂糖を交ぜ置くべし

## 輕便アイスクリーム

アイスクリームを製するには中に手數と費用とを要するを以て素人料理にては一寸むづかしけれども輕便法によれば案外易く出來るものなり

まづ材料として牛乳二合鷄卵四個、砂糖大匙に二杯クリーム一合半香料としてバニラ十滴を用ゆるなりさて二重鍋を用意して牛乳を沸かし玉子の黄味に砂糖を交ぜて沸きたる牛乳中へかき廻しながら注ぎ入れて粒の出來ざる樣注意すべし二分間の後火より去りクリームを交へ香料を入れ冷處に置き次ぎに以上の混合物を入るべきブリキ製の蓋ある罐と其五六倍程の桶を得て罐内へ冷へたる混合物を入れ蓋をなし別に氷と鹽とを用意し細かく碎き是を桶の底に一寸ほど敷き其中へ罐を入れ周圍に氷と鹽とを詰めて掩ひ、其上を厚き毛布にて掩ひ冷處に置くこと凡そ一時間ほど經ちて後開くべし

## 南瓜のスクハッシュ

まづ南瓜の皮と核とを去り一寸角ほどの大さに切り一時間冷水に浸たして鍋に入れ之を掩ふ丈の湯を注ぎ入れて柔くなるまで煮て湯を去り乾かし木さじの裏にて潰し水嚢にてこしバタ少量と鹽胡椒を交へて出す、

## チッケンサラダ

煮たる若しくは蒸したる鷄肉を皿にのせこれにドレッシングをかけて出す、ドレッシングの製法はまづ玉子の黄味二個、白砂糖小匙にて半分胡椒少量酢大匙一杯を用意し、廣き鉢内に玉子の黄味を入れ肉刺にてよく解き胡椒、砂糖を入れ酢を交へ濃くなるまで少しづゝ粉を入れるなり(以上西洋食)

## 甘鯛の鹽燒

あま鯛は火の通りにくい魚で、其肉質が至ッて軟かい故、自然肉の燒け落ちるのと、火の通り方が遲いので火加減と串の刺し加減が匆々肝要なり、そこでまづあま鯛を鰓や腸をぬきて下拵をなし兩面によ

く鹽をふりかけ、一時間も置きたるならば水にてザッと洗ひ竹串をうねりさしになし、更に頭のあたりより背鰭の方へ斜に細き竹串を刺してほどよく焼あげるなり焼けたらば即時に串は抜けざる故なるべく冷めてから抜くなり

### 南瓜の田樂

南瓜をさゝらにてよく洗ひ、よく水氣を拭ひて爼にのせ二分ほどの厚みに切り其れを細き串にさし、煮かへしたる胡麻の油を表裏に塗りつけて烈火にて焼き充分に火が通りたらば煉味噌を塗りてザッと炙り串を抜き皿に盛出すなり、右味噌の製法はまづ鹹味噌をよく摺りてほどよく砂糖を摺りまぜ裏漉にかけ直に鍋にうつしザット火にて煉るなり

### 胡瓜の浸し物

胡瓜をよく水洗ひをなし、直ちに爼にのせ小口より薄く切りて少許鹽をふりかけて目笊にとり暫時して水をかけよく水氣が切れたら生醤油に輪切の蕃椒を浸したるものを注ぎて供す

### 鰹のたまり焼

鰹のおろし身を更に切身になし、味噌に醤油を加へ、ほどよく緩め、直ちに其中へ右の鰹を浸し、暫時して取出して布巾にて其味噌を拭きとり程よく庖刀目を入れ、其切目の中へ青山椒の刻みたるを金串にてすり込み、直ちに火にて表裏を焼きほゞ焼けたれば再び醤油をそゝぎほどよく焼きあげるなり

### 伊勢蝦の鬼殻焼

まづ伊勢えびを水の中へ投れ、さゝらにて砂をよく洗ひ落し、直ちに水と共に鍋に入れ少量の鹽を加へ二三時間もゆでたれば即時取り出して水中に入れ再びさゝらにて洗ひ、それより爼にのせ、縦に二つ切りになし皿に醤油をいれ、其中へ浸し暫時して餅焼網にかけ其上にのせ程よく裏表を焼き乾し粉山椒などふりかけて皿に盛り出すなり

### あわびの付焼

あわびに鹽をつけてよく手にて擦り、おろし金の柄にて殻を剝し、腸を去り直ちに水洗して爼にのせ、縦に三分ほどの厚さにへぎ、それより爼の上に布巾をしき片ぎ置きたるあわびを其上にのせて擂木にてかろく叩きよく軟かになりたれば金串を刺し、即時烈火にて焼き醤油を二回ほど注ぎよく焼き乾し串をぬきて皿に盛るなり

### むしり蝦の酢の物

蝦は車蝦でもいせ蝦でもよし水洗ひしたれば鍋に湯を沸しよく沸騰したる時少量の鹽をいれて蝦を其中に投じ、ほどよく煠りたらば水中にとりて殻を剝し、金串にて背腸を去りなるべく肉を細かにむしり直ちに鹽を加へたる酢の中へ浸け後ち引上げて胡瓜もみなどと盛添へるなり又胡瓜もみのこしらへ方は胡瓜を水洗ひして縦に二つに割り、核を脱き薄く小口より切り、直ちに鹽をふりかけ暫時置きザット水洗ひして堅くしぼり酢の中へ浸し五六分間も經たれば絞り三杯酢をかけて用ふるなり

### もづくの酢の物

もづくを桶にいれ、灰汁にてよくもみ後水を多量に加へてよく洗ひながら五六回ほど水をかへ、全く鹽氣の脱けたる時、布に包みて堅く水氣を絞り、直ちに爼にとり細小に切り器にいれ、ほどよく鹽と酢を加へたる中へ暫らく漬け置き再び布にとり堅く絞り更に器にいれ小鍋に砂糖二杯と水二杯をいれ、よく沸騰たれば鍋を下ろし冷めたれば酢と醬油をほどよく注ぎて右のもづくにかけおろし山葵など添へて供す

### 茄子の揚出し

茄子をザツト水洗ひしてよく水氣を拭ひ皮を剝ぎて五分ほどに輪切にして其より胡麻の油の沸騰したる中へ投じ表裏共に狐色になりたらば皿に新聞紙を敷き其上に取りて更に皿に盛り生醬油とおろし大根およびおろし生姜を添へて出す

### 南瓜の胡麻酢かけ

南瓜をよく水洗ひしてほどよく切り更に五分ほどの賽形に刻みて直ぐ鍋にいれ、砂糖と少許の鹽をいれて味の加減を試み、火にかけ落蓋をして暫らく煮込み、煮汁の大略つまりたる頃鍋を下ろし、直ちに器に移しよく炒りたる胡麻を摺鉢にて摺り、充分に摺れたらば少許酢をいれてどろ／＼になし、右の南瓜にかけて食す

### ずいきの胡麻あえ

ずいきを一尺ほどの長さに切り上下より皮を剝きて爼にのせ一寸ほどの長さに切り更に縦に細かく切り直ちに水にいれ、灰汁を脱き鍋に湯を沸かしよく沸騰するを待ち其中へ投じザツト茹で、目笊にあげ、冷めたら堅く絞り直ちに酢の中へ漬け置き白胡麻を炒りよく擂りどろどろの加減に酢と醬油及び砂糖を擂りまぜて右のずゐきを堅く絞りてかきまぜるなり、ずゐきはなるべくよく絞らざれば水氣の出づるものなり

### 胡瓜の味噌あえ

胡瓜をよく水にて洗ひ薄く小口より切りて少許鹽をふりかけ其まゝ二三分間も置きたらば再び水にて洗ひ堅く絞り其れより味噌を爼の上に置き庖刀にて細小に刻み少許砂糖を混ぜ右の胡瓜をかきまぜるなり、又小鯵など酢取て細小に切り混ぜれば其風味は格別なり、扨又小鯵の酢取を調理するには小鯵のセンゴ去り頭を切り、腹部を開けて腸をぬきよく水洗ひをなし三枚におろし腹骨を去り其のまゝ酢の中へ浸し十分間も經ちたらば取出して細かに切りて使ふなり

## 生間流割烹奥儀

（木村傳衛右門翁の談）

▲鹽燒（しほやき）　肉類は總體燒いたのが一番味が好いもので、昔は鮹でも多くは燒いて違つた味であります、料理法も素人に分り易く手數が入らぬので誠に結構であります、鮎の鹽燒は御話申すまで

もなく、串に貫した鮎に少し鹽を振懸け、こんがり炙つて、それに蓼酢を浸けて用ゐますがもし蓼の葉が無ければ酢許りでも味に變りはありません、蓼は鮎に故事もあり青くつて一寸上品に見えるので遣ふのであります

▲附燒（つけやき）　醤油と味淋若くは酒にてこしらへた汁を附けて程よく燒いたのを例の蓼酢にて用ゆ、味最も妙なり

▲飴煮（あめに）　は初め酒鹽で煮き中程から鮎十疋につき固飴三錢位の割合で煮詰めるのでこれは上戸には極適當である

▲甘露煮（かんろに）　白燒にした鮎を酒と湯を等分にしたもので二時間ばかり湯煮、そして少しの醤油と味淋でまた一時間半も煮詰め、火から卸す少し以前に水飴を入れると味よし

▲酢煮（すに）　これは西洋料理で日本食では餘り遣ひませんが、こしらへ方は水一合の中へ西洋酢を大匙に二杯ほど入れそれに鹽少しと玉蜀黍七八つとリリーといふ香のある木葉三枚を加へたものでよく煮て一たん鮎を取出し、汁も共々冷して、其の冷えた時分に鮎へ右の汁をかけて用ゆ

▲田樂（でんがく）　こんがり燒きこれに味噌を附けて用ゆ

▲細作り（ほそづくり）　三枚におろし、からし酢味噌蓼酢などで用ゆ、中には好みによつて薄煎酒で食するものもあるが、これは重くるしいので、普通からし酢味噌が多い

▲背切（せぎり）　また錢切ともいふ、背の方から薄く切りて水で洗ふと腹の中の雜物は一切取れて錢の樣に穴が出來上品な恰好となる、それにからし酢味噌を附けて用ゆ

▲澄汁（すましじる）　三枚におろし體裁を整へるため眞中で一つ結び青ぢそ、めうがなどの中に入れてよし

▲味噌汁（みそしる）　これは餘り近年用ゐないが肴鑑などにも出て居る調理法で、鮎の味噌汁は暑氣拂としても宜く、また下痢を癒す効があるといひ傳へて居る、拵へ方は頗る簡短で澄汁を薄赤味噌と、かゆればよいのである

▲鮎酢（あゆす）　骨を拔き鹽を當てそれがよく浸みたら上等の酢に漬けて二三時間以上置き、御飯は極上等の酢と鹽を入れて炊き或は炊いた御飯に酢と鹽を混ぜてその飯を鮎の腹へ充分詰めて手でよく抑へ、これを酢箱かもし無い時は落し蓋のある箱へ並べて薄く切つた生姜などバラバラ載せて蓋の上から壓石をして置くと半日位で出來る

# 禮法苦言

## （お孃さんと娘さん）

中嶋義弌

近頃は世間で女子問題が大分八ケ間敷なつて來ました樣ですが、果して世間に云ふ樣に女學生なるものゝ

ある部分が堕落して居るでしょうか、何うでしょうかもし果して堕落して居るとすれば、如何して救済すればば宜しいでしょうか等の事は、吾等女子教育に身を委ぬる者の觀察研究すべき問題であります。併し是等の事は別問題と致しまして矢張女子に關係した御話を致しましよう、いや女子に關係した御話と云ふよりは、寧ろ女子其者の實際のお話しで、靑年の婦女子諸君は勿論、荀も女子を有てる父母、兄姉諸君に是非共留意して御記臆が願ひたいのです。

偖其實際の御話と云ふのは、今より數年前の事で、丁度私が麹町に女禮式教場を設けて、多くの生徒を教へて居つた時分の話しですが、其時に麹町から一人の生徒が通つて居りました、其名前は少々差支があるから、御預かりにして置きますが、其生徒はある富豪家のお嬢さんでしたから、隨分衣服なども流行を趁うて美くしく目立つものを着た、其立居振舞も誠に輕快で、當世風の令嬢として恥かしからぬ風采、學校教育は高等女學校を卒業されたとの事でしたから、他の生徒等よりは一段身の高い方でした、從つて禮式作法も呑込の早い方でしたが、非常な性急で是を覺えたら何ぞやるんです、此次は何ういふのと先へ先へと覺えたがるのでした、覺えて貰ふ事は有難いのですが、覺えたのみで實際に少しも履行して貰へないは實に張合のない話です、例へば禮法を教へて居る時に足を横の方へぞべらかして居るとか、途中で便所へ這入るとか云ふ風でした、又歸る時など傘を間違へるとか、下駄を履き違へるとか、其で平氣な顔をしてゐる、中々あつかましい方でした。

此お嬢さんの少し後から入學した生徒で、赤坂から通つて居た娘さんがありました、是も前同樣名前は御預かりにして置きますが、前の麹町の生徒はお嬢さんとしまして、此赤坂の生徒を娘さんとして話を致しましよう、偖此娘さんは家が非常に貧しいので、是迄は右の麹町のお嬢さんの内に下女奉公をして居られたのですが、近頃少し家の都合がよいとかで、下女奉公を止めて禮法を習ひに來ましたとの話でした、此娘さん

は今話した樣に家が貧しいものですから、學校も尋常小學校を卒業したのみで、其後は專ら母上の傍で家事の手傳してゐたが、家が貧しいので行儀見習旁々麹町のお孃さんの内に奉公に上つたとの話でした。此娘さんは衣物こそ美くしくなけれ、其起居動作は自ら度があつて、誠に優しい生徒でした、此娘さんは麹町のお孃さんの樣に早くは日課も進みませんでしたが、覺えた禮法は其時から實行すると云ふ風で、麹町のお孃さんとは全然正反對の性質でしたが、其にも係らず、常に麹町のお孃さんとは親密に交際をして居られた樣でした、是は前にお孃さんの内に奉公して居られたかでもありましたが、何時もお孃さん、お孃さんと尊敬して、歸る時などは自分で二人分の荷物を持て、お孃さんは何時も空手で歸るのが常でした。



卒業後は二人とも嫁せられたのでした、麹町のお孃さんの方は或る富豪の家でしたが、其後半年程經つと、其行先で何か不折合の事がありましたとかで實家へ歸ることに成りましたが、其後も時々私の處へ尋ねて來られた、又た赤坂の娘さんは或る官吏の處へ片附かれたのでしたが、其後婚家の都合もよくなつて來て、秩序ある家庭の主婦として家事を執つて居られましたが、是も時々尋ねて來ました、すると此事を麹町のお孃さんが聞込で、何う思ひましか、自分の家に奉公して居られた時の話などして、絶えず不滿の樣子でしたが、或日赤坂の娘さん即ち官吏の奥さんと、麹町のお

孃さんと私の宅で出會された、するとお孃さんは何となく不平の面持で、〇〇さん、お前は大層奇麗なお羽織を着て居るのね、其ばお前が御嫁に行く時に阿母さんに拵へて貰つたのでせう、と人の中で耻をかゝせた心算でしたが、官吏の奥さんは少しも耻づる色を見せず、靜かに、ハイ左樣でござりますと答へました、すると又お孃さんは貴女は大層澄まして居ることねと冷かして、先頃迄自分の家に下女奉公して、厠の掃除なぞして居なすつたと散々耻を與へたのでしたが、官吏の奥さんは少しも怒る樣子なく、私は那麼にすましては居りません、私が貴女の御家に御厄介に成つて御恩を受けた事は片時も忘れません、其の御陰で生活が出來るやうに成つたんですから、誠に有難う御座いますと云ひますと、麹町のお孃さんは益々立腹の樣子で人の家に下女奉公に使つて貰つた恩も忘れて、今は少し都合がよいと思つて人を馬鹿にして居なさる、貴女の樣な人とは以後御交際はしませんと、早速歸つて了つたが、其後一度も私の處へ見えられませんでしたが、此節話を聞きますと、その以後は何れへも嫁入をなさらないで矢張家に居られるさうですが、兎角嫂と中が惡いといふことを聞きました、今は最早三十近くになりませうか。

で、私は始終此お孃さんと官吏の奥さんの事を思ひ出しますが、凡そ女と生れては、男に嫁して一家の主婦となり、賢母良妻として夫を助け子女を敎育するのが本務である、して見ると家庭敎育も學校敎育も皆之に依て方針を定めねばならない、即ち飽迄も賢母良妻主義でなければならないと思ひます、是位の事は何人も御承知の事ですが、實際に於ては、高等の學校を卒業した女子でも、未來の良妻賢母たるの資格のないものが少くない樣に思ひます、今御話した麹町のお孃さんの樣なのは確に此資格を備へて居ない一人です。

して見ると賢母良妻たるの資格を得るとは餘程難かしいものでしようか、麹町のお孃さんの樣に、身は富豪の家に生れて高等女學校を卒業されて尙且つ此資格がないとすれば、一般女子に向つて賢母良妻たること

を望むは殆んど出來難い事の様に思はれます、併し右に麴町のお孃さんと對照して御話を致した赤坂の娘さんの様に、身は貧しき家に生れて學問も碌々なさらないのですが、其でも一家の主婦として夫に事へ、子女を立派に敎育することが出來るのですから、左程難かしい事でもない様にも思はれます。

私は此實例に就いて色々研究して見た所、つまり麴町のお孃さんは學校敎育は十分であつたが家庭敎育が不完全でした、又赤坂の娘さんは學校敎育はお話にはなりませんが、家庭敎育が十分であつた事が分りました、是に依て是を見れば、今日の學校なるものは女子敎育に於て家庭に一歩を讓つて居ると云はねばなりません、併し考へて見ますと家庭敎育のみを以てしては、女子敎育を完成することの出來ないは爭へないことです、私は決して今日の學校敎育を非認するものではありません、要は唯だ學校敎育のみを以てしては、完全に女子敎育を施すことが出來ないと云ふのです、近來女學校の數が益々增加して來たのは誠に結構なことですが、是と同時に家庭に於ても十分敎育に注意せねばならぬと思ひます、即ち學校のみに信賴して家庭に於て放任して置いては何にもなりません、學校と家庭とは丁度車の兩輪の如く鳥の兩翼の如



く相方相俟て女子教育の全きを得ることを私は切望するのであります。

## 訪問と家庭の迷惑

家を持つて居る人の話にいくら家の中に規則を立てて置いても不意な用事が出來たり、又不意に客が來たりするので到底規則通りには出來ないと云ひましたが、實に其通りで朝起きてまだ掃除も出來ない内に客が來たり最ういつもなら寢る時分になつてもまで客が歸らなかつたりするのには誠に閉口します而して猶夫ばかりでなく何時如何な人が訪ねて來るか分らないと來ては一日家事に追まはされて少しの猶豫もない年中只忙しい思ひをして暮すので有ります之は日本一般が然うで有るからいくら私一人が規則通りにしようとももがいた處で駄目な話で有りますがせめて私だけでも他の家庭の迷惑にはなるまいと心掛けて特別の用事の外は水曜日の午後からでなければ他を訪問しない樣にして居ますが之も中々いろ〳〵のさゝはりで行ひ難くて困つて居ます日本の家庭は斯樣な有樣故、一旦家庭を持つた以上は自由に外出の出來ないのは勿論ですが讀書の時間などは皆無になつてしまふ、從つて社會の有樣とはまるで懸け離れてしまふ樣になるので有ります。

夫から訪問時間の永いのにも困ります、之は今日中に是非仕てしまふと思つて居た事でも客が來れば最う出來ない、二時間、甚だしきは三時間も費されてしまひ、終には最う宜い加減にと思ふ樣になり自然双方の感情もまづくなると云ふ事もある。

夫故訪問時間は短くして其訪ねた主意さへ通れば、それで歸る樣にしたいものです。（ふじ子）

## 家計と出納日記

夫れ一家の主婦たるものは凡てその家の出納を日々計算し無益の事なき樣注意するをその任とす此事は實

に家務中にありて最も緊要なるものなり、然るに之れを怠る主婦は恐らくばその性質の放縱懶惰なるか又は其教育の惡しきに因るものなり、適當なる方法を設けて家費の出納を計算する時は決して毫も煩雑なることなきなり、但し其方法は各家の主婦と其家の職業とによりて各々異るべしと雖も如何なる暮しを爲す家にてもその主婦たるものは殊に節約を旨とせざるべからず、而して凡を中等の生計を爲す家の若き主婦が一家出納の計算を爲すに最も節約なる方法はまづ日記帳なり、日記帳を製して之を常に座右に置き大小の諸拂ひを記し之を一週間毎に勘定の正簿に寫し取るを要す、其正簿の一枚には良人より受取たる金高を記すべし、斯く順序を設け請取たる金高と遣ひ拂ひたる金高とを比較して之を計算し双方違算なく一家の入費を善く精算することを得ば啻に我が心に快きのみならず他日良人より金錢の出納に關して問はるゝ時更に不都合なく双方共に滿足なるべし、出納日記帳は啻に家計の精算を得るのみならず身分不相應なる奢侈の念慮は之れが爲めに抑制せらるるを以て慢然無用の散財をなすの弊習を防ぐに至り。家計をしてよく健全ならしむるに至るものなり。



# 齒の養生

齒は消化機器の一にして、常に外界より來る食物を送迎する第一の門戸なれば、其の健なると否とは直ちに內臟の胃腑に關係するものなり、胃腸病の多くは重に齒の惡きに原因すとは、其の道の博士の斷定する所なり、されば齒牙の養生は常に怠る可らず、父兄も亦た愛子の爲めには孩兒の頃より注意して、齒患に冒されざるやう心せざるべからず、幼兒父兄の注意の至らぬより、所謂ミソ齒なるものを生じ、而して其の黴菌は齲齒內に入りて、其が爲め換齒後、虫齒となり又は齒並びを惡くして、生涯齒痛に惱むの不幸を見るに至るものなれば、斯の如きは其の罪父兄にあり、宜しく意を用ふべき事とす。今大阪の一高等小學校の調査を聞くに、全校生徒中齲齒に罹れるもの男生にあつて五割、乃至六割、女生にあつて五割五分乃至七割五分の多きに及べる由にて、同校に於ては之に對し左の如き豫防心得を父兄の許に配付して、その注意を喚起せり。

齒は消化器のうち最も必要なるものにして食物の嚼みかた粗ければ終に胃病を誘起し又齲齒の爲にゆゝしき疾病（神經痛、顎骨疽、上顎竇化膿性炎、齒槽膿腫など）をかもすとありわけて高等小學校の生徒は人生中最發育の旺盛なる時なり此の時に際し齒の不良は其の局部の害のみならず全身の發達を遲緩ならしめ一生虛弱に陷るの不幸を招くものなれば幼少の時よりその豫防をなすこと極めて肝要なりとす

（一）乳齒の腐りたるものを「ナスビ齒」と稱へてちひさき時は齒の黑きが可愛らしなどとて捨置く人あれども乳齒が齲齒となりたる時は消化不良の病を惹起し又永久齒と交るとき生理的機能に障害を及し齒列不齊となりて大に顏貌の美を傷ふのみならず發音抔に不便を感ずることありよく〳〵注意すべし

（二）齒石又は齒屎の齒頸或は齒の間に堆積りたる時は齒科專門醫につきて除去るべし

（三）食後は必ず微溫湯か又は重炭酸曹達少量ばかりを和したる微溫湯にて含嗽すべし

（四）齒磨粉又は發藭水の類は齒科專門醫に問合せて善良き物を擇び用ふべし

（五）一日の中少くも朝と晩とは軟き毛の齒刷を用ひて齒を磨くべし而して齒の外面は横に內側は縱に磨くを良とす

（六）齒が丈夫なりとてほこりがほに硬き核などを嚙むべからずされ

どど軟き物のみ食するより固形食物を適度に嚼むは反って齒牙と骨質とを堅固に發育せしむる効あり

（七）粗惡き砂糖にて製りたる菓子又は甘味酸味の多き物は飲食ひすべからず

（八）あつきに過ぎ又はつめたきに過ぐるものは飲食ひすべからず

## ▲衛生顧問▼

**母斑に就いて**（問）私の目の下に二錢銅貨程の赤母斑がありますので、夫の對しても何程氣兼するかも知れませぬ、何卒之を除く方法はありますまいか、若し敎へ玉はりて、これが奇麗に取れたらば千金の賜物よりも嬉しく思ひまする。（何の因果か女）

（答）次の（問）を見られよ。

（問）私のためには姉妹とも師匠とも何とも形容のし難い親しい〳〵友垣がありまして、名をばいく子となん申し侍る、いく子（假の名）生來怜悧なる質にて、しかも素直に優しく、恰かも春風のそよ吹く如き有樣なるより、如何に心惡しき友もいく子に逢へば心地自らすが〳〵しうなりゆくなり、然るに天は何故かゝる人の運を弄び玉ふか、いく子の顏は半面薄墨を捺れるが如き母斑あり、これが爲め、その他何の缺點も無い美しい方なれど、何不足無き家に生れながら、二十有八年の間いとしやいく子それ自身は或は飽の片思とやともありしならんが、誰とていく子のためにお媒妁いたしませうなどいふものすら無し、それゆゑいく子は唯はした無き妾をこよ無き慰籍として、否妾こそいく子を無上の慰籍として日を送りしが、或る日徒然なるまゝに女學世界をそこはかと無く繙けば、忽ち見ゆる母斑の療法、やあ母斑の療法これ御座んなれと、驀直にいく子の家、いく子も亦固より飛立つ姿、早速懇意なる醫師の許に馳せて何うぞ2%の昇汞水一瓶讓り玉はりたしと乞へば、最初は毒藥ゆゑと斷られしも事情を打明けたれば、然らば一ポンド差上ん云々、嬉しなどゝは斯ることをやいふなるべし、直ちに布片をその中に浸し、明朝夜の明るを遲しと、その片を顏にあて、油紙と綿とをのせ、堅く繃帶を施したり、それより一時間二時間三時間、最後四時間目になると、恰も火を付けたるが如くピリ〳〵と痛み且つ引張るが如き感覺を起し、さすがのいく子も、泣かんばかりにこれは定めし破裂するにやあらんとのこと、勸めたる我は氣の毒にもあり恐ろしくもあれば、直に繃帶を取り眺むるに、赤く腫れて火傷と少しも異ならず、この儘にてあらば以前よりも却つて醜し、如何せんなど取つ置いつ案じ煩ひしが兎に角又醫師の許に至り、その容態を話せば醫師はこれは火傷の藥亞鉛華軟膏なり、之を塗り試みよ、即ちその命令に從ひ又布片にその膏藥を附け、之を腫れたる上にあて、又以前の如く繃帶をなし、さあこれにて如何成行んも致し方なし、雨降らば降れ風吹かば吹け、斯くて毎日取換へ一週間目になりたれば嗚呼天の助か否先生の御蔭、赤き腫の癒えたるのみならず、薄墨色も何時の間に

か消えて、他の平面と異ならず、いく子さんさあ鏡と妾は泣きぬ。然るにこれより十日程經て又もや表はれ出でたり薄鼠色、さても懸つくさこの色め、汝の失せざる間は我亦泣まじと、今度は經驗あれば更に驚かず、斯くて三たび戰ひしが敵途に降り、これより大凡二月になりぬれど更に表はれず(中略)之といふも全く女學世界の賜物に候へば、先生何卒斯き全文を御掲げ下されて世の同不幸者を御救ひ被下度御願ひ申上候旁御禮申候あなかしこ。(紀州の野菊子)

(答)貴孃の友情篤きには感服致し候、いく子は善き友を得たるものかなと羨ましく思ひます。

**毛髮に就いて**

(問)私事病氣にて長く打臥居り候ところ全快後毛髮非常に脱け落ち大いに心配いたし候ひしに、不圖女學世界を讀み、

レゾルチン(五、〇)ヒマシ油(三、〇)ベルガモット油(二、〇)芫菁丁幾(一〇、〇)アルコール(二〇〇、〇)の五品

をよく混せて塗布すれば、發毛藥となるやうに有之候もの故、早速藥劑師に賴み、調合致させ毎日筆にてザブ／＼塗け候へば、二ヶ月程にして大いに功を奏し候へども、如何にも短かくして相延申さず、誠に「拔けば貧はれよう」といふやうな我儘に候が、何卒今少し長くなる御藥有之候はゞ御高教の程御懇願申上候。(能登の女學世界愛讀者)

(答)氣長にお續けあれば必ず一定の長さになりませう。(長崎櫻代君も、、、、、、、、、、、右の點をつけなさい。)

(問)「カスメチツク」を髮に塗抹すれば如何なる效能のあるものに候哉、又衛生上害無く候や、併せて御示教の程御願申上候(博文館の近藤なる男の愛讀者)

(答)艶を善くし且つ柔らかにする效能あるさうですが、元來これは西洋人の用ゐるもので、其の成分中に沒食子酸といふ毛を茶色に染むる藥を含んでゐますから、日本人の目的には適ひますまい、又衛生上には何の害もありませぬ。

(問)私の友達にて、二十七歳になる人が、或る事情のために、髮を男子の如くに、睡眠中斷ち切られ、甚だ困つてゐますが、幾月程にて髷を結はるゝやうになりませうか、又之を早く延す藥液の無いものでありませうか、何分詳しく御示しを乞ふ。(氣の毒に思ふ女)

(答)文章は少し宛違ふけれど、何れもこれと同意味の手紙がこれと合せて六通で、その郵便局の消印を見るに同じい某所である。察するに同じ人が、早く返答を書かせん手段ではあるまいか、それは兎もあれ余の邪推かも知れぬけれど、「或る事情」は善事で無いに相違無い、のみならず此の問は更に衛生の分子を含んでならぬ、されば斷然答へませぬ序でに一般の讀者方に申上ておきますが、衛生上に關せぬことや、少しでも不正がましき事は繰返し々々幾百通の手紙が來ても悉く反古に致します、されば癖毛縮毛また赤毛などの療法質問、山の如く

あれと同じく衛生上に服せぬことゝ皆做します。

「一 藥に就いて」鞣酸と硼酸とを水分に混ぜて、腋臭に塗ければ善いとの事で試みましたが、直に落ちて了ひます。之を落さぬ工夫ありますまいか又腋臭には如何なる作用あるか、且つ果して腋臭に功ありや否や恐れながら御教授を乞ふ。(佐渡の不幸女)

(答)單軟膏といふ膏藥にまぜて塗擦すれば、落ちませぬ。そこで鞣酸は汗を止る作用あるし、硼酸は防腐の功ありますから、腋臭に用ゐれば長い月日の中、必ず効ありませう。

(問)炭酸グアヤコールの効能及び用法用量を御示教に預り度候(田舍藥店の主人)

(答)食欲消化を宜くし、咳嗽や痰を減し、熱や盗汗を退かす作用あれば、肺病者に用ゐて多少の効能あります、そこで肺病の初めは毎日(〇、二)乃至(〇、五)を與へ、漸時增量して一日(一、〇)乃至(四、〇)までにしても可い。

(問)ダキーンを服用致しましたところ、腹痛を催しますが、これは私の身體に適せぬのでありませうか、それとも腹痛を起す性質の御藥で御座いますか御教へ受度候。(美濃の血の道女)

(答)何人が服用しても多少の腹痛を起します。

(問)タカヂアスターゼの功能を問ふ。(伊賀のBH女)

(答)食物中の澱粉を消化せしむる目的の藥である。

(問)次亞燐酸鹽舎利別を常に服んで居れば、強壯になると聞きましたがさうでせうか、私は別に病氣はありませぬけれど、比較的薄弱でありますから、何か強壯藥を用ゐたいのであります、で右藥が功少きものならば、他藥を御教授下されたく御願申上ます。(下野の好強女)

(答)強壯劑であります、尙その外にも強壯劑は數へきれぬ程澤山あります、けれども病氣で無い人が何藥に限らず服む必要はありませぬ、然るに世人は之を誤解して、無病者でも少し薄弱であれば直に藥に依頼する者が多い、例へば胃病でも無いのに健胃劑を用ゐたり、眼病でも無いのに點眼藥を附るやうなものである、斯ゝる習慣を附ると、或は藥の中毒に罹り、或は藥無くては健康を維持出來ぬやうになる、されば病氣ならぬ薄弱な人は、適當な運動、適當な飲食物、適當な睡眠等に依つて其の薄弱を補ふ方法を講するが宜い。

「雜問一束」

(問)夏向飯を腐くせぬ方法ありますまいか、即ち朝たいた飯が明日の朝乃至午まで保てば宜いのであります、斯樣な質問は衞生顧問の主意に背くかも知れませぬが、何卒七月の誌上に御示教を乞ふ。(神田の主人寡家)

(答)飯は我國の主要食物、これに就いての質問、これこそ顧問欄中第一等の價値あるものと謂はねばならぬ、何卒この種の問を續々發せられたいのである。偖物を腐敗させぬやうに防ぐには、乾燥と冷却とを缺かぬが肝要である、されば飯もこの法則に從ひ、布を敷け

る蔭に移し、薬壺をなし、之を風通の善き北窓の下に吊しおけば大抵大丈夫であります、尚氣遣ふならば酢を少し打つておけば、明午までは、保險附であります。

（問）衛生顧問欄には男子の質問を御許し下さりますまいか。（北海の鯨大）

（答）元來女學世界は女子のみの讀物と限りませぬから、一向に差支ありませぬ、されど生殖器に關するもの丈は拔に致しませう。

（問）赤飯小豆は果して脚氣に効能有之候や。（麻布の金太郎）

（答）然り、然れどもこれのみを食して他の滋養物を食はぬ的の漢法療法は甚だ宜しからず候。

（問）食後直ちに運動すれば何故に宜しからず候や。及び何時間を經て運動に取懸るべきか。（出雲の海宿禰）

（答）血液はその働く場所に赴くものであるから、食物を取れば、胃に分布せる血管は血液充血し、從つて胃液分泌し、以て消化するのである、然るに運動すれば血液は運動する場所に行き、胃に充血せぬため食物の不消化を招くのである、されば食後三十分乃至一時間は休息せればならぬ。

（問）近眼は治りませぬものでせうか（近眼小娘）

（答）まあ治らぬものと諦めればなりませぬ、兎に角、度に合つた眼鏡をかけて、度の進まぬやう注意肝要なり。

（問）私は朝寢の習慣が就きまして、それがため午前二時頃まで眠られませぬ、即ち午前二時に眠り、同く九時に起るといふ次第であります、身體は極めて健全、十歳より今に至る二十五年間何等の病に侵されたことはありませぬ、何卒この惡習を御矯正下され度御願申上まする。（駿河のお富士）

（答）午後九時頃に入浴し、二三十分間を經てから、又三十分間程の運動をなし、直に就寢して御覧なさい、それでも功無くば、抱水コロラル（一、〇）か或はスルフオナール（〇、七）か、或は臭剝（一、〇）かをのみ、十分間程經て寢床に入るが可い、されど此の服藥療法は可成行はぬやうにせればならぬ。今一つの方法は野蠻的なれど、一夜徹夜し明日如何に睡くとも晝寢をせずに仕事をなし、日が暮るゝと同時に就寢するのである、この法を二三回實行すれば朝寢の習慣治るとのことである、併しこれは醫者の口から言ふべき方法では無い。

（妾）妾の夫は非常な大酒家で、飲めば殆んど別人の如くに慾得も放れて亂行に及びますが、實に前途夫の健康上及び一家の盛衰など心配で堪りませぬ、何とか酒嫌になる藥ありますまいか、ありますならば何卒御教授の程合掌して御懇願申します、これにて三たび伺ひますのでありますから恐れながら七月の誌上にどうぞ〳〵（信州諏訪平の心配妻）

（答）この外にもこの間は澤山あるけれど、別にこれと申すべき藥液を知らぬから答へなかつたのである、或人の說に曰く、大酒家の家人は其人の朋友知己親戚等と私かに氣脈を通じ、我家は勿論、すべて

其の人の行く家では何れも酒の中へ吐剤或は少し悪臭のある物を入れて飲ましむれば、遂に厭ふ心を起す云々。されど余は思ふに善良な方法では無い、縦し其の吐剤なり悪臭物が健康を害せぬにしても、其の秘密一たび本人の耳に入れば、却つて反動を起し尚悪を助くるやうなものである。故に赤心籠めて、徐ろに諫むるより外に上策はありますまい。

(問)私は旅順攻圍に加はり、一足切斷、除隊の不幸に相成り、今や歸郷書見をこれ事とし、運動不足の爲にて消化不良にて困り入り候。何卒その治療法御高示被下度御願申上候再拜。

君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな

とは、今我身の事を歎へるものかと被思候。(西海の大熊)

(答)本月の誌上に胃病と題し、滔々數千言を費して、己が知れる限りを述べましたから、それを御覽下され度候。

(答者の希望)北は千島の果より、南は澎湖島の隅に至るまでどころか、支那朝鮮乃至は布哇に亙っての、我が女學世界愛讀者より、郵券封入の質問書が、日に三四十通、月に千幾百、而して顧問欄目的の端書はこれに數倍。嗚呼我の如き者に斯くまでと思へば、實にこよ無き名譽とし、飽まで答へたくは候へども、如何せん唯讀むだけにても一日の仕事は十分有之候。左候へば當分の中郵券封入の御手紙は御見合下されて、「衞生顧問」は我儘ながら左の箇條書に從ひ被下度候

一、必ず「はがき」に限ること。

一、一人一問たるべきこと。

一、異樣な名を書かれたきこと、何となれば(愛讀女)或は(心配女)などでは數多くしき紛れ易いからである。

一、國名年齡月日は必ず書かれたきこと、何となれば國名は其地の氣候風土等と示し年齡は病氣に大關係あるし、月日は可成早きより答ふるからである。

一、藥品の周旋は必ず致さゞること、若し購求不便なる方は(東京市本郷區森川町一番地)順天堂藥舗へ直接に申込まれたきこと。

一、質問書は博文館で無く、必ず(東京市本郷區森川町一番地表北裏八十一號)糸左近方へ宛てられたき事。

一、面白半分の問合は答へざること。

一、楷書にて書かれたき事。

一、衞生に關せざるものは一切答へざる事。

或人が某家を尋ね玄關に上がる時、出迎へた麁服の婦人を見て「オイ君、靴を犬に食られぬ樣に賴むぜ」と云ひつゝ一室に通ると、一婦人が茶を持て出た、すると主人が「是れは私の妻ですお見知り置きを願ふ」と云ふ其妻君の顏を見ると、豈計らんや先きに玄關で下女と思ふた婦人で有た。

史談

# 歴史上の日本婦人

井上秋劍

## 狹穗姫皇后と弟橘媛

軍隊的婦人とて必らずしも馬上擐甲の紅粧をのみ指すにあらず、たとへ其一代の小歴史に馬上擐甲の事實無くとも、萬一の場合に當りては、其落々たる雄心、昂々たる氣宇、優に三軍を叱咤するの概ある者、是れ亦た一個の軍隊的婦人なり、垂仁、景行の二朝に渉りて、吾人は其太なる二個の婦人を見る、一は垂仁天皇の皇后狹穗姫にして、一は日本武尊の妃弟橘媛なり、自ら信じて行ふに當つては、水火と雖も恐るゝこと無く、鼎鑊と雖も怯づること無く、愛情にも動かされず、君命をも動かざることあり、而かも其自ら信じて行ふの動機は、彼後世に於ける鎌倉の尼將軍の如く、大阪の淀君の如く、偏に自家の利害より打算し、所謂女性のヒガミ根性より發生したる者にあらずして、婦人に於ける最も貴ぶ可き特性たる高尚優美なる博愛心、身を殺して仁を成すの本能を滿足せしめんが爲に發生せし者なり、一時の感情より發生せし者にあらずして、義務に殉ずるの理性より發生せし者なり、美の美なる者なり、善の善なる者なり、釋迦の慈、孔子の仁、基督の愛と雖も此外に出づる事無し、而かも學んで得たる者にあらざるなり、讀者暫らく吾人がこゝに斯二篇の詩歌的美譚を談るを許せ。垂仁天皇は明天子におはせり、日本書紀は天皇を頌へまつりて、生れて岐嶷の姿あり、壯なるに及んで倜儻大度、性率眞に任せて矯飾する所無しと云へり、豈君主として殆んど其善を極むる者にあらずや、而して狹穗姫后皇は正史別に說く所なしと雖、亦た才色兩全の佳人にして、愛情に厚く、理義に明かに、しかも毅然奪ふ可からざるの決心と、凜乎犯す可からざるの氣節と在はせしこと前後の事實に推して明かなり、是れ亦た后妃として殆んど其美を

極むる者たり、斯最善の君王と、斯最美の后妃と、時を同うして生れ、夫たり婦たり、眞個月中に蟾を飛ばし錦上に花を添ふるが如し、何ぞ料らん蕙蘭香からんとすれば秋風吹いて先づ破る、儘にならぬが浮世にて、エデンの園の樂を破るサタンは顯はれたり、皇后の母兄狭穂彦王、亦た是れ一箇の人物なり、身外戚の尊貴に居り、朝野の望の加はるに乘じ、竊に非望を覬覦す、一日皇后に語りて曰ふ、卿は兄と夫と孰れが愛しと思ひ玉ふぞと、皇后は兄の所問の意趣を知り玉ふべくもあらず、たゞ戯言なりと思せしかば、自づからなる婦人の情、流石に夫可愛しとも云ひ兼ねて、兄上こそ可愛しきにと答へ玉ふ、狭穂彦したり顔に更に語るらく、色を以て人に事ふる者は色衰へなば寵弛みなん、今天下には佳人多し、爭うて君王の寵を求む、卿の幸福を保はんとする者少なかるまじ、余若し南面して天子とならば、卿と與に四海に君臨し、枕を高うして百年を經ん、豈大なる幸福ならずや、こゝに此匕首を卿に授く、これを裀の中に佩び、天皇の寢ますを覘ひ、頸を刺して弑しまつれ、と始めて明かす兄王の非望、皇后驚き玉ふこと大方ならず、一たびは諫めんとし玉ひしも、兄王の反心牢乎として拔くべからず、諫めて止まるべくも見えざれば、また時を得て諫めんと匕首と共に胸に藏め、其場は兄王と別れ玉ふ、秋去冬來夢の間に早も一年の星霜を經ぬ、兄王は皇后の決行を促すこといよ〳〵急なり、天皇の五年冬十月、來目に行幸ましまして、皇后と共に樂み玉ひ、終に皇后の膝を枕とし、前後も知らず熟睡し玉ふ、此ありさまに皇后は圖らずも兄に謂はれしことを思ひ起したまひ、實にも兄の反心を和らげんと、それとなく日を延ばしてすでに一年を經たりけり、妾に若し不忠不貞の心あらむか、かゝる場合こそ玉體は危かるべく、妾亦た大逆無道の人とならん、いと恐ろしとも恐ろしき、さるにてもこの事天聽に達せんか、妾身は兎に角危きは兄の身なり、言ふも憂し言はぬもつらし亂れ髮、亂るゝ思とゞめあえず、胸の思のもやくやに、覺えず下る涕涙漣如、龍顏にはら〳〵と降りかゝりたる雨やさめ、覺めて不思議

の夢物語、錦鱗の小蛇首を纏ひ、大雨狹穗より來りしと、神の如き天皇の御言葉空怖しく、今は是までなり、兄の身の上なるべけれど、社稷の爲には代へ難しと明白に白させたまふ、天皇怒りたまふ氣色もおはさず、狹穗彦の罪憎む可し、卿の罪にはあらざるなりと宣らし、さて一方には直に上野八綱田を將とし軍卒夥多從へさせ、狹穗彦王を打取らせ玉ふ、されど王もさる者なり、苟も大事を企つる程の者、其成功の準備を爲すと同時に、失敗に處する道をも講せであるべき、稻城を築いて官軍を防ぎ月を踰えて降らざるなり、皇后獨りおぼしめすらく、吾皇后の位に在て國母と仰がるゝとも、兄王を亡ひ何の面目有て天下に莅まん、社稷の爲とは云ひながら、吾が兄を賣りたる故を以て、兄は今や殺されんとす、いかで見殺しにせらるべき、臣としての道は盡したり妻としての道も盡したり、最早此身は此身の物なり、吾生命を賭けて兄の生命を助けんこと爲し得難き事にもあるまじと、則ち生む所の皇子譽津別命を抱き、兄王の籠れる稻城に入り玉ふ、されど官軍の攻擊は之が爲めに衰ふることなかりき、天皇は勅を城中に下し、宣はく、罪は狹穗彦一人のみ、狹穗姬、譽津別の知る事ならず、速に二人を城外に出す可しと、大將八綱田また天意の在る所を傳へ、皇后を促し奉れども、皇后竟に諾ひ玉はず、兄の生命の助からば妾亦た城を出でゝ免れん、否らずば天意に順ひ難しと、天皇八綱田に宣はく、皇后と皇子を殺すに忍びず、いかゞしても助けたし、然れども狹穗彦は亂臣なり、何人の命請ありとも彼ばかりは助命し難し、速に城を攻落す可しと、八綱田仰せ承り、遂に最後の一策に訴へ、狹穗の稻城へ火を放けたり、こゝに於て皇后も亦た竟に兄王の助命成り難きを知り玉ひぬ則ち當初の覺悟をばどこまでも貫徹せんと決心したまふ、たゞ譽津別皇子は吾出なりといへども天胤なり、之を殺すは母として酷これより甚しきはなく、臣としては不忠の罪免かれ難しと、城の上より城外の官軍を麾き、皇子を手渡し玉ひぬ、さて其者に令せて宣はく、吾の當初此城に入りしは一に兄王の罪を免されん

が爲なり、しかも竟に聽かれず、吾の罪有るを知ぬ、今は是迄なり玉石共に焚かれんのみ、唯吾こゝに焚かるゝと雖、こゝに四年の春又秋、天皇の恩寵深かりしは忘れんとして忘れ難し、願くはこゝに萬分一を報せんが爲め、天皇の爲に好逑を撰ばん、丹波道主の女五人あり、いづれも志貞潔にして國母の位を耻かしめじ、掖庭に納れ玉へと、天皇は使者の奏言を聞かせ玉ひ、さすがに腸萬斷の心地おはせり、されど私情の爲に公道を枉ぐ可からず、可憐の貞媛飽くまで憐れむ可く、可憎の亂臣飽まで憎む可し、しかも憎む可きは公の爲なり、憐れむ可きは私の爲なり、終に涙を揮つて皇后最期の願を悉く赦許する旨を言ひ遣らせ玉ふ、赦許の綸言皇后の耳に達すると同時に、烟焔天を焦がして城を崩し屋を焚く、皇后遂に兄王と共に焚かれ玉ふ、崑崙の劫灰一物を留めず、永く史家をして涙襟を沾ほさしむ。弟橘姫の事に至りては、人の普ねく知る所、こゝに縷々を費すを須ひず、日本武尊は絶大の偉丈夫なり、空前の好男子なり、高貴妙齢の御身を以て、東奔西走、或は山又山に迷ひ、或は道無き道を開き、棲鶻の危巣、蠻異の幽宮、一劍佩び來り、千里横行す、元兇首を授け、群賊頭を俛す、戰へば勝ち、攻むれば取る、景行の朝、東西の亂を戡定せしは一に尊の力也、弟橘姫も亦た絶世の佳人也、其穗積氏忍山宿禰の女にして、日本武尊の妃となり軍旅に隨ひし人といふの外、史傳これが爲めに多くを語らずと雖、其心根の雄々しかりし事は、深く不毛に入りて瘴癘を犯す千里の遠征に從ひ、曾て倦怠の色無く、内助を尊に捧げしにも知る可く、相模より上總に航するにあたり、海若怒り天吳荒れ、御座舟あはや覆らんとするや、是必らず、海神の心なり、願くは妾の身を以て王の命を贖はんと、尊の扯きとめ玉ふ袂を振り放ち、跳つて波濤に投じたるにも證す可し、あはれ親ら矛を執り馬を驅るにも遙かに優りし勇猛無双、凜然たる風采今より之を想望して、轉た景慕の念に堪へず、あたら千金の身、尊の左右に侍して内助の責任ある貴重の命を、一種の迷信的習慣の犧牲に供したるの非を論ずるは、今日よ

り見ての事なり、當時に在ては賢不肖何人の差別なく堅く信じて疑はざりし一種の信仰の前に、最も貴とき美しき行動を取りたる者なり、一身を捨つるの苦痛は何人と雖忍びざる所、況んや相愛の情禁せざる愛人と生別して身先づ魚腹に葬られんとす、婦人の情として殊に斷腸に堪へざる所、而かも其忍びざる禁せざる斷腸に堪へざる所を敢てして、以て愛人の前に犧牲とせし一事に至りては、鬼神壯烈に泣き、天地爲めに感動す、日本婦人の特長を遺憾なく發揮せし者と謂ふ可き也、宜なる哉鬼神をも挫ぐ可き日本武尊をして、碓氷峠の巓に吾嬬者耶の歎聲を發せしむ、『あづま』の三字は東國の總稱として、長く英雄美人の紀念と爲れり、狹穗姫皇后は國母なり、弟橘媛は王妃なり、後世より之を見んか、いづれも深閨繡帳の裡に在り、隙間の風にも當りたまはぬ御身なり、而かも非常の事に會するや、千軍重圍の孤城に入り、萬里遠征の羈旅に從ひ、火に入りて自ら焚かれ、水に入つて自ら溺る、かつて悔ゆる所あらざるなり、日本婦人を以て高尚なる理性に乏しと爲し、自尊の氣象無しと云ふ者は、單に彼輕佻にして柔弱、病的にして怯懦なる一部の日本婦人を見、外柔にして內剛、優美にして壯烈なる眞の日本婦人を見ざるの誤解なり、歷史上の日本婦人を見ざるの誤解なり。

## 三女神

鬼耳生

西洋の文物が輸入せられて、日本の文化に一大變化を來したは、希臘の神話も與つて力あるもの〻一であらう。西洋の文學は總て此影響を蒙つて居る。否、文學ばかりでない、天文學醫學等にも、其神話中の神祇の名が屢用ゐられて居る位である。其數ある神々の內で、ミネルヴ(Minerva)ダイヤナ(Diana)ヴーナス(Venus)の三女神は、詩歌等に引用される事が多く、且又三神各女性の三方面をよく表して居るので、今茲に其神話の概畧を綴る事は、强ち無益でも無い。

宇宙開闢の其始に、天地の間に胚胎して生まれ出た神々の内で、末の男神の「時の神」サターン(Saturn)が希臘神話の抑の發端である。サターンが其妹のレヤ(Rhea)を娶つて生むだヂュピター(Jupiter)は彼の「神戰」の後サターンに代つて天を支配し、オリンプス(Olympus)の高嶺に神座を設け、後世まで神祇人類の祖先として、希臘人から尊崇せられた事は誰でも知る所で、茲では委しくは述べぬ。ヂュピターがサターンの兄の「海神」オセヤナス(Oceanus)の女のメチス(Metis)を娶つた時に、男神を生むと云ふ豫言があつた。そして自分の頭から生むだのが即ち

▲女神ミネルヴ

である。又の名をパラス・アゼーン(Pallas Athene)と云つて、其甲冑に身を固めたまゝヂュピターの頭から飛び出した時は、オリンプス動き海陸震ひ、流石の「日の神」ヘリオス(Helios)も、劍を執つて身構へたと云ふ事である。固より母の懐に居つたのでないので、其心は甚だ冷淡に、温和の感情などは殆んどない。「軍神」マルス(Mars)の様に戰亂を好んだが、同時に又平和をも愛した。彼女は軍神であつたと共に、才智の神であつた。文學技藝農業を奬勵して、人に初めて機織の術を敎へたのも、橄欖樹を植えて油を搾る法を授けたのも、皆此女神である。彼の有名なアッチカの首府雅典も、實に此女神の名を取つて附けたのである。それで又此首府の守護神として永く敬はれて居るのである。



MINERVA

トロイの戰の時、多くの神々も敵味方となつて戰つた其内で、ミネルヴは希臘方に、「軍神」マルスはトロ

イ方に與して互に雌雄を爭つたが、女神はマルスが突きくる槍先を輕く楯に受け止めて一歩退き、磐石拾つて敵手の眉間に投付けたので、流石の軍神も堪らず大地に倒れたと傳へられる。又同じトロイの戰にアチルスと呼ぶ勇士がアガメムノンを斬らんとした一刹那、其眼前に現はれて、怒れる眼差恐ろしく、髮を握つて引据えたので、アチルスも已を得ず劍を鞘に收めたと云ふ。トロイの戰の後テレマックスと云ふ美少年が父を尋ねて諸國を經歷つた間、マントールと云ふ翁となつて絕えず保護注意を怠らなかつた。或る夜テレマックスが夢にキューピットの矢に射られやうとしたとき、楯で之を拒いだと云ふ事がある（佛人フェ子ロン著テレマックス冒險談）。此事は勿論著者の作つた話であるが、ミ子ルヷの情を排し理性を貴ぶ性質が明かに示されてある。此通り此女神は殺伐のみを好んだ譯でない。否其雄々しい性質は女性の爲に中和されて、美しい調和した性格を表して居る。或る時清らかな泉の邊に、自分の工夫した笛を弄して居つた時、不圖眼に映じたのは自分の姿、笛を吹く頰の膨れて醜いのに心付いて、遂に之を棄てゝ仕舞つた。實に美しい逸話ではないか。又ヴーナスが美の褒美にパリスの手から黄金の林檎を貰た事に恨を抱いた事も確かに女性の一面である。此女神は一生獨身であつた。

其像は圖に示す通り甲冑をつけ、右手に槍左手に楯を持つて居る、足元にあるものは凡て其智識を示して居る。胸間を飾るのは恐怖の印とも云ふべき女神メヅザの胸像で、其頭上に飛翔するのは物凄い梟である。

### ▲女神ヴーナス

ヂュピターが女神ヂオン(Dione)と契つて出來たのがである。一說には清らかな大洋の泡から生れ出たとも云ふ、御承知の通り愛と美との女神であるが、アフロヂート(Aphrodite)と云ふては、知る人は少なからう其容姿の艷麗であつた事は次の逸話で知れる。

反間の女神エリスがテッサリー王ペレウスと女神セチスとの婚禮の晩に、神人の集合の所へ黄金の林檎を持つて來て、其內の最も美しい者に與えやうと申出た。

數ある女神の內でチュノン(Junon チュピターの妹で妻の)とミチルヴとヴィーナスの三女神の何れかゞ得べきものとは誰の眼にも解つたが、何れ劣らぬ花あやめで、夫れと定める事が出來なかつた。そこで其當時トロイを治めて居たプリアムスの子のパリスが之を撰ぶことゝなつた。女神等は各々竊に權力とか智識とかを申出して、自分を撰んで呉れる樣パリスに賴んだが、終にヴィーナスには勝てなかつた。ヴィーナスは絶世の美人を與へる事を約束したのである。其の時分第一の美人として知られたのは希臘の大名メチラウスの妻のヘレナ(Helena)であつたが、ヴィーナスは終に不法にもパリスをして此美人を盗ましめたのである。トロイの戰は實に茲に始まつたのだ。其戰にメチラウスがパリスを殺さんとした時、女神はパリスを暗黒に包んで其厄を免れしめた。ヴィーナスがミチルヴの理性を兼備へて居たらば、此樣な不義な所行は無かつたであらう。要するに女神は、愛が人生の幸福と共に、亦其悲劇の原因たる事をも示して居るのだ。トロイの戰で、ヂオメデスの爲に手に疵つけられた時、女神は母のヂオンに人間の不埓を訴へた。之を聞いてミチルヴは、「ヴィーナスは美しき希臘の婦人に己れの好めるトロイ方に心を傾くる樣計り、夫を撫で愛しむ折、黄金の扣金に軟かき手を傷けたるなり。」と冷笑すれば、父のチュピターは宥め賺して、「軍の事は汝が役にあらず。婚禮の樂みを計る事こそ、優しき汝が務なれ。荒き軍の事はマルスとミチルヴとに任せ置きねかし。」と。



VENUS

女神が火神ブルカナス(Vulcanus)に嫁して生んだの

が愛の神キュピド(Cupido)又エロス(Eros)だ。其父の作つた鐵の矢で人間の心を射ると射られた者は一生傷が治らないと云ふ事は夙に御承知の事であらう。

其像は裸體で、弓矢を持つたキュピドを連れて、乘つて居る黄金の車は鳩に曳かれて居る。際に燈火と蝶(人間の精神だと古は考へられた)とを添へる事がある。何處までも優しい穏やかな像。

同じくヂュピターが女神ラトナを娶つて生まれたのが有名な詩神アポロ(Apollo)と

▲女神ダイヤナ

である。狩の女神で、多くの女神に侍かれて小暗い森を跋渉し、黄金の弓矢に野獸を狩獵した。又アポロが日の神ヘリオスとして世界を照した通り、女神はルナ或はセレン(Luna or Selene)と云ふ名で、夜を照した。即ち月の神でもある。其性質は月の様に冷たく清よく、一生獨身であつた。然し此冷たく清よい心は女神に殘酷な性質を與へて、不德な都市に疫病の毒矢を送つて之れを罰した事は未だしも、或時アクテオンと云ふ青年が己れの湯上り姿を見たと云ふので、其體を鹿に變へて己れの獵犬に噛殺させた。又己れの社の尼が情人の訪問を受けたので其市に疫病を流行らせ、人々が已を得ず兩人を犧牲に供した事もある。凡て女神に仕へて居る處女に不都合があつた時、女神の怒は其血を見なければ解けぬ即ちヴィーナスとダイヤナとは女性の兩極端を示して居る。然しダイヤナとても女神である。愛の羈絆を脱し得なかつたのである。ラトムスと云ふ山に住む青年、一日狩獵に疲れて月光を浴びて草の上に睡むだ時、端なく其美しい寢顔を見たダイヤナは、馬を停めて下界に下り、ソと其額に接吻して情火を醫したと云ふ其像は手に弓矢を持ち輕羅を纏ひ側に鹿を連れてをる事もある。



DIANA

# 郎君放語

鹽谷小波

## 一　夫婦の化學的說明

三人よつてさへ、巳に姦しいと云はれる女が、十何人とより合つて、勝手な熱を吹くのだもの、いや喧ましい事であつた。而も默つて聞いて居れば、好い氣に成つて夫の棚卸し、どうも怪しからん話ぢや無いか。此上は是非に及ばぬ、我々も一つ負けん氣に成つて、大いに彼等をこき卸さゞるを得ん。ナェ、諸君も賛成か。

それぢやア御免蒙つて、吾輩から始めるよ。

抑も夫婦と云ふものは、吾輩をして云はしめるなら二人で10の物だらうと思ふ。で、夫が5で婦も5ならば、即ち同權同位と云ふ事になるのだが、これは滅多に得られぬ現象で、多くは夫6婦4、乃至夫8、婦2が、まア東洋風と云ふのだらう。

所が、夫の8に對して、婦も8たらんとし、乃至夫の6に對して、婦が7までも伸びやうとすると、元と10であるべきものが、五割も超過して來るから、勢ひ沸騰せざるを得んぢやないか。

が、また世の中には、夫3婦7、夫2婦8、甚しきに至つては、婦の10に對して、夫たるもの殆んど0なる者がある、此等は牝鷄の朝すると稱して、東洋では大ひに卑んだものだが、近頃いやにハイカラがつた家庭では、隨分かう云ふのがあるから驚くよ。

尤も同じ不權衡でも、夫重婦輕の方ならば、まづ家内安全だが、夫弱婦强と成つて來ると、よし家内は安全でも、社交の上ではあまり感心しないからねエ。

さうかと云つて、あまり婦を輕んじて、遂に0にしてしまふのも、甚だ感服出來ん話だが、まア夫6婦4位の所が、丁度好い所ではあるまいか。

思ふに英雄豪傑など云ふ仲間は、昔から一人で10まで占めて居た樣だ。さう成ると婦を入れる餘地が無い樣だが、又かう云ふ人傑に成ると、將に多妻主義を實

行して居る。然しそれも不思議は無いのさ。元と婦人を0にして居るのだもの、0なら幾人でも置かれる譯さねエ。

さうかと思ふと、夫が4なのに、婦も亦4か3位なのがある。これぢやア10に充たんのだから、所詮圓滿な家庭とは云はれんのさ。

いや、何だか化學の講義の樣で、ちと解りにくいかも知れんが、然し動かぬ眞理だから仕方が無い。どうせ夫婦と云ふものも、所謂る男女の親和力に依て、息子が人の夫に化け、娘が人の妻に化けるのだもの、矢張り化學の一種だうらぢや無いか。アハヽヽ。

## 二　對妻政策

成る程化學的夫婦論も面白い。尤も、それ許りぢやアまだ君の細君が、果して何の位の程度だか解らんが少くとも君の方は、6以上の勢力を占めてる樣だな。

まアそれもいゝさ。が、僕に云はせると、この夫素と婦素——僕も化學的に云ふよ——即ち兩素の化合力が、時と場合で差を生ずる方が可いと思ふ。

で、他人は知らず、少くとも僕の家庭では、それを實地に行つて居るのだ。例へば外に對しては、即ち社交上の事は、僕が6で妻が4で行くが、内に在つては即ち家政上の事は、僕が讓つて4と成つて、妻に6の勢力を持たして置く。

かうしておくと、妻も決して不平を云はないし、僕もまた滿足なので、畢竟家内安全だが、この四分六の割合が、互ひに位置を交換し合つて行くので、丁度五分五分の割合に成るのだ。

君は夫5婦5の同權なのは、滅多に見られんと云つた樣だがかう云ふ風の五分々々なら、隨分他にもあらうと思ふが。そりや七分三分でも、八分二分でも構はない、機に臨み變に應じて、その割合の地位を交換すりやア、平均してしまふのさ。

かう云ふと、又鼻の下を測量されるかも知れんが、妻だつて人間だもの、さう頭から押へ付けて許りも居られんから、時には此方から讓る樣にして、その顏も

立てやらんぢや可哀さうだ。

で、威張る時に威張らせておけば、また此方の威張る時にも、彼をして服從させる事が出來るのだ。

どうだい、僕の對妻政策なるものも、大いに參考に價するだらう。

## 三　馭妻術

ヘッ、對妻政策？　馬鹿な！　妻に對つて政策も何も入るもんか。妻は畢竟牛馬の如きものだから、只之を馭しさへすりやアよいのだ。乃公の馭妻術をまア聞けイ！

で、

一體妻なんて云ふものは、ありやア給金の入らん高等下女で非常な不都合の無い限りは、體よく飼殺しにしてやりやよいもんぢや。イヤ、事によると自分の方がお先へ御免蒙るか知れんが、其時やアまた何所か奉公口を探すがよいぢや無いか。

由來女子と小人とは養ひ難しと、古來から相場の極まつとるから、なまじこれに政策なんぞ用ひて、時に歩を讓る樣な事をして見ろ、直ぐ付け上り腐つて、遂には仕末に負へん樣に成るぢや。

盲從！　盲從！　妻は夫に盲從さへしとりやア、それで家内は安全なものぢや。イヤ、現に乃公の妻などは。もうその盲從に馴れて、今では頗る滿足の樣子ぢや。

親戚の者や昔の友人なぞが、五月蠅くいろ〳〵な事を勸めに來て、妻を社交に引張り出さうとするが、乃公が斷じて許さん。初めはちつとはフクレた樣ぢやつたが、此頃ぢやア諦めたと見えて、一向不平さうな顏もしとらん。

無論斯うは云ふても、既に妻たる以上は、乃公だつて決して憎うは無い。ぢやから時には不憫に思ふて、帶も買うてやる、芝居も見せてやる。

ぢやから妻も大滿足で、汲々として乃公の御機嫌を取つとる。イヤ實に忠婢と云ふべしぢや。

夫婦五分々々の權衡が取れんぢやア、家庭の圓滿が

得られんとは愚論ぢや。乃公なんぞは獨りで10を占めて、妻を0にして居るが、それでも決して波瀾は起らんぞ。

## 四　妻を遇するの法

これは驚いた。二十世紀のわが日本の社會に、君の樣な蠻的主義を執る者があると思ふと、吾輩は實に遺憾に堪へんな。

飜つて世界の大勢を見渡すのに、凡そ國の文野は、婦人の尊卑に依つて解るとは、曾て大隈伯の持論と聞いたが、全く歐米諸國の狀態を見るのに、文明の度の進んで居る國ほど、婦人の位置が進んで居る。是れ爭はれぬ事實だ。

然るに今日、苟も百年の苦樂を共にする妻を、高等下婢とは何事だらう。またその高等下婢を以て、而も甘んじて居る婦人があるとは、實に嘆かはしい事だと思ふね。

吾輩は全然反對する、さう云ふ馭妻術は全く採らん。それよりも、已に一家の妻たる以上は、また一家の女王である。内務大臣である。然らば女王たる威嚴を持たせ、大臣たるの權能を與へなけりやア成るまい。

で、よくその妻をして、十分に手腕を揮ひ、意見を通らせる樣にすれば、家政は着々として擧るのみならず、衍いて夫が社會上の生活にも、一種の光彩を添えて來る樣に成るのだ。

歐米の文明國では、妻の宜しからぬ爲めに、交際社會に出られんと云ふ、立派な制裁がある位だ。と云つて、妻たる者必しも交際家たるには及ばんが、少くとも夫の片腕と成つて或る時はこれを助け、又或る時はこれを慰めて、所謂偕老の友たる實力を有して居らんでは、甚だ賴もしく無いぢやないか。

其所へ行くと吾輩の妻などは、今日の教育を受けて居る丈に、よく其の間の消息を解して、夫に些も遺憾あらしめ無いよ。

否、吾輩は妻を妻としてよりは、寧ろ友人として敬意を拂つて居る。友人にもいろ〳〵あるが、妻の如き

は實に益友の方だ。時には吾輩の氣の付かん事まで、よく傍から忠告してくれる。此場合には寧ろ畏友の方だねエ。イヤ、又始まつたなどゝ云ひたまふな。……それや夫4妻6かも知れんさ。だが、苟も文明的家庭を形づくつて、文明的社會に立たうと云ふならば、妻を遇するの法亦斯く無かる可からず。諸君！　ちつと見習ひたまへ！。

## 五　自分勝手

イヤ感心！　妻が先生の熱心な文明論には、毎度ながら敬服の他は無いよ。

ナニ、妻が先生が解らんのかイ。知らざア云つて聞かせよう。抑も妻が先生とは、誰あらう君の事さ。君自身には氣がつくまいが、君は話の間に、必ず妻を引合に出す。で、二言目には妻が〳〵云ふから、其所で妻が先生サ。多情多恨の鷲見柳之丞に、異人館の門口でも覗かせたら、鷲見君の樣に成つたらうよ。

まア何でもいゝさ。凡そ日本廣しと雖も、君位細君を大切にして、大切にする許りか、崇拜して居る人はあるまいよ。

まアそれもいゝさ「女房に惚れて家内安全」——已に故人も云つて居る。君の家庭は羨ましいよ。定めし圓滿な文明式に出來上つてるんだらう。

此間も僕は實に感心したサ。君と電車で分れて、あれから三宅坂の方へ來ると、君の所の令夫人が、永田町の方からお出でなすつた。見りやア、ケンドンの透母衣に、車夫も定紋付の白法被。リウとした扮裝だつたが多分愛國婦人會か、それとも赤十字社へ御出ましだつたゞらう。——主人公は回數切符で電車に乘つて、細君は毎日お抱車——成る程文明の夫婦は違つたもんだと、當時已に感服して居つたんだ。

イヤ、實に君の細君は幸福だよ。だから僕も亦、少しは妻にもあやからせやうと思つて、此間から大分心がけて、交際社會にも出し、また音樂會や講演會にも勉めて出る樣にさせて居るが亦、夫の心妻知らずで、本人は却つて迷惑がつて亦、何の彼のと口實を設けて

成る丈出ない樣にするぢやア無いか。で、云ひ草が面白い。『あんな所へ出たつて、只氣が詰まつて、氣骨が折れる許りで、その割にあんまり智慧もつきませんワ。それよりやア、家に居て雜誌でも讀んで居る方が、衣服が入らない丈でも德です』とさ。あんまり料簡が因循だから、僕は時々小言を云ふんだが、さうするとまた『出ろなら出もしますが、それぢやア貴郎のお服が、何時出來上るか解りませんよ。それでもいゝんですか』なんて、示威口吻を用ひる。尤も何時だつけか、妻をある會へ出した所が、歸宅が晩く成つて、僕が腹を減らして歸つて來たのに、碌な菜が出來て居らなかつたから、大いに叱りつけた事もあるが、あゝ云ふ時にやア、矢張り家に居てくれた方がいゝよ。イヤ、矢張り男は自分勝手なものさ。

## 紹介

▲▲▲▲文章講話　著者五十嵐力氏は早稻田大學文章科の講師なり、本書は男女を問はず苟も文章を作る人の心得と爲るべき事柄を說きたるものにて初學の人には極めて有益なる書なり從來世間に有觸たる此の種の書物は大槪古人の言ひ古したる法則や、規範たるべしもの多くして日進の今日に適用して益多からず、然らざれば、乾燥無味なる文章論の類のみなり、然るに本書の著者は多年の蓄積と幾多の工風とを以て、文章學に一段の新意見を立てしものにて凡そ文を作るに就ての必要なるあらゆる心得を綿密周到に說きたり、表題は極めて平凡なれどもこの平凡なる題目の下に說かれし事柄は中々奇拔、斬新、痛快なる解說多く殊に此書の價値ある點は文章を一種の有機體として解剖し分析し、其細胞々々に就て一々詳しき說明を施し趣味ある意見を加へ例を引き證を擧げ縱横索引古人の名文を引例し參酌し其の缺點をあばき瑕疵を擧げ痒き處に手の屆く樣にあきあらはしたる處にあり、記者は嘗て志賀矧川氏の日本風景論を讀み深く地理學上に別種の妙趣味を感じたりしが、今五十嵐氏の文章講話を讀みて又同樣の面白味を喫したり、やもすれば無味乾燥に陷り易き文章論をして斯くまでに趣味ある解說を加へ、斯くまでに面白ろく讀ませし著者の勞や實に大なりといふべし、（五十嵐力氏著早稻田大學出版、定價一圓）

▲▲▲▲臺所調寶記　食道樂以來、二十世紀の新家庭に續々として便利重寶なる書籍を供給された弦齋居士、世間の奧樣や下女をして擧つて弦齋設の臺所の改良に隨喜渴仰せしめたる弦齋居士の工風と考案とは家庭記者たる我等の深く敬服する處ろである、臺所調寶記は其名の如く誠に臺所に從事するものゝ金科玉條として朝夕座右に缺くべからざるものなり。これは食道樂の小說體に說きたるものとは違ひ、廚庭內實地の經驗を一々問答體に記したるものにて米、砂糖、味噌、醬油、牛乳、肉類、野菜の品々より、洗濯、掃除、瀋物、ランプ、水、爐釜の使用法、保存法、貯藏法を一々問答體になし、文明流の臺所に不案內なる山出しの下女が不審を起して質問するを學理に詳しき實地の經驗ある奧樣が鄭寧親切に言ひ聞かす樣に記るされたり、其の噴飯するやうな下女の質問に對して一々明亮なる奧樣の答へ方は、何人にも面白く讀まれ何人にも面白く了解される、是れ弦齋居士ならでは出來ぬ藝にて餘人の企て及ばぬ處ろ、されば彼の百萬陀羅科學の原理を說いた書物よりも記者はこの一册の臺所重寶記こそ眞に家政の重寶なるべしと紹介の勞を執るものなり（村井弦齋居士著報知社出版部、定價八十錢）

# 風俗詩

井上剣花坊撰

題「暑い事」

## 天

暑い事軒の風鈴揺すつて見

甲斐國中巨摩郡百田村　志村八重乃

評云、何だか古句で見たやうなりと、いろ〳〵調べて見たれど見当らず、さては撰者の覚えちがひなりしよ。滑稽もこゝに至れば王公の前に説く可く、川柳もこゝに至れば古人に耻ぢず、暑熱蒸窒、金石融けんとす、清風を呼べども、終に来らず、不動の姿勢を以て釣り下りたる風鈴を揺り動かして、もしや風伯の落し見ても隠れて居ずやとの思入れ、或はせめて風有る姿を為し、気はこゝろの涼を納れんとす、其愚や及ぶ可からず、其稚や掬す可し、嗚呼面白い〳〵。

## 地

蚤火事を物見の役の暑い事

本郷区丸山福山町四　大[illegible]春江

評云、「暑い事」の冠著総用は、容易な風丈けに秀逸なり、者共も大概同じ處へ一致す、下手に詠むとたゞの俳諧になつて仕舞ふ、それをよみこなすはなか〳〵に難業なり、且ついづくも同じ今日此頃の九十度を上下する暑さでは思ふやうに詩想も浮ばぬかして、眼鼓程に當はざりしを覚ゆ、どこかに大事が有つたサア出て見ろと殿命聚り、ハツト御承して祇りつける眞最中な物干杯を上る居候的人物の小手打かざしキツト見得ば何處迄も川柳なり、「物見」の二字、慶用最も妙、これ等の可笑味は、彼徒らに駄洒落これ事とし、ダスグリこれ能とするやからの解する處にあらず。

## 人

遅参して上座に直る暑い事

越後三島郡日吉村　坪井わか

評云、何時より御光来と有つた案内の時刻を後れて來て見ると、客はいづれも揃うて座定まり配膳も済んで居る、主人は□々こそ御入来さア床柱に空席が御座る、あれへ御通りなされ、いや〳〵それは失禮このあたりでよろしう御座る、其處へ御座りなされては給事の者が困る、是非に〳〵と云へば、満座の客も口を揃へて辞誼も事に寄ります御通りなされと進められ、左様ござらば御免くだされと汗じと〳〵の他客の背を押分けて上座へ通れば、あまりの高上りと背から汗、それに端近とは違ひ床柱は風の通も悪しく、いやはや難有迷惑を感じる云々、長いごた〳〵の暑くろしきを十七字に縮めたところ此句の働きなり。

## 秀逸之部

風鈴を蜥蜴が鳴らす暑い事　能登　大森くめ

暑い事水を飲むではいけないの　佐賀　松島某

暑い事竿の襁褓に油蟬　本郷　徳力ふみ子

暑い事下手な茶室の呑み廻し　麹町　みわ子

暑い事蒸した豆腐のやうになり　越後　中村蔣美

乘替で満員になる暑い事
葬ひが道を塞げる暑い事
暑い事雨降りそこね〱
暑い事島田におしと母の命
踏切で待つ口々に暑い事
叱られてお乳を飲ます暑い事
繪で見ても砂漠の旅は暑い事
ワン〱が舌を出してる暑い事
暑い事お馬が笠を被つてる
暑い事隣のお酒がぬるんで來
暑い事夕立前の午後一時
夏芝居幕間で出る暑い事
暑い事海水浴へ行く道の
暑い事先づ脫いでから御挨拶
病院の室が二階で暑い事
天麩羅の油がはねる暑い事
かしこまり御小言を聞く暑い事
炊きたての飯蒸での汁で暑い事
草も木も萎縮して居る暑い事
瘦せる法は[illegible]知ら暑い事
蛙の智葉裏へ躍る暑い事

神田　小林ひさ子
仙臺　鮎川桃枝
麹町　井上梅子
深川　小宮よみ子
京都　井口なみ子
牛込　小島濱子
麹町　葛城京
牛込　小林冬女
埼玉　神保歌子
岩代　遠藤磨礎子
横濱　岡千代子
周防　貞弘やち子
伊勢　太田榮子
大阪　大宅勇子
越後　逢坂きそ
信州　若林むめ
京都　夕月女史
赤坂　服部光子
備中　岩田うめの
仙臺　荒つる子
長野　河原ふさ子

## 俳句之部

縮れ毛が汗でひッつく暑い事
遠火の烟動かぬ暑い事
風鈴がチリンとも鳴らず暑い事
湯あがりへ來客の有る暑い事
暑い〱と云つてる暑い事
暑い事背の子は泣く火は燃え
暑い事母さん九十八度だよ
一粒づゝ吹いてはたべる暑い事
暑い事一汐浴びて砂に寐る
暑い事夕日照り込む赤煉瓦
また覺えず云つたのよ暑い事
潮水を又浴びに出る暑い事
暑い事盲目も空を眺めてる
追從に小兒負つたが暑い事
暑い事明日は日曜ねえあなた
暑い事氷屋やたら目に留り
暑い事汗をふき〱草履脫ぐ
暑い事白粉顔に川が出來
先生に二度叱られる暑い事

大阪　服部なみ
同　西松秋子
能登　杉下こひ子
横濱　吉田うさ子
同　伊藤菜
京都　藤田節枝
能登　杉下文枝子
岐阜　翠紗子
讃岐　向井ちゑ子
千葉　田村たき子
廣島　谷木つる子
神奈川　服部寿子
岩代　足立きくの
麹町　杉生たつ子
越中　岡田さだ子
八王子　大野ふさ子
京都　渡邊ふさ
根津　姫海はま子
石狩　倉邊たか

暑い事ねまきと軍服ぬがして居　越後　鶴子
頬杖をつく〳〵夏の暑い事　横濱　伊藤とし
兒を背に御飯焚いてる暑い事　桑名　伊藤よし子
先生の倫理の講義暑い事　高岡　木津すみ子
避暑に來て見てもやつぱり暑い事　駒込　大伴良子
ひさし髪亂れて今日の暑い事　姫路　船戸雪子
病室を看護して居る暑い事　備後　鵜野羅久子
暑い事早く箱根へねえあなた　前橋　田部井榮子
硯簾迄じつとして居る暑い事　横濱　中山景子
勿體ないが晝御飯の暑い事　横濱　奥野ます子
四疊半客は一つで暑い事　京都　菅野和子
でかい帯きちんと坐る暑い事　長門　益田直子
暑い事ハンカチーフもびしよ濡れ　横濱　安藤よね子
暑い事五體も溶けて仕舞さう　鎌倉　鳥海英子
天窓から照りつけらるゝ暑い事　島根　貞子
氣の張つた客に物言ふ暑い事　大阪　落合はな
おべゞ着るのはいやなと暑い事　讃岐　高橋初子
日盛りやテニスに負けて暑い事　兵庫　霞洞僊子
皮膚迄も剝ぎたい程の暑い事　神田　徳田可笑子
石盤に汗のこぼれる暑い事　横濱　小峰園子
夕立が降りそこなつて暑い事　本郷　石原錫子

夕立の降りそこなつて暑い事　佐世保　茂子
流汗淋漓田の草を掻く暑い事　常陸　漣漪女史
暑い事だと鶏も行水し　[illegible]　林とみの
牛肉で御飯をたべる暑い事　南千住　飯田喜久
產月の御腹持餘す暑い事　神戸　水越照子
さし向ひ話が途切れ暑い事　上州　富貴子
華盛頓馬車馳ちがふ暑い事　播州　伊藤清
暑い事兵隊さんは大變よ　信州　小林まさる
裸にも流石になれず暑い事　山形　岡ことこ
暑い事氷屋さんと頑是なさ　讃岐　佐々木鹿子
横しぶき雨戸をしめて暑い事　麹町　赤瀬川友子
姑の眼鏡の光る暑い事　堺　綿谷まさ
雨雲は晴れさうも無し暑い事　甲府　村上きくの
轉寐の腹に日のさす暑い事　岩代　本多せつ子
母ちやんと膝に來る子の暑い事　牛込　峰崎とら
孫の大病だと急いでく暑い事　越後　中川とわ子
次亞燐が利き過ぎたので暑い事　大阪　高橋千壽子
薄い舌べちやくる喋舌る暑い事　牛込　東條町子
廂髪日よけにならで暑い事　日本橋　窪田園子
暑い事九尺二間に赤裸　仙臺　荒とし子
暑い事たべた氷が汗になる　近江　森田よね

暑い事先一睡はあとにして　越後　木嶋うら子

國の爲め機關の火夫の暑い事　北海道　つね子

暑氣見舞鉢合する暑い事　姫路　まつ子

暑い事ナニ涼しいと姑云ひ　神田　二村絹惠

降りもせず照りもせぬ日の暑い事　兵庫　山本衆子

## 撰者吟

末の子が首へ摑まる暑い事

三兒産んで泣きたてられる暑い事

氣障男やたら世辭云ふ暑い事

香水が汗に溶さるゝ暑い事

### 次回の川柳課題

「海水浴」「活人畫」「蟲」（投稿締切八月十五日）

## 謎々

「媾和」「朝鮮人」「リボン」とかけ

### 第一等

▲朝　京都市東丸太町二丁目榊原爲次郎方　福井千代子

「渡船」と解く

心は「あちらへついたりこちらへついたり

評云、ちよつと見れば何でもなけれど、其思ひつきおもしろし、渡船の「あちらへついたりこちらへついたり」は「邦や今日は南」のより脫胎し來れるか、しかも換骨の妙は彼に伐りて更妙なり。

### 第二等

▲朝　福岡市上名島町　塚本富美子

「意地惡い姑」と解く

心は「いつも長煙管でスパリ〳〵

評云、何だか間抜けて可笑しい、恰かも朝鮮人のそれにも似たり、長煙管に着想したるを多とす。

### 第三等

▲媾　埼玉縣兒玉郡加美村勝場　佐藤ふさ

「小學校の暑中休暇」と解く

心は「八月一日から始まる

評云、事實に相違は出來るかも知れぬが眼のつけ所が奇警だ、この調子に謎はやつて貰ひたい。

## 以下秀逸

▲朝…「溜飲患者」と解く　札幌　前田康子

心は「胃活（威喝）で治める

▲姉…花嫁の仕度」と解く
心は「なか〱はかどらぬ
甲州　鈴木　はな

▲姉…巻煙草の「敷島」と解く
心は「休戰（九錢）はしない
京橋　山口　梅子

▲り…裁縫の初步」と解く
心は「紙（髮）へ針でさす
横濱　小峰　園子

▲姉…果實の栽培」と解く
心は「出來ると嬉しい
京都　葵田　むめ

▲朝…中風の老人」と解く
心は「世話がやける
神戸　田代　愛子

▲姉…戀人へ結婚の申込」と解く
心は「早く結果が聞きたい
陸前　なとり

▲朝…高利貸」と解く
心は「利子（李氏）をたのみに暮らす
本郷　石原　鶴子

▲姉…米倉」と解く
心は「米が中に選入る
神戸　林　せつ子

▲姉…コンパス」と解く
心は、「二本（日本）で自由に出來る
備中　朝倉　宮惠

▲朝…座蒲團」と解く
心は「人の尻に敷かれるやうに出來てる
千葉　齋多　光子

▲姉…印度人の結婚」と解く
心は「早すぎる
因幡　谷口　清野

▲り…進物の水引」と解く
心は「紙（髮）の上に結ばれる
群馬　北澤みよ子

▲朝…一枚看板」と解く
心は「着替（氣慨）が無い
駿河　池田つゞ子

## 次號の課題

『富士登山』とかけて
『近眼鏡』とかけて
『温泉場』とかけて
（〆切八月十五日）

## 紹介

▲極樂村　牛込　新潮社

田口掬汀子の小說、極樂村の外三晝夜、歸省夫人、駐在巡査の四篇を輯めたるもの、極樂村に於ては主人公藤原久滿一を假りて勝保観音の理想郷を建設し、三晝夜に於ては名利を去つて正義に就く可憐の村娘を捲きて筆端清洌を極め、歸省夫人に於ては昔の村娘、今は泥水より出世して子爵夫人と成れるが一度歸省して、錦の袂を飜へす噂の邊に、昔の戀人に面會せる折の情緒を寫して、筆力雄渾、又た駐在巡査は世襲の財産を横奪したるが上に尚ほ、最愛の妻までも奪ひ取らんとする强慾非道の舅に對する不幸なる青年の憤怒を寫したる深刻の物にて、感興最も深し、通讀するに四篇共に著者獨得の道徳觀が、宛ら暗中に閃く光明の線の如く紙上に流れて讀者を刺すの力あり、家庭小說として好箇の讀物なるを信ず（定價六十五錢）

# 夏季の陣中生活

在滿洲　友金豊之助

四面茫々、滿目荒寥で在た曠野の冬も、何時しか奇花珍草を敷詰むる春と成り、其も間も無く去つて、新たに來たは熱風焦土萬緑爲に枯るゝの夏。（七月上旬）

夏とは云へ、今日此頃の暑熱は未だ頂上とは行かぬが、舎外に出れば隨分暑いのである、目下の所、寒暖計は日中で九十度以上、夜間で六十度位迄の間を昇降じて居るものゝ、また〳〵這麽事では濟まぬ、暑熱の盛となれば、百二十度以上にも昇るのであるから、堪つたものではない。

知らるゝ通り、夏季は内地と雖も隨分惡疫が流行するので注意を要するが、まして不潔で而も風土の異つた土地に、多數の人員より成る軍隊が起臥することであるから、衛生上の注意がいる事は無論の話である、其が爲め戰地には衛生委員と云ふ係があつて、軍隊衛生の事を監督されて居る、今次の順序に據つて之を御咄し爲やう、第一舎營村落の掃除、第二各兵營の掃除第三飲食物、第四被服。

▲村落の掃除　先づ或る村に舎營することに成ると、係りの兵士は土人を督して、附近村落の掃除をはじめる、其の法は腐つた水溜でもあれば直樣埋め立てゝ上に小砂利を敷き、掻き寄せた塵埃汚物等は村外に運び去て燒棄てるのである、道路は二米突乃至三米突の幅を取つて、兩側に溝を掘り、路の中央を爼板形に高くし、其上に砂を盛つて、排水を好くし、降雨の折の泥濘を防ぐのである、又た掃除委員は土人の家を一々臨撿して、不潔なる汚物は之を取去り、穢なき個所には夫々清潔法を施すのである、村落の掃除は略ば這麽ものであるが、筆の序に土人の生活狀態を語つて置かう。

土人が衛生上に無智識である事は實に呆るゝ外はない、上等社會になれば少しは良いやうなものゝ、土民の九部を占めてゐる下等社會の狀態はひどいものです上等社會と言つた所が唯だ家が宏壯で、被服が立派

と云ふのみで、衞生上から見ると餘り大差はないのである、粗末な木材と高粱を以て造られた彼等の家屋は煤や埃を以て充たさるゝと雖も、曾て一度も掃はれた事なく、床にも土間にも掃箒の跡なく、器物は室内に散亂して猥雜を極め、汚物は庭一杯に擴がつて何とも云へぬ惡臭を放ち、一見嘔吐を催さずには居られないのである、住家に對して無頓着なる彼等は又た己が身體に對しても無精極るもので、頭と體を洗ふと云ふことがない、或る日私が入浴して居る傍に、一人の土人が來て、妙な顏して不思議さうに見て居たから、私は「你的身子洗々好」と訊ねると、彼答へて「清國人洗洗沒有」と言ふので在た、誠に其の言ふ通りで彼等の體は垢に埋もれ、其の垢は所々に黒く固り着いてゐる、衣服も亦た其の通りで洗濯をしたことがなく、寢るも起きるも耕すにも歩くにも、一つ服を着通しであるから、蟲はたかる汗斑にはなる、加之に臭くはなる、其でも彼等は一向平氣なものである、食物は一般に高粱飯、粟飯を用ひ、副食物は重に葱、白菜、韮などで、時には是等の野菜を豚の油で炸げて食べる事もあるが大抵は生の儘妙な味噌を付けて、旨味さうに食するのである、之れに驚くのは厠の設けの無いことで、所嫌はず屋外に放流するのであるから、不潔とも何とも言ひ樣がない、斯う云ふ狀態であるから、自然其土地は病毒の原因たる不潔物に充たされてゐるので、其内に起臥する身こそ、實に危險千萬なものである。然るに當局者が注意深き監督の効あつて、我が軍隊中に未だ其土地の風土に侵されたと云ふ病兵を見ぬのは、誠に喜ばしい事である。

▲兵舍の掃除　兵舍は夏季の方冬季よりも遙かに上等で、悉く土人の家庭の完全なものが割當てられて在ると云ふのは夏季は降雨が多いので野外の宿營に困難を感ずるからである、所が前に言ふた通りの譯で、衞生に構はぬ人間の棲んで在た不潔の家の事であるから、其の掃除は格別嚴重に行はれるのである、即ち濕氣ある所には乾いた砂を撒き、壁の崩潰は白紙又は新聞紙で貼り、天井は高粱や丸木を縄で取付て其上に紙を貼

り、害蟲毒菌の發生を防ぐ爲めに設備をするのである

それから又た障子も新しく貼り換へ、土人の使用した穢き器物は悉く屋外に持出すことに成つて居る、而して日當りの好い所に食器棚が設けて食後食器を洗ひ終るや、之に載せて乾す事に成つてゐる。

ロスキーの襲來には恐れぬが、茲に一つ閉口するのは滿洲名物の蠅の襲撃である、殊に食事の時などは夥しき蠅の群勢が眞黑に成つて押寄せる之が爲め一方には舍内に「蠅入ラズ」を設けて、之に食物や食器を藏ひ置くと共に、他の一方にては蠅捕器を工夫して其の剿滅を計るのである。併しながら此奴の補充員は仲々澤山に有ると見えて、打てども殺せども少しも減らないで、後から幾聯隊も繰出して來るにはほと〳〵閉口する、デ、我隊の衛生委員は土人に嚴命して蠅を捕らしめ、又各兵舍に對して蠅を捕獲した數の高點者には相當の賞品を與へるとの布令を達したのさ、兵士等は爭ふて蠅狩を始め、午睡もせずに一生懸命に蠅を追廻して居ると云ふ有樣で在た、以て當地に於ける蠅の勢力一斑がお分りに成らう。

それから厠は兵舍より可なり隔たつた所に設けられてあるが、其の構造は、先づ深さ六尺以上の壕を掘り木片又は板を渡して踏板となし、其上に莚や木の皮で小舍を造り、屋根には泥土を塗つて雨漏を防ぐ樣にしてある、而して使用毎に石灰を撒布することに成つてゐる。

浴場は土人より徴集した大甕を半ば土中に埋め其の周圍に火の廻る樣に掘り凹め、一方に竈口を設けたもので、之に焚木を投べて湯を沸すのである。

兵舍の門前は、幅一米突位の通路を挾んで溝を掘り路の中央に飛石を並べて、雨天の折の通行に便にし、窓の近くには高粱にて清げに垣根を結ひ、其内に築山を築いて雜草を植え込み、或は空罐に珍花の一株、椽端の凉風に靡くなど、仲々に風情深く、確かに兵舍の主人たる風流な大和武士の威風を顯してゐる萬事が斯樣な譯であるから、我が軍隊の到る村落は如何な不潔汚濁な巷も忽ち化して清潔無病の樂園となるのである

▲飲食物　飯は衛生の爲め二種飯(米と麥)で、副食物には牛肉、豚肉、鹽魚、罐詰魚類及び牛蒡、慈姑、胡蘿蔔、蓮根、甘藷、干瓢、馬鈴薯等の干野菜を供給されてゐる、是等の物は中隊の炊事場當番の手より、食事の都度醫官の點檢を受けて各分隊に分配されるのであるから、至極安全である、飲料及炊事用の水には、村内に於て最も純良なる井戸を選び、其には一々歩哨を附けて、不潔なる土人の爲めに穢されぬ様にしてある、而して飲料にするには煮沸した物でなければ用ゐないことに成てゐる。

▲被服　兵士一人につき新調の夏服と木綿の襦袢袴下二着を給與され、尚ほ洗濯を怠らぬ爲めにとて石鹸も十分に給與して在るから、少しも不便不自由を感せぬ夏の陣の話は先づ斯ういふ有様で、其他には夜間睡眠中醫官若しくは當直下士が各兵舍を巡廻し、兵士の寢相や戸、障子の開閉に注意し、又は時々舍の内外の清潔檢査、衞生講話などが行はれ、其の周到なる注意は實に至れり盡せりである、されば各將卒も十分衞生に意を用ゐて、益々健全なる體力と士氣を養成せんことに努めて居るのである。

▲陣中の娯樂　終に臨み夏季陣中の娯樂を申さうならかの屋内に蟄伏して爐邊に膝を押合ふ冬の陣と異り、夏の陣は餘程快活で、樂しみが多いのである、或時は一竿の釣竿を肩にして附近の河邊に糸を垂れ、又或時は西の空紅を流す夕間暮心合ひたる戰友と涼しき風に吹かれつゝ、村端れの老柳や楡の下に草を藉いて郷里の話を交換し、或時は又た洗ふが如き夕立の後、綠水滴る樣な彼方の森や山を眺めつゝ、涼しき窻の下に讀書するなど忙中閑ある戰地の樂しみ亦た格別な味があるのである。

◎東洋女學校の臨時生徒募集　去る四月開校以來漸次盛況に向ひつゝある東洋女學校にては來る九月の新學期に於て第四年級以下各學級十名の補缺生徒を募集する由にて入學志願者は九月四日迄に願書を出すべく入學試驗は同五日に執行し國語と數學との二科目につきて試驗する由。

# 友のたのしみ

小川直子

凡人の名をつくる事は正子あるは操などすべて斯くあらまほしとてのわざにしあれど玉とつけたりとて光もいでこず軽と呼べども身は重くして働き鈍きがあるべく兎にも角にも名にそはぬが世の習ひなれど爰に松坂といふまちに住み玉へる阿部優子刀自は名に背かず心ざまいとやさしくこぼるゝ許の愛敬ありて老たる人のためには心の安からんやうにしなし幼き兒子達をばらうたがりて能くなつけなどせらるゝさまは實にくし聖の願ひにも叶へりと見ゆる君なれば此館には老も若きも問ひ來つゝ常に賑はしう暮し給へりかゝればおのれも常に問ひみとはれみ親しみあひて心へだてぬ友なるが此程より五月雨の打續きていとゞつれ／＼なるまゝに窓の中なる文よむわざも梅の實ならねどうみはてたる折しも此刀自より消息ありて只今三輪田眞佐子女史安藤きく子刀自打つれてふりはへ來給へりされば例の物がたりも心ゆくらんを來給ひてんやとあり素より此刀自の館とおのれの庵とはほど遠からぬ道にてたゞはひわたる計の所にしあれば老か身なれど頓てかちよりものしつ此ふたりのまろうどには久しうたい目も得せざりければいと嬉しうてくさ／＼のかたらひぐさを摘いでつゝ泣みわらひみ樂しみあひぬ此時優子刀自のいひ出られけるは世に占といふ事ありていにしへはかしこき御あたりを始め奉りしもは野邊の末深山の奥にすまへに賤が身まで萬につけつゝ問ひたるなりとかやされど斯く開けゆく世はかゝる事に心をとむるは中々に迷ひの媒ともなるべければとて此頃はいたう戒むるわざなるを猶深く信ずるともがらもありて兎かういひあへるは如何なる事にか優などは學びの道も淺ければ何のたどり得たる事もなくて過し來ぬるを如何なるものにかとありけるに三輪田女史は素より唐大和の文のはやしにも奥深う分入にし君なればこれにつきて弘くためしを引いでつゝ答へられければ優子の君喜びて

心ある友にしあへば世の中のまよひの雲もはれわたるなり

かゝみとも見るべき友にあひしより心のやみもはれわたりぬる

とすよみいで給ひけるにつきておのれ
　雲なきこゝろの友とかたらふる折しもはるゝさみたれのあめ
　さみたれのつれ／＼わふる頃としもしらてかたらふまとの中哉
となむおもふまゝをよみいでけるまた倭子刀自きく子の君には七とせ餘りもあひまゐらせざりければとて
　年ふれどかはらで嬉し老松のたかきこゝろの道の友がき
とありければ菊子刀自のかへし
　嬉しさは何とことばにいはは汭水ふかきなさけは汲てこそしれ』また三輪田女史
　おもふどちあひ逢ふごとに紅葉のあかきこゝろの色ぞ見えける
三輪田女史はこよなき有識の君なれはおのれ
　分ゆけどはてなき道の奧佐ご路をあされればひろふことのはの玉
とよみて聞えけりまた菊子刀自はいとも／＼みやびなる君なれば
　夏も猶匂へるきゝの高き香をたもとにしめて遊ぶ友かき
斯くおのも／＼思ふがまゝなる事どもをうらなくものしつゝ遊ぶ折しも二郎君名は泰二と稱へて今年帝國大學を事をへ給ふがいで來て何くれの物語ども今めかしきかたに移りてこよなう面白しかく樂しむほどに此君が此頃世にもてはやすなる繪はがきといふ物をもていでゝあはれ刀自達よ願はくはこれに歌かきてたびてんやと乞ひ給ふに安藤刀自がとりあへず螢草のかたあるをとりて
　よる光るほたるに似たり山澤のみきはに淸き露くさのはな
今ひとつ浦島が子のかたに
　玉手箱あくればさむる夢の間に八千代をこめて契りおきけむ
とかき給へりければ三輪田女史は新樹の繪に唐うたを草にて
　孺林煙雨午寒凝。淨盡殘花春已空。猶有餘香吹不滅。暎青纈綠樹梢風。

おのれもたゞに返さんもはえなきわざならんと思ひてうるはしき竹の繪ありけるに

　人の世のまことの道は呉竹のすぐなるかげやしをりなるらん

かゝる遊びなれば心ゆく事たとへむ方なくて長き日もはや黄昏近う成にければいざ〳〵と催したてゝ歸らんとせしに雨いたうふりいでければ優子刀自

　淺からぬ人のこゝろはふる雨にぬれて歸るを見てぞしらるゝ」といひかけ給へるに安藤刀自のかへし

　玉あへる友と遊びし嬉しさにぬれてかへるも何いとふべき」三輪田女史は

　あかずとて又かへり見る歸り路はあひおもふこゝろはてなかりけり」おのれ

　おもふどちあかぬ別にしをれつる袂ぬれそふさみたれのあめ

などいひかはしてみな歸りにけりつとめて三輪田女史より優子の君へきのふの樂しかりし事などいひおこせ給へる文の奥に

　あたゝかきむしろのかをり今も猶袖にのこりてなつかしきかな

此日おのれは庵の中にたれこめてきのふの事どもくりかへし思ひ出つゝ

　松坂の榮行かげにたちよりて遊びしむしろしきしのふかな

と口ずさひてありける折ふし優子の君より三輪田女史よりの此うたなどもたせて見せにおこせ給ひければおのれもまた此松坂のうたかきて贈りけるに頓てまた

　かくてこそ世にすむかひもありそ海なみ〳〵ならぬ友にあひつゝ

とありそも〳〵此優子の君は名のごと優なるのみならず慈悲の心深くものし給へばすべて世に行はるゝ慈善のわざには常に心をそゝぎてかゝづらひ給ふ事大方ならすさるからにこたび御軍のおこりてよりこなたに救ひ給へるわざどもゝ數へ盡すべうもあらねばおのれは常に敬ひ尊びて交らふなりけり誰も〳〵斯くこそあらまほしきわざなりけれ

# 雜錄



## 婦女漫錄

若翁

▲女子の獨立

方今世に奇說多し其一に曰く女子は男子の手を藉らずして須らく獨立自營の覺悟あるべしと、都下に有力なる一女學校の如きは女子の獨立自營をその學校經營の一要目として、世の女學生を吸收しつゝありと、聊か一言なかるべからず。

元來男女は其性を異にするが爲に其能力資質にも强弱大小の區別あり、生理學者の說に女子の腦髓は男子よりも少量にして其肺量、胃力等に於ても亦著しく劣り居れりと、是れ先天的か、後天の慣習によれるか、兎も角もこの事實は爭ふべからざるなり、故に一方は剛、一方は柔、剛柔相竢ちて家を成し以て社會を作る、男は家計の主働者たり女は之れが經營者たらざるべからず、如何なる場合に於ても男を外にして女が家の主働者たる事なし、若し男子一朝にして蚤世の不幸に遭遇し婦人にして餘儀なく自ら一家の主働に任せざるべからざる場合ありとして豫め狼狽沮喪せざらんが爲に、獨立自營の養成をなしおくなりと云はゞ、穴勝ち咎む可からざるも、そは餘りに大早計ならずや、抑も人間非常の時に遭へば非常の決心も出づるものなり、又應急の手段も生ずるものなり、されば爲に一つの變時を慮つて日常の事を等閑にするは非なり、故に婦人日常に於ける婦人としての務を果すべき準備を了せば



充分なる可し。

▲女子の職業と獨逸の實例

婦人の職業に就くと、その獨立自營とは別個の問題なり、獨逸國にて近年婦人の職業に就くもの〻、迅速なる增加を現出したるに就て或る學者は婦人の天然勞働範圍は國民經濟的生產に在るに非ずして、家庭家族の内に在るなり、然るに若干の婦人は、此の天然の職業を實行するの便宜を得ざる爲に已むを得ずして職業に就くもあり、又近世商工業の發達に依て從來家内にて行ひ來りし婦人の職業、例へば絲を紡くとか、機を織るとか、衣服を裁縫するとか、麵麭を燒くとか云ふとが、家族的經濟より分離せられて獨立の職業となり、それが爲に家族的生產の範圍が狹隘となりて、家族經濟即ち世帶を持つと云ふとが、主として消費の整理に限らる〻やうになりたれば、自然婦人の手に暇を生じて、家庭以外に職業を求めざるべからざるに至れるなりと、又或學者は種々なる統計を掲げて、千八百八十三年以來獨逸國に婦人職業者の百萬人以上增加せしは、男子の勞力が供給し得らる〻限り供給せられて、尙ほ其不足を補ふべき必要の存したりし爲めなりと。

▲家庭經濟の不整理

我が邦の現在、或は近き將來に於て、獨逸のそれの如く、家族的經濟が消費の整理に限られて婦人の手が差當り不用に歸するが如き、又は外面に在て男子の勞力が十二分に供給し盡くされて、尙ほ婦人の手を待たざる可からざる程の必要を感ずる如き、時期の到來しあるとも信ぜざるなり、されば今日の場合に在て一女子の職業を得るは一男子の其古き職業を失ふとを意味せり、而もその女子の職業の世に歡迎せらる〻は、是れ決して世の女子の爲に計れるに非ずして、只資本家が賃錢低き勞働者を歡迎すると云ふに止まれり、斯くて女子の就業者を增加する比例を以て男子の失業者は增加するとゝなり、遂には廉價なる女工は男工の地位を奪ひ去りて、職業なき夫は妻の爲に辨當を會社へ輸ぶの奇觀を呈するに至るべく、其結果は生計の困難となり、臺所の紊亂となり、家庭の破滅となる、此處社

會主義論者の最も憂慮する所なりとす。

▲婦人と獨立自營

然れども婦人の職業を求めつゝあるは現實にして、社會も亦漸く婦人の就業を歡迎せんとするの傾きあり、此に至つて社會主義者ならざるも聊か杞憂なき能はず、併しながら是れ勢なり、されば今日に於ける女子の職業なるものは何如、曰く各種の女工、女教師、官省銀行會社の事務員、女醫者、保母、看護婦、産婆、音曲、生花、茶の湯、等の師匠これなり、而も教師としての女子、職工としての女子、事務員としての女子が男子に企及し能はざるは勿論、日常婦人の獨占とも云ふべき衣服の裁縫、食物の烹煮の如き婦人的の仕事もその專門的の技能に至つては、總てこれ男子の手に待たざる可からざるなり。

その女子に於ける絶對的職業と曰はゞ、産婆あり、保母あり、看護婦あり、餘り喜ばれざるも按摩あり、女結髪あり、其他普通女子の共に齒しするを屑しとせざる藝妓、娼妓、酌婦あり、而も其成功、(若し成功と云ひ得べくんば)、前者にあらずして後者を推さゞるべからず、以て如何に女子がその獨立自營に縁遠きかは一目して瞭然たらずや。



▲藝妓の存在と家庭の防腐

藝妓は醜業者として我一般社會に在て擯斥せられつゝある所なるが、其實彼が現時の地位たる我普通一般の社交上缺くべからざる必要物なるぞか

し、我が新文明の空氣を呼吸せる女流は、歐米の婦人が交際場裡に跳ね廻りつゝあるを見て羨望し、自らも其顰に傚ひ、社交の花と持囃されんと腐心せる所なるが、從來日本婦人として歐米に知られたるは、斯る歐米風の女流にあらずして、彼の賤むべき藝妓輩ならんとは豈歎ずべきにあらずや、藝妓は維新修交の當時より疾くに日本婦人の風俗として歐米に知られたりき。

由來藝妓なるものは獨り我が國にのみ存して、歐米には絶えてなき所なり、若し强て匹を求めんか、彼の國の女優若しくは舞姫これにちかし、されど俳優舞姫は何處までも俳優舞姫にして舞臺に立ちて演劇するのみ、その杯盤の間に周旋する如きはもとその業にあらず、然るに社交の發達せる歐米人は我が夙に藝妓の社交界に於ける地位を看取し觀光の客として我が邦に渡來するもの必ず藝妓を聘して一席の觀を試みざるはなし、而も決して醜業者視せざるなり、又醜業婦的取扱ひをなさゞりき、歐米、殊に米國は最も女權の伸張せる國柄なれども、富豪モルカンが京都祇園の歌妓を落籍して其室となすや、彼の歌妓は米國婦人界に於て紳士モルガンの令婦人として優に社交場裏に濶歩しつゝあるの奇觀、是れ國風を異にせるの一現象として見るべし。

社會に藝妓のあるは我が婦人界に取つて幸ひなり、歐米婦人の交際場裡に立つや、時として握手に次ぐに接吻を以てし、接吻に次ぐに舞踏を以てす、即ち他の夫婦と相擁して翩々として舞ふ、我が良人よりは嫉視せらるべく、他の夫人よりは妬視せらるべく、自らは一分の警戒もゆるかせにすべからざるなり、而も姦淫は一種の好奇心にして其日の出來心なり、是れ彼の歐米社交の裏面に於て往々奇怪の事實ある所以なり、我が邦に在ては然らず、斯る專業的婦人のあるあり、以て我が室家の崇高を保ち家庭の清潔を保留し得る次第なり、而して我が家系の神聖、血統の純正も亦維持せらるゝ所以にあらずや、日本の藝妓が時として醜業を營むは偶々以て我が家庭の防腐劑たるべし。

△家庭は婦人の王國

要するに女子の外觀は絶對的不可なり、月毎に月經の障りあるに非ずや、攝生は大切なり此期間は殊に苟且になすべからず、又懷妊の大役あるにあらずや、姙身中の攝養は更なり最も胎敎は謹嚴ならざるべからず而していづれも是れ婦人として勞働に堪ゆべき最良年齒の時期にあらずや。

されば婦人生活の中心點は家庭ならざるべからず、家庭は婦人の王國なり、獨棲は家庭を成さゞる不具者なり、家庭なきは浪人なり、恰も是れ培養力の乏しき荒野の花か、風雨の吹き凄める廢園の草のみ、以て其性情を損ひ其品格を墮すに至らん、故に婦人の獨立自營は云ふべくして行ふべからず、是れ空論なり、婦人の職業は家庭家族の間に於て天然的勞働に服するにあり、若し誤て空想を追隨し不自然なる勞働を撰ばんかゝその不幸や豈啻に婦人のみならんや。



▲結婚と自由戀愛

女子は到底獨棲すべきものに非ず、男女室に在るは人の大倫なりとせば、或時期に達せば必ず結婚せざる可からず、さて結婚は如何にして擧ぐべきか、如何にして行はれつゝあるか、古來我が風習は父母先づ其男の爲に婦を相し、其女の爲に夫を相し、父母以て其可とするに至つて始めて當人に謀り、當人の異存なきを見て茲に結納する順序なるが、今日に在ては此風習を父母の干渉と稱へ、若き男女の痛く喜ば

ざる處ろなり、就中教育ありと稱するものゝ中に盛に西洋風に倣ひて自由結婚を唱へ且つこれを實行するに至れり。

▲佛國の例

いま歐洲文明の本場なる英佛に於ける男女の關係如何と云ふに、佛蘭西に在ては先づ男女の若者互に見定を着けて結婚の意志を定むる順序なりと雖も、その結婚の成立は是非双方の親達の許可を受けざるべからず、又其結婚式を擧げて眞の夫婦となるまでの間は、双方勝手に相携へて運動することも出來難きにあらざれども、其場合には必ず母親の同行するものとせり。

▲英國の例

又英國に於ては、若き男女の互に相愛し氣の合ひたるものが互に約束し、夫たり婦たらんと決心して先づ結婚の豫備約束を爲すなり、而して其豫備約束が濟まば男女相携へて自由に往來し、父母兄弟を交へずして何處へも往くことを得べし、又家庭に在ても成るべく二人の交際には干渉せざる方針にして、若し男子が遠隔の地より女子の家を訪問する場合には、家内のものは外出して若き男女を一家に殘し、自由に談話或は遊戯をなさしむべく、取計ふなり、併し結婚の成立には形式上父の許諾を受けざるべからず、さて斯の如く男女隔てなく親密なる交際を爲し得ると雖も、その結婚式を擧げざる以上は、幾年月の永きに渉るも決してその神聖を汚すことなし、若し豫備約束中に在て成婚後の如き行爲あらんか、其ものは生涯社會に顔出のならざる制裁ありて、その嚴なることは寸毫も假借する所あらざるを以て、全く社會的死人となり終身浮ぶ瀬なし、英國の醜業婦は多くその謹愼を缺げる婦女の後身なりと云ふ。

▲自由結婚の程度

英と云ひ佛と云ひ共に斯る制裁の下に自由結婚は行はれ男女間の神聖は保たれつゝあるなり、故に自由と云ふと雖も是れ程度問題たるに過ぎず、顧ふに我が社會の制裁は何如、從來男女各自の意思を以て勝手に接觸するものを野合と云ひ又隊と稱へて甚しく擯斥した

るものなるが、今やこの制裁は漸々薄弱となりて青年男女の醜交は敢て珍しからず、心あるもの丶常に長大憩する處とす、もと野合なるものは下層社會にのみ多く行はれて、その制裁なき成婚の結果として、夫婦間の紛爭斷ゆるとなく彼の流俗の所謂摺鉢飛び擂木舞ふの活劇は屢々演せらる丶所なり。

情人の相忿爭するは夏日炎天に驟雨を降すと一般なり、其鎭靜するに及では山野草色益々鮮新となりて更に一層の風景を增すものなりとは、是れ子ッケル夫人の言なり、某女史は之を敷衍して曰く、是れ唯にその鎭靜のときのみならんや、忿爭そのものも又一種の美觀ならずや、彼の忿爭中の波瀾澎湃は眞に情界の一偉觀ならずやと、世に所謂犬も喰はざる夫婦喧嘩を以て是を情界の偉觀に比す、自由結婚の本家本元たる歐人の觀察さもあるべし。



▲婦人と社會主義

近來女學生間に社會主義の思想傳播するとかにて、文部省は嚴重に取締を爲すべき旨、各女學校へ訓令したりと、さて謂ふ所の社會主義とは何ぞ、今の社會の害惡の根原を以て土地資本を一部の少數なる富者が握れるに由るとなし、此土地資本を社會の共有とせば、一切の人民は皆衣食住の自由を得て勞働者即ち賃銀奴

隷は全く跡を絶つと云ふに在り。

而して此社會主義と婦人との關係如何と云ふに、彼等の主張する所は現實の女子は常に男子に依賴して其衣食を得ざる可からず、故に今日の結婚は其名如何に美なるも其式如何に正しきも女子の爲には畢竟衣食を得るの道に過ぎずして、其一身を男子に賣りて衣食安全の地位を買ひつゝあるなり、斯く結婚が經濟的なる結果として妻なるものは、殆んど他の財產と同じく夫の私有物となり、茲に貞操を守るてふ義務を生じ來る妻が貞操を守るとは取も直さず妻なるものが自己に對して夫の所有權を認めたる言葉なりと、以て現在の夫婦制度を非定す。

然るに社會主義が實行せられて婦人が經濟上の獨立を得て、衣食住の鐵鎖を斷ち全く男子の束縛より脫せんか、最早や其衣食住の爲に其地位の爲に結婚するに非ずして、戀愛によりて結婚する事となり、戀愛は茲に始めて其自由を得るに至るなり。

### ▲自由戀愛說

結婚が純然たる戀愛に依りて成立せるを以て、若し夫婦間に在て愛情の冷却する場合は、强て忌はしき關係を繼續するを要せず相別るゝを喜ぶ、而して其場合に於ける子女の如きも經濟上の不自由を感ぜざるにあれば、今日の離婚の如き困難あるとなし、男女は一に其愛情に從つて離合す、戀愛は婦人の生命なり最高權威なり、婦人の涙は必ず戀愛の屈辱を意味す、戀愛は自由ならざる可からずと、是れ我國社會主義者の主張なりとす。

自由戀愛是れ婦人對社會主義者の理想なり、されば夫婦の契は偕老同穴ならずして、交情一夕にして相改むるも妨げず、朝に甲と握手し夕に乙に秋波を輸くるも自由なり、只愛情の淺深に從て新陳轉代するのみ、若し之を現實にせんか、男女の離合頻繁となり、夫婦制度は忽ち破壞せられて、太古蒙昧時代の雜婚制度に復歸すべし、豈恐るべき主張ならずや、然れども彼等は自由なる雜婚制度を以て、愛情なき壓制なる現在の夫婦制度(彼等の臆測)に優れりと爲すものなり。

抑も戀愛切言すれば是れ痴情、最も卑しむべき劣情の發動にして、其終局は獸慾の滿足にあり、故にその發動のまに〳〵之をして自由放縱ならしめんか、兩性の關係は恰も交尾期に於ける犬猫相追隨すると一般、社會は忽ち滅裂して禽獸界に退歩すべし、ベーコンも云へり、誰にても少しく戀愛の地に足を容るゝ時は偉大と高潔とには訣別を告げざるを得ずと。



パンジャマン、コンスタン氏曰く、我れ愛して而して他の愛せざる固より不幸なるも猶是れ尋常の不幸なり、我れ愛せずして而も他に愛せらるゝに至ては、眞に是れ淺間敷不幸と云ふべしと、實に世に嫌惡すべき人より熱愛せられ義理に迫つて身を亡したるものゝ例少なからず、人に克己の修養なく社會に塞慾の制裁なくんば、所謂淺間敷不幸は頻々殺到して世は其弊に堪へざるべし。

▲戀愛の永續し男女兩々相戀愛し未來永劫變るなからんと契ひ、偶々或る動機の爲に男女相擁して情死するは、世に珍らしからざる事實なり、然るにその一方が生存する場合なきにしも非らざるが、他日その生存者が前死者の後を逐ひて再び死を逐ぐるものに至ては稀有にして、殆んど絶無なるが如し、又横濱の某氏は戀愛の爲に情死せんとするものを救はんと立願し

戀愛の成立し難きを歎じ不量見を出し兼ね間數人物を發見するや、一々我家へ連れ來りて懇諭し、時に多少の金錢を支出して夫婦たらしめたるもの前後七八十組に及びたりと、然るに驚ろくべし斯く死を賭して辛く成立したる夫婦なるに係らず、其後愛情を全ふして睦しく双棲せるもの僅々三夫婦に過ぎずと云へり、以て如何に戀愛なるものが病的發作たるを知らるべし、恥も慮外をも顧みず常識なき其痴態や喪心とや云はん、狂氣とや云はん。

◆婦人と婚期

婦人が結婚するに當ッては何れの期を撰ぶ可か、その最良期は如何、先頃米國の一雜誌に婦人の婚期に就て曰ふ、近來女子の結婚期が甚だ後れたるやの憾あり近時女子が夫を迎ふる以前に在て先づ社會に出でゝ種種なる履歷を作り以て其身を飾り立てんとするの傾きを生せり、是れ大なる誤りなり、何となれば女子の幸福なるべき結婚の時期は蕾の將に綻びんとする時なりとす、若し此時期より晩れんか、互にその愛情減少し結婚後の愉快を自然に薄弱ならしめ行くを以てなり、即ち女子の年齢は十九歳を以て頗る結婚に熟したる時とすべし、若し夫れより後れて夫を選ぶに至つては多く其選擇を誤るなり、故に年齢十九歳に達せば其眞情より愛し得る處の男子と結婚するを良しとすとあり。

我が邦の處女が結婚以前に履歷を作らんとの志望あるや否やは吾人之を知らず、されども晩婚婦人がその良人の撰擇を誤りつゝあるの弊は日米共に同一なるが如し、蓋し思ふに我が邦の女子も年齢十七八才が結婚の最良時期にはあらざるか、而して其結婚や寧ろ早きに過ぐるも晩きに失せざらんことを要す、處女として羞恥の態なく、朱唇より喋々戀を説き、愛を論じ、臆面なく男子を品隲し去るに至ては、最早や妙齡の處女にあらずして、一個の鐵面婦人のみ眞誠の男子は到底斯る婦人を娶らざるべし然るに年少未だ稚氣を脱せず、萬事羞恥に堪へざるものゝ如く家事は擧げて父母に托し、結婚を見ると夢の如くなるものにして始めて處女の態度ありといふべし。

▲寡婦と再醮

貞女二夫に見えずとは古來我が婦道の眞髓にして、緇衣涅齒、その婚儀の嚴かなるに由來する所あるなり、然れども世態の推移に伴ひて婦道の制裁も亦變遷し、眉毛を落し齒を涅るの風習も廢れ今や離婚も七去以外に正式に是認せらるゝ場合あり、隨て再醮敢て怪しむものなく、却て相喜ぶの風を生じ來る日露開戰後は多數の新未亡人を生じつゝありて、爲に既に婦人再嫁說をなすもの少なからず、想ふに寡居日倚ほ淺く煢々哀泣の餘りに未だ再び箕帚を奉ずるに懶く、又故良人の忠勇に對する社會の敬意は遷して以て未亡人に捧げ來れるあり、此時に當りて再嫁說をなす、或は婦人を侮辱するの感なきにしもあらず。



▲婦人の貞操とハムモンの噴泉

併しながら『二十後家は立つても三十後家は立たず』とかや、若き婦人の寡婦となりて獨棲その能く有終の美をなすは尋常人の能くする所にあらず、アデリヤも云へり、貞潔に見ゆる婦人の多くに就いて深く其の情を察すれば殆んどハムモンの噴泉に似たり、晝間は頗る淸冽なるも夜に入れば混濁となり、終には熱沸するに至

ると、某女流は之を敷衍して、表面に於て貞潔なるも裏面に於ては不潔の心を懐く、若し一旦誘惑に陥る時は遂に墮落に至るもの多し、表裏二なく、その獨を愼みて屋漏に愧ざるもの果して幾人かあると云へり、吾人は此に於て幾多の未亡人に寄語す、或時期を見計ひて似合しき緣あらば、よろしく再嫁して故良人の名をも汚さず、又自らも後半生を誤ることなき兩全の策として決行すべきことを。

然れども帝國軍人が勇あり義あり、我が民族特殊の武士道を遺憾なく發揚して、世界に聲譽を擅らにしつつあるに係らず獨り我が女性が武士の妻女たる能はずと云はゞ、聊か遺憾なからずや、年齒若く色未だ衰へざる婦人が良人に後れ世を淋しげに渡れども、其心を潔く持して獨棲せるは、唯さへ優れて見ゆるものなるに、剩へ遺兒など慈み育つる如き、故良人の德も未亡人の操も心なきものゝ眼にも輝きて見ゆるなり、嵐の夜半、時雨の晨の心細きにも歌などよみて其懐をやる如きに至ては、如何に崇高なるよ、されど此等は修養ある婦人ならでは叶ひ難し、今日の物質的教育の果して斯る婦人を作り得べしとも思へず去りとは歎かはしき次第ならずや。

# 夏の旅

加藤みどり

## （一）片瀬川

わらはは今吾が弟に代りて夏の旅をそものしてん夏の雲の奇峰半天に高き一日、烈日に照らされ熱砂を踏みて江の島に至る、茶亭主人の山もと橋より渡ありと忠實だちて教へくるゝに、それよけんと鞄提げ渡をさして急ぎぬ。行々車夫の五月蠅つき遊ふをふり拂ひつゝ漾々たる砂路を歩む無氣味さ、――打續く松林をもれて赤きフラフの飜れるは宛然招くものゝ如くやがて橋欄の白さも見え初めたり。玉なす汗を拭ひもあへで渡船場に至れば船は今し方出たばかり誠にお氣の毒樣と云ふ、相應の迎あらばよし暫待たんと腰打かけて休らふ駄菓子を求食り澁茶など啜り居れば松濤颯々の聲を絶たず涼しさ云ふ許りなし。折しも二人連なる少年の海水帽を阿彌陀に被り草履を穿ちたるが息急き來りて叔父さん船は直出ないかと問ふ、今出る處ですさアお入

ンなさいといふに彼等は蒼惶として出で去りぬ、翁さん浜を見ておれば彼等は今来し方に向て手をはたくと打叩きしたり顔に早くくと叫びぬ、やがて靜々入り来るは計らざりき妙齢の一佳人。――年の頃は十七八にもやあらん同じく海水帽を被り白縮の浴衣を裾短かに着なしたるが桃色のハンケチにて切りと風を煽り立つる状またなく嬉たし。サア御出なさりませうとの案内に岸に下り立ちて乗り移れば舟子の青柳一揮舟は緩やかなる流れに浴ふて下りゆく、涼やかなる風の絶えず身邊を訪るゝ心地よさに烟なんど吹かしつゝ舟子と談るも中々興あり。帽を被ぶツてると大變暑いのれと優しき聲のして麦藁は無造作に下に置かれぬ。此邊には珍らしき桃色白の格別日焼も見えずフックリと下豊れな黒目勝のぱツちりしたどこかあどけない顔立では笑む毎に愛嬌靨が見えて洗立ての束髪は却て得も云はれぬ趣きがある、



面恥げに眼を水面にそらし居るも其口元の可愛らしさよ。予は所在無さに貴方達は何處へ行らしたのと話の糸口を出した、姉は餘念なく移りゆく景色に見取れて居た少年はハア僕等ですか遊行寺へ行ツて来たです、ソウですか僕も今し方行て来た處です小栗堂見て来ましたか、ハア見て来たです姉さんが感慨に沈んだ處サと彼は先程より默聴する姉なる人を其圓らなる眼でヂツと見つめた、姉はパツと紅潮しつ一寸弟を睨めた、舟子は喫へ煙管の悠々たるものである兩岸の蘆荻風に戦ぎ名も知らぬ草花の赤き白きが天鵞絨の如き緑草の間に入亂れて色彩を施せる風情のなかしきに堤を距てゝ一帶の松林打續き蜩の涼しげなるなど宛然繪の様である、舟の下るにつれて移り行く景色の面白さに暫しは我身も打忘られて扇も役なきものとはなりぬ鎌倉の將軍宗尊の親王の都に歸らせ給ふ道すがら「かへり来てまた見ん事も

かたせ川」と詠じさせ給ひしも思ひ出られて只此景を寫すべき筆才なきをかこちき。

藁屋を探り水車を迎へ何處ともなく眠そうに牛の鳴くなるも面白く天地閑寂傍人なきが如し、少女如何と顧れば是も四方の景色に恍惚として魅せらるゝものに似たりいつしか裾模様のやうな松林もつき果て、兩岸燦々と照輝く砂山に迎へられた、近く眞面に海を距て、黒く蟠れるは江の島である、昔西行が「柴松のくすの茂みに妻こひて」と詠じけん砥上が原はげに此川右岸一帶の砂濱なりけり予は龍口寺に上人の當年を忍ばんとて舟子してとある岸に着けしめ左様ならと堤に上れば、舟は早一搖り揺て三四間岸を離れぬれど彼等が人皆は尙ほ歌立てる渡頭にあるぞ嬉しき。

## （二）片瀬饅頭

龍口寺はもと鎌倉時代の刑場にして潮風荒るゝ處恰も鈴が森の如く白刄閃めき鮮血砂にまみれし悲慘の地なりき。さても當時鎌倉の禪門を荒らし、宗祖日蓮の忌憚に觸るゝや、文永八年九月十二日遂に刑せらるゝ由定まりて警固嚴々檻車は爰に運ばれけり、あはれ宗界の英傑もひし〳〵と縛められて今や刑臺に坐せしめられぬ、悲風松籟に響きて怒濤巖を嚙む時從容として沈黙瞑目早や劊手は刀を採て後げ廻りいざ御覺悟召され候へと刀を眞向に振かぶるや折しも一陣の怪風轟然として起り砂を捲き木を倒し一天見る〳〵墨を流せるが如く電光閃々迅雷耳に轟めくと共に怪しや刀身忽ち三段して空に飛び警護の衆怪にうたれて生色あるものなし、やがて鎌倉より早馬にて赦免狀は來りぬ難よくも日蓮は赦さるゝことゝなりぬ、世には是を龍の口の御難と稱し宗徒の殊に隨喜する所なり後龍口寺の立つあり此徒の來往織るが如く江の島と並びて日に月に榮ゆ今寺内に其刑臺たりしと傳ふる石あるも如何にや。後方なる七面山景致頗る佳眼下片瀬の一村を距て、江の島と對し左は腰越一帶、七里が濱等に取る如く右麓片瀬川を越えて遙に鵠沼烏帽子岩の勝を見る、若夫れ晩涼飄々松頭に訪づるゝ時白明等を廻りて此山に上らば金龜山下燈影星の降る如く覺えず快を呼ぶといふこは茶亭の談る所なり、磴を下ること六十三段眞筆の石摺など求めて寺門に出れば茶店櫛比して名物片瀬饅頭を鬻く、今しも蒸かけと見えて濛々と氣の立てるを切りと團扇もてあふげりこいつ旨そうなりと腰打かけつゝ先づ二十ばかり呉れよと云ふお持になりますかと問ふ何此處で食ふのだと瞬間に茶を啜りつゝ平げぬ、皮の光澤ありて薄きは郷里金澤なる新保屋の太白其儘餡の風味甚だ輕くして妙、東京にも斯な旨い饅頭はご座りませぬとは亭主の穴勝手前味噌にもあらじ今是を望して片瀬饅頭の旨さを忍ぶこと久し。

## （三）兒ヶ淵

白菊と忍ぶの里の人問はゞ思ひ入江の島と答へよの遺詠を殘し當年稚兒白菊の投ぜし處今や榮螺の壺燒世にしろく一本の正宗に半醉な

寂にして窓を鳴らすものはあれど一掬少年の節操に涙を垂るゝもの稀なり、峙嶂たる断崖を傳ひつゝ怪しげなる様儀によりて龍窟に入る。太古の洞穴は暗澹として寸ほの暗く岩際より滴る水の響さへ耳立ちて聞ゆるに奥の方より颯風の颯と吹きて冷やかなる、脚さ又云ふべからず、欄により俯瞰すれば狂濤渦巻き来りて岩礁を噛み霧と降り露と化し凄絶例ふるにものなし顧れば水天一碧水や空なる處白帆の静かに往来する風情これ一幅の活畫図——此ジナい、ラマ的風景に再會を期し松火振りかざしつゝ奥へ／＼と進みゆく、金剛界胎蔵界と選び巡りしはよけれど此邊六尺豁の我に取りて函谷關も物かは、頭と云ひ腰と云ひ泥まみれの體落とんだ二十世紀の忠熊が出來たり。



（四）壺焼屋

世に榮螺ほど不味物はあらじ壺焼の外は何としても食へず如何に其肉の小にして剛きものなるよ、——汝ほどつまらなき貝はあらじな唯俗人に愛せらるゝを以て足れりとす其殻の厳めしく立派なるにも似で其腸腑の腐り役立つ處のいと少なきは彼の、、、ハイカラと云ふものにも似たらんかし予は今日より汝に榮螺と名を逐らん曰く、、、ハイカラ貝何ぞ其名の今めきて相應しき事よと、、、、、くだらなき事思ひ浮べつゝもと來し路に上り行けば、ヘイ榮螺の壺焼召上て入らしやい名物壺焼は如何様と前後左右より黄色き聲にて攻立てらるゝに辟易して景色よき一亭に逃げ込みぬ、婢の茶を運び來たるに先づ最大の梨子を命ず婢唖然として去り大きなる物三ツ許、、、にナイフそへて持ち來り壺焼は如何様と小聲に云ひて促がす

栄螺か先づ御免だと云へば、彼れ蒼皇として去りぬ、百人よれば百人共之を命ずるならんに、是は又不可思議なる客の入込しものと思しならん腸風に涼を入れ梨子噛りつゝ眸を放てば、西南二面總然として前方に開け漫々たる水の彼方には箱根天城の火山帶宛ら黛の如く淡靄模糊の中に見えそめて、大磯小田原邊の長汀一々指呼の間にあり白帆千重の波間に上下し烏帽子が岩の青螺手に取るが如く見ゆるなど得も云はれず崖下赤合羽に似たる海人の逆卷く浪に投じ鮑とり來るを見るもなか〱興あり。

# 悲喜こも〱

鹿野生

僕が一家は妻と其の母との三人暮して、いと小さき家庭ではあるが、三人氣が揃ふて未だ一回も波風などの立ちしことなく、貧しき暮しはして居れど、まづ理想的の家庭と云ふ方であッた、それに妻が妊娠せるより僕始め母の喜び限りなく、男の兒ならば何と名けやうか、僕の父は正立と云ひ、僕は直司と云ふから、正の一字と司の一字を取りて正司とつけやう、若し女ならば、どんな名が良からう、雪子―いや雪のやうに早く消えて失せては面白くない、光子はどうだ、なんだかいやだ、さう〱光子と云ふ詐欺師があッたッけ、綾子はどうだ、それはよからうなどと三人寄れば色々と子供の生るるを樂しみに、待ちし甲斐ありて、去る五月の上旬に芽出度も玉のやうとはちッと誉め過ぎるかは知られど、親の目には如何にも顔立のよい男の子を娩した。

僕等一家の喜びは譬ふるに物なきほど、早速名を正司とつけて、制規の屆をも滿足に濟したが、四五日過ぎるも尚ほ黑色を帶べる大便を爲し、それに餘りに乳を戀しがる氣合故病障でもなきやと思ひ、直ぐに醫者を呼んで診察せしめしに、案の如く腸胃に故障あるから、乳は必ず二時間を置て飲ますべく、又度々湯を使はすべしとの事で、醫の命する如く、必ず一日には一二度の湯浴を爲さしめ、假令泣き叫んでも二時間立たれば乳を飲ませぬやうにしてやッたが、悲しや捗々しき模樣もなく、殊に四十度近くの熱を發し、其の泣き咽ぶ聲のいと憫れさに、どうしたらよからう、かうすればよからうと、心を碎けども言葉をきゝえぬことゝて、知るに由しなく、母などは夜も碌に寢れず、身は粉となつて碎くるとも此の赤子さへ快くならば厭はせぬぞと遂に、看護を怠らなかつた、僕も亦た同じ心で朝な夕なに思ひを煎め神に向て祈願を爲し、職務を濟まして途に就けば、歩きながらに心ははや家に飛び、正司は如何にせしや又泣きはせぬかと恐る恐る門を入りし位であつた。

所か其後追い〱快方に赴き、生れて丁度三十日目である、正司は僕の膝に――眠り居りしが、夢でも見しにや、いとも愛らしき笑を爲した、僕は之を見て飛び立つばかりに喜び勇んだが、其の翌日から更に全身に吹腫を生した、醫の話しには之れはフウシンと云ふもので、腸胃の惡き赤子には兎角出來き易いもの、左程に心配するに足らぬとの事、併

し大便をする度に之が爲め泣く聲は實にあはれに堪へ難き思をしたが、二三日を經て段々心地よく、あら嬉しやと思ひしに六月十一日の朝に至り、全身冷え行く樣子より、醫を迎ふれば、驚くべし心臟に故障を來し、壽命覺束なしとの事、僕は如何に大金を費すも、之が爲めに破産するとも、名醫を喚んで命をとり留めばやと、其醫に相談するに今は他に醫を喚ぶの暇なし、まづ應急の手當が肝要なり、カラシ湯を使はせ、湯タンポを以て身體を溫め、又手拭を以て頭部を溫めればならぬとの事故、かくする内、郵便の聲と共に置き去りし葉書を見れば、妻の姉の嫁し居る所より、義母に向け昨夜腹痛むこと頻り故、多分產氣附きたるなるべし、御多忙の所恐入るも何卒御出下されたしとのを、是れ兼て此くあるべしと期したる姙娠せる僕か義姉よりの使狀なり、母は此の葉書に接して、心平かならさるも今死に垂んとせる孫を捨て行くべくもあられば、反て之に向け「コトモ、キトク、ユカレヌ、ナラヌコイ」の電文を發した其の胸中の喜憂果して如何に。



此くて正司に向ては應急の手當を爲すも、少しも其の驗しなく、苦るしき息を時々つき居る内、悲しや四十幾日を一期として終に此の世を去られた、僕は暗夜に光明を失ないし如く、掌中の玉を取り去られた如くとは愚か、三十餘年替て覺えなきの悲を感じた。妻や義母は殆んど氣も狂はんばかりの嘆き悲み、實にいたはしく、それに死んだ赤子の屍を見れば、不思議や目を開き如何にも莞爾として笑ふが如く、少しも死したるものとは見えず、爲めに妻は死んだのではない、未だ息があるとて死屍に取り摑み、或は抱きなどするその憫れさは眞に斷腸の思ひ、僕は世も身もあらぬ心地にて、其の死體に向て此く云ふた、

正司切角此の世に生れ出で、僅かに四十日の命、父の顔も母の顔も祖母の顔も、得知らで逝かるゝのはさぞ〳〵殘念であらう、より多く此の父も汝に訣るるのは、殘念で〳〵堪へられぬ、併し人生は夢のごとく幻のやう

だ、何程長命するとも百歳を出でぬ、寧ろ味きなき此の世に生れ出でゝ憂き辛き目に逢はんより、再び空に歸するのはよいかも知れぬ、
と生きたる人に物云ふ如く合掌しながら云ふたが、流石に思ひに堪へ離く再びかく云ふた、
汝の靈魂はその身を去るとも、再び母の胎内に入つて、復た健全なる身體となつて是非〳〵此の世に生れ出て、此の父を喜ばしてくれ。
と後は云ふに忍びなかつた。かく歎き悲む内に、又もや一通の葉書が舞込んだ、急で見れば口は如何に義姉よりの手紙で、午後一時五十分男子を分娩、母子共に至て健全なりとの知らせ、何たる事ぞ、午前には僕が兒を失ひ、午後には妻の姉が しかも男の兒を分娩するとは、あゝ我兒の靈魂は義姉の腹中に乘り移りて生れしにや、同胞の間に於て同日に同性の生死を見んとは、實に不思議千萬、丸で小說か演劇的。
實に此の一事や浮世の狀躰を顯はして遺憾なきもの、世に死より悲きはなし、又生より喜ばしきはなし、共に喜悲の極端なり、此の兩極端を同時に受けたる義母の胸中や如何に、可愛孫に訣れて乍ち又可愛孫の生るゝを聞く、されど義母は此の喜びを以て、目の前に横はる死せる孫の悲みには換へ難きなり、天も無情なる哉、神も佛もなき浮世哉、せめて今一日も我が兒の死が遲くあらば、此の吉報を得て如何に喜び親ひたらんに、若し死せざりしならば、僕は我子と義姉の子と共に兩々相育つを見て、如何に嬉しう思ひ、子供同志も從弟として共に遊びもし往來もしたらんものを。
其れに奇しき事には、僕の國許にある實妹は、此の二月の十一日に女子を分娩したるが、丁度此の日の夕方其の嬰兒を撮れる寫眞が飛び込んだ、僕は一寸之を見て其の笑へお顏に思はず又笑たが、乍ち我兒の死せるを見て萬と云ふに云はれぬ感想が湧き出でた、泣き崩れ居る妻に見せじとすれど、既に妻はさとりて暗澹一種の悲みを顯はした、嗚呼神はどこ迄僕を苦るしめるであらうか。
翌々日此の愛らしかりし正司は、砂村に立揚る一片の烟となり、白骨となつて再び僕が手許に來た、死せば一片の白骨、化すれば一塊の土石是れ元より人生の免かれぬ所、僕が化骨の説は則ち此の感想を付けたものなれど、世に始めて子なるものを設け、始めて世に子なるものに訣れた僕は、凡腦凡骨と見え、悲痛煩悶を免がれなんだ、あゝ僕は愚はす四十餘日の長夢を見て、喜びもし悲みもした、浮世は是れ泡沫夢幻。

## 名流長逝

詩歌界の耆宿錦鷄間祗候從三位巖谷一六翁去月廿二日胃癌を以て薨去せらる、越えて三日青山新葬地に於て葬儀執行あり會する者朝野の名流江湖の逸士無慮一千數名ありき。

# 時事彙報

## 獨逸皇太子の御婚儀

去ぬる六月三日の伯林市は、皇太子維廉とメクレンブルヒ、シユウエーリンの公妃セシリアとが御結婚式を擧げらるゝの日とて、未曾有の賑盛を極め、御二方の麗しき御機嫌を拜し奉らんと都大路に集る市民は狂する許なりしと、今少しく當日の光景を記さんに、妃殿下には先づ御母后アナスタシア太公妃及び御附人と共に特別仕立の列車に御搭乘あらせられ、正午を以てレールター停車場に御着、それより獨逸皇室用の馬車に乘り移らせられ、歡呼湧くが如き巷を縫うてベルブウ宮に入らせられ、此處にて皇帝皇后兩陛下及び皇太子殿下其他の普魯士皇族に御面謁あらせられたり、兩殿下の御入輿式は、午後四時三十分より始まり、ヘルブウ宮よりチアガルテン、ブランデンブルク門ウンテル、デン、リンデンの中央並木大路を經て宮城に御入城あらせらる、道筋に黑山を築ける群衆は、口々に萬歳を三呼してこれを奉迎せり、當日市中を徘徊せる外國人は日本人を除けば寥々曉の星のごとかりしも此等の日本人はウンテル、デン、リンデンの大路に沿うて佇立し、行の過ぐるや、鬨を作つて一齊に萬歳を三呼し公私家屋の窓に倚つてこれを觀望しつゝありし衆を驚かせり、妃殿下の行列が宮城の程近く進ませられたるは、午後五時頃にして、宮城内の一砲臺は祝砲を連發してこれを迎へ、皇太子殿下には此時直に御下馬あらせられ、手巾を振ひて風を起し、拍手喝采雷の如き裡に妃殿下の手を携へられて、黑馬八頭曳の馬車に御搭乘あらせられたるが、皇后陛下の右方に御座を占められ群衆の歡呼に對して一々御挨拶ありたれば、伯林の市民は悉く此未來における獨逸君王の玉顏を拜することを得、各畏みてこれを奉迎せり、又セシリア公妃には伯林市民の此誠意ある歡迎を御覽せられ、玉貌特に麗はしく、いとも快活に見受け奉れり。

伯林市長はブランデンブルク門内のパリーゼル、ブ

ラワウにおいて妃殿下を奉迎し、同じくメクレンブルク公妃にして曾て普魯士女王たりしルイザの英傑を稱ふるの辭を奉り、群衆之に和して拍手喝采するや、妃殿下にはいと朗なる御聲にて次の如く御挨拶ありたり曰く『本日の盛大なる歡迎は妾が終身銘肝して忘れざる所にして、妾は伯林市の好意を永へに忘るゝことなかるべし』と、更に列の進みて、宮城の大階段の下に至りしとき、獨逸皇帝は親しくこゝに御待受ありて妃殿下をブランデンブルク室、およびナイツホールに伴はせられ、伯林政府の獨逸及び諸外國の賓客に御紹介あり、それより妃殿下には御庭園内にて近衛歩兵中隊長の御資格としての皇太子殿下に御面謁ありて後、エレクトルのホールにて皇帝皇后兩陛下、メクレンブルクシユウエーリン太公アナスタシア太公等、其他普魯士およびメクレンブルヒの大官に御面謁あり、夕景に至り諸賓客と皇室の御晩餐を俱にせられ、皇帝陛下には此時を機として女王ルイザ勳章を妃殿下に賜はりたり。

此日兩陛下兩殿下諸皇族及び諸賓客は共に新伯林寺院の祈禱會に臨ませられたるが、夜に入りて學生の提灯行列は點々として宮殿の高樓より望まれぬ、而して此日此盛大なる行列を見んとて朝來四方より集まり來りしものは、各辨當持にて馳せ集りたれども、其過半は行列の混雜にて途中に立往生をなせり、されば利を見るに敏き商人は早くも棧敷をしつらへて見物を收容せるが、一人の棧敷代安きは十五圓、高きは五十圓に上ぼり、道筋の家の窓一つの代價は實に三百マーク、即ち百五十圓の高價を示せりといふ、以て當日における儀式の盛大なりしことを想見すべし。

## 演說家ベル、カーチー孃

演說家として、著述家、旅行家として、はた米國思想界の大立物として名聲嘖々たる、ベル、カーチー孃は、今回日東新進國の婦人に握手せんが爲に來朝し、去月十四日横濱の日本婦人矯風會大會の演壇に立ちて

我國に於ける第一回の演説を試みられたり、今や彼女の來歴を我國の婦人に紹介せんに、

嬢は米國ミスシッピー州バーノンの一殖民地に生れ幸福なる生涯を送りしが、折柄起れる南北戰爭の影響を受けて俄かに悲慘の境遇に陷り、遂に妙齢の身を捧げて一教員たるの止むを得ざるに至りしが、蛟龍遂に池中の者ならず、六年の後は伎倆ある教育家として斯界の矚目する所となりぬ、次で一千八百八十九年更に進で時の論壇に現るゝや、其巧妙なる演説振は、更に彼の名をして大ならしめ、最もポピユラーなる辯士として斯界の歡迎を受け、遂に世界的の生涯を營むに至れり。

斯くて一身を世界の演壇に捧ぐるや、彼は大なる旅行家となり、米國の各洲は勿論、歐洲の天地一として彼の足跡を印せざるはなかりき、中に就て最も大なる成功は、倫敦のローヤル、アルバートホール、米國サルトレーキ市の大會堂に於ける講演にして、其他聯合基督教婦人會大會、基督教青年會、婦人倶樂部等、其他此種の會合には一として現はれざるはなし。

嬢の最も得意とする演題は「責任者は誰なりや」「法律上の見地より」「基督教市民」「デキシールに於ける昔時」等にして、南部奴隷生活の立脚地より立論せる大演説は特に痛切なるをもて有名なり。

又た嬢は神に對して殊に熱實なる信仰を有し、其一擧一動凡べて此信仰の土臺より出でざるはなく、人道の問題に關し、世界的の思想を以て世界民衆の上に其福音を傳へんとするは確に大なる感化を與ふるものなり、されど彼は其擧作一も女性の柔和を失はず、音聲朗朗にして風貌濶達、げに一個の偉婦人なり、嬢を最もよく知れる、ミシシツピーの知事ロンジ氏は彼に就て言ふて曰く「嬢は唯にミシシツピー洲の人たるのみならず亦た合衆國の人なり、實に近時嬢程多く知られたるはなかるべく、基督教的婦人の卓越せる模型の一なり」と。

# 妙齢の許婚

這般我邦に來遊せられたる米國大統領の令嬢、アリス、ルーズヴエルト孃及び、陸軍卿タフト氏の一行中にニコラス、ロング、ウオースと云ふ人あり、シンシンナチ州選出の代議士にして、父は有名なる法官、叔父は墺國劄駐公使にして、俊才の聞え高き少壯政治家なるが、此の人こそ米國大統領の婿君として、ルーズヴエルト孃と遠からず結婚の約ある幸運の人、今回の旅行は互に意志の交換をなす機會として造られたるものゝ如く、若し不結果に了る如き事あらば、ロングウオース氏は男にあらずなどゝ岡燒の評判取り〳〵なりと、双方の親達は昵懇の間柄とて出發前にはウオース氏の母及姉は屢々孃を訪問して萬端の世話を燒きしとなり、偖て孃の來遊も國務卿薨去の爲め豫定より後れたるが、別項記載の如く廿五日横濱港に來着、其より宮内省より差廻されたる特別仕立の滊車にて東上、濱離宮に投宿さるゝことゝ成り、翌日參内、兩陛下に御面謁あり、之に付き東京市民、實業團體、愛國婦人會等は盛んなる歡迎會を催して一行を迎へたり、今同行の人々を見るに男子組にはタフト氏ロング、ウオースを始めとして下院議長カンノン氏、及び元老議員十名、下院議員二十名、又た孃の隨行者はマベル孃、マクミラン孃、ルード孃等二十人程にて、一行は間も無くマニラに赴かれ、歸途再び我邦に立寄られて、暫らく滯在し、日光其他の名所を觀覽ある由なり。(別項參看)

# 華族女學校の卒業式

華族女學校卒業證書授與式は七月十日同校樓上の式場に於て擧行せらる例年皇后陛下行啓あらせらるゝ筈なるも本年は葉山行啓中に付特に皇太子妃殿下同校に行啓あらせられたり、又た參校の方々には東伏見宮妃周子、梨本宮妃伊都子兩殿下を始め奉り田中宮内大臣、花房宮内次官、菊池學習院長、德川家達公同夫人、島津公爵、同夫人、鍋島侯爵同夫人、山内侯爵夫人、寺内陸相夫人、小笠原主殿頭、足立調査課長、周布公平、三宅錦鷄間祗候、藤波主馬頭、工藤文事秘

書官、馬場伏見宮別當、栗原宮內書記官等あり其他各生徒の父兄等數十名の參列ありて東宮妃殿下御着車の節は數員生徒は門內兩側に細川校長、下田學監、淺岡幹事等職員は玄關に於て奉迎、殿下には御降車後直ちに細川校長の御先導に依り樓上便殿に入御、御少憩中、東伏見宮、梨本宮妃兩殿下に御對顔引き續き田中宮內大臣以下親、勅任官以上の諸氏に拜謁仰付られ其より校長の御先導にて生徒製品陳列所御巡覽あり、擧て式場に臨御、一同起立敬禮を行ひ生徒一同一齊に皇后陛下御製の「金剛石」及び「水は器」の唱歌あり、細川校長は全科卒業生廿四名及別科卒業生一名に卒業證書を又同、中小學各級及第生徒總代に修業證書を授與し奏樂中に校長の式辭及同科卒業生總代德川英子（德川慶喜公第十一女）の謝辭あり、再び生徒一同「秋の宮居」の唱歌を以て當日の式を終り、田中宮內大臣以下來賓一同復席し、參觀人及生徒一同退場、來賓には別室に於て立食菓の饗應あり、東宮妃殿下還御の節は田中宮內大臣、細川校長以下奉迎の時の如く玄關及門內兩側に整列して奉送したり尚は當日殿下には同校に若干の御下賜金ありたる由にて、細川校長は同日青山御所に參候し、親しく御禮を言上したりと、卒業人名左の如し

（全科及別科卒業生姓名いろは順）

池田　數子　　戸澤　敬子　　德川　英子　　大河内完子
岡澤　偕子　　奥村　房子　　勝　　伊代　　米澤　容子
吉田喜和子　　鷹司　房子　　中村　聡子　　村山　浦子
魚住まず子　　上原　鉦　　　上野ふく子　　野村　初子
松平　貞子　　福羽　文子　　淺岡　和歌　　櫻井多喜子
三田　千枝　　三井　ゆう　　毛利　亮子　　杉山　歌子
（以上全科卒業）
山內　壽子
（以上別科卒業）

## 刷新せる日本淑女學校

本鄕區千駄木林町なる日本淑女學校は今春來校務に就て一大刷新を行へる由聞き及びしが今回いよ〳〵其實施を見るに至れり、今其概要とする處を記さんにまづ本校に大學部及び高等女學部の二部を置て大學部を國文科家政科の二科に分ち共に修業年限を三ヶ年とし高等女學部を四ヶ年とす而して大學部に入るべき者は四ヶ年程度の高等女學校、女子師範學校並に是と同等の學力を有するものとなしたり、扨近者女子に向つて高等教育を授くるの可否に就ては世上に種々の議論もあることとなるが、そは兎も角我國に於て此種の教育希望者に向つて門戸を開けるものは只女子大學の外に此

の日本淑女學校あるのみ、女子高等師範は專門の女教師養成を以て目的とするものなれば元より之と撰を異にするものなるが、今淑女學校が微力を顧みずして敢て這般の大計畫を實施するに至りしは今日の女子教育界に於て聊か活目すべき事とせざるべからず、兎に角同校が一大發展を爲すは今後數年の後にあるべく、隨つて女子教育社會に特殊の光彩を放つべきも又後日の事なるべければ今は只其紹介丈に止めて其の內容の如何に就ては詳記せざるべし、本校の校長は小杉文學博士なるが教務主任として今回新たに就職されしは國文界の耆宿物集高見博士の令息文學士高量氏にして學監は夙に女子教育界に令名ある塚本濱子女史にして專ら家政科を擔任さるべしといふ其他各科擔任の講師三十五名內學士の稱號有る者十八名に上る、猶聞くところによれば同校の內部には有力なる貴顯等の後援を有すといふ。

## 慰問袋の奇緣

懸軍萬里の地にある兵士の身に嬉しきものは、內地の同胞より送る慰問袋なりと聞く、之を受取りたる時彼等は袋の口も解かずに先づ送り主の名所を兎見角見或は何子と優く記されし水莖に子の四五人もある古女房を十九か二十の處女と推し、凱旋の後は妻となし玉へと遠慮なき戰友の揶揄ふもあれば、五六歲の少女と聞き、我子の事の偲ばれて寫眞を送れと乞ふもあり、或は又眞の友達親類に屆きて興一入なるもありけるが此は又更に變りて、奇緣とやいはん妻が送りしものの夫に屆きたる不思議の譚あり、さても大分縣直入郡玉來村野田マサは慰問袋の催しあるを聞き、夫友市も出征して戰地に不自由し居れば思ひは人一倍にて、困るは誰も同じと屆きし人が便利なるようにと、心を籠めたる品の數々袋に納めて一同と共に送り出したるが、此ぞ神佛の御引合せ、右の袋は夫友市の手に落ち、何にも知らぬ友市は不圖解いて其と知り、嬉さ飛立つ計、手紙を出してかくと報じたるより妻マサは猶更ら願はぬ願ひの屆きて、餘りのことに嬉しなきに泣き出でたりとぞ。さきには國分操子女史が送りたる毛布の其の知人に屆きたる奇遇あり、今また此の奇緣を聞く、共に好一對の佳話と云ふべし。

# 避暑の栞

## 夏季と海水浴

海水浴は近年の流行となつて誰でも行くやうになつたのは至極喜ばしい事である、日本のやうに四面環海の國は外國にもない、殊にその海濱は白砂青松で四季の中和を得て居るので外人も羨ましがつてゐる位である、さればこの天然の浴場を打棄て置くのは勿體ない次第であるから成可く夏季は最寄の海濱で水浴をなし壯健なる國民とならねばならぬ。

### ○海水浴の効能

海水浴が身體に効能のあるのは第一海濱の空氣が清淨である、紅塵萬丈の都會に生活をしたものがこの塵埃の混らぬ清淨な空氣を呼吸し、酸素の澤山ある濃厚な空氣で肺を強くし、鹽氣に濕つてゐる空氣で鹽分を吸收するなど種々の効能がある、殊に海水浴は空氣よりも海水の溫度が低くなつてゐるから人の皮膚には極めてあたりがよい、波動にゆられるから自然に運動になつて食欲が進むといふ効能もある、海水浴の時季は七月下旬より九月の上旬までの間、即ち海水の溫度が攝氏の十五度から十七八度の間をよしとする、この度は丁度我々の體溫に比べると二十度の差があるので海水浴の際の寒冷作用は一時血液を身體の內部へ送つてしまふが爲め、皮膚を蒼白にするけれども浴後は其の反動で血管が擴張し、皮膚に紅を潮し、身體の溫暖を感ずる樣になる、海水浴の重なる効は冷水浴、冷水摩擦法と同樣に海水の含んでゐる成分、波及び砂の動搖から皮膚、粘膜を刺戟し胸筋の活動を誘ふの特効がある。

浴場、海水浴の場所は天然の風光、人工の設備、鹽分の濃厚氣候の好適、海底の淸潔である處ろを撰ねばならぬ、海水浴はなるべく大陸に遠ざかつた大洋中の孤島がよいが交通の便利がないから矢張內地でなくてはならぬ、但し不衛生の土地や河の落口などの海は海

水が不潔な上に河水が混じて鹽分が薄くなるから効能が少いのである。

○入浴の心得

虚弱者並に病者は始めは二日置に一回位にして段々馴れるにつけて毎日一回行ふやうにする、健康者とても一日三回までとするがよい時間は健康者にあつては三十分まで、虚弱者は三分乃至五分間、又入浴の時刻は午前八時頃と午後五時頃をよしとす又海水浴をするに當つて最初布片を海水に浸して全身を摩擦し、その後で水中に入るをよしとす、然らざれば海水の寒凉が暖かなる身體を襲ふ事あまりに急激ゆゑ戰慄を起すのみならず、皮膚の表面を著るしく収縮する等の事があつて其爲に血液内部に集注し浴後頭痛眩暈を起し且つ倦怠を覺ゆるがこれは甚だ健康に害がある。

○浴中の運動

浴者は水中に在つても常に手足の運動を忘れてはならぬ、元より游泳の術を知つてゐる人は自然手足も十分に動かして水中の運動を間斷なく行つてゐるからよいが游泳を知らぬ者は只水へ入つたばかりでは何にもならぬ游泳の代りに全身を摩擦洗濯、運動等をする要がある、斯くすれば呼吸も深くするやうになり總ての筋が皆動くから浴後疲れて食が欲しくなるのである。

○浴後の注意

既に海水浴が終つたなら必ず乾燥した西洋手拭を以て強く身體を摩擦し漸く水分を拭い去つた上で衣服をつけねばならぬ、衣服は砂の上に脱ぎ置いては日光に照されて熱くなり又は蟲などが付くからこれは木陰の安全な所ろへ置くやうに注意をせねばならぬ、熱してゐる衣服を着るのは毒である、況んや浴後熱砂の上に腹をつけて寢轉んで身體の熱するなどは實に不法な行爲である。

○海氣浴

海水浴の外に海氣浴といふのがある、海邊の氣候に浴するの謂で、單に海濱の轉地療養といふてもよろしい、海濱の空氣は常に濃く密にて温度が一定して急激の差がなく、この氣を呼吸すると感冒の常習を少くし

精神を爽快にする事其効は海水浴に劣らないが、此法を行ふには六週間以上を費さねばならぬ且つ純粹の海氣でなくては効が薄いわけであるから、大洋中の孤島でも選ばねばならない、海氣浴の効能は呼吸器病者に殊効がある。肺結核、慢性氣管支炎、百日咳、氣管支喘息等には皆効能がある。又海水浴の効能は、神經衰弱、慢性レウマチス、腸胃カタル、月經不順、神經痛等によく又腦充血、卒中の下地ある人及心臟病等に害がある。

## 夏と温泉

日本は火山國である、故に國內到る處ろに温泉のない處ろはない全國を通じて現に六百餘個所もある、で元來温泉が人體に益するのは何であるかといふに、それは泉中の成分を皮膚から吸收する處ろにある 即ち温保と、皮膚の刺戟作用と、鑛泉の內服との三つが温泉特有の効能である、温保の効は食慾を促し、呼吸を活潑にし、血行を盛んにし、發汗を誘ひ、安眠が出來て疲勞を醫する、又皮膚の刺戟作用は皮膚を刺戟してこれを强健にする、又鑛泉の內服は鹽類泉並に硫黃泉は體內の水分の流通を促し從つて排泄を容易にし、身體の汚物を洗滌掃除するの効がある、炭酸泉は慢性の消化器病に、鐵泉は諸種の貧血性に適するの効がある



### ○温泉の種類

泉中含有の成分はこれを大別して單純泉、鹽類泉、硫黃泉、

酸性泉、炭酸泉の五種としてある、

單純泉の適應症は婦人生殖器の慢性症、神經症、慢性腹膜炎によし

酸性泉は皮膚病、癩病、消化器病によし

炭酸泉は消化器病、貧血症によし

鹽類泉は痔疾、常習便秘、慢性症消化器、硫黄泉は慢性關節筋肉疾患、慢性皮膚病、氣管支カタル、婦人生殖器慢性症によし

○入浴を忌むもの

高齢者、嬰兒、姙婦、腦病患者、心臓病、脚氣、卒中の素因ある者幷に喀血の肺患者、月經中の婦人などは入浴を禁忌せればならぬ。

○入浴日數

温泉滞在日數は病勢體質、幼老の區別により又温泉の成分温度等によつて長短かあるがまづ三週間を通例とする又温泉保養者は必らず自分の體質及び病症を顧みて浴槽に至るや直ちに入浴せず、まづ一二日間は靜息し三日目あたりより入浴を試むる方、安全である。

○入浴の度數

これも人に依つて違ふ、通例一日に一二回、時間は朝八九時頃夕六時前後、又場合によりては寢しなに入る事もよし、又その時間も始めは概して短かく漸次に長めて十分間より二十分間位に止めて拔くのが適度である。

○旅宿の衛生法

近頃は衛生法が行屆いて夜具や、枕には白布を蔽ふやうになつたが、猶十分安全を期したならば面倒でも自分で枕の被と敷布團に敷く「シーツ」と掛夜具の衿を被ふ白布とを携帶して寢る時は之を被ふのが一番爽快である。夜具の襟被は大幅の長さ二尺位の金巾か、大なる西洋手拭がよろしい、枕被は小さい布片でよろしい。

○婦人の富士登山

近年は婦人にして富士登山を試むる者尠からず妙齢の女學生が同級者又は有志者一團を作して登山するなど年々増加の傾向あり今年も已に其登山期節に入りて總て暑中休暇ともならば此等の計畫を實行する向も多かるべき歟依て彼の野中至氏夫人に就て「婦人の富士登山注意」を聞くに

▲服裝 は矢張り袴を着け脚絆を穿べし富士の裾野を馬にて行く場合などには是非とも袴が必要なり又た半股引の類をも忘るべからず

▲携帶品 手拭、紙、手帳、鉛筆、洋刀位に止めて決して餘計なる品を持つべからず但し飢を凌ぐ麵包、渇を癒す氷砂糖梅干、他に多

少の藥を用意すること勿論なり石室の食物等は成べく口にせざるを可とす

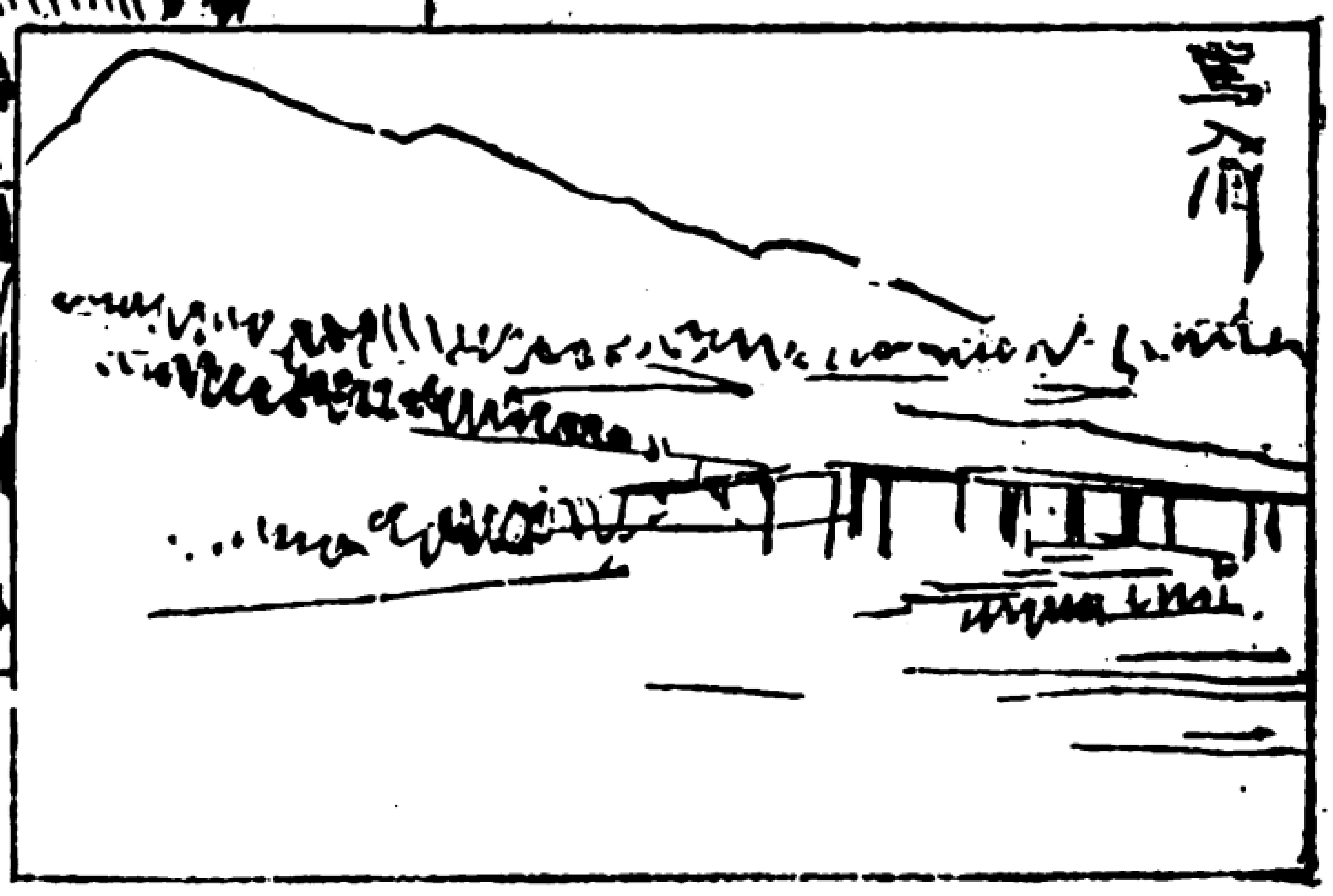
▲歩調　これは食物に亘で最も注意すべき事にて殊に婦人に於て其必要を見るなり然りとて別に面倒き事に非ず要するに彼の案内者たる強力の踏む足跡を一々踏んで行くべし強力は年來の經驗に據つて其人が健脚なるや又強壯なるやを容易に鑑別し其人に應じて或は疾く或は緩く歩むものなれば此れに從つて行けば間違無し又婦人は兎角に俯瞰する癖あれども此れは禁物にて大いに疲勞を招くの基なれば注意すべし

▲難儀の事　登山の途中婦人の難儀に感ずるは石室と便所にて石室は僅々二坪か三坪の狭き所に男女を問はず種々の人物雜居して眠るなれば妙齢の婦人には是尤も難儀なるべしと。

# 避暑旅行の栞

山清く水涼しき邊りに三伏の苦熱を避けて、心身を休養するの好時季とて各鐵道にては夫々





割引切符を發賣して、是等旅行者の便宜を計ることを勉め居れば、此間を利用して銷夏の樂みを執るは最も時宜に適ひたりといふべし。

△富士登山割引乘車券　夏を忘れんと欲せば高山に登りて、天外の冷氣に觸るに若くはなし、富士山の冷氣は實に避暑の目的を極端に達するものと云ふべく、又た山上心目を驚かすの奇勝少からざれば夏季旅行には上乘の地なり今鐵道作業局にて登山者の爲めに計る所を聞くに新橋、品川、横濱、横須賀等各驛より山北御殿場まで(及び靜岡より鈴川まで)の二割引乘車券——二

三等に限る──を發賣し、其の通用期限は新橋、品川、横濱、横須賀よりは七日間、藤澤、國府津沼津、靜岡よりは五日間なりとす。

△海濱行割引發賣券　又た武相海岸の凉味に浴せんとする旅行者の便宜にとて、新橋、品川、横濱、平沼の四驛より鎌倉、逗子、藤澤、茅ヶ崎、平塚、大磯、國府津等の各驛行に對して、七月十一日より九月十一日までの間、二割引往復乘車券を毎日發賣する由、其の通用期限は三日間なりと。

△海濱回遊割引乘車券　湘南の海岸を遊覽せんと欲する旅行客の爲めに發賣する所にして京濱兩地より鎌倉、逗子、田浦、横須賀、藤澤、茅ヶ崎、平塚、大磯、二ノ宮、國府津等の各驛間回遊の便宜あり、その通用期間は七日にして、賃金は左の如し。

新橋品川より　一等四圓、　二等二圓三十錢、　三等一圓十錢

横濱平沼より　一等三圓、　二等一圓八十錢、　三等一圓

江の島の風光を探り、大磯の海水に浴し、或は函嶺に奇勝を尋ねんと欲する者は之に據るを最も便利とす。

△日光遊覽割引乘車券　又た日本鐵道會社にては日光の清境に遊ばんとする旅客の便宜の爲めに、八月中の土曜日、日曜日、兩日に限り、上野驛に於て往復四割引の乘車券を發賣する由、其の通用期限は五日間にして割引賃金は左の如し

三等壹圓六十六錢、　二等二圓五十錢、　一等三圓七十四錢

但し此の乘車券を用ゐる者は、日光各旅館料を半減にし、又た小西旅館にても辨當料宿料等を割引く便宜あり。

△鹽原温泉　に行くには上野驛にて乘車、西那須野驛にて下車、其より四里にして關谷、此間は平坦砥の如き道にて馬車人車の便あり、關谷より一里歩きて目的地に達するものなるが、日本鐵道會社にては此の地に遊ぶもの〻便宜を計りて、往復四割引通用期限十日間の乘車券を發賣する由、賃錢は左の如し。

三等一圓六十八錢、　二等二圓五十二錢、　一等三圓七十六錢

△那須温泉　に避暑する者の便宜にとて、又た上野、黑磯間往復割引の乘車券を發賣す。

三等一圓八十錢、　二等二圓七十錢、　一等四圓九錢

△海岸線回遊乘車券　日本鐵道海岸線たる常州沿海を遊覽せんと欲する者の爲めに、發賣するものにして、此の乘車券を用ゆる時は、上野平間往復三割引の賃金にて、水戸より平に至る十六驛間を幾度も往復され十分銷夏の樂に飽いて後再び上野に戻るを得べし、通用期限七日間、賃錢左の如し。

三等二圓六十四錢、　二等三圓九十六錢、　一等五圓九十四錢

霞浦、水戸公園、大洗海水浴、助川海岸、勿來の關、湯本温泉等は此の乘車券の回遊區域中に屬す。

△房總海濱　總武鐵道會社兩國驛にては銚子、成東の各驛行の避暑客に對して、往復二割引、有効期限十日間の乘車券を發賣す、又た房總鐵道線に屬する稻毛、一ノ宮、大東、大原等の各驛行に對

して、兩國驛より通しの遊覽割引切符を發賣すると。

△多摩川回遊往復乗車券　甲武鐵道にては五人以上の團體に對して標題の如き乗車券を發賣し、賃金を半減すと。

△富士登山割引乗車券　又富士登山者の爲め、八王子まで三割引の乗車券を發賣する由なれば、甲州口より攀登せんとする者は、此の便を借りて八王子に至り、其より官線に乗替へ大月にて下車すべし、但し官線には割引なし。






# 夏時の流行品

▲岐阜提灯　夏の檐端に吊して風致と涼味を兼れたるものは、岐阜提灯なり、今年の相場を聞くに、普通朱塗絹張二ツ總附にて七十五錢より一圓五十錢、上物本塗金銀蒔繪及び松柾にて一圓七十五錢より七圓五十錢まであり、模樣は秋草模樣、鵜、狩、養老の瀧、月影等例年と餘り變化なけれど、時節柄陸海軍旗を交叉したるなど最も賣行よしと、又た「忠勇義烈」など書入れたるもあり、軍人家族へ盆の贈物とするに好適なり。

▲岐阜簾　といふもの、近年は岐阜提灯と共に賞用せらるゝ樣になりたるが、涼風吹入る軒端などに掛けては涼味一段を增して誠に優美のものなり、骨は提灯に用ゆる細きミガキにて編みし精巧のものなれば、上品なる事云ふまでもなし、種類にはカスミ簾、カノコ簾等ありて共に涼しき模樣入なり、無地にも甲乙の二種あり、幅三尺、丈六尺の物にて一圓六十五錢より二圓十五錢迄、其他綟子織の横へ五分明に竹を編み込みしものなどあり、價は八十五錢九十五錢同じく半簾にて五十

玉細、六十五錢なりと。

▲岐阜團扇　雄漆塗なれば水に入れて飛沫に濡き注ぐを得、誠に清涼無類の物なり、模様には鵜飼の篝火、養老の瀧のスカシ入り夏木立に日の出のスカシなど中々遜深し、其他雁皮紙張にて赤、白、黄など色分けせしものあり、價は趣附にて十五錢より二十錢までなりと。

▲洋傘　夏季に適當の婦人用洋傘は、絹張にて骨にアルミニユームを用ゐたるものなるか、白地に黒と白の縞子の縞又はオリーブ色など評判よく、柄は一體に長き方なり、價は九圓以上十四五圓也、又た桃色の絹張にて、同じ色のシフオニを裏に付たる物は、本年初めて出來たる新形なるが、最も好人氣なりと、價は十二圓より二十圓まで、又た子供物としては、異に桃色か紅と云ふ樣な色氣が流行する如し價四五圓前後。

▲履物　婦人向の履物には元祿形日和下駄、最も流行す其形は前が廣く後が狹く、鼻緒はオリーブ、古代紫、小豆色等の天鵞絨へ元祿時代の模様を織出したるものなり、價一圓五六十錢。又た元祿模様千代田草履と云ふもの貴婦人社會に行はる、表は緞珍綢代にて鼻緒は盤繻へ元祿模様を捫捺にして出したるもの好評なりと、價は二圓三十錢より三圓位まで。

●螢　　　　　　　　　　　　　　　　　輪島　杉下ふみ子

夜あまり暑いから妹を連れて庭へ凉みに出ました所が、今日鉢つた金魚の壺の草に、螢がぴか／＼光つて居ますと、「姉さんあれは金魚の目の玉が光るのでしやうれ」と云ふのですもの、本當にふき出しましたわ。

# ルーズベルト孃の入京

▲孃の平生　孃は芳紀まさに二十歳楚々たる佳人なり、而かして其氣品、其趣味正に米國理想的婦人なり、父大統領曾て孃に就ていへり、「予が愛孃は家内に閑居する能はず、安樂椅子に安坐するを好まざる少女たり」と、是れ孃が戸外運動に特殊の興味を有するをいへるものなり、孃は米國婦人の爲し得る殆んど凡ての戸外遊戲に熟練し、乘馬は其尤も好む所にして又尤も熟練せる處ろなり、氷滑りテニス、遊獵等にも多大の興味を有し、其術に巧みなりと而のみならず孃は又大に文學を愛し、文才を有し其自ら作りたる抒情詩も少からずといふ。

▲孃はルーズベルト氏の先妻アリスの遺子なれども現夫人との關係甚だ美はしく夫人の感化を受けて其身を奉ずる事甚だ質素にして常に好んで茶褐色の裝飾少き衣服を着すといふ、而かも社交界に於ける人望は甚だ大にして現に米國社交界の花と稱せらる、數月前夕

フト氏の比律賓行の時あるや嬢は共に東洋に巡遊せんと欲するの念切にして父に請ふて其許可を得歓喜禁ずる能はず直ちに教師を聘して熱心に西班牙語を研究し三ケ月にして自由に之を語り得るに至れりと其の聡慧知るべし。

▲船中　嬢が今回乗船したるマンチユリア號は太平洋滊船會社の持船にして一ケ年前進水したる二千八百噸の新式滊船なるが船内の設備壯麗にして整頓せること宛然洋中のホテルの如し、嬢はこの美麗清潔なる船室中の特別室三個を居間としつゝあり、ブリッヂ、デツキの上にありて、黄銅製の安樂寢臺備はり、いかに風浪荒くとも褥裡に臥す時は動搖も知らずして靜臥し得べき裝置なり、又枕元には不透明なる蓋を備へたる電燈ありて讀書をなすに適し寢室の一方には衣裳箪笥一棹及び長椅子一脚あり此の椅子に凭つて朝茶を啜るに便にせり、又寢臺の頭邊には白色の扉ありこれを開けば自用の浴室にして床は花甃もて碁盤形に敷き、陶器製の浴槽と當世の粋を集めたる一切の附屬品を備へたり、而して寢臺の後ろは書齋にして寫字臺及び豫備の衣裳とを備へたり、以上三室共大なる圓窓を穿ち紅色のカーテンもて蔽はる、これをひらけば太洋の眺望悉く双眼に入り萬里洋上の旅愁を慰するに足るべしといふ。

▲横濱に於けるアリス嬢　ルーズベルト嬢一行を乘せたるマンチユリア號の横濱港に入るや、折しも港内に碇泊し居たる帝國軍艦某號は登桁式を行ひ、マンチユリア號に向つて萬歳を三呼し、港内又滿船飾を施せる小蒸氣船頗る多く、海岸通より棧橋にかけて人の山を築けり、かくて午前九時と云ふ頃出迎船に擁されて船の棧橋に着くや、アリス嬢幷にタフト氏等は他の乘客と共に甲板上に出でゝ、歡迎の爲めに雲集せる橋上の人々を眺めつゝ、いと滿足の體に見受けられたり、此間アリス嬢は絶えずタフト氏の傍に佇立し、恰かも其父に甘へる如き態度にて喃々嬌舌を弄して止ざりき、間も無く船に梯子の架せらるゝや、一行七十名の人々中甲板の入口に出でしが、茲にて周布神奈川縣知事、

市原横濱市長、其の他宮内省、外務省等よりの出迎を受け、一々握手の禮をなし、導かれて梯子を降るに及び、横濱市は市原市長の令嬢をして、アリス嬢に一束の大花束を贈らしめ、婦人矯風會もまた同様の花束を贈りぬ、かくて棧橋上を歩み出でたる一行は、集まれる人々の視線の中心となり、手早く一行の風采を撮映せんとする寫眞師あり、白衣の裳を飜せる孃等の姿に見惚るゝ少女もありて、棧橋上は實に一幅の好畫題を呈せり。

▲新橋に於けるアリス孃　二十五日午前十一時半孃の一行新橋停車場に着する間も無く、愛國婦人會々長岩倉公爵夫人、同副會長鍋島侯爵夫人は進んで孃に花束を贈りしに、孃には滿面の笑を以て之を受けられ、續いて多くの歡迎人に一々握手して、洩なく滿足を與へたるは、流石に米國交際社會に鍛へたる交際術の如才なさを思はしめぬ、孃は打見る所芳紀廿歳前後に見受られ、容姿は稍々瘦形ながら、都雅秀麗の佳人にして、服裝は横濱着港前に船中にて改めたる物の儘にて、藤紫色のスコルト、白色のウエストにレースのネクタイを眞珠のブローチにて留めたる、瀟洒の裝ひにて、殊に其の優雅なる容貌と快活なる擧作とは天晴米國第一流の貴女たるを思はしめ、群集をして囑目時を久しうせしめたり。

▲公使館に於けるアリス孃　ルーズベルト孃には着京直ちに靈南坂なる米國公使館に入るや、豫て用意しあることゝて、階上の裝飾善美を極めたる一室に入りて旅裝を解くの暇もなく、訪問の內外紳士踵を接して引も切らず、午後六時過には芝離宮の晩餐會に臨む爲め、ポートマン孃、マクミラン孃、並にグリスカム公使夫妻達と共に馬車を驅りて芝離宮に赴き、かくて午後九時過歸館するや、孃を取圍みて談笑百出、盡くるの期なき模樣なりしが、明けて廿六日の朝は孃の未だ臥床にある時分より、既に各國公使夫人內外貴女紳士の訪問あり、室內は各種の方面より贈呈したる花環、花籠、繪畫、美術品等を以て所狹きまでに飾られたるに、孃は如何にも滿足の樣子にて喜の色を湛へ居られき、夫

より宮中の午餐會に參内する爲め、盛裝を凝らされたるが、流石に米國交際場裏の花形と呼ばれる程ありて、容貌風采の美は東洋婦人の其を以て律す可からず、而も凛たる態度には人をして自ら尊敬心を起さしむるものあり。

▲夜の賑ひ　米國貴賓到着の二十五日より二十七日にかけての市中は各戸に日米國旗を掲して歡迎の意を表したるをもて、非常の賑を呈したるが、殊に二十五日の夜は全都狂する許の賑ひにて盛觀を極めたり、先づ芝離宮に於ける花火を始として、木挽町三四丁目の有志連は樂隊船を芝濱に浮べて花火の御催しに興を添へ大通りにては例の三井のイルミチーションを初とし、新橋際の博品館、エビスビール、天賞堂、日報社其他の家々も大小の花瓦斯やらイルミチーションを施し、東京電車線の要所々々には電柱裝飾を施し、又た東電、及街鐵の兩社は例の裝飾電車を運轉したるに、之を見んとて集ふもの線路の兩側に溢れて、其通行の度萬歳の聲を揚るなど、祝捷會の時にも劣ぬ賑ひ方なりし。

▲東郷大將夫人と握手　貴賓を新橋に歡迎せし愛國婦人會員百九名は廿五日夕刻更に島津公爵夫人、伊東海軍大將夫人、大山大將夫人等總代となりて孃等を其旅館なる米國公使館に訪問し。親しく孃に面談せり、然るに此來訪の貴夫人の中には世間の偉人東郷大將の夫人も在りとの事を知りたれば孃は大に喜び大將の偉勳を頌するの名譽を得たりとて折から同館に集ひ居たる新來の賓客等吾れも〳〵と入來り一同に夫人を紹介せしに御紹介までもなし吾等いかで世界の偉人たる東郷大將の夫人の面影を知らであるべきと熱誠籠めて握手をなし扨て交る〳〵挨拶をのべたる中に年長なる某上院議員は肅然として述べていふ樣日本の婦人はすべて口數尠くいと愼み深き其裡に一種いふべからざる奥床しき節のこもれるぞ殊に慕はしき、抑も開戰以來日本帝國の態度は誠に此婦人の性格に一致せる處ろありと繰り返し日本婦人の淑德を稱へたりき。

# 閨秀俳句

（課題）虫干、夕立、夏羽織

翠庵松花選

（天）

虫干や衣の香匂ふ大廣間　越後古志郡十日町村存心堂　加納さだ子

纎巧に流れず陳套に落ちず格高く氣雄にして自ら大家の風あり

（地）

村長や靴新しう夏羽織　長崎市下筑後町四番米田方　月宮はる子

新しき靴と夏羽織にて意氣揚々たる村長の擧止宛然目に在り平凡なる如くにして高手にあらざれば作り得ざる所なり

（人）

まい〳〵に夕立晴るゝ花藻哉　松山市小唐人町一丁目　池田澄江女

天然の美趣を捉へ得るの手腕凡ならず

秀句

辭誼すむや共に脱ぎ去る夏羽織　山田　森　とくの

よき衣の裾曳く妻や紗の羽織　岩代　本多せつ子

夕風や折目正しき夏羽織　神戸　愁園女史

兄を待ち針のすゝみや夏羽織　山田　濱田とく子

拜領の昔偲ぶや夏羽織　女子大學　細川とし子

去年の皺伸びぬ儘や夏羽織　名古屋　篠田浪子

夏羽織醫者殿通る奥座敷　仙臺　齋藤しげ子

風涼し衣桁にかゝる夏羽織　横須賀　堀田とみ子

夏羽織忠死の夫のかたみ哉　埼玉　神保歌子

戰死した兄のかたみや夏羽織　御嵩　鈴木曾夫子

夏羽織吹かれて行くや橋の上　能登　杉本ふみを

風のまゝ疊み込みけり夏羽織　横須賀　高橋つね子

片寄れば目立つ脊筋や夏羽織　山形　加藤よし子

月影がさすや衣桁の夏羽織　京橋　太田秀子

村葬や列肅として夏羽織　大阪　高橋美代女

夏羽織ぬがせて客に薄茶哉　磐城　高山要子

夏羽織肩で風切る力士哉　大阪　垂柳女史

先生はこよりの紐や夏羽織　羽後　柴田春子

夏羽織風を通してたゝみけり　牛込　山路光子

夏羽織脱ぎけり父が碁のかたき　京橋　須貝きしの

印籠は櫻なりけり夏羽織　伏木　野口たつ子

腰にさす扇見えけり夏羽織　信濃　松尾節子

夏羽織紐重もさうに見えにけり　遠江　宮部ますゑ

故郷の藍のかほりや夏羽織　磐城　すみれ女史
蠶番者やしかつめらしき夏羽織　越後　小菅まさ子
夏羽織楚々たる君の來ましけり　讃岐　松田久代
藩公を出迎ふ人や夏羽織　前橋　行田あい子
會釋して涙拭きけり夏羽織　小石川　田淵頼子
兵兒帶のシミはづかしや薄羽織　大和　蕣子
業の所作ものものし夏羽織　鎌倉　たか子
凱旋の夫待つ針や薄羽織　淺草　本多美那子
ものゝふか病衣の上や夏羽織　新井　とし代
川風にはらむ馬乘や夏羽織　上野　富永蕣美殿
夏羽織着そめし後家や肩ほそき　京都　三木梅子
汗の身にしかつめらしき羽織哉　下谷　榊原きん子
雙肩に荷ふ禮儀や夏羽織　丹波　並河つる子
先生や絽の羽織着て代診す　仙臺　鈴木道子
脱ぎ捨てゝ船に忘れぬ夏羽織　鳥取　田子貞代
夏羽織折目正しう朱鞘哉　常陸　香取經
自轉車の風孕みけり夏羽織　盛岡　工藤榮次郎
椽先の薄き羽織や風標し　牛込　藤野鐵子
年わかき切髮後家や夏羽織　下總　林はな子
御殿將の着こなしぶりや夏羽織　越後　鈴木雪子

## 入選二百句

讀誦む聲の顫ふや絽の羽織　名古屋　久田宗代子
夏羽織脱いで忘れて戾りけり　千駄谷　川井常子
夏羽織着て詣でけり招魂社　小石川　浪花
夏羽織都にまされる京育ち　磯部　かなへ
背子は今ます野の原や夏羽織　篠山　古川義子
三日月や涼しく見ゆる夏羽織　福岡　武内たき
夏羽織見かへる風の涼しさよ　埼玉　杉浦彩惠子
涼臺に置き忘れあり夏羽織　羽後　菊地隆子
夏痩の肩ゆき長き羽織かな　熊本　林田ひへ子
風まで透て見えけり夏羽織　大阪　河邊義江
公園をそゞろ歩きや夏羽織　八幡　松原雛子
夏羽織醉臥に皺を生じけり　但馬　大西芳枝
大粒の雨亂點す夏羽織　青森　水野雄三
夏羽織芝生に脱ぎて遊びけり　明石　中井さく子
海老茶ぬいで夏羽織着る朝かな　金澤　阪田よし子
夏羽織衣桁より落ちて卓の上　札幌　吉井如水女
夏羽織袖すれ合ふも蒸し暑し　杵築　宮崎たへ子
夏羽織二人連なり涼月夜　津山　中野米子
虫干や母が綴りし歌の卷　見付　高林多賀子
虫干のふみに蠹の栞かな　山田　出口蘋花女
虫干や抽出し匂ふ鬱金香　長崎　月宮はる子
虫干に祖先を偲ぶ軍袍かな　姫路　米澤榮子

虫干や床へ置きたる系圖箱　大阪　高橋美代女
虫干に母の振袖見たりけり　牛込　山路光子
虫干やおのが着物を數へつゝ　大阪　角川ゆき子
虫干や古物の多き深山寺　伊香保　富永壽美龍
虫干や妖術に懸けし錦繪　信濃　竹鼻晴女
虫干の鎧の櫃や御感状　栃木　林田ひへ女
虫干や葛籠の底に破鏡　駒込　西貝古代子
虫干や戀も老いたる文の殻　近江　大隅つゐ子
虫干や小町が歌に塵起る　平塚　今井豊子
土用干幼き時の清書帳　長崎　光安靜子
虫干に薙刀を振る老女哉　成田　大竹てつ子
虫干や老僧やなら語るらく　能登　花子女史
虫干やむかし畫繪の六歌仙　下總　山崎ひで子
寶物の書畫三千や土用干　名古屋　久田家代子
虫干の一日思出多き身よ　東京　飯塚初音子
虫干や揮りぬいて見る須磨の巻　弘前　入戸とよ子
虫干や一巻缺けし湖月抄　本郷　一條とし子
虫干にもろき縅や獅子頭　山形　米倉紫子
鎧着て若衆歎くや土用干　伊勢　辻芳子
みまかりし妻の小袖や土用干　仙臺　柳田はなよ
虫干に打ちて笑ふや陣太鼓　米澤　土橋榮子
虫干や書を讀る煤け繪　長崎　松岡數子
虫干や夫婦の衣ならびけり　一ノ關　阿部ちう子
蘭麝ゆ虫干終へて鐘の音　赤阪　鳩女
虫干や靜君樣の御感状　下總　西山都子

---

虫干に人形の帯解く子かな　大阪　一葉
虫干に又新たなる涙かな　越後　坪井わか子
虫干や様にならぶる家の歌　伏木　田口あき子
虫干や出し残されし弓一つ　下谷　石渡とし子
虫干して元祿美人見出しけり　伊勢　三重澤子
虫干の圖書目錄も作りけり　小石川　秋元濟子
虫干や世になき人のはれ衣裳　博多　磯野いち子
振袖に昔偲ぶや土用干　筑前　大坪貞
虫干やるすなる人の書物箱　丹波　靜野女史
分捕の軍旗操たり土用干　名古屋　代之助
虫干に亡き母の寫眞見出しけり　大阪　三雲のぶ子
今更にかたみ偲ぶや土用干　大和　渡部常子
虫干や思ひ出さるゝ古し事　函館　高橋ひで
虫干や先皇の筆の慕はしき　下總　森久子
虫干や亡父は昔を偲ぶらん　常陸　香取紅
虫干やかたみに偲ぶ親の恩　横濱　大村初子
虫干に亡き父思ふ羽織かな　岩代　猪野はる子
虫干や小猫のじやるゝ紅しごき　新宮　坪井都子
日の當る箪笥の底や土用干　山形　加藤よし子
虫干やよく風の入る南窓　山形　加藤盛子
太刀一つ話しの種や土用干　牛込　藤野鋭子
虫干や人手にかけぬ雛の箱　東京　川井常子
虫干に人目引くなり戀慕の書　京都　服部絮絮代
虫干や被布着し人を偲ばれつ　山形　關みさを
虫干に坊やの旗も干されたり　越中　小山さほ

虫干や袂から出る花の塵
虫干や十七文字は師の記念
虫干に亡き母君をなつかしむ
虫干や亡き母思ふ黒小袖
虫ばみし書像尊き御虫干
虫干や祖父の秘蔵の陣羽織
虫干や風鈴の音の絶えぬ日に
虫干や昔を語る武士の果
子に語る父の遺筆や土用干
虫干や父の勲を兒に語る
虫干や亡き妹の一葛籠
虫干や家重代の陣刀
虫干や軍服の主今いづこ
虫干や愛らしげなる坊の顔
虫干の香書に昔の匂ひかな
虫干に母の秘事聞きにけり
ぬしは今韓國の静や土用干
虫干の中より出たり失せし物
虫干や小袖振袖品定め
虫干やいくさのにはの玉づさし
虫干や戰死の兄の古兵書
虫干や歌麿の繪をまれて見る
虫干や泣きしことある四書五經
氣の付かぬ隣の書や虫干して
虫干に祖母の嫁入り話し哉

鳥取　田子　貞代
大阪　泉　りせ女
奈良　高橋　銀子
名古屋　友清　晴子
金澤　木原　蕗子
同
京都　木村　八重
木曽　露々　女子
信濃　藤巻おつな
越後　杉山　雅子
田邊　久保伊和子
淺草　田邊露々枝
横濱　齋藤まさ子
長崎　松岡　敷子
京橋　太田　秀子
仙臺　齋藤しげ子
横濱　水島とよ子
名古屋　奥村　晃子
尾去澤　清井　松子
相模　眞田　縫子
越中　中村せき子
弘前　西村まさ子
駒込　富田つな子
加賀　松原　麗子
下總　林　はな子

---

虫干や月雪花に着し小袖
虫干に昔を耻づる清書哉
本山の虫干御經ばかりなり
虫干や一行二行讀みながら
虫干に母は昔を聞かせけり
虫干や家代々の陣羽織
虫干や今年は殖えし衣紋竹
虫干や侯爵様の系圖哉
虫干や親の秘藏の大刀もあり
虫干や祖父のいろはの手本まで
虫干や血染のやじり床の間に
血に染みし服や譽の土用干
虫干に金襴多き古刹かな
拜領の御紋ゆかしや土用干
虫干や去年の夏の旅日記
虫干やかたみの衣抱きつゝ
虫干やまだ血の紅き戰の旗
虫干に思ひも寄らず戀の文
虫干に思ひ出すなり持參錦
島田して海老茶虫干す身となりぬ
夕立の晴れて青葉に入日哉
紫鹿の露らんとする夕立かな
夕立や出水見て居る橋の人
夕立や庭一面の麻畑
夕立に差向ひけり君夫婦

三田　鈴木二葉女
筑前　安部たき子
越前　如月　葛子
大阪　村上　照子
靜岡　荻原なを子
羽後　大澤しん子
福井　川崎　重子
阿波　久米　哲子
長門　梅田　染子
深川　安田しま子
小田原　内野　鈴子
市ヶ谷　小林　鶴子
越後　逢坂　榮子
石狩　加藤　銀子
横須賀　堀田あさ子
大和　川村こよ子
讃岐　後藤くめ子
四日市　涼風　女史
播磨　大西　敏子
和歌山　大野　幸子
伊香保　富永壽美緒
長崎　月宮はる子
能登　月下富美子
栃木　新藤ますを
神戸　愁園　女史

針やめて歸り待たるゝ夕立哉　大和　辻　倚子
夕立をやます女生や仁王門　四日市　廣瀨　秀子
夕立に辻堂の繪馬ながめけり　仙臺　齋藤しげ子
夕立は跡なく晴れて蟬の聲　下野　包　子
夕立に暫し宿かる道者哉　津市　太田みつ子
夕立や假りの宿りの一里塚　美濃　吉田　露子
夕立や日傘もありて京の町　成田　古矢よし子
夕立の跡や月夜の沖の島　大阪　濱塚芳惠子
夕立や乞食の濡れて辻の堂　山形　岡　まさ子
夕立の軒賑がしき露店哉　京橋　太田　秀子
夕立晴れて緑したゝる庭の面　磐城　吉田つる子
大瀧へ雲の落ち込む夕立哉　飯田　羽生きの枝
夕立に晝寢の夢は覺めにけり　下總　岩藤　滋子
涼しさや夕立晴れて磯の月　淺草　田邊せつ子
夕立を集めて高し瀧の音　京橋　須貝きしの
砲烟は止んで忠死に夕立哉　和泉　松井千代子
稻妻と瀧の鳴り出す夕立哉　伏木　田口あき子
夕立の晴れて美くし虹の橋　鐵町　長谷川加壽枝
夕立や古歌思ひ出て庵の軒　下之關　世數　敏子
夕立のあとや小笹の風涼し　長崎　吉田　竹子
夕立を避けし柳や石地藏　和歌山　紫　子
夏山のみどり涼しき夕立哉　大阪　三木つや子
夕立や雨宿りする陰もなし　境町　藤沼　花汀
夕立の寄し野中の一軒家　御嵩　鈴木曾夫子
夕立や廣野を急ぐ武者十騎　讃岐　横井伊與子

學童の濡れつゝ歸る夕立哉　播磨　淺原志奈子
夕立や百萬石の田の青み　小樽　阿部きみ子
夕立や驅け込む野番小屋　下總　矢野とよ子
夕立に裏戸を拔ける女かな　小樽　櫻井　夏子
夕立の後は涼しき小窓哉　播磨　山下　郁子
夕立や晴れて涼しき庭の松　横濱　なつ　子
夕立の跡や月夜の物靜か　大阪　小寺　祥子
夕立や法師木陰にたゝずみぬ　尾去澤　浦井　松子
夕立や迎への傘は入らぬ空　遠江　奥野みつ子
夕立や自轉車乘りの馳せ違ふ　越中　中村せき子
夕立の名殘や蟬の聲涼し　丹波　笠河つる子
夕立の晴れたる庭に夕日哉　御嶽　寺田たまき
夕立や駿馬鬼鹿毛嘶きぬ　四久保　石上　久子
夕立や神輿昇きゆく砂河原　名古屋　久田家お代
夕立の過ぎて涼しき磯家哉　名古屋　舟　女
夕立や暫しは語る人の妻　下總　山崎　英子
緣日の人出盛りを夕立かな　伊勢　三重　澤子
夕立や暫し賑ふ地藏堂　和歌山　森　繁尾
繪行燈に夕立つ村の祭かな　松山　池田　文代
夕立の晴れて涼しき京の町　桑名　柴田　桂子
夕立や牛に繫つ居所の徒　讃岐　松田かつ子
夕立に水溢れけり金魚鉢　京橋　奥村千代子
夕立や日傘の紅を流しけり　筑後　安武　素香
夕立や晴れて涼しき蟬の聲　桑名　松野しげ子
夕立の晴れし樹の間や星の數　蘇澤　平野　紫匂



小說

# 處女日記

田口掬汀

「處女日記」は佛國の作家ヘレビイ氏の「オンヂラン、マリアヂユ」と題せる短篇を飜譯したものです、此一篇は決して名篇傑作などいふものではない、が私は讀んで非常な趣味を感じて、特に「女學世界」の讀者諸君に是非お目に掛けたく、飜案に近い反譯をしたのです、と云ふのは此處女の世間に對する考へ――喧しく言へば處世觀といふものが、偏へに逸樂を欲し大慾を求めて、何の勞苦も拂はずに高い安らかな生涯を送ると云ふ、虛榮心と利己心とで固まつて居るので、我國一部の處女また此類型たるを免れぬのであるからです、故に此日記を飜譯するのは即ち我國の處女――殊に女學生の或一部の思想を反映するものだ、と考へて甚だ不得手な飜譯の筆を執つたのですから、豫じめ飜譯の趣意を御諒知なすつて、御閲讀を願ひ度う存じます

〇十一月廿五日　朝十時

私は熱心にソナートの譜を練習して居ると、不意に母上がお入來になつた、見れば美々しい外出服を着して在つしやる、私は驚いて眼を大きくしました。十時前のお起床とは從來例のない事、日曜の午後一時の禮拜にさへ、毎時後れ勝ちの御參詣なので、屢時寺院の僧正に向つて、『禮拜時間を今一時間延べて下さるなら、宗教も申分なしのものになりますが……』などゝ戯れたこともあつた、左程朝寢癖の母上が今朝は如何したのであらうと、私は喫驚顏して伺つて

見ると、既早一廻して來たとのお答へです、私は倍々驚きました

母上は先づ私が欲しがつて居た毛糸を買ひに行つたのだと言ひ、今夜は三輪家に音樂會の催しがあるから同行せよ、平素斯道に趣味を覺えぬ父上までも、御列席なさる筈だとのお話、獨合點で定めて了つて、着物のお指圖までなさるのです、私は異議なく仰せに從ひますと、母上は滿足さうに點頭いて、急がし氣に室を出られました

夫にしても訝しい事の態、例にない早起をなされたのさへ不思議なのに、其破格の御起床は私の買物の爲だとは、益す合點の行かぬ話、之には何か深い仔細がなければならぬ、彼か是かと思悩んだ末、私は或一つの考へが稻妻の如く腦底に閃めきました、結婚談！結婚の見合の爲！必ず之でなければならぬ……と

次第に時間が經つて、樂しく恐ろしく而して行きたいやうで、行き度くないやうな其見合の刻限が近づいて來る……母上の狼狽は又格別なもので、午飯も召食らぬやうな御様子、靜然として居られるかと見れば、不意に起つて歩かれる、私の身裝の手傳ひにといふので、懇意な呂輪瀬夫人を招かれるなど、此見合世の常の事とは見えぬので……………

私は此有様を見ながら心の中で呟きました——廣い世界に私の母上ほどの好い親が又とあらうとは思はれぬ、世間の親といふものは、大概親權を振廻して、終生の大事を五六分間に定めて仕舞ふと言ふ有様、其様な親を有つた婦人は實に憫然なものだ、夫に就けても、斯う云ふ善良な母を有つた私は、決して輕卒な行爲はされぬ、男の容姿や口前の美くしいのに打込んで、遠い將來を忘れるやうな事があつてはならぬ

いや大丈夫！私は去年の春以來既に五人の希望者を斥けました、中には一時恍惚するやうな美男もあつたけれど、其門地、資產、社會上の地歩と云ふものが、何れも私が百年の大計を定むるに足らなかつた爲です

私は未だ二十歳にならぬ……辛と十九になつたばかりだが、既に五人の男を失望させる程の強い意志を有つて居る、私は何處までも沈着に且つ冷靜にして、熟々對手を觀察せねばならぬ、斯うして靜かに日記に筆を運んで行かれる程だから、夫も大丈夫出來ると信じます

「我が婚姻」

此一語は此日記の初頁を飾る文字で、私が大切の生涯を定むる尺度です、既に斥けた五人の青年も皆尺度に合はなかつたので、今宵現はるゝ第六の候補者も、同じく此尺度で計られるのです

多幸なる候補者よ、姿を整へ擧動を愼みて、私の尺度に當り給へ、而して嚴密精細なる私の試驗を受けられたまへや。

○十一月廿六日　午後四時

心地の好い間に昨夜の事(見合の顛末)を書いつけるとしやう

私は匆々に晩餐を濟して二階に上り、長い時間と多くの注意とを費して身裝を整へ、二時間半ばかりの後に母上のお居室へと下りました

見れば扉が半ば開いて兩親の話聲が聞えます、立淀んで耳を澄せば父上の聲で

「それ程の必要もなからうぢやないか」

「いゝえ」と母上は聲に力を入れて「必要がないどころですか、所天がお在下さらなきや迚も出來やしませんよ」

「何も出來ない筈はないさ、彼の青年には始終倶樂部で會つて知つて居る、聞けば百合子(私の名)が馬に乘つ

てるのを見て、それから太く打込んで今度の申込をしたさうぢやないか、それで既早澤山と云ふものだ、お前と百合子さへ居れァ、外に誰も列席するに及ばんと云ふものだ」

「ですけれど其處には又色々と都合がありますからね」

「都合がある？　然うかな」と些時考へて、「可し！　爲方がない、行かう〳〵一緒に行かう」

と暫く話が絶える

昨日の騎馬の姿を見てから申込み！　誰だらう？　若しや私が思つて居る丈二さんではなからうか、あゝ如何かして彼の人であつて與れゝば可い…………

私は此樣な身勝手な事を祈りながら、兩親と馬車に同乘して、十時半といふ頃に三輪家に着きました、お氣の毒なは父上、嗜好がなければ何の面白味とてもない筈、それに多勢寄つて賑はし合ふなら格別の事、見れば僅々二十人足らずの小人數で、誠に詰らぬ夜會なのです

私等が着すると同時に、一の諧なる平調な曲が始まりました、それは誰でも合せる事の出來るやうとの注意なのでせう、私は温和に一隅に陣取つて、密と戰場の光景を見渡しますと、多くは老人若くは半老人、艶の失せた、糊の拔けた、羽毛の捲れた人物ばかり

此處ではないと眼を回した、と丁度私の反對の側に四人の青年、疑ひはない目指す敵は正に此中にある……

併し當の對敵は何れであるかは未だ判明らぬ、私は心の中で呟いた……何でも最も熱心に私を見る人が其であると、一度下げた頭を擡げたが、八個の眼球が同じやうに光つて、私の顔に集つて居る、ハッとして顏を外向けて又試みる、眼球は倘も光つて居る、幾度試みても同じ結果を得るに過ぎないので…………

丁度幸ひ、程なく小憩の時間が來たので、私は母上を促して席を放れ、廊下の方を彷徨しながら密と問ふて

見ました

「お母様、何の方が然うなのか教へて頂戴な」

「ほゝほ、知らない振りをしてるわ、お前疾に見當が附いた筈ぢやないか」

「あら私見當なんざ附きやしませんよ、教へて下さいなお母様、音樂が又始まりますからよ、さ早く教へて頂戴てば」

「ぢや教へて進げませう」と室内を見て、「そら彼處の額の下に在つしやる方、ほらお父様の方へ被行つた彼の方、惡い事はありませんわね」

「何惡い事があるものかね」

「だけども少しお口が大きいのね」

「些とも大きい事はないぢやないか」

「いゝえ大きいんですよ……だけどもマア可ござんすわ、而してお名前は何と被稱るの?」

「圓手主馬子爵と被稱るのよ、御身分は其通りだし、加之資産だつてマア中分なしだし……」

「お母様マアお止なさいましよ、早く席に復りませう、今度はモザール(樂名)なんですよ、そら始まりました」

私は又母上を促して隅の方に席を占めて、深い考へに沈んだのです

身分は立派なり資產は裕かなり、口の大きいのは瑕疵と云へば言はれるけれど、夫も然程大きな疵とも言へぬ、加之圓手子爵夫人といふ名稱が氣に適つた、之は如何しても承諾せねばならぬ縁談だ

此様な事を考へて居る間に二番の音樂が終へて、私は兩親の傍へ呼ばれたのです、母上は熱心の面色で萬事好都合に捗取ること、彼の家柄の正しいこと、彼と父上と一應相談のあつた事など話された上、此處で簡單な

對面をするやうとのお話、招聘の役は父上が引受けて早速探しに赴かれる

程なく、父上は未來の良人を伴れて來られた、一同面を合せて坐つたが、何れも言葉なに控えて居るので、誠に手持無沙汰の有様でした

私は何程でも見られるけれど、彼は私を凝視する勇氣がなかつた、私は注意深く話をしかけて、色々と例の尺度で計り始めた、聞けば彼は巴里が一番好き、田舍に長く住ふことや、銃獵に時間を費すなどは大嫌ひだと云ふ、私は此銃獵嫌ひといふのが太く氣に適りました

全體銃獵といふものほど女を苦しめるものはありませぬ、何故と言つて此遊びは、良人を終日奪ひ去つて散散に疲れるせて、日が暮れてから返して寄越すと云ふ意地の惡い事をするからです

處が子爵は此草地縣の銃獵が可厭な代りに、乘馬が非常に好きだと仰在る、之も私の嗜好と適合した、彼は郊外餘り遠からぬ處に大きな森林を所有して居るとのこと、二人が轡を駢べて遊び暮して、それから夕方芝居見物の間に合ふやうに歸つて來られる、之程都合の好い事はない

加之、彼は財産にも身體にも時間にも、總て自由の人であると云ふのが何より悦ばしい事である、父も母もない……弟が一人あるけれど、今は一年志願兵になつて居るとのこと、私は以上の話を僅々十五分間に聞く事を得たのです、何と敏速なものではありませぬか

私の沈着な態度は、誠に驚くべきものであつたと云ふ……之は後で母上から聞いたので……併し其は少しも驚くに及びませぬ、少しも危險のない境遇を要める私が、此位の注意をせねばならぬのは言ふを俟たぬところです、舅姑のないこと、小姑のないこと、之が取りも直さず爭ひのないことで、良人に事へるのみが只一つの勤め、夫も斯うして成立た結婚ならば多く骨の折れる事もありますまい

私が斥けた五人の候補者の中に、滿里谷侯爵と云ふのがあつた、快活な、愛嬌のある男で、那邊か婦人を引附ける力を有つて居る處から、私は殆く迷はふとしたのですが、母親が壯健で居るとの事を聞いて、無理に斥けて仕舞ひました、言ふまでもなく、姑は爭の種なりと悟つて居るからで

彼是する間に最終の樂が始まつた、音樂が終つて舞踏になる、其小憩の時に、母上は又私に向つて

「お前大層上手に話して居たが、定めし氣に適たらうね」とお尋ねなさる

「はあ……惡い方ではないと思ひますの」

「夫は可かつた、お父樣が彼の人を家に呼ばふと仰在てるから、お前差支がないだらうね」

「差支なんかないけども……夫ぢや餘り氣が早過ぎますわ」

「たけども早く爲なきや不可ませんよ」

「ぢや如何でも可御座んすから……」

「はゝあ、滿更嫌でもない癖に……ぢや木曜日の夜にお呼び申すとにしやうね」

それから父上は直ちに彼に招待の旨を通じて、再び幌馬車に同乘して、三輪家を辭したのは夜半近い頃ほひでした

（晩餐の時刻になりましたから、以下は明日の部に）

○十一月廿七日

今日は彼の人の身上と、結婚の申込をなされた始末とを、母上から聞いた儘に記しませう

圓手子爵（彼の人の名）に一人の高齢な伯母がある、伯母は百五十萬法といふ巨額の財産を所有して居るので、

子爵が廿五歳までに結婚するならば其財產を贈與する、若し子爵が結婚せぬとならば、目下一年志願兵たる子爵の弟保富に讓る、保富また結婚せぬ時は、遺產全部を擧げて貧民に施與すると言つて居る

併し子爵は久しく獨身論を固執して、伯母の恩命に耳も傾けなかつた、家には百四五十萬の資產があるから、夫で裕かに暮して行かれる、何も主張を拋つて贈與を受ける必要はないと、大いに力んで居たのであつたが、昨年の暮に企てた金融事業に大失敗を招いて、一時に百萬法以上の大穴を明けて仕舞つた、殘る處の利金と言つては一年僅に十二萬リーブルに過ぎぬ、婢僕を解傭する、愛馬を賣る、如何にも維持が附かなくなつて、已むなく獨身論を捨てゝ了ひ、來る一月、廿五歳に達する前に好配偶を求めて、伯母の贈與を受けやうと決心した、となると四方から降るやうに緣談を持込んで來る、が所謂帶に短し襷に長しで、之ぞと深く思込んだ者もなかつた

其矢先、不圖した事で私を見染めて、是非にと望み始めた其次第は斯うなので

恰も四日以前、今月廿四日の午前中であつた、私は乘馬敎師の稽古を受ける爲に、丁度十時といふ比ひに公園の馬場へ參りました

馬丁は逞しい駒を引いて來た、名をトリプーレといつて仲々の荒馬な上に、三日目で厩を出したといふので、非常な元氣になつて居ました

私は敎師の補けを受けて、辛とトリプーレに乘りました、而して韁を執つたと思ふ間もなく、馬は驀然に驅け出した、普通の騎手ならば直ちに振り落されて了ふに相違ないが、私は幸ひ此馬の癖を知つて居るので、腰を放さずに濟んだのですけれども、帽子は何處へか飛んで了ふ、止針が抜けて髮はバラ〳〵になる、風は音するばかりに面を叩いて、長い髮は後に黃金色の波を引く、沿道の樹木只一面の青緑を張つたやう、蹄の響き徒

らに勇ましく身は宙を飛んで居る心地

折しも前面の小徑から立出た一人の青年紳士、足を淀めて私の姿を迎へ且つ見送つた、而して「巧い！奇麗な髪だ……實に美くしい姿だ」と呟いたさうです、これが即ち圓手子爵であつたので

私は程なく此悍馬を御し鎭めて、敎師や馬丁の賞讃を擔つて、同行の森戸孃と共に、馬車で歸つたのでしたが、圓手子爵は騎馬で我等を追跡して、宅はウアレンヌ町四十九番地と突留めて歸つたさうです

子爵は歸宅匆々人名辭書を繰つて、ウアレンヌ町四十九番地の邸宅は、男爵礎尾地の住居と知ると、今度は騎馬の婦人(私の事)は果して男爵の娘であるか否かゞ判明らぬ、あゝ如何かして確める工風があるまいかと心を碎きながら、其夜は三輪家に催された小集會に臨んだのだが、談話の序に、三輪夫人が私の父と懇意なのを知つて、子爵は尙も鋭く斬込んで愈々私の身上を聞くと、非常な熱心の色を面に現して、あゝ如何して今まで彼のやうな美人を知らなかつたらうと叫んださうな

さて子爵は我慢がしきれなくなつて、遂に希望の丈けを三輪夫人に打明けた、子爵は豫て淸澄侯爵の令孃鹿野子に對する縁談の進行中であるが、能るものなら百合子を欲しい、鹿野子の方は變更しても構はぬとの言條、三輪夫人は二つ返答で承諾した

それから夫人は私の母上に書狀を發する、母上は異例の夙起をされる、段々と作戰計畫が進行して、招待客の人選から樂人の傭聘から、さては次第書の印刷まで瞬く間に出來て、前夜の始末になつたとは只々愕くの外ない迅速さである

だが思へば運と云ふもの程不思議なものはない、若しもトリブーレが暴れて驅けなかつたならば……私の侍女が髪を解けるやうに結んで呉れなかつたならば、如何して此結婚談が起るものか

併し氣の毒なは鹿野子爵である、先刻聞けば子爵の樣子を見る爲に、急に巴里に來たとの事であるが、見ン事子爵を奪ふ事が出來るだらうか、私は奪はれて了ふであらうか

第六の候補者に對する振出し工合は甚だ好い、此双六の賽は何處に落着く事にならう

○十一月廿八日　朝十時

昨夜の宴會の次第を書いつけませう

三日以前に約して置いた宴會―子爵が愈よ私の宅に來る事になりました、此三日間の私の氣の揉みやうと言ふものは、喩ふるに物もなかつたのです

兩親は固より三輪夫人まで、今夜は熟々見せねばならぬから、子爵と對坐するやうにと言ふのであつたが、私は並坐說を執つて動きませんでした、夫は仔細に子爵の談話を玩味する必要があつたからで、言を換へて申せば嚴密に例の尺度を當てゝ見やうと考へたからです、私は首尾よく子爵と椅子を並べました

夫から種々な談話を始めましたが、二人の趣味嗜好と云ふものが、不思議にも適合するのです、子爵の驚喜の情は歷々と見えるのでありました

私は平素に斯う考へて居る――壯健な身を有て閑散な月日を送るものを、決して良人としてはならぬ、何故かと言ふと、怠惰放縱の風習家政を危くするものがないからです

處が子爵は非常に多忙である、子爵は行政區の議員で、又野外騎行會、氷滑會、射撃會等の會員であり、而して又文筆に餘暇を注いで居る、之程の忙しい役目を果すならば、身も自然に丈夫になられる筈、次ぎには政治思想も問ふて見た、それも要するに私の滿足する答へでありました

尚其次ぎは國手家の家柄です、子爵の家は十四世紀以來の舊家なので、子爵中第三位と下らぬ名門なのです、世の負惜みを言ふ人は家柄などは如何でも構はぬ、心術が高潔で行爲が正しければ、系圖などは如何でも可いでないか杯と言ふが、譽れある家門と云ふとは、今の世の中には缺くべからざるものである、今のやうに僞紳士が跋扈したり、正體の判明らぬ外國の貴族などが、巴里の都會を我物顔にして居る時代には、正統の貴族てふ名稱を輝く必要は、言ふを俟たずに解るであらう

僅か一時間半位の間に、斯う云ふ話をして斯う言ふ事を考へたのでしたが、食事が終ると程なく、子爵は私の父上の方へ行かれました、之と殆むど入れ違ひに母上が來られて

『子爵のお話は如何だつたの？』とお問ひなさるのです、私は臆面もなく

『彼の方のやうな好い人は、私滅多にあるまいと思つて居ますの』

『それは可かつたね、私は又如何かと思つて心配して居ましたよ』

『お母樣、私今後温和しく致します』

『眞に然うしてお呉れ、私も食事中目を放さずに居ましたが、彼の方も大層嬉しさうにして在したから、之で安心が出來ると思つてね、眞に悦んで居ましたよ』

私の嬉しさも喩ふるに物がない、子爵は？　と眼を回せば三輪夫人の傍にお在なさる、夫人は

『然う焦つては不可せぬ、心を落着けて悠りお定めなさるが可う御座んすよ』

と諭して居るやうに見えるのです、又此方の母上も無論此場で定め度いと、非常に急込んで居られるのだけれど、清瀧家の事が心に懸つて、それと言出し難て在つしやるのが、歴然見えるやうに思はれます

『其御心配は御無用です』と私は心の中で叫びました、今夜の會合で子爵は確かに私の有になつたのです、何

の心配も懸念も要らぬのです、しかも此處が我慢すべき場合……試驗の上にも試驗をして、これで遺憾はないと云ふ時に、固く約束をする事にしやう

之が私の素志ではあり且つ理想である……と私も逸る感情を抑へて、更に翌朝ルーブル博物館内でお目に掛らうと言つて、其夜は惜しい別れをしました

○十一月廿九日　午後五時

翌朝……即ち今朝早く家を出て、私は約束の時間に先だちて、ルーブル博物館に赴きました、多くの名畫をずうと見渡しながら、靜に進んで行きますと、子爵はミユリオ幼女の畫像の前に佇んで居りました

場所柄なれば殺風景な事も言はれず、談話は自然と美術の事に向くのでしたが、子爵は斯道には少しの智識も有つて居ないので、私は一時失望しましたが又考へ直しました「私は美術の批評家と結婚するのではない、繪畫の事が解らなくとも、生活上には一向差支がないではないか……」と斯う思ふと子爵の容姿が俄に好くなつて見え、衣服の着こなしから、言葉使ひから、淡白で瀟洒で爽快で何とも言ひやうのない男に見えます……要するに私は十分に滿足したのです

何時まで立つても居られぬので、私は程なく其處で別れを告げ、門前に待合せた母上に同乘して家路に就くと、母上は又急しく斬込むのです

「如何だね百合子、早く定めて仕舞つたら可いぢやないかね」

「何少し待つて下さいましな」

「お前未だ心が定まらないのね、何も其樣に深く考へなくても可いぢやないか」

「お母様のやうに然う地位や財産ばかりに目をつけて、軽々しく定めては不可ませんわ」
「ではお前、外に未だ望みがあるのかい」
「あゝ！私彼の方の馬に乗つたのを見度いんですわ」
「宛然子供のやうね、ほゝほ」と軽く笑つて
「おや馬に乗つた處を見れア、もう夫で可いだらうね」
「夫で可御座んすとも！」
此要求が最後の望みと言ふので、又々三輪夫人に世話を焼かせる事となつた、夫人は早速子爵まで通告する、子爵も異議なく承諾して、明朝十時アカシアスの廣地を、共に乗廻さうと云ふ事になる
私は相變らず勝手な事を言つて、父上に同行して貰ふ事となつた、夫にしても四五年間、一度も馬の背に跨らぬ父上こそ、飛んだ御迷惑であつたでせう

○十一月三十日

私は父上と共に騎馬で公園へ参りました
子爵は私どもより先きに、アルザヌ種の牝馬に乗して居られました、私は深い縁のあるトリプーレに乗つて居ます、爽やかな風衣衫を拂ふて、心地好く照る日の光りの波の中に、轡を駢べて乗廻した樂しさ、實に終生忘られぬ紀念なのです、私は他日トリプーレを子爵に捧げて、彼がアルザヌ種の名馬をば、私の乗用にさして貰はふなどと考へました
樂しい騎行も程よく切り上げて、私と父上とは別れて家路に就きました、私は馬を下りると、突如母上の室

に驅込んで

「お母樣、只今歸つて參りました」

「如何だつたね乘馬のお姿は、定めしお前の氣に適つたらうね」

「あゝ！眞に美くしい……それは〳〵見事なものでした」

「では旣早定めて了つても可いだらうね」

「はあ何卒！」と言つて、私は母上に抱附いた

所思があつてとは言ひながら、色々の我儘な註文を提出すのをお叱りもなく、萬事心通りにさして下さつた、忝ないは親の慈悲、私は淚を以て感謝したのです

〇十二月四日

今日午後三時には、百五十萬法の財產家たる例の伯母君が、公然私を貰ひにお入出なさる筈である。

私は愈よ圓手子爵夫人となるのです

來月匆々結婚式を濟すと共に、子爵は百五十萬法の資產を手に入れらるのである

〇十二月十一日

婚禮は愈々來る一月の六日と定まりました、贅澤を言へば、正月匆々婚禮すると云ふは、何だか新年の贈物にでもなるやうで面白くない、が今更其樣な事を言へる譯のものでない、私は精々と準備をせねばなりませぬ

扨て婚禮が濟んだなら如何しやう、七八日間の新婚旅行をするに相違ない、とすれば行先はニースの方であらう、彼處に七八日御遊び暮して、それから巴里に歸つて來る、其時分には大抵の劇場が開いて居る、父上を

招待してオペラを見物する事になるだらう

私は實に幸福である、私は子爵を愛して居るし、子爵も私を愛して居る、イヤ寧ろ崇拜して居られる、夫といふのも所詮私が沈着であつたからだ、英國の小說に描かれる婦人のやうに、心も亂るゝばかりに戀しいとか、彼の君と同棲に居らずば生きて居ぬとか、或は足音を聞いてさへ身體が打顫ふとか、戀に弱い心は私の最も厭ふところで、私は決して此樣な病には罹らぬ意である

私は決して燃えますまい、イヤ設令燃ゆべき塲合に遇つたとて、容易に燃えてはならぬのです、私の子爵を……即ち良人を愛するのは友情である、其友情に尊敬を加へて良人に對しやうと考へて居る、而して後に始めて戀情が起るのであらう

私は此戀情といふものを、家政維持の爲必要なものとして起さうとするのです、何故かと言へば互ひに戀し合つて居れば、何事も夫婦一緒にされるのだが、戀し合はねば和熟を缺く、隨つて總ての費用が二倍にも三倍にもなる、爭ひが出來る、互ひに負けじと費消競をする、遂には離別もすれば破產もする、だから若し何人も戀と云ふものをせねばならぬものとならば、私は良人を求めた以後に、一家の經濟に缺くべからざるものとして、極めて愼重に戀をして行かうと考へるのです

私と意見が合つて、而して此戀を十分に味へた一友人が、今日も私に忠告して吳れました、其語は

「百合子さんも結婚なすつたら、私のやうに良人を愛さなけりやなりませんよ、良人を愛すると云ふことは、取りも直さず一年に十萬法を利けるのですからね、ですから若しか情の上で愛する事が出來なかつたら、算盤の上から愛するやうにしなきやなりませんよ」

と斯う云ふのでした、人に依つて餘り極端な說だと思ふかも知れませぬが、私は慥に眞理だと信じて居りま

す

私は此忠告を忘れずに、よく良人を愛しませう、婚禮の日までは未だ廿六日ある、私は此間に十分に心を煉つて置かねばなりませぬ

併し、私は斯うして圓手子爵夫人となるのであるが、心に懸るは丈二さん（廿五日の日記に名丈書いて置いた）である、彼は如何なるのであらう、私が心で思つて居た事は、彼方も薄々知つて居た筈である、定めし將來は斯うと思込んで居たであらうに、この體面を外向けて仕舞ふのだもの、如何に腹を立てるか知れぬ

イヤ怒つたとて何の怖い事があらう、あゝ私は戀を一家の經濟以外に使はふとした、これからは夢にも此樣な事を思つてはならぬ、然うだ決して思ふまい、斯る詰らぬ義理を考へるやうでは、破產の魔物の手が容赦もなく頭を押へる事になるであらう

（完）

# 忘れな草

寫字　生田葵山人

此の間のたよりにて其の許の御勉强の模樣悉しく承知いたし父上にも一方ならず御喜びなされ候、然るにても惡魔の障碍や此の度縣廳にては俄の御人減らしにて父上も其の數に洩れ給はぬ身となり給ひ、今後は僅かなる恩給にて暮らし行かねばならぬ仕儀と相成り申候、父上も取る齡にていたく衰へられ、口でこそ元氣

に云給ふも、食慾もいたく減り、拾町も歩めば息切れせらるゝ樣になられ候。右樣の譯にて之からは月々の送金も出來兼ね候間、何とか分別なされ度、一時歸國なされてはと母は思ひ申候、また其の中には宜き事も有之べく、くれぐ\も御氣の毒と存じ候。

別封爲替拾圓私の古き下着など賣拂ひやうやうの思にて拵へ候、送金は之が最後と御思ひ被下度候　先はあらく\かしく。

母より

きく子は此の手紙を三日前に受取つた、今四邊は夕暮れ景色の下宿の窓に倚つて再び此の手紙を繰擴げて讀むと、今年六拾になつた父の老ひたる姿が浮び出されて來て、惡戯盛りの弟、十四歳になる妹を世話して行かれる母の氣苦勞が偲ばれて、つくぐ\と其の慈愛が身に浸むのであつた。返事は其の翌日の晩出した。長女なる自分が外へ出て居て、母に種々と苦勞を懸ける事の詫び、いくら考え直しても今歸國しては折角此の壹年半學資を貰ひ、勉强したのが無駄になる事を云ひ、東京は廣き處何か働き口を見附けて勉强して行く旨を御心配なくとの文字を添へて云ひ送つて遣つたのである。

『後一年。然うだ一年、一年位ゐは夢の樣に經つて了はう。甚麼に辛い事や悲しい事にも辛抱して勉强を續けて往つて、卒業免狀を首尾よく取つて、私が裁縫の教師にでもならねば我家は奈何したつても生活て行けやしない。私は甚麼事したつても勉强を續けて行くわ。』

夕榮えの色褪せて行く雲を仰いで菊子は恁う呟いたが、其の眼からは熱い涙が溢れ出て、瘠せの見える白い頰を傳ふた。故郷は瀬戸内海に沿える國、二百里の雲を隔てゝ此の雄々しい決心をした菊子は十九歳なのだ。面長の輪廓の良い顔長で、眉は少し濃過ぎるが、夢見る樣な黑瞳を容れた大きな眼差しは愛心の深いのを見せ

て居る。肉の厚い落附いた鼻で、口元は莫伽に可愛く恰度紅の朝顏の花が萎んだ形だ。流行の束髮にリボンは樺色、艶な花簪は添つて居ない。幾度も水を潜つたらしい白絣の浴衣にメレンスの帶と云ふ服裝だが、能く發達した身體に四合似合つて、窓の柱に手を措いて前方見て居るのが、何の事は無い夕暮色を添へて美術家の手に爲つた畫圖の樣に見える。恐らく此の時窓の下を通る若人があつたならば驚きの眼を瞠るに違い無い。若い女ならば嫉ましの眼を注ぎ、醜き娘持つ母ならば羨望の色を浮べて通るに違い無いんで、何として此の麗はしの人に慼る悲嘆と惱みがあるなどと思ひ浮べやう。夕日に輝く花を見てそが散て泥に塗れて行くのを思はぬ人は冷酷な人である。菊子は此の時不圖下の街を瞰下し、通る人を見て。

「あゝあの人等は皆幸福だ。愉快な顏をして家路へと急いで居る、何として私が此處に嘆いて居るなどと思つて呉やう。」

不圖思つたのである。而し之は無論間違ひだ。世の中は然う自分ばかりに幸福を與へて呉ず、誰しも一度は苦痛の苦い味を知つて初めて眞の人世の光りに接する事が出來るのだ。下の街を通る人が總て幸福？之も頗る疑はしい。然し人を疑はず、親の愛に浴して、親の後生を安樂に暮らさせやうとして遙々都に上つたから若い乙女が這麼思ひを持つたのは無論無理はない。女々しい事であるが菊子の眼からは涙が引續き流れた。袂から手巾を取出しては拭つて居たが、此の時夕闇の横町から麗はしいハーモニカの音がして來た。奏して居たのはあの門に立つ女法界節の唱ふ俗曲の一つだつたが、其れが不思議に今日は心の奧底迄も擽られる樣に響く。奏して居る群は前の街に顯はれたが、帽子を斜に冠つて居るの。紺絣の袖を高く捲し上げて居るの、莫伽に高い書生下駄を穿いて居るの、頭髮をてら〳〵さして奇麗に分けて居るのと、いつも自分が學校に通ふ道すがら調戯ふ輩合なので、菊子は急いで身を曳いて、障子を閉めた。下の街には笑聲が起つて、盛んに口笛を吹き鳴



らす。此方が一向に取合はぬので騒ぎは何時の間にか靜まつて了つたが、菊子は部屋の中が全く暗くなつたのに心附いて、急いで燐寸を擦つて、洋燈に灯を點した。

部屋は四疊半一間、根津と云へば都での場末の中の場末だが、其れで部屋料が二圓だ。國であつたなら立派な人が住まれる家賃だと菊子は何時も思ふ、此の間迄は此處に今一人の自分と同じ樣に身の上の友達も居たが其の友達は、餘り此の部屋が汚ないので、下の家主の菓子賣る老婆が吝嗇で、流元のたはしを無斷に使つたと云つては恐い眼を見せるのに驚いて去つて了つたのである。で菊子は半分の部屋料を負擔させる同宿人を需めて居るが容易に見附らない。然らば今少し安價な部屋と探して居るが其れも見當らないんだ。菊子は處々剝のある一閑張の机の前に座り、其の上に乘つてある洋燈の灯影を瞶つて居たが、軈て身を動かし片側の手文庫を引寄せ中を開いて疊紙を取出した。疊紙の中は今日郵便局で受取つた壹圓紙幣拾枚なのだ。取上げて一應數を調べたが、更に其れを一枚〳〵机の上に押並べ、壹番端から數へ初める。

「一二三四五六七八九、十枚。」何と思つてか三度繰回して讀んだ。幾度讀むでも拾の數が貳拾になる試しは無い、また紙幣の表に顯はれた壹の字が拾に變る氣遣ひも無い、然るに菊子は猶今一度讀むだ。あゝ拾の數は滿足を表現はした數の字である、愛を說く基督の記號も拾の頭文字を戴いて居る。此處に顯はれた拾の數は果して菊子の心を滿足し得るであらうか、四度算へた後五度目の手を下して其を一重ねにしたが、洋燈の光りは寂しげに穢い机の上に其を映し出す、菊子は眼も放たず凝視めたが、淚はほろ〳〵と流れ出て其の紙幣を濡らした。

「大庭さんお客さんですよ。」

不意に階下から家主の老婆の聲がした。

「はい。」
返辭すると急いで其の紙幣を手文庫の中に納め、とつかはと階子段の口元迄行くと。
「大庭さん私よ。」
「戸河さん……能く被入つたのね、さあ御上りなさいまし。」
「お邪魔にならなくつて？」
云ひながら上つて來たのは紺絣の單衣に鍜茶袴、引詰めた束髪に結つた丸顏ので、何處からの歸りらしく小さい包を抱えて居る。
「家は暑いでしやう。」と云つて菊子は團扇を進める。
「有難う。」と受取つて來た客は輕く煽ぎながら。
「あのね大庭さん、私昨日御話しした所今往つて來て歸り懸けなの、生憎なのよ、みんな海水浴へ往つて了つて九月には歸つて來るから御頼み申しますつて云ふの。それはお裁縫の方でしやう。夫れから家庭敎師と云つて居た方もね、もう出來て了つたんですつて……。」
「然うでしたか、種々と御骨折さして濟みませんでしたね。」
「私ね、あんなに貴嬢に安心さして置いて這麼事云つて來ては濟まないんですがね、でも爲方がないもんですから、釣つて置く様な事して猶更貴方に心配さす様な事があつてはと思つて、其れで直ぐ來たんですわ。」
「戸河さん、何も那麼斟酌は入らない事ですわ。私に運が無かつたんですもの……。」云てホロリとする。
「でもね、那麼に氣を落さなくつてもいゝのよ。貴方寫字を御爲なすつて？」
「寫字つて……あの字を寫すのでしやう。」

「えゝ、爲る氣があつて？」

「なんでも私致しますわ。御飯焚奉公でも關はない爲やうと思つて居る位ですもの。」云つて菊子は手にした手巾を顔に當た。儉しい友の戸河よし子も思はずも眼を潤まして、涙の中に菊子のリボンの顫ふのを見た。

「然う、其れぢやいゝわ、永くあるか無いか知らないが、私の兄さんの御友達で醫學生の方ですつて。賴みたいと云つて被入るのよ。」

「有難う、戸河さん、私御恩は一生忘れないわ。請願世話して下さいましな。」

其の翌日の夕暮再び戸河よし子此の哀な二階の客となつたが、其の夜から菊子の窓の灯は一時過ぎ迄も點つて居た。時には曉の鐘の響く頃迄も。で、階下の老婆さんは流石に案じて。

「貴女此頃夜遲く迄御勉强なさいますと見えますね、那麼に氣をお詰めなさると身體に障りますよ。」

「なあに、然うでもないんですよ。」輕く云ふ菊子の血色は悪かつた。那麼に夜を更かしながらも五時半には乾度床を離れて學校に行く支度をするのである。自活して行く門出に受負つた仕事、氣の小さい乙女が身體を忘れて勉强するのは無理ならぬ事だ。

## 別離

「大庭さん、私ね今日は御別離に來たのよ、急に國へ歸らなけりやならぬ事が出來てね、明日の晩出發かも知れないのよ。」

「明晩？　まあ奈何して、何か心配事でも起つたの？」

菊子は殆ど顏色を變へぬ迄に急込んで尋ねる。

『別に心配事ぢやなくつてよ。　此の間些と御話した……何だか私氣態が悪いわ。』　云つて今宵も此の詑びしい根津の菊子の下宿を訪れた戸河よし子は颯と顏を赧く染めた。

『氣態が悪いつて……。』

　菊子は鸚鵡返しに口の中に呟いたが、思ひ當つたらしく潜めた眉を直して。

『其れぢや縁の事？　あの事でしやう。』

　返辭は無くてよし子は頷いて見せた。

『然う、其りやまあ御目出度い事、御喜び申上げますわ。あの御國のお醫者樣でしやう。』

『え丶、私御醫者さんなんか嫌いなんですけども、父や母がね……其れに兄のお友逹で、私も子供の時分から能く御知り申して居るんですから……。』

『結構ですは、氣心を知り合つて居るのは嫁附いてからだつて、甚麽に氣が置けなくつていゝぢやありませんか、其れに御醫者さんは情深いと申ますから。』

『嫌だは大庭さん、私もつと勉强がして居たいんですもの、其れに貴方と御別れするのが辛くて……。』

『有難う、其のお言葉で私澤山。貴方は之から國へ御歸りになると幸福がどつさり待つて居るんでしやう、私はね、私はね、此の廣い東京に親戚と云つては一軒も無く。今迄は只もう貴方一人を便にして居たんですに、御目出度い其れが御國へ御歸りになつて了ひになると私は甚麽にか心細いでしやう。然し私泣かなくつてよ、御目出度いんですもの、御祝ひ申上げてよ。』

　氣强う云ふものゝいつか菊子の眼頭に涙が浮んで居る。

『大庭さん勘忍して頂戴ね、だがね私甚麽事あつても貴女の事は忘れなくつてよ。兄は此方に矢張し居るんで

すから貴方の事もよつく頼んで置いたの、私に變つて御世話するつて申して居ましたわ、私國へ歸つたら父に話して、今迄私に送つて貰つた分を、貴方に送つて戴く樣頼む心算なの、いゝでしやう。」

餘りとは友の優しさに感激して菊子は堪えずしく〳〵と泣くのであつた。

「大庭さん、泣かずに居て頂戴な、私貴方の涙を見ては國へ歸るのも嫌になつて了ふわ、ねえ、屹度私貴方を泣かさない樣に盡力しますわ。」

云ひながらよし子は手早く帶の間から紙包を取出して●

「貴女怒つては嫌よ、これはね從兄が御前の嗜好な事に使へつて送つて來て呉たの、些しだが使つて頂戴な。」

「いゝえ、いゝの、此の間寫字したので此の月はいゝの。」

「此の月は善くつても、また來月があるでしやう。ねえ取つて置いて頂戴。」

よし色は少々黑くとても、身體は肥り過ぎて若き男を回顧す姿は無くとても、慈愛の心を納れた婦人は、人世の花だ。天上の星と光りを爭ふ事が出來る。よし子の小さい眼は愛に輝いて、口元には人の情が零れさうに顯はれて居る。人を救ふのは自分を救ふのだ。之が天使の面影でなくて、何がそも天使の面影だらうと、菊子は涙の中に友の顏を瞶つたのである。

其の翌日の夕二人はまた新橋の停車場で逢つた。其の外に此の天使を送つたのは四人の女友、其の人の兄、兄の友達二三の中に、菊子に寫字を托した彼の醫學生も交ぢつて居た。色の白い、にやけた風采で、頭の髪を奇麗に分けて、其の上伊達の金椽眼鏡迄も懸けた念入の裝飾方である、よし子から其の兄なる人に紹介され、其のまた兄なる人から此の醫學生を紹介されて菊子は此の間の寫字料を頂いた禮を述べた。

「貴方ですか、非常に奇麗に寫せて結構でした。また御頼みいたしたいです、私只今は未だ下宿に居ますが、

ちと御遊びに入被い。」バナヽの立派な帽子と指輪をはめた手で弄ぢりながら挨拶する聲を聞て、菊子は氣取つた人だとも思ひ、また自分を白眼と睨はすので、嫌な目使ひする人だとも思つた。

「大庭さん、貴方身體を大事にしてね。」

「貴方も精々御厭ひなすつてね。」

プラットホームに立つて菊子は三等室の窓から顔を出すよし子の顔を見上げて云つた。昨夜一晩は此の事を思つて泣き明し、先刻からは待合室で他の女友四人と淑に物語つて人の世の別離を嘆げいたが、其れでも泣き足らぬと見えて、又も涙が頰に傳ふ。男の別離には又逢はんの願ひを酒に籠め、盃を打合して別れるのだが、女は男の酒を涙に代へ、手巾の二三枚濡らして別るゝ。料理店に上らず御手輕でいゝかも知れないが、迷惑は驛夫達で、情深い御志の程を見せ附けらるゝのみが、御蔭で停車場の空氣が濕つぽくなると呟く。

「あれで男を欺すも時には使はねばいゝが。」

と、云のもあるが、菊子やよし子のは那麼のぢやない、眞實至純の情から流て出た世に尊むべき涙なのだ。

發車は五分後に迫まつた、よし子は人々の挨拶に言葉少なに應へて居たが、今が最後と云ふ見柄で、力強く菊子を瞶り。

「大庭さん、ほんとに身體を大事にしてね、私が云つた事は御解りになつたでしやう。意志を强固にしてね……兄さん、大庭さんの事よろしく御願ひいたしますよ。」

云ふ折しも、車掌は遣つて來て、人々を窓の下から放れさしたが、軈て相圖の笛、提燈の靑い光りは車掌の手に上下されると滊車は勇ましく烟を吐き人々の悲哀を嘲笑ふ傲然たる態度で、きく子の唯一の友戸河よし子を其の故鄕なる遠江へと運んで往つて了つた。

# 誘惑

人々の頽勢打つ中を掻分けて、菊子は他の女友と共の停車場を出で、前の廣場を電車の方に歩ゆんだが、悲しい滊笛の音は自分を咀ふ樣に胸を壓する。事實此の別離を嘆いたのは彼の兄よりも、醫學生よりも、他の女友よりも菊子が一番深いんだ。本鄕の四丁目で電車を降り、他の女友等にも別れて、自分一人然ながら親鳥の巣を突放された雛鳥のやう。また大海原の上に漂泊する小舟の樣な心地を抱いて根津の下宿へと歩を進めたが、宵の間上天氣と思つたのは嘘、いつの間にか黑雲は大空に瀰漫つて星の影を立蔽ひ、西の方角からは遠雷が遠寄せの太鼓の樣に響く、蒸暑い忌な晩となつて、時々雲間から物凄じい電が颯と落ちて來て憐な身を照らすのであつた。降られてはと歩を早めて赤門前まで來ると、不意に背後から

「大庭さん、今歸りですか。」

男の聲で呼懸けた。驚としながらも思はずも歩を停めて回顧ると、片側の辻燈は、先刻停車場で友の兄に紹介せられたパナマ帽の醫學生と認めさした。

「あゝ、貴方で御座いましたか。」慇懃に禮をした。

「先刻停車場で御別れして、些と其處の友達を訪ねたんですが、留守なもんですから之から歸る處です。」

「はあ。」

僅に返辭したばかりなのに、不遠慮にも早や菊子と押幷んで歩むのである。夜は拾時過ぎたが未だ往來は足強くあつて、店を開けて居るのは飮食店ばかりぢやない。瓦斯の燈火燦しい洋物店の店頭に、リボンの色を誇る女學生の姿も見えて、鈴を鳴らして自轉車に通過ぐ學生もある。菊子は胸を騷がさずには居られない。恁る

跡を人に見られては姦しい口の端、あらぬ名を唱はれるは必定と心も空、疾く過行き給へかしと念ずるのであつた。

「貴女のお下宿は確か根津だと聞いて居ましたが、然うで御座いましやう。」

「はい。」

「私は谷中迄參るんですから御送りいたしましやう。之から御歸りになる道は隨分淋しいですから。」

菊子には此の言葉を斷はる力はなかつた。嘘にも優しい心附け、其の上自分には一ケ月の入費を儲けさして與た恩人であるとの思ひは其の小さな胸に絡まつたのである。

「私は貴女の御身の上をよし子さんから聽いて、眞實同情の涙を注いだです、精神一到何事か成らざらんやですから……なァに貴方然う不幸福ばかり續くものぢやありません、不及ながら僕も一臂のお力を添へる心算です。」

「はい、有難う存じます、何分よろしく……。」

貳人はいつか駒込の通りさへ越して居た。幸福誰にも見附からず淋しい通りに出たので、菊子は少し心を落附かしたが、其れでも左右を回顧つて前方から女學生らしいのが來ると顏を俯目に男の蔭に身を隱す。

「貴女、其處に水溜がありますよ。」

注意せられて驚いて飛退いたが、同時に向側を通る三人連れの書生が此方に眼を注ぎ、

「チエスト。」　消魂しい叫聲を擧げたので、菊子は一溜りもなく縮下つて顏を眞赤に染めたが、醫學生は滿足げな容子を見せ、微笑さへ頰に浮べた。

草津の溫泉のある方へと道を右に折れて、貳人は步んだが。此處迄來る間に夜は更けて、此の邊を通行する

人影とては最早一人とても無く、雨は今にも降つて來さうな模樣で蒸暑い事限り無かつた。幸ひ雷は烈しく鳴らず、只電の閃きに行手の黒い樹立がパツと燃える樣にちらつくのであつたが。男は一層身體を菊子の方へと近寄らして。

「貴女、いつも這麼淋しい處を一人で御歸りになるんですか?。」

「はい。しかし夜は滅多に出ませんから……。」

「しかし、永く根津には被入るのでしやう。時偶には更けて御歸りになる事もあるでしやうに……。」

「那麼時は團子坂の方へ廻つて歸るんでお座います。」

「ほんとに此處は物凄い處だ。貴女危う御座いますよ。道が惡くつてしかも坂になつて居るんですからね、御手を御貸しなさい、曳いて上げますから……。」

「いゝえ、其れには及ひません。」

此方が斷はるのを係はず、彼方から進み寄つて否應なしに菊子の柔い手を取るのである。直ぐ振放さうかしらとも思つたが、女の弱い心は其れも爲得ず其の儘にして歩みを移したが、生來初めて男に手を握られたので、全身の血は頭に上る樣に顔に熱氣を覺えらるゝ。

「貴女戀と云ふ事を知つて被入るでしやう。」

「はい。」　菊子は何が何やら夢中である。

「戀!　人生に尤も美いしいものぢやありませんでしやうか。沙漠の樣な人生に咲きでゝる只一本の花です。詩人も歌ふぢやありませんか、我世の花を戀と云ふ……。」

「はい。」

『私、豫々お噂はよし子さんにお聞き申して御慕ひいたしていたんですが、今日不圖御姿を見て、心に叶ふた樂しいお姿だと、一目見て心が亂れたです……。』

媚かしい事を云つて曳ひてる手を堅く握締める。菊子には何が何やら解らない。よしんば解つたにしろ應へ得らるゝであらうか、只感ずる事は、指の痛い事のみだ。

『貴方、手が痛ふ御座いますから、もう少し御緩めなすつて下さいまし。』

『いゝえ緩めません。私の貴女に對して持つ高い情が恁うするんです。私の身體は火の様になつて居るんです、私の心は今……。』

『でも、私は痛いのですから、ア痛〱……。』

と、男は急に立佇つて菊子の顏を瞰る態で、

『貴女の私に御答へなさる言葉は其れのみですか？。』

が、菊子はもう返辭さへ爲なかつた。一旦擾亂された胸の中は靜になつて來て、男の餘りとは媚めかしい言葉、失禮な擧動に、平生の雄々しい決心は喚起されて、憤りの思さへ湧き上つて來た。折しもポツリ〱と落ちて來た雨。

『あゝ降つて參りました。濡れると何で御座いますから……下宿は直ぐ其處で御座います、馳出して參りたう御座いますから、此の手を御放しなすつて下さいまし。』

『いゝえ放しません。只今の御返辭を聞かぬ中は。私は道すがら丁と考えたです、もし貴女が私に優しい返辭をして下さいましたら、之から决して貴女に不自由はさせないです。貴女の御志が遂する様に盡す心算です。』

『何たる恐ろしい誘惑の言葉であらう。菊子の今の身には此の言葉程烈しい力を持つものはない。耳元で低音

の樂器が響いた樣な氣もした。然し事實は雷音かも知れないんだ。優しい人心と一時は思ひ迷つて、胸は又も掻亂されたが、掻亂された丈けに、心の眼は總てを深く見入つた。

「一目見て私を戀した。那麼事があらうか、よしんば其れにしても、係る深夜係る寂しい場所で、係る事を云出す、女の弱い心を脅かすので無くて何であらう。眞實の愛情には時間を要する。煩悶もあるとの事だ。結婚を意味した愛は謹愼だと聞いて居るに其れもない。あゝ其ればかりか、私の返辭次第で盡す……何たる賤しい利己の言葉であらう。明に私の節操と交換しやうと云ふんだ。嘘りの言葉、女の情を弄ばうとする卑屈な男子、誰か女を賊さうとするのに憎まれる樣な言葉を吐かうか……。」

係ふ思ひ附くと胸も張り裂ける程口惜しい思が湧き上つた。

「貴女は泣いて被入るのですか。」

成程菊子は泣いた。然し之は對手を憎んでの涙ぢや無い。自分が係る誘惑を受くる樣な落目の身となつたのを嘆ぎ、よし一瞬たりとも係る言葉に惑はされた思慮の足らざる身を恥ぢて泣いた涙である。

「何が悲しいんです。之から貴女の涙は私が拭ふ心算です。」 云ひながら不躾にも手にした手巾で拭はうとする。

「何をなさるんです。失禮な。」

退けて屹となり、

「貴方の樣な方があるから、女學生は世間から惡評せられるんで、女學生の涙は乾かないんです。」

云ふかと見ると無理から取られた掌を拗ぎ放し、身を翻して闇路を下宿の方へと一散走りに驅け出すのであつた。今程ヶ谷邊りを過ぎ行くよし子はそも何を思つて居るであらう。故郷には菊子の父母は最早安らかな夢

路に入つたに違い無い。

あゝ菊子は今後果して世と戰ふて潔く活き、首尾よく其の願望を成遂げ得るであらうか。刻々に脅かして止まない生活の苦痛は無限に人の心を萎靡ます力を持つて居る。恐らく今後過去つた月日よりも一層困難な時は來るであらうし、もそつと恐ろしい誘惑が來るかも知れない。菊子の繊弱な身體は果して其れに堪え得るであらうか。いや心配無用、菊子は確に堪え得る。彼女は節操の何たるかを自覺して居る。しかも一度勝利を得て凱歌を擧げた愉快を添へて自覺して居るんだ。婦人の身に最も尊む可き事は節操！　節操なき婦人は、いくら美くしくつても造花に過無い、いくら學問があつてもそは狐の面を冠つた樣なものだ。月桂冠は節操ある者のみ戴かれるので、そを持續して所持して居る限り、社會は味方となり、友は同情者となつて、成効の途に導かねば止まないんだ。

（完）

## 紹介

▲女子の新職業（西片町内外出版協會發行）　獨立自營を欲する女子の必讀すべき良書なり、本書は平易明快なる談話體を以て女子の職業を說明する事頗る親切を極む、先づ前編に於て女子職業と獨立との關係を話し、歐米女子の職業と我國女子の職業との比較を述べ、次に職業選擇上の心得を說き、扨て本題に入ては、造花、刺繡、編物、寫眞、理髮、裁縫、等の技藝的職業より、郵便局事務員、鐵道事務員、保險會社計手、銀行傭員、電話交換手、女子店員、學校教員、保姆看護婦、產婆、女醫者、新聞記者、速記者等に至るまでの各種職業に就きて、仔細に案內的說明をなし、其の修業法、就職手續、俸給等の事を具さに了解せらるゝやうに記述しあれば、職業を求むる女子の爲めには俾益鮮からず。（著者木下祥眞、定價三十錢）

▲我子の美德（表神保町同文館發行）　學習院教授大村仁太郎氏は嘗に獨乙ザルツマン氏原著の「我子の惡德」を公にして好評を博したるが、今又た其の姉妹編とも云ふべき同氏「理想的教育」の翻案「我が子の美德」を出されたり、本書の說く所を見るに、筆を談話體に假りて、繁瑣なる人の愛子繁雄に對する養育方法を敍說したるものにて、文辭の流麗は言はずもがな、全篇家庭教育上有益なる教訓と心得とを以て充たさる、誠に兒童教育に善良の軌範を示すものといふべく、子を教ゆる親に向つて其の教え方を教ゆる良書にしあれば、人の親の熟讀玩味せんことを望む。（定價七十錢）

## 次號記事豫告　九月五日發行



### 每月五日發行

#### 定價表

一册（紙數二百八頁）……金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內　定刊數……十二册
　　增刊四回……一、四、七、十月價格同一

郵税　一册　二錢

#### 廣告料

| | 二十四字詰　行 | 半頁（卅二行） | 一頁（六十四行） |
|---|---|---|---|
| 特等 | | | 割引　四十圓 |
| 一等 | 五十四錢 | 十七圓二十八錢 | 割引　三十三圓 |
| 二等 | 四十四錢 | 十四圓八錢 | 割引　二十七圓 |
| 三等 | 三十七錢 | 十一圓八十四錢 | 割引　二十三圓 |

△等級の位置ヘ切目等御照會次第御報可致候

### 註文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘以下の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ


不許複製

明治卅八年八月五日發行　第五卷第拾壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

大隈伯爵序文
横井農學博士校閲

# 家庭園藝術

農學士 富益良一君
報知新聞園藝記者 田中花浪君 合著

全壹册

洋裝四六判上製
紙數五百八十頁
正價七拾五錢
郵稅八錢

## 八月中旬發行

◎口繪（美麗着色花卉の圖）橋本邦助君畫
◎大隈伯邸園及温室の光景（寫眞銅版）

清新なる家庭には清新にして多趣味なる遊戯が必要である。家庭の平和を望むには家庭を賑はす事が必要であると共に家庭の團欒には相樂むといふ事が何よりも肝腎で、即ち家庭の園藝は此の多くの目的を果すべく、至極格好のものである。實に園藝は神秘なる術で、是れに因つて快絶なる娛樂と、壯絶なる興味を得る計りでない。健全なる精神をも涵養出來るし身體をも强壯に出來るし向も其上利益を得る事か出來る。眞や園藝は生產的遊戯と云ふべく、泰西諸國の家庭に比べて一般に物淋しい、我國の家庭には此上なき良好の事業である。玆に本書は其師友として生れたので、彼の艷美なる花卉は勿論、芊々たる蔬菜、累々たる果樹の培養に至る迄、微を捨てず細を揭げ一々丁寧に洩れなく嶄新なる學說と多年の經驗を平易に說明せる外に其調理法と文學趣味をも附加してある。で婦人小兒の讀本且學生の參考書として適應してゐるし一讀直に實行し得べき實際のものであると斷定して置く。想ふに一家に白米が必要である如く、家庭には是非とも本書を備へ置かればならぬ。



（後付の二）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

工學士 大河戸宗治君編

工業叢書

# 力學圖解法

（新刊發賣）

洋布中判上製
紙數四百卅頁
正價八拾錢
郵税拾錢

本書は初等の工學を學習する者徒らに複雜にして誤り易き計算法のみを知りて簡易にして迅速なる圖式法あるを知らず徒らに時間を費して却て其正を誤るの患に陷ること少なからず著者之を遺憾とし本書を編述す本書は圖式法に依て力を解析する方法より普通の屋構及橋梁の應力を計算する方法を詳述し且つ一般に適用せらるゝ風壓應力圖を作るべき簡易方法機關車車輪荷重より生ずる最大彎曲力率並に最大剪斷力の解析法等をも附加せり實に本書の目的は一は以て初等工學の教科書に充て一は此等學舍出身者の參考書に供せんとするにあり

工學士 江浪常吉君著

工業叢書

# 最新 回轉汽機

（新刊發賣）

洋布中判上製
紙數三百五十頁
正價八拾錢
郵税八錢

工業界に於ける蒸汽機關の活用は既に其極に達せり之れに代りて將來の一大効力たるべき回轉汽機の研鑽は未だ完全の域に達せずと雖も歐米各國に於ける幾多の實驗は着々之れが効力の偉大なるを示し從來の蒸汽機關に比して經濟上尠少ならざる利あることは最早疑ふべからざる事實となれり而して工業界にては之れに關する新著を望むや切なり江浪工學士玆に見るあり回轉汽機を研究せんと欲するもの又は之を應用せんとするものゝ參考に資せん爲め曩に蒸汽機關を著述せられしに續ひて本書を著し以て斯界に貢獻せらる其編述の周到なる讀者を資する鮮少にあらざるなり

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（後付の三）

古今無比の大英文典出版

東京外國語學校教授 平井金三先生
東京早稻田大學講師 平井廣五郎先生 共編

# 大英文典 前置詞

下巻（新刊發賣） 上巻（既刊） 英學新報社藏版

洋裝大判美製本
上巻壹圓貳拾錢
下巻壹圓參拾錢
郵便税拾錢宛

英文法書の世に行はるゝ者其幾種なるを知らず、獨り**獨逸人メッツネル**の著其精微を抉り其蘊奥を究め、材料の豐富なる考證の該博なる**古今獨歩**と稱す、惜ひ哉獨逸文と英譯と絶版年已に久しく、今や、之を江湖に求むべからず、是に於て本書の著者この**寳典**の終に埋沒せんことを憂ひ、夙に之を公にするに志あり、乃ち其英獨兩文を對照して之を**邦文に譯し**更に古今百家の説を參酌輯集し、拮据年を經て**稿遂に成る**冀くば英文學を解剖する學者の爲めに**X光線**たらんことを。

**發兌書肆** 東京日本橋區本町 **博文館** 東京神田表神保町 **東京堂**

農學博士佐藤昌介君校閲 農學士佐藤昌君著
●**農業經濟原論** 脊皮大判 正價壹圓貳拾錢 郵税拾四錢

農學士梁田斌君 蠶業専攻園田國三郎君合著
●**實用養蠶新書** 洋裝大判 正價五拾五錢 郵税八錢

宇野光三郎君著
●**シヤルとウイル** 正價貳拾五錢 郵税四錢
（洋裝袖珍）

岡田市治君著
●**英語異同辨** 正價五拾錢 郵税六錢
（洋裝袖珍）

發兌書肆 **博文館** **東京堂**

釋雲照律師新著

# 佛教原論

一名 法界同歸德教論

全一册

洋裝菊判美本
紙數約三百五十頁
八月上旬發刊

◎卷頭＝雲照律師最近寫眞肖像挿入

末法稀世の大善知識釋雲照律師は高齢八旬に近く法徳益々宇内に光被して四民之に歸依すること嬰兒の慈母に於けるが如し律師一たび錫を停むれば四邊履を倒にして來會し法筵徐に眞理を演繹すれば貴賤襟を正して渇仰す。故に各宗各派の僧侶も其狹見を捨てゝ均しく其德を讓り律師の衣鉢を傳へんことを仰願せり。律師既に高齢に達し諸緣全く解脱す。於茲今世の名殘として佛教原論を著述し出版を本館に托せらる。蓋し律師の精神籠つて本書に在り、律師の法音纏めて本書に在り。本書即ち律師の精神にして所謂二而不二の大原論といふべきなり。其内容如何は請ふ本書を繙ひて冷煖自知せらるべし。

石倉翠葉君著　寫眞銅版廿三葉挿入
●成田山名所圖會
全一册洋裝　大判一五八頁
正價三拾五錢　郵税六錢

石倉翠葉君著　寫眞銅版數多挿入
●善光寺名所圖會
全一册洋裝　大判二七六頁
正價四拾五錢　郵税八錢

高野山座主原心猛大僧正題辭　石倉翠葉君著　寫眞銅版三十餘枚
●高野山名所圖會
全一册洋裝　大判三四二頁
正價六拾錢　郵税拾錢

石倉翠葉君著　寫眞銅版二十四葉挿入
●日光山名所圖會
全一册洋裝　大判五一〇頁
正價六拾錢　郵税拾貳錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(後付の五)

# 少年日露戰史

洋裝大判毎編寫眞口繪挿入
正價一册拾貳錢　郵税一册四錢
前金 ●六册金六拾七錢●十二册金壹圓貳拾八錢▲外要郵税

## 巖谷小波君編　毎編密畫挿入

凡例

少年日露戰史は、今の少年の爲めばかりで無く、今から後の少年の爲めにも、帝國空前の大事業を永く記憶させる爲めに、日露の戰爭を書いた本であります。

附錄軍國讀本は、日露戰爭に關係した、美談や逸事を讀本體に書いて、忠君愛國の好模範を、永く少年に示す爲めの本であります。

第拾貳編　新刊發賣

## 奉天の巻　上

目次




發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館


（後付の六）

數學世界主筆竹貫登代多君補
少年世界記者竹貫直人君著

# 實用 新式速算法

新式速算法は學校にて教授されざる教科書にも、說明しあらざる速算秘術也、日本未だ曾て此種の出版無し本書を以て嚆矢とす編纂の目的は一は以て學生諸君が補修用に供すべく、一は銀行會社商店等、日常取引の頻繁なる諸子の好參考書たらしめんとせり故に上巻に於ては加減乘除より筆を起し具體的に之を講述したれば初學者と雖も直に修得するを得べく、下巻に於ては實用算術を主とし廣く農工商各科に亘りて抽象的に詳述し猶ほ補ふに諸種の必用算表を以てし附錄としては珠算速算法をも添えたれば學者の至便此上なかるべし、世の數學篤志家須らく一本を机邊に備へて永く寶典となせや。

全一册

洋裝クロース中判
紙數約三百頁
七月上旬發行

竹貫直人君著
**數學遊戲** 正價貳拾三錢 郵稅四錢

竹貫登代多君著
**新撰 算術問答** 正價貳拾錢 郵稅四錢

竹貫登代多君編
**新撰 代數問答** 正價貳拾錢 郵稅四錢

竹貫登代多君編
**新撰幾何問答** 正價貳拾錢 郵稅四錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（後付の八）

巖谷小波君書　和田英作君畫




全一冊

洋裝最新式頗美本
紙數五百頁
正價壹圓
郵稅拾錢

先に**洋行土産**二卷を著して、洛陽の紙價を高からしめ、將た**天覽、上覽**の榮を得たる著者は、今又拾遺として茲に本書を公にせんとす。**小說**か、否、**談話**か、否、畢竟實地の見聞を基として、例の妙想を構へ、快筆を揮へるもの、加ふるに和田氏が**挿畫**の**錦上花**を添るあり。氏も亦當年著者と共に彼地に遊べるの人、机上一たび之を繙かんか、寫す所眞に迫らざる無く、所謂る**文明國**の**暗面**は、忽ち淨玻璃の鏡に照らされ、例の**留學生**の**眞相**は、宛ら紙上に**躍々**たらん。

巖谷小波君著　寫眞銅版數葉挿入
● 小波 **洋行土產**　全二冊洋布上綴 中判新形八四〇頁　正價一冊壹圓貳拾錢 郵稅一冊拾貳錢

大橋乙羽君著　彩色美麗寫眞版及木版密畫挿入
● **歐山米水**　全一冊特別上綴 大判一七〇〇頁　正價壹圓五拾錢 郵稅八錢

大橋乙羽君著　寫眞版挿入
● **歐米小觀**　全一冊洋布上綴 小判二六二頁　正價四拾錢 郵稅四錢

鎌田榮吉君著　寫眞版挿入
● **歐米漫遊雜記**　全一冊紙皮上綴 小判四二四頁　正價四拾錢 郵稅六錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女學世界
第五卷第拾壹號
明治卅八年八月五日發行
毎月一回五日發行
明治卅三年十二月廿五日
第三種郵便物認可




(定價金貳拾錢)